洋泉社MOOK
別冊映画秘宝

決定版

# ツイン・ピークス

We Live Inside A Dream

## 究極読本

THE ULTIMATE GUIDEBOOK TO TWIN PEAKS

滝本誠＋高橋ヨシキ 監修

滝本誠、狂乱の美女図鑑

完全保存版・全エピソード解説

デイヴィッド・リンチ幻惑の『序章』から、劇場版、25年後の『The Return』まで。

WELCOME TO TWIN PEAKS
POPULATION 51.201
ツイン・ピークス、突然の<デペイズマン>
洋泉社MOOK 別冊映画秘宝
決定版ツイン・ピークス究極読本
滝本誠＋高橋ヨシキ：監修
洋泉社

# OVERTURE

By Makoto TAKIMOTO

撮影◎菊池茂夫

滝本誠による恍惚の序曲

# 片腕男慨嘆

## コ・ノ・ザ・レ・ゴ・ト・ハ・マ・エ・ガ・キ・ナ・ノ・カ？ ソ・レ・ト・モ・ア・ト・ガ・キ・ナ・ノ・カ？

文◎滝本誠

**滝本誠の思いついたままの即興的イントロダクション。理解の良薬とはならない。**

25年間、閑古鳥が巣くっていたレッド・ルーム、ようやく活気が戻って、片腕男うれしそうで、なにより。

やはり、ロードハウス・ゲストのトリはジュリー・クルーズが締めた。当然であろう。ロードハウスのステージ(序章)の最初のゲストは彼女だったのだから(彼女しかいなかった)。時を超えて、彼女は古び、声だけはそのままでよみがえった歌が〈The World Spins〉である。夜の闇から光の世界へ、天使の声がかわらずリピートするわけだが……。

しかし、直後のラスト・エピソードで、世界は夜へ戦慄の再スピンをみせる。クルーズの歌のタイトルでいえば、〈Into the Night〉ということになる。これもまたagain & again。

このコラムではシーズン1&2言及の兼ね合いもあり、シーズン3の意味で、また〈3〉に意味を込めて、『ツイン・ピークス3』の呼称を使用させていただくので各方面ご容赦。思いついたままの即興的イントロダクションであり、いつもどおりのお茶、珈琲濁しコラム。理解の良薬とはならない。

そういえば、影書房だったかの編集のかた他何人かと一緒に裕木奈江さんと珈琲を南青山で飲んだ記憶がよみがえったが、夢だったかもしれない。

### 死体は愛を選べない

『ツイン・ピークス』は、そもそもすべてに先立って少女死体ありき、ということで、このコラムも、撮影現地で現在まで続く、ファンの集い=〈ツイン・ピークス・フェスティバル〉の初期に配布された、ゲストのシェリル・リー(ローラ・パーマー)の、恍惚死体写真からスタートしたい(P・2~3)。

だれもがひそかに想像していた死体置き場のローラの、理想の姿態がここにある。ポスターは、自然保護、動物愛護団体のために制作されたものだが、シーズン2で、ツイン・ピークスの自然(イタチ)保護運動がとってつけたような善意の流れで謳われていたことを受けてのものであり、映画『ツイン・ピークス ローラ・パーマー最期の7日間』(92年)で、ヌード撮影をリーは体験済みでもあった。そもそも、実生活でリーは自然保護運動の熱烈な共感者でもあった。文案にある〈In Fur〉からの連想はというと、ザッヘル・マゾッホのマゾヒズム小説『毛皮を着たヴィーナス』(河出文庫)で、皮肉は深い。

シェリル・リーがこうもり傘でもさしていれば、シュルレアリスムに接近したであろうが、とっているのは死体として無理のないナチュラルな姿態。腕で、ツイン・ピークスが隠されているが、さほどの高峰ではないのでよろしいのではないか。

ちなみに、最近購入したこの古いポスターは彼女のサイン付きであった。この事態を、死体写真に当の死体がいつのまにかサインしてい

自分の右足が自己存在を主張（足声はリンチ）し、困惑するあたりのジェリーが実にかわいい。

ジュリー・クルーズの25年。上はシーズン1、下はシーズン3。2002年、2007年のミニ・コンサートではガリガリで心配したがやや体重増で安心。

マリアン・フェイスフルのアルバム『シークレット・ライフ』（79年）のジャケット写真。イギリス映画で最初にFUCKといったのはわたし、というのが素敵な自慢らしい。

た！として、その超常性を愉しむことにした。というのも、リンチの役名＝ゴードン・コールの盗用元でもあり、今回の『ツイン・ピークス3』では重要な場面でTV画面に出てくるビリー・ワイルダー『サンセット大通り』（50年）は、そもそも死体が語るというものであった。サインぐらい簡単であろう。

瞼を閉じ、ラッピングされた少女死体で開始された「ツイン・ピークス」シリーズのあからさまなスピンオフとして、目をみひらいた死体として、自己パロディに果敢に挑戦したことがすばらしい。詩人・小説家のチャールズ・ブコウスキーであれば、ローラ・パーマーを岸辺に打ち上がった人魚ととらえて、これは絶好の機会として、短編「人魚との交尾」（『町でいちばんの美女』収録、新潮社）のごとき、ネクロフィリア愛にいそしむことは確実。死体は愛を選べない。

マゾッホついでに記せば、天使、薬物中毒、セックス依存というローラの初期設定の典型的モデルが、マゾッホ類縁の貴種、歌手のマリアンヌ・フェイスフルだ。彼女の母親はヒトラー支配が及び始めるころ、ベルリンで踊り子をしていて、瓜二つの女性とのコンビで〈ミラー・ダンス〉なる出しもので人気を得ていた。大きな鏡をおいたかのような、完璧なダブル・マジック。ドッペルゲンガー・ダンスといってもいい。イギリスへ渡って、マリアンヌを生む。

ミック・ジャガーとの破局のあと、身をもちくずしていたが、天使の声を捨て、しわがれた声で復活。このフェイスフルから依頼を受けて、アルバム〈シークレット・ライフ〉（95年）をアンジェロ・バダラメンティがプロデュースしたとき、バダラメンティはあからさまに、彼女をツイン・ピークスへ、リンチ・ワールドに召喚しようと試みた。それは、ダンテ『神曲地獄篇』の有名な冒頭、人生なかばで正しい道を失い、目覚めれば恐怖の森の中云々にはじまり、シェークスピア『テンペスト』の、われわれは夢で作られ云々で終わる朗読の採用としてもあきらか。〈森〉と〈夢〉というリンチ的用語、アルバム・タイトルもまたローラの秘密の日記を想わせるのである。彼女なら、60年代の履歴からして、魔術師アレイスター・クロウリー由来の名称「ブラックロッジ」に優先席を要求できるだろう。

『ツイン・ピークス3』でもっとも愛しき迷い人は、ホーン兄弟の弟、ジェリー（デイヴィッド・パトリック・ケリー）であろう。森のなかで迷い、〈シーズン3〉丸ごとかけて森をさまよい続けるのである。お前はダンテか!? と、ツッコミも可能。ジェリーのマリファナ菓子、食してみたいね。

# ちょいと『ブルーベルベット』へリターン

**滝本誠の思いついたままの即興的イントロダクション。理解の良薬とはならない。**

ごそごそやっていて、世のリンチ・ボーイズ(年齢不問)のために、リンチ作品への健全なリアクションの模範例が出てきたから、それを示しておきたい。ジャズ・ミュージシャンとしてデビュー、次に絵筆を握り、ポップ・アートからニュー・ペインティングへ、独自の具象絵画をきわめることになったラリー・リバースの絵である。

パンツを下ろした少年が立膝状態で、ブルーベルベット地のソファーに局部を擦りつけ、あるいは突き立てている。タイトルが長い。"Young Man in a Blue Velvet Chair with Young Man in a Black Hat"(89年)。50代の壮年リバースが少年時代の記憶として描いたものらしいが、89年という発表年、そしてタイトルからいって、長く論議が続いたリンチの代表作『ブルーベルベット』(86年)へのユーモラスな、みずからの少年時代を振り返りつつのアンサー・ペインティングとみるのが正しいだろう。ベルベット・オナニーMeTooというわけだ。

いうまでもなく、ベルベットはオナニーの相性抜群の生地素材(拙書『映画の乳首、絵画の腓 AC 2017』幻戯書房参照)で、おそらく、ガールフレンドが座ったソファーに陰拓が残っていて、それへの少年リバースの反応が、パンツを下ろして……の行動となってあらわれたのであろう。床には事後処理用トイレットペーパーが置かれ、にくいほどに万全だ。まだ耳を切り取ってはいないが、壁の絵＝Young Men in Black Hat は、若き日のゴッホの自画像の描き直しだ。ゴッホもまた『ブルーベルベット』形成イメージ群のひとつ。しかし、in a Blue Velvet(着た)ならいざしらず、in a Blue Velvet Chair と Chair が加わると、オナニー様態は突然、江戸川乱歩の〈人間椅子〉めいたものにこちらの想像が及ぶではないか?

リバースはサックス奏者であり、セックス猛者ということを自伝『WHAT DID I DO?』(92年)で隠さずに吐露している。彼は、サックスを手に、セックスのフリーウエイを爆走する最高のトンデモ・ボヘミアンだった。

## サックス、セックス、サックス

『ロスト・ハイウエイ』(97年)のメイキング映像で、撮影のあいま、サックス、セックスとうれしそうに、いくぶん照れくさそうに顎を確認していたのが、主演俳優のビル・プルマンだったものである。アルバート・アイラーばりの、フリーキーなサックス奏者としてキャラクター設定されながら、家庭での彼は、妻(パトリシア・アークエット)相手のセックスにおいては常に勃起不全となり、敗走に次ぐ敗走……。セックスは、サックス(最低)状態となる。この敗走がロスト・ハイウエイ、喪失と分裂を生み出す。

ハリウッド・ヒルズのリンチの自宅(フランク・ロイド・ライトの息子ロイド・ライトの設計)を訪れる幸運があったのは95年、リンチが『ロスト・ハイウエイ』に向けて準備をすすめている時期だった。リンチにもっとも親しい日本人キュレイター、飯田高誉氏に同行させていただいての訪問である。同行者はほかに、大学時代、よく入浴していた浴場を改装してギャラリーにした上野のスカイ・ザ・バスハウスのオーナー。ふたりとも91年1月開催、東高現代美術館でのリンチ展キュレイター。

このアトリエ訪問ではっきりしたのは、リンチにおける美術活動と映画製作の密接な関係性である。自分の絵が動くのを見たかったという、彼が映画製作にかかわるようになったアート・スクール時代の実験期の初期衝動は見事なまでに持続していて、ふたつは同じものなのである。

リンチは映画のイメージをまず、キャンヴァス上で展開し、描きながら映像を模索している。1点ですべての展開を含みうるかのようなストーリーボードが、大キャンヴァスのペインティングといっていい。書き込まれた言

葉は愚直なまでに説明的なト書きだが、時に幼児体験系のシュールなもの。たとえば〈ママはおうちにいて、あたまがこわれている〉的な。訪問時にリンチが試行を重ねていたのが、頭部がふたつの人物像であった。これが『ロスト・ハイウェイ』へと展開することになるわけである。ドッペルゲンガー（分身）は、飽きることなくリンチが追求し続けている一貫したテーマであって、ペインティング作品初期のものに、〈I SEE MYSELF〉がある。黒主体の絵のなかで、片方の顔が白、片方が黒として表現され、黒のほうは地色に溶解してよく見えなくなっていて、まさにシャドー。

別れ際、ロサンゼルスで、われわれがいくべきところとして、傍にあったテーブル上の郵便物の封筒を雑に破って、その裏面に地図を描いてくれた。これをいまに至るも所持しているのは、かすれたペン文字、それに線の筆触と全体のバランスがドローイング・アートと感じられたからだった。ラフにみえてラフではない、ではなにか？ リンチが紙上にとらえる、彼しかとらえられない空間へのラブだ、なんてね。

リンチ・マップに書きこまれたのは、推薦カフェに、ポール・ダンス・バー、それに行きつけという書店＝ブック・スープ（ここでリンチのバイブル『アート・スピリット』発見、購入）。カフェのウエイトレスは、いかにもリンチ好みにみえた。『ツイン・ピークス ローラ・パーマー最期の7日間』で殺されたテレサ・バンクス似なのである。やはりね、と納得し、極東の3人は勢い込んで、デイヴィッド・リンチを知っているか？ と訊いてみた。当然、知っているだろうと、ところが、知らないとの答え。単に怪しいアジアの人さらいに思われたのかもしれない。

切れ端をここに掲載した理由は、こうした紙への走り書きが、撮影の指示、俳優のポジショニングなど、現場におけるリンチ指示のアナクロにして最善のツールとして、別の角度で見えてきたからだ。『ツイン・ピークス3』はスケジュールがタイト、かつ場所移動も多いため、一発勝負も多い。そのとき、リンチがとった演出方法は、紙にペンで鳥瞰的に現場を描き、説明することだった。これがメイキング映像で何度かでてくる。われわれに書いて示したのも、位置説明、それに動きの指示であった。つまり、いいかえれば、われわれはリンチに演出されたのだw。

時を経てかすれて読みづらくなっているが、ロサンゼルス（一部）が、白い空白のなかに浮き出してくるような気がしますね。あるいは白の廃墟といっていいか。興味尽きず。

アトリエで自作の前のリンチ（1995年、撮影・飯田高誉）。家の裏山を削ってアトリエ棟があった。このときまだ生まれたばかりの子が『ツイン・ピークス3』で裏方をやっている。

音楽、美術双方で、ラリー・リバース展が可能なのは、ジャンル的にカオスなマイク・ケリー展などを成功に導いてきたワタリウム美術館かもしれない。

# 『数学　突然のデペイズマン』展



『ツイン・ピークス3』の新しいオープニング・タイトル・デザインは、撮影新機材＝ドローン、そしてCGの進化を受けて、上方から瀧の飛沫を捉え、その水の落下が赤いカーテンをくねらせるさまをめくるめく連続性で表現、赤いカーテンは血の瀧となる。同時に燃えさかる炎ともみえ、いってみれば、水と火の合一が美しい連続性として捉えられている。

　タイトル・デザインとは離れるが、たわめられ静止状態の赤いカーテン（緞帳といったほうが、重々しさがあっていい）は林立する血の森でもあろう。

　そもそもツイン・ピークス・イメージの原点といっていい〈瀧〉へいまいちど回帰してみたい。

『瀧狂／横尾忠則 Collection 中毒』（新潮社、解説：荒俣宏）という、瀧の飛沫を読者の視覚に1万回以上浴びせる、世界に類例のないクレイジーなポスト・カード集成本が刊行されたのは96年であった。ツイン・ピークスの代名詞となった現実のスノカルミー・フォールは、当然発見は容易だろう、と当時たかをくくってページをひらいたものである。ところが、これが出てこない。疲れてどれも同じに見えてくるのだ。仕方なく、1点ずつルーペ（拡大鏡）で確認していき、ついに、記念切手並の大きさのカードを2点発見できたのである。見つけるのが難しかったのは、崖の上に絶好の立地を得たホテル＝ツイン・ピークスのグレート・ノーザン・ホテルが建設されていない時代の古いカードだったからである。

　久しぶりに『瀧狂』を取り出したのは理由があって、横尾忠則とリンチが、カルティエ美術財団美術館で開催された〈数学　突然のデペイズマン〉展（11年）において、ポスト・カード（＆ポスター）上でコラボレーションを行ったからだ。中央に展開する細かな円形の図像は、リンチがイメージ構成した〈ミューシャ・グロモフの神秘図書館〉で、そこに横尾があらたな図像を組み込んだ、いってみれば〈精神数学世界〉の可視化である。リンチと組んだグロモフの数学には、誰かの解説を受けないと（受けても）、とうてい愚生の頭では理解できない深遠がある。それ以前にまったくわからないフランス語が深淵そのもの。

　図録掲載の数式で、唯一、なじみがありそうにみえたのが、√1＋√2＋√3……＝3であった。〈3〉である。こちらが欲しいものだけが、飛び出してきてほかはどうでもよくなるというのはありがちな真実で、数学においてもその通りであった。〈3〉！

　リンチのなかで、あるいは周辺で、『ツイン・ピークス』〈25年後〉の新展開を待望する空気がなかば冗談ぽく、あるいはシリアスなビジネスとして醸成されつつあったはずであり、そうした空気のなかで、リンチにとって〈3〉という数字は何を意味したかはいわずもがな、

「考へよ人生の旅人／汝もまた岩間からしみでた／水霊にすぎない」（西脇順三郎『旅人かへらず』）、申し訳ない、60年代世代はついこの詩が……。

女性の裸体画、そして風景画をペンでたくみに描く才能の持ち主が、ドン・S・デイヴィス（ブリッグス少佐）だ。瀧の絵もあるがこれがみごと。彼の肉体は『ツイン・ピークス3』で酷い、いや重要な扱いを受ける。

であったろう。後述するように、〈3〉はツイン・ピークス新世界の基数となるべく運命づけられていた。大袈裟にいえば、

〈3〉同様に、いやそれ以上に重要と思われるのは、『数学、突然のデペイズマン』という展示タイトルだろう。そう、この〈デペイズマン〉という言葉だ。いうまでもなくオートマティスムなどとともに、シュルレアリスムの基本用語といっていい。大切なのは、『ツイン・ピークス3』は〈デペイズマン〉ラッシュとなったことだ。

〈デペイズマン〉の定義については、パトリック・ワルドベルグ『シュルレアリスム』(河出文庫)の訳者、巖谷國士氏の訳注をお借りすることにする。

「〈デペイズマン〉とは、デペイゼ(=追放する、異国に追いやる、環境をかえる)という動詞から来た言葉で、事物を日常的な関係から追放して異常な関係のなかに置き、ありうべからず光景をつくりだすことをいう」

もとより、ほとんどのリンチ作品が〈デペイズマン〉映画といってよく、リンチ作品においてはとりわけ珍しいとはいえない。彼がシュルレアリストといわれる由縁だ。しかし、『ツイン・ピークス3』は、エージェント・クーパーの運命のほか、多様なデペイズそのものがテーマのごとく前面にせせり出てくる。1章で提示(展示)されるベッド上の、女/男の時空デペイズの死体コラージュがすばらしくグロテスク、そして美しい！ドラマの結構として最高のデペイズマンの仕掛けはやはり、ラストだ。

これまで観てきた〈ツイン・ピークス〉はなんだったのか⁉デペイズされたのは視聴者でもあって、それまでのあらゆる解釈が一瞬にデペイズされる衝撃。ツイン・ピークスは、解決に至る約束の地などではなく、解釈の追放の地であった。円環性はシーズン2がそうであったことからじゅうぶんに想像しえたが、まさかここまでやるとはね！お先真っ暗の奇譚SFめいたラストであった。

リンチは『ツイン・ピークス3』への貴重な啓示を受けるテーマ展に、「数学展」の前年に参加していた。

リンチの<ミューシャ・グロモフの神秘の図書館>をもとにした横尾忠則のポスター＆絵葉書デザイン。(『数学、突然のデペイズマン』より)。パティ・スミスも朗読者として参加し、リンチとCDを図録付録として残した。

# リンチ参加『罪と罰』展の深層

**滝本誠の思いついたままの即興的イントロダクション。理解の良薬とはならない。**

2010年にパリのオルセー美術館でひらかれた大規模なテーマ展が「罪と罰」である。ドストエフスキーの『罪と罰』からタイトルだけはいただいているが、中身は〈犯罪と刑罰〉にかんしての、さまざまなアート作品の収集展示、さらに新聞の犯罪記事、犯罪専門誌紹介、大量の現場実録写真が展示され、さながら犯罪博物館の様相だった。

　このテーマ展にリンチは、ミクスド・メディア作品〈Do You Want to Know What I Really Think?〉で参加した。このテーマ展がリンチにとって大きな意味を持つことになったのは、死体、殺人などの犯罪を賛美し、それをアート行為とみなしたシュルレアリストの作品群を包括的に見聞する機会となったことだ。特に、シュルレアリスムの先駆といえるヴィクトル・ユゴー（別の顔が『レ・ミゼラブル』の作家）の〈正義〉（1857年）の展示。ギロチンで断頭された首がぴゅーと気持ちよく？飛んでいるあたり、〈断首〉ドラマとしての『ツイン・ピークス3』に大いにイマジネーションを与えたにちがいない。

　次に、マルセル・デュシャン〈1.水の落下、2.燈用ガスが与えられたとせよ〉は、デュシャンの死後に発表され、美術史最高のミステリーといっていい作品だ。〈瀧と死体〉において、これまでリンチは見たことがないと、デュシャン作品と『ツイン・ピークス』との関係性を否定してきた。写真であったとしても、この展覧会でようやくこれを見たのかもしれない。証拠は、のぞき穴の先の裸体（死体）の煽情的なポーズをリトグラフとして、ほとんど直後にリンチが制作したからである。とりあえず、リンチのデュシャン発見、というか公式にデュシャンを作品に取り込んだのが2010年である。〈瀧と裸体（死体）〉への新鮮なリセットがリンチ内部でなされたといっておこう。〈マルセル・デュシャンのツイン・ピークス！〉へのリセット、再度、死体をデペイズして快楽せよ！

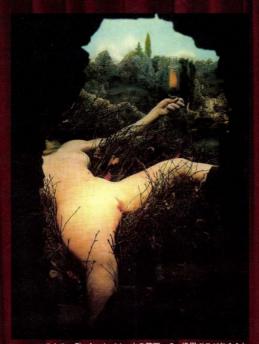
　「罪と罰」展示で、リンチ作品のとなりが、デュシャンのレディ・メイド〈WANTED $2000 REWARD（犯人捜し、賞金2,000ドル）〉で、その横が、ルネ・マグリット〈暗殺者の暗殺〉（1926年）であった。

　蓄音器の拡声器、それぞれがそれぞれの分身めいた3人の暗殺者、窓の外の代理男性3体、あるいは事件を目撃する刑事3人としてもいい。中央のレッド・ベルベット・ベッド上の女性死体のタオルの位置が首に近く、遠目には首が切断されているかにみえる。男の棍棒の影は、まさしく男根として、女性性器に至る一直線上にトリッキーに位置している。鏡のなかに自分の後ろ姿を見る、レッド・ルームのシャドーとのクーパーの追いかけっこのような〈複製禁止〉を超えて、『ツイン・ピークス3』が、3分身ドラマ（すぐに2分身ドラマとなるにせよ）となったのは、マグリットの〈暗殺者の暗殺〉がもたらしたものとみることは可能であろう。暗殺がふんだんに出てくるわけだし。

『罪と罰』展参加のリンチ作品<Do You Want to Know What I Really Think?>（03年）。お互いが黒い分身を引き連れていることに留意。

ユゴー<正義>。未体験だが、この段階では意識はあるらしい。若山富三郎主演の「子連れ狼」シリーズ（72〜74年）でも、切られ転がった首が見た光景に唖然。

マグリット<複製禁止>。ふたつでじゅうぶんですよ、わかってくださいよ。

ルネ・マグリット<暗殺者の暗殺>。この蓄音器の拡声器からドラマが発生する。フィラデルフィア出身のリチャード・レスター監督（『HELP！』）も、マグリット大好きを公言。

マルセル・デュシャン<1．水の落下　2．燈用ガスが与えられるとせよ>（フィラデルフィア美術館）。板扉の覗き穴からの幻惑の光景。20世紀の<モナ・リザ>と呼びたい。陰唇の謎めいた微笑みなどなど。

クーパー、Mr.C、ダギーのカイル・マクラクラン３態。25年前のカイルの老け顔メイク、ちょっとやりすぎでしたね。

# ジョスリンの鏡の魔と〈ノブ女〉

**滝本誠の思いついたままの即興的イントロダクション。理解の良薬とはならない。**

『ツイン・ピークス』シーズン2のラスト。鏡の裏世界はすべてつながっている。この後、ボブ・クーパーがとった行動が災厄を招き続き……。そして25年後……。しかし、この25年後というのも……。

この冒頭シークエンスのジョアン・チェンの一連のけだるい優雅には、まったくもって惚れ惚れ。彼女のレズビアン・セックスへの挑戦は、ドナルド・キャメルの『ワイルド・サイド』（96年）。このとき、彼女の……。

小テーブルの引き出しのノブとなってしまったチェン（ジョスリン・パッカード）。このノブに触れたものは云々で『ノブ女の恐怖』とかありそう。左はナイドの裕木奈江さん。表情のこの角度クール！ 美しい！

暗殺者ということでいえば、シーズン1&2を通じて、もっとも魅惑的な謎でありつづけた存在、ジョスリン・パッカード〈ジョアン・チェン〉を忘れてはならない。チャイナ・ファム・ファタルとしての彼女はエージェント・クーパー暗殺のミッションを帯びた存在で、ブラックロッジによって生かされていた繰り人形ともいえるが、すべてはさだかではない。結局は愛に迷う？ 失敗者として暗殺者失格。絶命させられ、ホテルルームの机の引き出しノブに封じ込められ、というかノブとなってしまう。シリーズ1&2にあって、まったく予想していなかった唖然の奇景が、このときのジョスリンの最期であった。ノブ女！

『ツイン・ピークス』1&2は、彼女がけだるいトランス状態で、鏡の自分に見入る冒頭のショットで始まるが、彼女の瞳が鏡の奥に聴いていたのは、左右逆転、鏡空間では正当な逆さ言葉のミッションであろうか？ ジョスリンの鏡の魔は、エピソード29、グレート・ノーザン・ホテルのトイレ鏡に鏡面連鎖でつらなり、クーパーへのボブの憑依で終了した。ジョスリンがなすべき〈暗殺〉は、ラストの鏡のショットで象徴的に果たされ、それが『ツイン・ピークス3』における暗殺合戦へ道をひらいたといえるのである。

彼女のミステリーを引き継ぐのが、ナイドの裕木奈江だ。最初に観て、彼女が登場したとき、もちろん誰が演じているのかもわからなかったが、顔が〈ノブ〉にみえたことから、これはジョスリンの再生ではないかと受け取ったのである。過去への後悔もあって、クーパーのデペイズマンにあたって、トランスポート過負荷を〈3〉に下げ、〈首〉切断を回避してやったジョスリンの新しい生、と解釈したのである。安全だが、記憶を送る容量が少なく、それが幼児レベルにクーパーを下降させた？ と。もちろん、フロスト／リンチによってこの解釈は否定されたが。

## さてもさても。

残された、真の〈不可解〉は、ローラの母親セーラ・パーマー（グレイス・ザブリスキー）ということになろうか？ セーラが隠し持つ秘密とはなにか？ 彼女は、本当はなにものなのか？ どういう生命体なのか？

　セーラの登場場面は、すべて暴力の気配が充満していたが、もっとも衝撃的なショットは、カント野郎殺害にあたって、自らの顔を単なるチープなマスクであるかのようにパコンと開いてみせるシーンであり、また自宅で、額入りのローラの写真を破壊し尽くそうとする場面だ。ガラスは砕け散る。しかし、さらに破壊を加えようにも、ローラの写真は変わ

らぬ笑みを見せ、これまた超常的に無傷のままだ。ローラもまたセーラ同様の顔剥きの場面をシーズン早々にみせている。セーラのローラへの激しい憎悪、いってみれば折檻行為が意味するものとはなにか？　思えば、ローラの父親とは本当のところ誰なのか？　誰が、あるいは何が彼女にローラを孕ませたのか？　処女懐胎？　異界間婚姻？

たとえば、マックス・エルンストの〈3人の証人、アンドレ・ブルトン、ポール・エリュアール、そして画家自身の前で、幼子イエス・キリストを折檻する聖処女マリア〉。この作品の不穏と緊張と暗黒領域が、〈3〉から〈ツイン・ピークス4〉へのイマジネーションをキックするように思える。

2015年にオーストラリアでひらかれたリンチ展は、〈Between Two Worlds〉と名づけられたが、すでに〈ツイン・ピークス3〉の製作のメドが立っていたこともあって、リンチはこのタイトルを、呪文めいたFire Walk With Meの文言から抜粋、使用した。

Through the darkness of the future past,
The magician longs to see,
One chants out between two worlds
Fire walk with me

この展覧会において、リンチは〈ツイン・ピークス3〉の映像のための試作といえるものを発表した。写真作品のWoman Thinkingシリーズがダイレクトにセーラ／ローラの顔パコン・シーンに、Headシリーズが、ナイド（裕木奈江）の目のない顔へ移行、展開する。

リンチの創作上の転機といえるものは、07年のカルティエ美術財団美術館での大規模な個展〈The Air is on Fire〉の折に、会場からも近かったモンパルナスの版画工房イデムとの協力関係のスタートだ。ここでのリトグラフ（石版画）との出会い、発想をそのままダイレクトに石の上に塗りたくる手法の自由自在さが、リンチを解放した。リトグラフ先行で『ツイン・ピークス3』へ持ち込まれたヴィジュアルが、〈Insect bite Woman〉であろう。エピソード8のこのInsectの扱いが〈4〉の鍵であることはたしかだが、難物。乞うご期待というしかないか。

## The World (TWIN PEAKS) Spins, Again & Again

David Lynch<Woman Thinking #1>（08年）『Between Two Worlds』展図録より。この黄金球が美しい！

マックス・エルンスト<幼子イエス・キリストを折檻する聖処女マリア>、<3人>が鍵を握る。

David Lynch<Insect and Woman>（07年）個展図録『David Lynch Lithos,2007-2009』より。

# 滝本誠、狂乱の美女図鑑

選・文◎滝本誠

## PART.I 3分身

Chromatics in RED ROOM

エピソード2の終わり、初めてロードハウスが映り、ステージにキャメラが向けられる。そこにいたのが、ジョニー・ジュエル率いる<クロマティクス>で歌うは<Shadow>。すでにテーマ曲だ。

Chromatics
"Shadow"

一瞬、ミレーユ・ダルクか、と思える容姿の美女がシンガーのルース・ラデレット嬢だった。ひと目ぼれ。グループの出身地はオレゴン州ポートランド、とくれば、テレサ・バンクスの死体があがった場所である。グループは<チェリー>に発して、『ツイン・ピークス』のストーカー的ポジションで曲作りをしてきた。その甲斐あってのフィーチャーを得たといっていい。ルースがいるかぎり応援を続ける。

（Andrea C. Leal、Amy Shiels、Giselle DaMier）

サンディ、マンディ、キャンディの順なら覚えやすいが、キャンディが常にセンターでキメポーズをとる、アートでいうポーズ・アーティスト（?）。ラスベガス・ガールで、ギャングの飾り物だが、ギャングに手を焼かせるのはキャンディゆえ。

美しい成熟ぶりに驚いたのが、ニューヨークのヘザー、エリカ、アニーの＜オ・ルヴォワール・シモーヌ＞のロードハウス登場である。2007年、パリのリンチ展のイベントにジュリー・クルーズらとともに彼女たちも参加。リンチが正面で聴いているので、上がりまくっていたことを覚えている。そんな3人娘の最新がロードハウスで確認できたわけだ。

Au Revoir Simone

PART.II

# 死体美女

次ページの子犬おばさんの強烈な、それにしても七面倒くさいリンチ・ギャグにうんざりしつつ導かれるのが、サウスダコダ州の図書館員ルース・ダヴェンポートの死体。左目の損傷が死因かと。ふとんカバーをめくって飛び込んでくるのが、見たことのない異様な死体。特に胴体は時空超えのデペイズ・ボディ。男女、パーツを変更しても興味深いが、ブリッグス少佐の球形頭部では、お笑いにしかならないかも。

## 死体第一号

### ルース・ダヴェンポート Ruth Davenport
（Mary Stofle）

後半、ようやくダヴェンポートの頭部以外が空き地で発見、高橋ヨシキ氏の指摘の通り、マルセル・デュシャン<1：水の落下　2：燈用ガスがあたえられたとせよ>の、リンチ・ヴァージョンといえる。デュシャンをここで使ったのだ。

死体第二号

トレイシー・バーベラト Tracey Barberato
（Madeline Zima）

Tの食い込みがなかなかと思う暇もなく、ぐちょぐちゃぺぺぺぺズルズルと吸顔、吸脳されてしまった。男の手がなかなかに切ない。造形物として、この顔面なかなかイケる。

ベッドの上の姿態のカッコよさは、パルプ・ノワールの表紙から飛び出してきたようで、クロマティックスのルース嬢とともに最高点。面白い図柄と、なにより保護性の強いピンクのブラとパンティ。無駄だったが。

死体第三号

ダーリャ Darya
（Nicole LaLiberte）

# PART.Ⅲ 崇高の人 フェリーニの継承

ゆっくりと滲みだす崇高性が<消防士>とどこともも知れぬ、何者をも近づけぬ孤島要塞のモノトーンの空間に<存在>している。彼女はいま、新しい悪魔の誕生、ニュータイプの地獄の業火の生誕を察知したばかりだ。

セニョリータ・ディド Senorita Dido
(Joy Nash)

クラクションの女 Woman in car
(Laura Kenny)

自己都合のためクラクションを鳴らし続ける女がこの場合とても説得的なのは、やはり運転しているのがそもそも威圧系の表情だからであろう。こういう表情に最近は美を見出してしまう。

子犬おばさん Marjorie Green
(Melissa Bailey)

ふくよかな女性の登場はリンチの場合、やはり異次元のなにかを呼び込む視覚儀式のようなものである。そして、子犬とともに彼女がまず事件を嗅ぎつけるのだ。

子どもがはねられるのを目撃したミリアム。彼女をキャスティングしたスタッフの優秀性におどろく。この表情は一瞬だがリンチがほしい表情だ。

**ミリアム・サリヴァン Miriam Sullivan**
（Sarah Jean Long）

**ハイジ**
（Andrea Hays）

この懐かしさをみよ、このすべてを委ねられる『ツイン・ピークス』のふくよか姫＝ハイジにただただ愛の重さをみよ。シーズン4まで、お元気でね。

『ツイン・ピークス』
シーズン1のハイジ

PART.Ⅳ

# 場、拐(さら)い人。

ルビー Ruby

シャーリン・イー Charlyne Yi

ロードハウスの眼鏡っ子、小柄なアジアン・ガール。屈辱を受けての彼女の絶叫が愛らしい。このショットが『ツイン・ピークス3』のベスト・ショット。

ビュエラ Buella

キャスリーン・デミング Kathleen Deming

悪党の巣窟にあって、彼女の存在感は逆らえない悪の気配そのもの。研究課題にしたいほどの魔的造型といおうか。

シーズン2のアリシア

ガーステン・ヘイワード Gersten Hayward

アリシア・ウィット Alicia Witt

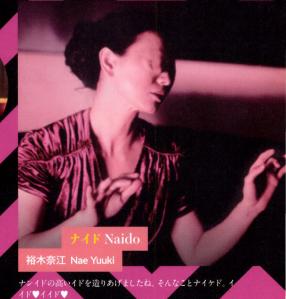
『デューン　砂の惑星』(84年)の9歳児が、『ツイン・ピークス2』を経て、最近はゾンビ(『ウォーキング・デッド』)になっていたが、晴れて再登場。信じがたいほどに変わらず美しい。

ナイド Naido

裕木奈江 Nae Yuuki

ナンイドの高いイドを造りあげましたね。そんなことナイケド。イイド♥イイド♥

## クリスティ Kristi

フランセスカ・イーストウッド
Francesca Fisher-Eastwood

ラスト・エピソード、客もまばらな町のダイナー、ウエイトレスは客のセクハラに耐えつつお仕事。パパ（クリント・イーストウッド）に言いつけてやる、マグナム手にやってくるわよ、と言えば、すべて解決。

## フランス女 French Woman

ベレニス・マーロウ
Berenice Marlohe

『カウボーイとフランス男』以来の、フランス小馬鹿（褒め言葉です。どこが？）のロング・ロング・シークエンス。イジリ対象、今回は女性です。モレシャン風の日本語アクセントの副音声解説が欲しい。

## メディチ家のヴィーナス Venus de' Medici

赤い部屋における不動の白いエロティシズム。マシュー・グレゴリー・ルイスのゴシック・ロマンス『マンク 破戒僧』で称揚され、またサドに絶賛されたヴィーナス。

## ラジオ局の受付の女 Receptionist

トレーシー・フィリップス Tracy Phillips

エドワード・ホッパー<Office at Night>（40年）の活人画に、目が点、そして釘付け。同じくホッパー・マニアのヴェンダースへの挑戦状。

# THE WORLD SPINS!

## ジュリー・クルーズ Julee Cruise

クロマティクスのジョニー・ジュエルもロードハウスのクルーズをバックアップ。ジュエルの新アルバム『Themes For Television』はジョエル版ツイン・ピークス！

PART. V

# 本来、主役なの私。

## ナオミ・ワッツ
Naomi Watts

as
ジェイニー・E・ジョーンズ
Jane "Janey-E" Jones

代表作『マルホランド・ドライブ』。リンチによって起死回生を果たし、キング・コングの愛までも得てしまった奇蹟の女優。リンチのためなら半裸で腰のグラインドぐらいたやすい御用。久しぶりセックス喘ぎ声に起きた息子サニージムの表情いいんだよね。

## アマンダ・セイフライド
Amanda Seyfried

as
ベッキー・バーネット
Rebecca McCauley"Becky"Burnett

代表作『ラブレース』（13年）。『マンマ・ミーア』（08年）から上手に自己コントロール、作品選択コントロールしてきた印象、不思議ちゃん顔なのだが、演技の幅広し、巧い。『あなたの旅立ち、綴ります』（17年）なんて、旅立ちもうすぐな身としてはお願いしたいと思った次第であります。

## モニカ・ベルッチ
Monica Bellucci

代表作『アレックス』（02年）。ギャスパー・ノエのタイム逆回しのこの作品は、長い、長いレイプ・シーンが繰り広げられる。とにかく寝崩れしない固くそそりたったツイン・ピークスは圧巻で、リンチの夢に出てきてもおかしくはない。

## アシュレイ・ジャッド Ashley Judd

as ビバリー・ペイジ Beverly Paige

代表作『BUG／バグ』(06年)。代表作には、マイケル・シャノンと共演、ウイリアム・フリードキンの監督という、この狂った作品を挙げておこう。『ツイン・ピークス3』では、病の夫を抱えた、ベンジャミン・ホーンの秘書というおとなしい役柄。過去の映画製作の現場でのセクハラを告白したが、ホーンの秘書というのは昔なら最悪だったろう。

## ジェニファー・ジェイソン・リー Jennifer Jason Leigh

as シャンタル・ハッチェンス Chantal Hutchens

代表作『カンザス・シティ』(96年)。ビッチ系演技に関してはだれもかなわない、問答無用、ストレートにクール。演技賞候補や受賞も多いが、それもまたビッチ・スピリットか。最高。

In Memory of ...

## パトリシア・ノリス Patricia Norris (衣裳デザイン／美術)

1931年3月22日 - 2015年2月20日。享年83。衣裳／美術デザイナー。80年の『エレファント・マン』を機にリンチと出会い、『ツイン・ピークス』パイロット版でエミー賞最優秀衣装デザイン賞を受賞。『ブルーベルベット』、『ワイルド・アット・ハート』、『ロスト・ハイウェイ』ではプロダクション・デザイナーも担当した。リンチとは30年来の盟友だったが、『ストレイト・ストーリー』(00年)以降は疎遠だった。

## ローラ・ダーン Laura Dern

as ダイアン・エヴァンス Diane Evans

代表作『ワイルド・アット・ハート』。使用されなかったが、『インランド・エンパイア』の時、ダーンはオナニー・シーンを撮影している。これは『マルホランド・ドライブ』のナオミ・ワッツへの強烈なライバル心としかいえない。今回も、カイル・マクラクラン相手のセックスにそれがメラメラ。あなた背面、あたしギリ上方前面、勝ったのはどちらかしら。タミー、目じゃないわ。

『ツイン・ピークス The Return』

# In Memory of ...

『ツイン・ピークス The Return』の各話のエンドクレジットには、惜しくも亡くなった俳優たちの名前が「In Memory of 」と記されていた。『The Return』制作前に旅立った関係者も多く、否が応にも25年という歳月の長さを実感せずにはいられない。ここでは、『The Return』放送後に亡くなった2人も含めて、謹んで哀悼の意を表したい。

文◎北原香

## ◆キャサリン・E・コールソン

（マーガレット・ランターマン）
追悼された回／第1話&2話
1943年10月22日 - 2015年9月28日。享年71。

リンチとの出会いは74年の短編映画『The Amputee』。当時の夫であるジャック・ナンスが主演を務めた『イレイザーヘッド』（77年）では、看護師役での出演は実現しなかったが、助監督兼カメラアシスタントやマイク持ちなど、あらゆるスタッフ業務を担当した。制作費のために朝から新聞配達、昼のウエイトレスのアルバイトではレストランから食べ物をもらってくるなどして、関係者全員の面倒を見ていたという。主人公ヘンリーの髪をメアリー役のシャーロット・スチュワートと一緒に逆立てていたのも彼女。リンチはこのころに“丸太おばさん”のアイデアを考えついた。その後、『スター・トレック2 カーンの逆襲』（83年）や『ナイト・オン・ザ・プラネット』（91年）で撮影アシスタントを務めたほか、『サギ師とウソつき患者』（91年）、『ハロウィーン・夜の罠』（82年未）、『爆走三銃士』（92年未）などに出演。後年はオレゴン州の劇団オレゴン・シェイクスピア・フェスティバルに所属し、舞台にも力を入れていた。実際に死を目の前にしたコールソンに「私、死ぬわ」というセリフを言わせたのは、リンチと彼女の信頼関係あってのこと。物語のなかでしっかりとコールソンを看取ったということだろう。

## ◆マーガレット・ランターマン（丸太おばさんの本名）

追悼された回／第15話
第1シーズン 序章～『The Return』第15話

生年月日不詳。自称てんびん座。ツイン・ピークス高校卒業後、州立エヴァーグリーン大学の通信教育で森林および野生生物管理学を専攻。胸に抱く丸太はポンデローサ松の若木で、結婚式の夜に消防士の夫から贈られたもの。夫は式の翌日に火事で死んだ。丸太は不思議な知恵を持っており、丸太おばさんは夫と異世界と自分の3つをつなぐものとしてそれを片時も離さなかった。丸太の声に常に耳を傾けている丸太おばさんは、『ツイン・ピークス』の中で最も客観的に事件を見つめているひとりだった。『The Return』でも、病床から丸太のメッセージをホークに伝えつづけ、自身の死さえ冷静に受け止めて、この世を去った──。

## ◆ミゲル・フェラー

（アルバート・ローゼンフィールド）

追悼された回／第3話
1955年2月7日 - 2017年1月19日。享年61。

毒舌家で皮肉屋のFBI検視官。「青いバラ特捜チーム」の一員として、FBI特別捜査官ゴードン・コールとともに不可思議な事件を捜査している。

父親は『シラノ・ド・ベルジュラック』（50年）の主演でヒスパニック系初のオスカーを受賞した俳優のホセ・フェラー（『デューン／砂の惑星』にも出演）、母親は50年代に活躍した歌手のローズマリー・クルーニー、従兄弟はジョージ・クルーニーという芸能一家出身。もともとミュージシャンを志望しており、キース・ムーンのアルバム『Two Sides of the Moon』（75年）にはドラマーとして参加している。74年にマーク・フロストと出会い、TVシリーズ『ヒル・ストリート・ブルース』に出演。『ツイン・ピークス』を経て、リンチ／フロスト組の『オン・ジ・エアー』（92年）にも出演した。『The Return』撮影前にすでに喉頭がんが発覚、彼の出演シーンは先にまとめて撮影された。病気という理由を隠して全スタッフに丁寧に協力を求めるリンチの姿は、ブルーレイボックスの特典映像で観ることができる。

## ◆ジャック・ナンス

（ピート・マーテル）

追悼された回／第17話
1943年12月21日 - 1996年12月30日。享年53。

パッカード製材所の工事長でローラの死体の第一発見者。趣味は釣りとチェス。チェスの腕前は名人級でウィンダム・アール事件の解決に役立った。

“デイヴィッド・リンチの分身”としてリンチ作品に欠かせない存在だった。『イレイザーヘッド』の主演に始まり、『デューン／砂の惑星』、『ブルーベルベット』、『ワイルド・アット・ハート』、『ローラ・パーマー最期の７日間』（92年）など。丸太おばさん役のキャサリン・E・コールソンとは68年に結婚、76年に離婚したが、盟友として共にリンチを支えた間柄。『イレイザーヘッド』制作費のための新聞配達は、リンチ、コールソンとともにナンスもやっていた。晩年はアルコール依存症に苦しみ、荒れた生活を送っていた。91年3月に結婚した2番めの妻ケリーは、8カ月後の11月に自殺。ナンス自身は96年にくも膜下出血で死亡。ケンカで殴られたか、酔って頭をぶつけたのが原因とみられている。

## ◆フランク・シルヴァ

（キラー・ボブ）

追悼された回／第１話＆２話
1950年10月31日 - 1995年9月13日。享年44。

1945年、ニューメキシコ州で行われた核実験の直後、エクスペリメントから生まれた悪の化身。人々の痛みと悲しみ“ガルモンボジーア”を糧にして、リーランドからクーパーのドッペルゲンガーへと憑依を繰り返している。

スタッフとしては『デューン／砂の惑星』（84年）『ブルーベルベット』（86年）『ワイルド・アット・ハート』（90年）などでリンチ作品の常連であった。雑誌『フィガロマガジン』創刊10周年記念で製作されたオムニバス映画『パリ・ストーリー』（88年）のリンチ監督作品『カウボーイとフランス男』にも参加。大道具係として『ツイン・ピークス』パイロット版の現場にいた彼が、ローラの母セーラが絶叫する場面の撮影中に、偶然鏡に映り込んでしまったことにより、リンチは「作品の一部になった」と感じて、シリーズ中で最も重要なキャラクターである「キラー・ボブ」を誕生させ、役者経験もある彼をそのまま役柄に起用した。

## ◆デイヴィッド・ボウイ

（フィリップ・ジェフリーズ）

追悼された回／第14話
1947年1月8日 - 2016年1月10日。享年69。

元FBI特別捜査官。87年にブエノスアイレスで行方不明となり、89年にFBIフィラデルフィア支局に現れたが謎の警告を発して再び姿を消す。

リンチはボウイに、弁護士を通じて『The Return』への出演をオファーしていたが断られていた。理由は明かされなかったというが、今となっては体調不良が理由だったのではと推測できる。ボウイは、『ローラ・パーマー最期の7日間』の映像の使用は許可していたものの、ジェフリーズのルイジアナ風訛りが気に入っていなかったようで、声の使用はNG。吹替にネイサン・フリゼルが起用された。ボウイの不在によって、ジェフリーズは人間ではなく、機械の体で登場することになったわけだが、これも必然性のある偶然だったのかもしれない。ちなみにボウイは、1980年のブロードウェイでバーナード・ポメランスの戯曲による舞台版『エレファント・マン』に主演。大島渚はこの舞台を見て『戦場のメリークリスマス』（83年）に起用したという。

## ◆ドン・S・デイヴィス

（ガーランド・ブリッグス）

追悼された回／第3話
1942年8月4日 - 2008年6月29日。享年65。

アメリカ空軍少佐。超常現象を研究するための空軍の極秘プロジェクト「ブルーブック計画」に従事していた。謎の失踪を遂げて死んだと思われていたが、25年後にサウスダコタで切断死体として発見される。

サウスイースト・ミズーリ州立大学と南イリノイ大学で演劇・アートの学士号を取得。カナダのブリティッシュ・コロンビア大学で10年間教壇に立ちながら博士号も取得した勉強家で、87年から本格的に俳優に転向した。『冒険野郎マクガイバー』（85～92年）をはじめ、『X-ファイル』（93年～）でのスカリーのお父さん、『スターゲイト SG-1』（97～07年）でのハモンド将軍など、有名TVシリーズへの出演多数。俳優としてだけでなく、大学教授やビジュアルアーティストとしても活躍した。絵画や木彫り細工の作品も発表しており、おそらくリンチとも気が合ったに違いない。

## ◆ハリー・ディーン・スタントン

（カール・ロッド）

1926年7月14日 - 2017年9月15日。享年91。

ニュー・ファット・トラウト・トレーラーパークの管理人で、ブックハウス・ボーイズの創設者。高校生だった1947年9月9日、クラスメイトの丸太おばさん、アランと3人でハイキングへ出かけた際に一緒に遭難した経験がある。

西部劇でキャリアを重ね、『エイリアン』（79年）、『パリ、テキサス』（84年）、『レポマン』（84年）などに出演。リンチとは、『パリ・ストーリー』収録の短編『カウボーイとフランス男』（88年）に主演してからの付き合いで、『ワイルド・アット・ハート』（90年）、『ストレイト・ストーリー』（99年）、『インランド・エンパイア』（06年）などに出演。遺作となった主演作『ラッキー』（17年）では、俳優として参加したリンチと共演を果たした。ミュージシャンとしての顔も持ち、『The Return』第11話でもやさしい歌声を聴くことができる。

# In Memory of ...

## ◆ウォーレン・フロスト

（ウィル・ヘイワード）

追悼された回／第7話

1925年6月5日 - 2017年2月17日。享年91。

カルフーン記念病院の医師であり、ツイン・ピークス保安官事務所の検視官。パーマー家とは家族ぐるみの仲で、セーラ出産の際にはローラを取り上げた。

『ツイン・ピークス』ではドナ、ハリエット、ガーステン3姉妹の父親だが、実生活ではマーク・フロストと『クーパーは語る』の著者であるスコット・フロスト兄弟の父。50年代から俳優をはじめ、70年代にはミネソタ大学で舞台美術の博士号を取得し、ミネソタ州キメラ・シアター・カンパニーでは芸術監督も務めた。『The Return』撮影時は闘病生活中だったが、俳優引退を返上、病気を押して出演を果たした。

## ◆マーヴィン・ロザンド

（トード）

追悼された回／第5話

1936年5月6日 - 2015年9月21日。享年79。

ダブルRダイナーのコック。

前シリーズ中には登場しておらず、『ローラ・パーマー最期の7日間』でも出演シーンがカットされ、リンチが未公開シーンを再構成した『もうひとつのローラ・パーマー最期の7日間』でようやく出演シーンが世に出た。Showtimeとの契約に基づき、『The Return』への出演を誰にも話していなかったため、実際に家族が出演を知ったのは彼の死後だったという。ロザンドは『The Return』撮影直後、キャサリン・E・コールソンが亡くなるちょうど1週間前にこの世を去った。

## ◆グラディ・テイト

（ジャズドラマー／シンガー）

1932年1月14日 - 2017年10月8日。享年85。

『ツイン・ピークス』全シリーズのサントラに参加。『The Return』のスコア版には「グラディ・グルーヴ」（アンジェロ・バダラメンティ feat.グラディ・テイト）という曲が収録されている。若いころは俳優を志していたが、59年にドラマーとして頭角を現し、クインシー・ジョーンズ・ビッグバンドに抜擢。ドラマーとして参加したアルバムは4,000枚以上。歌手としての代表作に「風のささやき」（68年）。

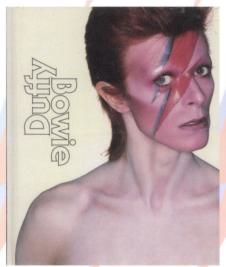
～クロウリーに囚われて～
電撃ZIGZAGボウイ大作戦！

# 滝本誠のIn Memory of... DAVID BOWIE

文◎滝本誠

"In Memory of Brian Duffy"（ACCエディション刊）として編まれたダフィとボウイのコラボの全容。なかにダフィではないが、充実の『地球に落ちて来た男』（76年）の製作風景、写真が収録され、資料として素晴らしい。

## 〈ホワイト・サンズ〉のブラック・ポイント

1963年、ケネディ大統領暗殺によって、阿鼻叫喚のシックスティーズが幕開けするが、この年、ペーパーバック（ゴールドメダル）オリジナルとして、1冊のSF小説がアメリカで刊行された。ウォルター・テヴィスの『The Man Who Fell To Earth』である。裏表紙のセールス文には、〈『ハスラー』の作家が書いた驚くべきA Visitor From Another Planet小説〉とあって、1950年代SFでよく目にする……"From Another Planet"を入れ込んだタイトルも検討されたことがわかる。

アメリカの戦後世代少年たちは、マチネーで観たSF映画に熱狂し、"From outer

ハート・クレインの死は、それが自分の誕生日に近いこともあって、後年ボウイにさまざまな感慨をもたらすことになった。それがまさか、である。

space"や"From Another Planet"ということばに無条件でイッたのである。原爆、水爆実験、それに宇宙飛行の黎明期と重なり、どのようなチープな出来のSF映画でも、そこには世界の終末の恐怖が貼りついていた。こうした空気のなかで育ったリンチも、この"From Another Planet"に夢と恐怖を感じ続けていたことは、『ツイン・ピークス』のマイケル・アンダーソンに、当初は"The Man from Another Place"という呼称を与えたことからもわかるだろう。

そのオリジナルの表紙イラストは見ての通りのものであり、右に地球人の、左に細い（人間型）エイリアンの骨格、それぞれのレントゲン透視標本として描いている。

エピグラフにはハート・クレインの詩の一部が引用されていて、最初の行には、こうある。

And so it was I entered the broken world

……この崩れ、壊れた世界へと入る。

テヴィスのSFの内容は、この行をリフレインしたものだ。もとより、母なる星も壊滅状態に近づいている（だから彼はやってきた）わけだが、地球は果たして彼にとってどうなのか？その答えはエピグラムにすでに書き込まれているわけだ。映画の日本公開は1977年で、邦題はそのまま『地球に落ちて来た男』となり、同名の邦訳（扶桑社）もずいぶんたって、2003年に刊行された。

小説の冒頭は、トーマス・ニュートンがさびれた町にまず一歩を踏み入れるところから始まる。看板には〈HANEYVILLE：POP.1400〉とあり、その町ハニーヴィルの人口が1400人と知ることになる。ジム・トンプスンのスモール・タウン・ノワールの人口が『POP.1280』だったように、だれがみてもこれくらいの人口がスモール・タウンの正解人口だろう。ツイン・ピークスの看板の巨大人口は、まったくもって不可解で、ありえない。この住人数の謎にリンチ／フロストは解答を与えていない。

町への登場場面において、『地球に落ちて来た男』のボウイと、『ツイン・ピークス』のFBI捜査官のカイル・マクラクランのイメージを交錯させたい。ボウイが若いころのジェフリーズにみえてくる。ふたりとも、the broken worldへの正体の見えない侵入者として共通するのだ。

〈エピソード8〉の戦慄は、原爆実験の異様美もさることながら、ボウイ研究の側からみれば、クレジットそのもの、実験がおこなわれた砂漠名〈ホワイト・サンズ〉にこそあるだろう。『地球に落ちて来た男』撮影時、ボウイは現場にやってきたファッション・カメラマンのダフィと、深夜にホワイト・サンズを訪れ、黒い服、黒い帽子になって、簡単なフラッシュ撮影をした。ボウイが砂を手にしてそれを撒いたとき、フラッシュ効果によって、白い細やかな奇跡の砂が、まさに死の灰とも見え、ボウイが白鳥か天使のようにも見えて、壮絶に美しい。

リンチ／ボウイの時を超えてのアート核反応が〈エピソード8〉だ。

リンチ創造のキノコ雲、そして実験場所・日時。

JULY 16, 1945
WHITE SANDS, NEW MEXICO
5:29 AM (MWT)

# キャンディ・クラーク参戦

『ツイン・ピークス3』配信にぶつけるかたちで、あるいはあやかる形で、でも新鮮プッシーはこっちのほうが断然いけてない？と言いそうな黒人〈3〉人娘＝プッシー・キャッツも登場するのが、スモール・タウンのダークなハイスクールものドラマ『リバーデイル』（17年～）である。お約束の水死体、ただし、こちらの水死体は額を射抜かれた美少年高校生なのだ。

キャスティングに驚きつつ納得したのが、メッチェン・アミックの出演である。地元の新聞記者にして、2人娘のしつけきびしい教育（鬼）ママ役だ。スモール・タウンの新聞記者ということは、町の情報を、各家庭の秘密をにぎるというおいしい立場であり、邪な人格の格好の受け皿である。アミックがぴたりとはまる。死体の検死解剖も医者に鼻薬をきかせて潜入。娘も高校新聞の編集者として、犯人捜しに没頭する。音楽・映画ネタが多く、それだけで楽しい。怪しいやりとりの場として、今の時代にドライブイン・シアターが設置されている町なのである。

アミックの起用は、『ツイン・ピークス』リスペクトの証文のようなものかもしれない。

キャスティングより、さらに驚いたのが、アミックの役名だ。

アリス・クーパー！ですよ。グラン・ギニョル・バンド＝アリス・クーパー（のちソロ、ややこしい。マリリン・マンソンが命名方式、グループ離脱で後を追ったといえるわけだが）が、たちどころに脳裏に浮かぶ。そもそもこの名前は、17世紀初頭に魔姉妹とうわさされ、家の火災で両親が死んだとき、姉は村人に惨殺され、妹のアリスはしばらくのちに13歳で姉の後を追ったとされる名前だ。まさに、魔の国のアリスだ。『ツイン・ピークス』同様、『リバーデイル』も、死体発見後、犯人探しが魔女狩りの様相を呈してくる。

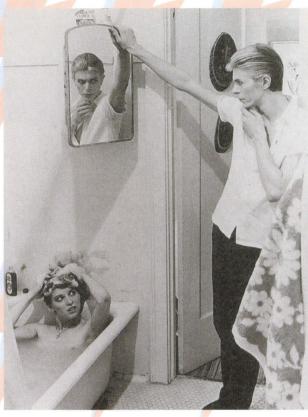
しかし、クーパー姓とくれば、デイル・クーパー捜査官もまた、魔女の系譜に連なる子孫とすれば……。

自らの死を自覚して、自分のポップライフを集約、終止符を打とうとしたボウイはミュージック・ヴィデオ〈★（ブラック・スター）〉を製作、暗い宇宙を漂った〈スペイス・オディティ〉のトム少佐の亡骸から、きらめく頭蓋骨を回収する。これを迎えるのが、セイレムの魔少女たちの憑依ダンス（イヴォ・ヴァン・ホーヴェ演出、アーサー・ミラー『クルーシブル（るつぼ）』の振付援用）だった。ここでボウイは高らかに、〈暗黒★書〉を掲げてみせた。反クリスト者として。ボウイは、少女アリス・クーパーや『ウィッチ』（15年）の少女のボウイ・サバトへの召喚も願ったにちがいない。

キャスティングといえば、『ツイン・ピークス3』でまったく予想すらしていなかったのが、キャンディ・クラーク（『地球に落ちて来た男』）の出演だ。エレベーターの過重力で倒れ、鼻血を出したトーマス・ニュートン（ボウイ）を抱き上げ（！）、かいがいしく世話を焼いていたメアリー・ルゥが、なにゆえここに？これまでリンチ作品との接点はない。考えられるのは、オファーしたもののボウイの出演がどうもかなわないと判断されたとき、ボウイのダイアン（代案）はクラーク嬢しかいない、ということなのだ。

クラーク演じるのは、ツイン・ピークスのトルーマン保安官（兄）の妻であり、実に世俗をきわめて、ガミガミ、ガミガミといつも罵声を浴びせる。こうしたルゥの現在こそが、40年の時を経た地球人女性としての正しい現世的なありかたとして、ニュートンは学ぶであろう（まあ、結婚すれば、男を待つ運命はこれしかない）。

しかし、クラークもリンチに呼ばれ、しかもただただがみがみ、がみがみ、がみがみの黄昏を演じるとは、エイリアン・ボウイとのセックス以来の驚きであったろう。

『地球に落ちて来た男』スティル。キャンディ・クラークの入浴。ぎりぎりニップル・ラインというのが、カメラもキャンディもプロの証。

アート系ファッション誌『FLAUNT』の表紙を飾ったボウイ自画像。眼の部分が２カ所くりぬかれている。たしかこのとき、付録としてクレヨンが付いていたと思うが、きちんととっておかないと意味をなさない（次ページへ）

# Aライン・ガール
# ハロー、スペイス・ボウイ

空飛ぶ円盤が、ウラジミール・ナボコフが歓喜するであろう飛行スタイルを見せるのが、『Earth Versus the Flying Saucers（世紀の謎 空飛ぶ円盤地球を襲撃す）』（56年）である。ナボコフの『ロリータ』（55年）へのSF的回答？ どういうことか？ 少女のスカートが春風にふわりと浮かぶ反重力的夢感覚と言おうか。旅客機の窓越しに、戦闘機の正面に、あるいは車を走らせているときに、その後ろについてふわり、ふわり……いずれも円盤の飛行が上へと衝突を避けるので、われわれはふわりとしたスカートを下から仰ぎ見ることになるのだ。

空飛ぶ円盤にこのような痺れる官能を与えたのが、特撮の神様レイ・ハリーハウゼンである。製作費の兼ね合いか、合成とかが安っぽくもあるが、円盤飛行のゆるやかで優雅なお色気にかんしてはこれを凌ぐものは以後もまったくあらわれない。

『ツイン・ピークス3』、最後の対決にむけて、分身〈悪〉の回収にむけて、たわむ巨大送電線と平行するハイウェイをダイアンとクーパーが車を走らせるシーンを観たときに、どこかで近似の雰囲気を味わったことがあるな、と、なけなしの記憶をたどり、たどりついたのが、このSF映画だった。

この空飛ぶ円盤は前もってなにかを伝えようとしていたのだが、ノイズしか主人公には聞こえない。ただ、再生時に、攻撃で電圧が弱まってテープ回転がスローになったとき、彼らが発した英語メッセージが聞こえてきたが、時すでに遅し。円盤内部での拉致、その人間の脳から記憶を取り出す装置などが逆に新鮮。過去の白黒映画が持つ魔術だ。

長い沈黙を破って世界を驚かせた『The Next Day』に続き、間髪入れずリリースした、『Extra』（共に13年）収録作〈Born in A UFO〉において、不思議な少女は〈Aラインのスカート〉、つまり末広がりのふわりとしたスカートを穿いてあらわれる。これはまさに1940年代、50年代のアメリカン・ファッションだ。ここで、この言葉を借りて言いたいのは次のことである。つまり、Aライン・スカートの延長にハリーハウゼンの円盤デザインがあるということ。その時代の優雅が、円盤デザインにまで無意識に及んだのではないか？ Aは大文字でなくてはならない。その角張った先端部に丸みを与えよ、そして、そして下へ圧縮せよ、こうしてA UFOは、A＝UFOとなる。ボウイは、UFOと少女を同定し、そこに救済のイメージを与える。UFOで生まれた少女は、音楽劇『ラザルス』の少女同様、ボウイが自己救済のために生み出したドッペルゲンガーだ。

ちなみに、『ツイン・ピークス3』にあって、Aライン・スカート・ガールズは、キャンディ他カジノの3人娘だが、古風にして奇怪なAライン・スカート少女の登場が〈エピソード8〉であって、この少女こそが……。

1947年生まれのボウイが育った、ケント州ブロムリーは、今にいたるまで広範に使用される膨大なSFアイデア（宇宙戦争、タイム・マシーン、透明人間ほか）を世に出した作家H・G・ウエルズが生まれ育った場所でもあった。いってみれば、現代SF生誕の地である。血ではなく、地は争えない。ボウイが最終的に、異星人アイデアで自らをスターダムへと押し上げていったことは、いまや文字通り妖精譚レベルだ。この1947年は、アメリカで本格的にUFO（未確認飛行物体、お皿状に見えたことから空飛ぶ円盤とも）が相次いで報告されはじめた年でもある。そして、目撃例が多いのはニューメキシコ州であって、映画『地球に落ちて来た男』が

撮影されたのもそこであった。ボウイのSFの〈地〉は騒いだにちがいない。

このポスターは下からのあおりでは映画に忠実としても、そもそも下腹デザインがまったく異なる。ただ、EARTH vs ……のタイトルが乗っかっている黒い形はかろうじてオーケー。

2012年のパリで最大規模のエドワード・ホッパー展が開催され、これがまたリンチの創造力をくすぐった。Aライン・ガールのホッパー空間への投入である。

表紙にはもうひとつ仕掛けがあって、それが親指の爪で穿たれた穴をなぞっていって、パコン。下からはウッズマンならぬ長髪黒々ボウイが顔を見せるのである。さすが、ジェフリーズ、とっくにセーラ／ローラの暗黒版聖家族の実相をお見通しだったのかもしれない。

# ブラックロッジに永遠に囚われて

コカイン他のドラッグ漬けで、青白くやせ細り、周辺から健康危惧の声もあった1975年、ニューヨークに拠点を移していたボウイは、この年初めて、実験映像作家ケネス・アンガーをガールフレンドのひとりとともに訪問する。このとき、ある種の儀式を目の当たりにしたようで、それがドラッグ漬けの精神に深く侵入した。アンガー訪問を訊き及んでやってきたジミー・ペイジ（レッド・ツェッペリン）と激しい口論がはじまり、決定的な決別となった。呪いをかけられたと感じたボウイは、ニューヨークを離れ、ロサンゼルスへと移り、家の床に魔法陣を描いて霊的アタックへの防御態勢をとった。

ひとりのイギリス人監督が訪ねてきて、ボウイに映画出演を打診したのは、こうした混乱のさなかであった。それが、ニコラス・ローグであり、打診された作品がテヴィスの『The Man Who Fell To Earth』(63年)であった。

ケネス・アンガー、ジミー・ペイジ、そしてボウイ、この3人に共通する関心対象が〈魔術師アレイスター・クロウリー〉ということになる。1968年に、クロウリー命のケネス・アンガーがイギリスに渡ってカルチャーに黒い波乱を起こした。彼がローリング・ストーンズに接近したからだ。なぜイギリスに渡ったか？ アメリカで撮影した『ルシファー・ライジング』フィルムが、出演・音楽のバーソレイユによって持ち逃げされ、それを彼はチャールズ・マンソンに献上。このことがあって、アメリカでの映画製作を断念、自らの死亡告知を出して、イギリスに活路を求めたのだ。

折しも、イギリスではそれまで忘れ去られていたクロウリーは、セックス、ドラッグ、ロックンロールの中核で息を吹き返しつつあった。

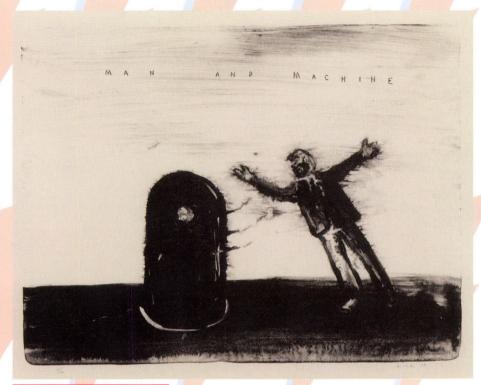
「汝の意志するところのものを為せ」

という彼の格言は誰の耳にも心地良いが、労働者階級がロックという新階級を創造したシックスティーズに、彼らを後押しするマントラとなったのである。ビートルズ〈サージェント・ペッパーズ・ロンリー・ハート・クラブ・バンド〉のアルバム・ジャケットにクロウリーの禿げ頭が印刷されたことが、復活の決定打。

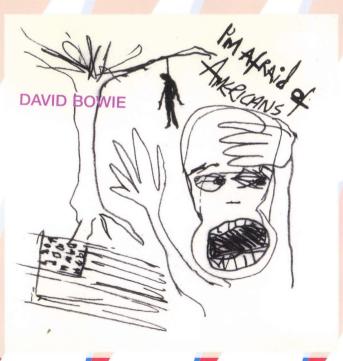
このビートルズの歴史的名盤と同日発売となった10代の少年ボウイのアルバムは売れなかったが、奇想にあふれ、特にアルバム最後に置かれたテイクは、ラジオ・ミニ・ドラマ仕立ての墓場恐怖コント、これが最高である。

アンガーは最初、ローリング・ストーンズに接近、彼らの悪魔商売に手を貸してカネを借りるが、オルタモントのギミー・シェルター・コンサートで死者が出たことでストーンズは商売をたたむ。アンガーの次の他人の財布狙いが、ジミー・ペイジであった。

ペイジはスコットランドの旧クロウリー宅購入のほか、バンドで稼いだ金をここぞとばかりにクロウリーの遺産コレクションに費やしていく。こうしたペイジの動向に臍を噛む思いでいたのが、当時オカルト傾斜を加速させつつ、スターダムに駆け上がりはじめたボウイだったわけだ。クロウリーの死は1947年、つまりボウイの生誕年。クロウリーの精神的後継者はおれだ、と思ってもおかしくない。ともかく、シックスティーズに争って読まれたヘルマン・ヘッセの『荒野の狼』が言うように、カルチャーの先端パーティへの入場者は、MADMAN ONLYなのである。クロウリー・パーティも同様。ボウイには本当のMADMANの自覚もあった。地ではなく、こちらは血として。

クロウリーは『地球に落ちて来た男』の撮

＜Man and Machine＞（09年）個展図録『David Lynch Lithos,2007-2009』（10年）より。黒々マシーンからなにやらびりびりしたものが男を引き寄せている。

『ツイン・ピークス3』であきらかになったボウイの最終形態。閉じ込められているのか、このポット状そのものなのか。インダストリアル・ゴシック美、たまらない。

映画『プレステージ』（06年）のテスラ・コイル放電ショー。原作はSF作家のクリストファー・プリースト『奇術師』（95年ハヤカワ文庫）。テスラの装置による瞬間場所移動とか、『ローラ・パーマー最期の７日間』の特典映像のボウイの時空間移動ショットなどテスラ的といっていい。

リンチとボウイを繋ぐ共通の友人、トレント・レズナー（ナイン・インチ・ネイルズ）プロデュースのリミックス・ヴァージョン『I'm Afraid of Americans』、ジャケット・イラストはボウイ自身である。

影現場にも影を投げた。この小説の映画化に奔走してきたのが、デイヴィッド・キャメルだったからである。デイヴィッドはドナルド・キャメル（『パフォーマンス』68年／ニコラス・ローグと共同監督）の弟であり、キャメル兄弟は幼いころ、父親が非常な賛美者であった関係で、自宅に無心によく訪れていた、老残のアレイスター・クロウリーにあやされた記憶があるのだ。体が臭かった、家からモノがなくなった記憶しかないようだが、オカルト史では貴重な体験というしかない。撮影後、ボウイは最高傑作『ステイション・トゥ・ステイション』（76年）を作り上げ、表題曲でクロウリーへの賛歌を歌い上げるのである。

こうして、ボウイの1975年は、ひとことでいえば〈クロウリーに囚われて〉となった。『地球に落ちて来た男』のニュートンも、地球というBroken Worldに囚われた男だったことを思えば、とにかく〈囚われ〉つつ、創造においては人生で最良をなしえた年となった。あるいは、意志するところのものを十全に為したのが1975年であった。ローグの幸運は、まさに地上の汗の気配のない、Another Worldに生きているかのようなボウイの肉体、精神を捕獲しえたことである。

リンチもまた、ボウイ（ジェフリーズ）へのリスペクトとして、『ツイン・ピークス3』において、決定的な〈囚われ〉状態にする。ポットに封じ込め、あるいはポットそのものとするのである。ダークでゴシックな色調の巨大ポットがジェフリーズの住処であり、つまりはボウイの住処として、リンチは提示したのだ。（クロウリーの）ブラックロッジに最良の席を用意した、ということなのか。

『ローラ・パーマー最期の7日間』における、ブラックロッジに囚われ、絶叫するボウイから四半世紀の間に、ボウイはリンチの禁断領域に踏み込んだ。ニコラ・テスラのテスラ・コイル使用の放電ショー（映画『プレステージ』06年／クリストファー・ノーラン監督）である。リンチがタイトル・ロゴの数秒で我慢したテスラ・ショーを、大画面で、しかもボウイがテスラを演じた……。業界では、リンチのいまだ作られない『ロニー・ロケット』は、テスラ映画と呼ばれてきた。びりびりした放電世界が舞台だからだ。

あこがれ続けてきたテスラのコイル放電の光を浴びたボウイは、暗闇に自閉してもらわなくてはならないと考えたかどうかはわからないが、あのような姿になった。ボウイはリンチの親友でもあるナイン・インチ・ネイルズ（トレント・レズナー）プロデュースの〈I'm Afraid of Americans〉における自分の判断は、正しかったと思うだろう。AmericansをLynchとしながら。冗談としても、それくらいポットの部屋は暗く侘しい。

リンチとボウイが顔を合わせたのは、『ローラ・パーマー最期の7日間』の撮影現場であったが、ボウイが姿を見せたとき、隣のミゲル・フェラーに、おい、あれがボウイか。こたえてフェラー曰く、ボウイに見えます。まるで、ゴードン／アルバートの劇中会話のような会話がなされたらしい。ボウイ&フェラーに改めて合掌。

『ローラ・パーマー最期の7日間』で、失踪したままの捜査官フィリップ・ジェフリーズ役でリンチ作品初参加のスーパースター＝ボウイ。

# "TWIN PEAKS"

**懐かしの90年代宣材物から、最新作『The Return』のオフィシャルみやげもの、貴重小道具、激レア・ファンメイド・アイテムまで、よりどりみどりのグッズ迷宮!**

提供◎オギー ジョーンズ、高橋ヨシキ、北原香、本田敬、滝本誠、CAFE：MONOCHROME 川村誠
撮影◎菊池茂夫

## AUTOGRAPH

2017年7月12日(水)、ペニンシュラ東京でのカイル・マクラクラン来日取材時に滝本誠氏と。

1. カイル・マクラクラン

2. シェリル・リー

3. シェリリン・フェン

**1.**
17年7月の来日時のインタビューで『ツイン・ピークス』を一言で表すと?の問いに「BALANCE」と答えたカイル・マクラクラン。滝本さんとは25年ぶりの再会。 (北)

**2.**
TPの中で死体写真の次に有名なローラの「プロムクイーン フォト」にシェリル・リーのサインが入ったもの。サイン自体の入手難度は低いですがこの写真と死体写真にサインが入ったものはやはり人気がアリ。 (オ)

**3.**
シェリリン・フェンの新たな公式サイト(https://www.sherilynfennxo.com)が2017年2月にオープンしたときに購入したもの。サイン入りヌード写真も購入可能。(高)

# 90's GOODS

**1.**
Star Pics社製トレーディングカード。パック売りではなく、箱に全種類カードが入っていて、運がよければ直筆サインカードが当たる。画像下の両端が大当たりのクーパーとローラ。中央の3枚はPRESS PASS社のサインカード(2013年)。 (オ)

**2.**
タウンガイド「ツイン・ピークスの歩き方」(扶桑社刊)。TPの歴史、自然環境、産業、ファッション、観光名所など細かく紹介。TPワールドの設計図のひとつといえる。 (北)

**3.**
『ローラの日記』英語版2種。左はペーパーバック。執筆したのはリンチの娘ジェニファー。ローラの12歳の誕生日(84年)から死の直前(89年)までの「秘密の日記」。 (高)

**4.**
デイル・クーパーの日記『クーパーは語る』の英語版ペーパーバック、およびカセットブック。カセットブックはカイル・マクラクランの音声が約1時間楽しめる。 (高)

# BOARD GAME

『The Return』放映が発表された1年後、15年の夏にたまたま通りがかった、会社の近所の某出版社の倉庫。いつもは閉まっているシャッターが開けられ、整理作業真っ最中のなか、ガラクタの山に燦然の輝いていたデッドストックのボードゲーム。「売ってください」「いいよ、タダであげるよ」。小さな奇跡に、すぐコンビニでアイスクリームを購入し差し入れた。（本）

## TWIN PEAKS TIMES .1

キネマ旬報社が制作し、レンタルショップで配布していた新聞仕立ての解説フライヤー。ビデオ販促用に第5号まで作られた。スナック菓子ポリンキーや遊園地としまえんのシリーズなど、当時話題となっていたCMや広告をパロディにした架空の新聞広告。（本）

"TWIN PEAKS" RARE GOODS DINER

# やりたくなっちゃうね!

# 90's GOODS

1.

**1.**
劇場版の発表時、本国から来た写真は右下の4ショットなど数点のみ。ローラの顔の画像はビデオ会社から供給された。映画の公開に合わせ、新宿東口広場でローラ・パーマーの命日が催され、数千人のファンが焼香に。丸太おばさんやネイディーンなど、多くのコスプレイヤーも参加した。なお、地方公開時の併映作品は、なぜかレオン・カーフェイ主演の『炎の大捜査線』(92年)。（本）

2.

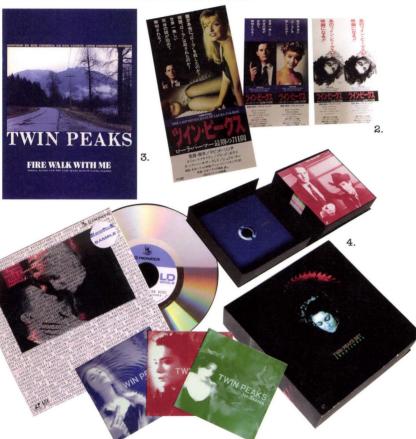
**2.**
一般券とペア券が発売された。ペア券は珍しく絵柄違いのもので2種類。先行版と普及版か、マニアに買わせようとバージョン違いにしたのか、配給会社も存在しないため、今となってはすべてが謎に。（本）

3.

**3.**
劇場用パンフレット。32ページ仕立てで500円という良心的な商品。中ページセンターの折り返し見開きは、雑誌『エスクァイア』が『ツイン・ピークス』を特集したときに現地で撮影した廃列車のオリジナル写真。同誌から多くの画像が流用されている。そのほか、カイル・マクラクランのインタビュー記事や、シェリル・リー来日時の会見のコメントが再録されている。（本）

4.

**4.**
LDはシーズン1（1～7章）とシーズン2のPART1（8～18章）、PART2およびスペシャル（19～29章）の3分割のセットと、それをすべて合体させた16枚組BOXの2種類があり、青い豪華な解説書は全話BOXにのみ封入された。解説書の表紙にある魚の入ったコーヒーは、デザイナーが作成したオリジナルもの。（本）

## TWIN PEAKS TIMES .2

5.

全14巻で構成されたVHSジャケットの原画。ローラの顔を共通のデザインにバリエーション展開されている。レンタルショップにズラリと並んだ背表紙に、貸出中の札が次々とかけられていった光景も今は昔。ちなみに、デザイナーはニクス・グラフィックスの栂田透氏。（本）

5.

# PROPS

**1.**
『劇場版』でローラの部屋にかかっていた「天使の絵」のオリジナルからのコピー。画像は天使が去ったバージョン。天使がいるバージョンもあり。コピーなので現在でも海外のオークション・サイトで頻繁に見かけます。 (オ)

**2.**
「ミス・ツイン・ピークス・コンテスト」エントリー募集ポスター。こちらもオリジナルからのコピー。ちなみに、優勝賞金は2,000ドルとあの町にしてはけっこう奮発しています。 (オ)

**3.**
RRダイナーのメニュー。オリジナルからのコピーで、メニューの中身は空白。テーブルの上に置けばたちまちRRダイナーで食事している気分になれるハズ。たぶん。 (オ)

**4.**
「片目のジャック」の紙ナプキン。オリジナルプロップ。オードリーのようにチェリーの茎を舌で結んでペッとやりたいところですが、本物なのでもったいなくてできません。大量に作られているので根気よく探せば見つかります。 (オ)

**5.**
「パインウィーゼルを救え」の缶バッジ。オリジナルプロップ。『TP』S2後半のグダグダパートを彩る重要なプロップ。現存数は多いですが人気なので価格は200ドル前後してしまいます。ショボい缶バッジなのに。 (オ)

**6.**
「グレート・ノーザン・ホテル従業員名札」。オリジナルプロップ。そこそこの数の従業員がいるホテルの名札なので高額ですがレア度低し。「TAMI SUE」さんってどなた? (オ)

**7.**
「ローラの死体発見現場の流木の皮」。オークションで購入した、限りなく怪しいアイテム。出品者が自ら毟ってきた本物だと言い張るのでハイそうですかとしか言いようがない。冷静に考えると毟っちゃダメだろう! (オ)

**8.**
「滝の流れる時計」。プロップと同じ商品。滝の部分が流れているように点灯する50年代のアンティーク時計。劇中で片腕の男の左側で一瞬だけ映ります。ファンはこんなガラクタもほしくなっちゃうんです。 (オ)

**9.**
「赤い部屋のランプ」。プロップと同じ商品。『TP』と関係なく人気の高い「サターンランプ」と呼ばれるアールデコ様式の逸品。ボディはすべてガラス製。自分の部屋を「赤いカーテンの部屋」にしたい困ったファンには必須のアイテム。 (オ)

**10.**
「ローラ幼少時の写真」。オリジナルプロップ。第17章のヘイワード邸での「ローラを偲ぶ会」でテーブルに置かれていたもの。シェリル・リーの幼少期の写真ではなく、実際は雑誌の切り抜き。680ドルで売りつけられました。 (オ)

**11.**
「クーパーのライト付ルーペ」。プロップと同じ商品。「MAGNA LITE」という商品で同じデザインでサイズが数種あり。爪の紙片や「FLESH WORLD」を見るシーンなどに登場。箱付の完品が容易に見つかるので、クーパーのコスプレをする方へオススメ。(オ)

**12.**
「ハートのペンダント」。プロップと同じ商品。数十年前に日本でも流行ったバカップル御用達のペンダント。首に掛ければたちまちバカに変身! 似たものがかなりあるのでDVDを観ながら字体の同じものを根気よく捜索。 (オ)

**13.**
「ダイアン各種」。プロップと同じ商品。25年前にはまさか実在するとは思わなかったダイアン。コスプレには必須アイテム。左から6章、8章、パイロット版ほかに使われたものと同種。いちばん右がパナソニック、残りはRealistic社製。 (オ)

**14.**
「目盛り付きグラス」。プロップと同じ商品。第26章でクーパーがミルクを飲んだときのグラス。目盛り付きのおかしなグラスなので、ホテルの備品なのかクーパーの私物なのか謎。オークションで探す際は「目盛り」「カウボーイ」「グラス」でひたすら検索。 (オ)

**15.**
「RRダイナー アヒルの置物」。プロップと同じ商品。RRダイナーの4人掛け席の横に置いてある、かなり主張の強い置物。一見木彫りの置物のような佇まいだが、実際は陶器製のクッキージャー。レプリカのメニューと一緒に並べれば、あとひと息でRRダイナー! (オ)

**16.**
「クーパーの電卓」。プロップと同じ商品。「ダイヤルマスター」という電話のトーン信号が発信できる電卓。ジェームズを保安官事務所で取り調べる際にこれを使い「HE DID NOT DO IT」とクーパーがハリーに知らせたシーンに登場。 (オ)

**17.**
「丸太おばさん ティーカップ、フォトフレーム」。オリジナルプロップ。俳優のジョン・マルコヴィッチがD・リンチ作品の登場人物のコスプレをしまくる意味不明なショートムービー「サイコジェニックフーガ」の『TP』篇で登場。マルちゃんはクーパーと丸太おばさんに扮します。心の目を使ってもマルちゃんの仮装にしか見えません。 (オ)

**18.**
「保安官事務所の電話のアンプ」。プロップと同じ商品。「DUOFONE」という名前の電話用スピーカーアンプ。未使用の箱付完品で手に入れましたが、あまりにも地味なので達成感低し。なぜかトレーディングカードにも写真があります。 (オ)

**19.**
「ブラックロッジ リング」。現行商品。左が駄菓子屋テイスト満載のブート品。右がジュエリーメーカー「ROCK LOVE JEWELRY」社のオフィシャル商品。本物そっくりです(本物見たことないですけどね)。 (オ)

**20.**
「ドナのステレオラジカセ」。プロップと同じ商品。25年前にしてもかなりドナがケチで物持ちがいいヤツだとわかる商品。「ダイアン」と同じくRealistic社製。『TP』のファン以外にはただの廃品なので、べらぼうに安い値段で購入可能。しかし探すのはかなり困難を極めます。 (オ)

**21.**
「ウィンダム・アールのトランプ」。第25章に登場のトランプレプリカにカイルの直筆サインが入ったもの。 (オ)

# OFFICIAL GOODS

1.
「ツイン・ピークスのテーマ」のシングルCD。カップリングは「ローラ・パーマーのテーマ」を収録。8cmっていうのが時代ですね。（北）

2.
FUNKO社製フィギュアセット。コーヒーカップや丸太などの小物が付属。肘と膝関節が可動するのでさまざまなポーズが可能。旧ケナーの『SW』フィギュアのような似過ぎずオモチャっぽさを残した見事な造形（考えすぎ？）。他のキャラもほしいところですが残念ながらこの4種のみ。（オ）

3.
TPカードゲーム。ハーティロビン製。UNOとブラックジャックを足したような面倒な割りにまったく盛り上がらないゲーム。SEGAから出ていたボードゲームもやはり面白くない。（オ）

4.
テレホンカード。今どきの若者にはテレホンカードといってもピンとこないでしょうね。左が販売用の商品で、右がパイオニアLDCの非売品。他にもかなりの種類が出ていました。昔はテレカは投機の対象でしたが、現在は額面割れです。（オ）

5.
ツインピークスジュエリー。ROCK LOVE JEWELRY製の本格的なアクセサリー。ジャコビーの金のスコップペンダント、丸太ペンダント、ブラックロッジリングのほかにも数種あり。丸太ペンダントはホークを演じるマイケル・ホースのデザインと造形で、直筆サイン入り証明書が付属します。（オ）

6.
ツインピークス・サイン ボブルヘッド。BIF BANG POW!製。頭がないのにボブルヘッドというわけのわからない商品。絵柄違いで2種類アリ。いちばん右は同じメーカーの「PIN MATE」というミニこけしのシリーズ。（オ）

7.
『The Return』プレミア試写みやげ。プレミア試写の際に関係者に配布されたトートバッグと原寸大の丸太クッション。最近、これよりふた回りくらい小さいサイズのパチモン丸太クッションが100均で200円で販売されていてビックリ。（オ）

**8.**
『ツイン・ピークス ビジュアルサウンドトラック』。25年前のブーム絶頂期に発売されたLD。『TP』のサントラにロケ地で撮り下ろしたグダグダな映像がただただ流れるというある意味『TP』らしいグッズ。ファンにはたまらないがそれ以外の人にはかなり苦痛なシロモノ。（オ）

**9.**
『The Return』完成試写場内マップ。いちおう会場の案内図にはなっていますが知らない人が見たらただのラクガキです。（オ）

**10.**
ダギーのコーヒーカップとカジノチップ入れ。番組公式HPより購入可能だったカップ。どちらもダギーのものまね宴会芸には欠かせないアイテム。黄緑色のジャケットを見つけるのがなかなか大変ですけどね。（オ）

**11.**
『The Return』ピンバッジ。販売用ですがオフィシャル・ジュエリーを複数購入した際に気前よくオマケで入っていました。（オ）

**12.**
クーパー捜査官ボブルヘッド。BIF BANG POW! 製、1,500個限定の商品。ネクタイの柄と台座の模様違いのバリエーション。SDCC2017で先行販売されました。（オ）

**13.**
TP靴下。ジグザグ模様に特に権利はないようで、さまざまなアパレル商品が発売されていますが、本商品は正式に版権を取得したオフィシャル商品です。（オ）

**14.**
TPサインパッチ。町の入り口のサイン（看板）デザインのパッチ。オフィシャルアイテムの現行品です。（オ）

**15.**
BE@RBRICK。おなじみのメディコムトイ製のデザイナーズトイ。ブラインドボックス販売でHORRORのカテゴリーに入っていました。ローラ・パーマーは温度で体の色が変わります。クーパーは「裏」（シークレット）扱いでした。シリーズ21です。（オ）

8.

9.

10.

11.

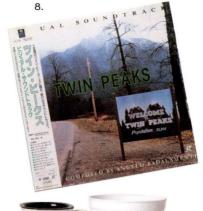
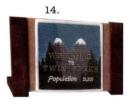
12.

13.

14.

15.

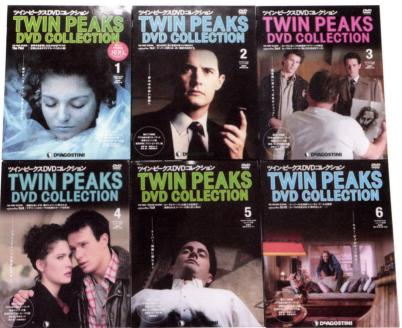
16.

17.

**16.**
BE@RBRICK付属カード。シリーズ21のHORRORカテゴリーのローラ、クーパーに付属していたカード。BE@RBRICKでは、このカードがそれぞれの個体のギャランティーとなります。（オ）

**17.**
POP! FUNKO社製のソフビフィギュア。全7種プラス2体セット1種。下段の4種は直筆サイン入りです。丸太おばさんのサインはもういただくことは叶わないので残念です。（オ）

# MAGAZINES

1.

2.

**1.**

『ツイン・ピークス DVDコレクション』デアゴスティーニ社製。2015年5月～8月というおかしな時期にリリースされたため惜しまれつつ？6号で休刊となってしまった商品。残りのエピソードは1万円でまとめて優待販売。静岡限定のテストマーケット商品なので、存在を知らない人がほとんどです。創刊号から17号まで購読するとまったくうれしくない『ツイン・ピークス』のサントラがもれなくもらえる予定でした。コレ買う人は普通持ってるでしょ!　（オ）

**2.**

当時の熱狂を閉じ込めたものからリンチ本人のインタビュー集まで、リンチに関する出版物を読めば、TPの世界が少し分かるかも。
左上から時計回りに：『映画作家が自身を語る　デイヴィッド・リンチ』改訂増補版（フィルムアート社）／『銀星倶楽部15』（ペヨトル工房）／『ピーカーをめざせ』（映人社）／『美術手帖』91年3月号（美術出版社）／『キネ旬ムック フィルムメーカーズ⑦ デイヴィッド・リンチ』（キネマ旬報社）　（北）

**7.**

老舗ファンジン『Wrapped in Plastic』。第1・第2シーズンのDVDボックスに収録されている特典映像は編集コンビの尽力によるもの。こちらの編集チームは現在『BLUE ROSE』(8.)を作っています。（北）

**8.**

『BLUE ROSE』。2017年1月から刊行が始まった『ツイン・ピークス』マニアによるマニアのための同人誌。他では読めない貴重なインタビューなどマニアックな記事が満載。（高）

**9.**

『FLESH WORLD』。フジテレビの深夜のクイズ番組『カルトQ』デイヴィッド・リンチ回(92年4月13日放送)の出場者5人によって作られたファンジン。同人誌といったほうがしっくりくる内容です。皆さんご存知の通り、若き日の高橋ヨシキさんが同番組に出場しており、この雑誌の編集を行っています。表紙は現地まで出向いて撮影した写真です。（オ）

**10.**

『SECRET AGENT OF TWIN PEAKS』。165ページの力作ファンジン。内容はカイル・マクラクラン中心のTP本。スノコルミーへの聖地巡礼記事など読み物も充実。『FLESH WORLD』よりちょうど1週間早い発行。ほかにもクーパーのコミックも発行していたようだが現物未入手。（オ）

**11.**

『FAQ』(よくある質問)とは名ばかりの、異常に充実した情報で埋め尽くされたマニア向けハンドブック。同じシリーズには『ロッキー・ホラーFAQ』、『フィルム・ノワールFAQ』などもあり、どれも相当にハードコア。（高）

**12.**

『ツイン・ピークス』がらみでは最も初期に発売されたメイキング本(90年)。早すぎた刊行とあって、エピソードガイドが第16章までしか載っていないのはご愛嬌。製作の舞台裏、詳細な人物紹介など読みどころ多し。（高）

**13.**

雑誌ジャーナリズムでまず最初に『ツイン・ピークス』を大激賞したのが、この『エンターテインメント・ウィークリー』誌だった。この先走った大特集が与えた影響は大きい。しかし、シーズン2も半ばにくると一転、手の平返しで大ブーイング。まぁ、世間と同じ。（滝）

7.

8.

9.

10.

11.

12.

13.

# FAN MADE

1.

GARBAGE PAIL KIDSカード。TOPPS社の人気シリーズ。キャベツ畑人形のパロディーカード。すべてのカードがゲロを吐いているか鼻くそをほじくっているか、キャラがバラバラにされている絵柄。珍しく『The Return』からの商品で、名前は「JACKPOT JONES」と「CASINO COOPER」。（オ）

2.

「第2回ボルチモア TPコンベンション」の入場パス。トレーディングカードにシールを貼っただけの手抜きだが、なんかちょっとうれしいグッズ。（オ）

3.

グレート・ノーザン・ホテル315号室のキータグ。『The Return』第3話に登場するやいなや、etsyにレプリカ商品が溢れた。現在はShowtimeのサイトで公式グッズとして発売中。（北）

4.

Chromaticsのジョニー・ジュエルのレーベル「Italians Do It Better」のサイトからレコードを買うとおまけのポスターがつく。その中に入っていたローラバージョン。（北）

5.

ドイツのファンが作った小さなジオラマ入りの缶。人物サイズは1cmほど。よくできているけどちょっと高い。（北）

6.

ベンジャミン・マッケイが描いた図柄のタロットカード。皇帝がベン、正義がハリー、フールはアンディなど、カードのキャラへの振り分けが楽しい。（北）

7.

TP20周年記念パッチ3種。困った感じのデザインは、デイヴィッド・リンチ本人によるものだからしょうがない。（オ）

# COFFEE BREAK

**8.**
ジョージアTP缶。ジョージアとのタイアップ商品。缶の裏にキャラクター紹介や豆知識がプリントしてあります。当時『TP』のオリジナル・ストーリーがジョージアのCMで連続で放映されて話題になりました。左の写真はクーパーの等身大パネルを前にご満悦の高橋ヨシキさん。25年前！　（オ）

**9.**
おなじみツイン・ピークス警察のロゴ入りマグカップ（今はブートも含め、多くのウェブサイトで販売されている）。コースターはまったく『ツイン・ピークス』と関係ないが、ギザギザ模様が良い感じだったので購入。　（高）

**10.**
デイヴィッド・リンチ印のコーヒー豆。現行版は袋入りだが、以前はオリジナル缶＋コースターつきで、davidlynch.comや恵比寿NADiffで購入できた。1300円ほどだったか。　（北）

**11.**
RRダイナーカップ。プロップと同様の商品。黒いほうは劇中にたまに登場するカップ。右の茶色いほうは2013年のツインピークス・フェスティバルで販売された復刻版。　（オ）

**12.**
BL DISH、『The Return』8話のクーパーの名セリフ「月のない闇夜のようなブラックコーヒー」と刻まれたBL MUG、BL GLASS SETは色のついた飲料を注ぐとウッズマンの台詞「これは水だ。そしてこれは井戸だ…」が浮かび上がる。ブラックロッジ柄と2個セットで販売中（川）

**13.**
飲み物注文時についてくる、時期ごとにデザインが変わるコースター各種。『イレイザーヘッド』のヘンリー、ラジエイターガール、ショートフィルムのキャラはDAVID LYNCH COFFEEオリジナルコースター。クーパー&ローラは新作OA記念。　（川）

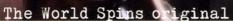
**14.**
特製TPバッジ。3種のマークセットと10種のキャラセット、各トートバッグなど付で好評販売中。お店レポートはP.72へ!　（川）

9.

8.

11.

10.

# CAFE:MONOCHROME GOODS

12.

13.

14.

The World Spins original

滝本誠の逆再生アワー 1989

# インダストリアル・シンフォニー No.1

1989.11.10 @ Brooklyn Academy of Music

文◎滝本誠

1989年、リンチは多方面に多忙をきわめた。まず、ワシントン州の何カ所かで『ツイン・ピークス』パイロット版の撮影、TV上層部のシリーズ化の決断が遅れたため、インターナショナル版（TV局の投下資金回収）のために余儀なくされた追加撮影（マイケル・J・アンダーソン初参加）があり、その前には、まさに突然のひらめきとして急遽撮影に挑んだ『ワイルド・アット・ハート』（90年）があり、こうした合間を縫って、バダラメンティとジュリー・クルーズの初アルバム録音、さらに合間の合間を縫って本格化しはじめていた絵画制作。

こうした多忙のなかで、翌年の1990年に勃発する世界的なリンチ大ブームのささやかな前哨戦が、舞台『インダストリアル・シンフォニー No.1』として行われた。観客には、これが何かの前哨戦とは時期的にまったく理解できなかっただろう。しかし、『ツイン・ピークス』、『ワイルド・アット・ハート』の大衆的関心のさなかの1年後にリリースされたこの舞台の編集版ヴィデオが、そのことをあきらかにしたのである。

ブロンクスの音楽アカデミーから、作曲家バダラメンティのところに話が来た〈ニュー・ウエイヴ・ミュージック・フェスティバル〉への参加作品として突貫的につくられたものだが、内実は歌手ジュリー・クルーズの実験的ソロ・コンサートだ。ただ、実験をおこなったのがデイヴィッド・リンチとなれば、これはもう実験慣れしたニュー・ウエイヴの客であっても舞台の感想はカオスでしかありえまい。特に、赤い服の小人のウッズマン＝マイケル・J・アンダーソンが、自分よりも太そうな木材をギーコ、ヨシキ、ジーコ、ギークとノコギリで挽き始めた時には、ワオ、なにが起こっているんだ？ もしや他に6人小人がいるのかと闇を透かしてなんとか探しだそうとした客もいたのではないか、クルーズを白雪姫に見立てて。

まずは女（ローラ・ダーン）、次に男（ニコラス・ケイジ）のアップ映像、ふたりが電話で会話している。その内容といえば、ケイジからの突然の別れの言葉だ。『ワイルド・アット・ハート』で熱く共演したふたりを使っての特別映像。ダーンの失恋によって崩壊した心象、『ブルーベルベット』のときのように、くちびるがワナワナマナナと脈打つ怒りの光景が『インダストリアル・シンフォニー No.1』のステージの展開内容となる。

真っ暗なステージにノイズ音がつんざき、

# 女と車。

フラッシュが何度も闇をスラッシュする、このフラッシュ／スラッシュが、フラれた女の〈失恋夢〉の最初の感情だ。怖え。

夢のなかで女の代理存在（ドリームセルフ）といえるのがクルーズなのだ。クルーズの白無垢フリルドレスは、ダーンが夢見た花嫁衣裳ともいえるのである。

低く、低く伸ばされたサイレン音がモチーフの〈Up in Flames〉が最初に流れ、歌われる。ステージにまといつくこのモチーフが夢全体への警告音となり、後半の爆撃機の世界崩落の警報へとつながるのである。この曲のあいだ、吊るされた男が浮遊し、その横の黒パイプの塔のなかには、黒パンティと黒のハイヒールだけの若くほどよい、リンチが好きだろうなと思われる、おいしそうな半裸肉厚ガールが、パイプのあいだをあがきつつ、うち棄てられた廃車にたどり着き、乳房をすりつけつつ後部の窓ににじり寄り、身を入れ、なかで悶え続ける。彼女のこの一連の動きにリンチ以上に歓びを感じたにちがいないのが、SF作家、J・G・バラードだ。1970年にロンドンのアーツ・ラブでおこなった〈クラッシュ〉展で、バラードは半裸女性に同様の行為を命じたのだった。バラードにはリンチのこの舞台が、自分へのオマージュ、あるいは返礼と見えたにちがいない。バラードが『ブルーベルベット』の熱狂者ということは、広く知られていたからだ。

リンチ／バダラメンティ／クルーズの曲で、曲が後半部まで至って一度断ち切られる特異な曲想の歌があって、それが彼らの最高作といっていい〈Into the Night〉だが、『インダストリアル・シンフォニーNo.1』でこの箇所はどのように演出されたか？

最高20メートルはあろうかという高さでふわりと吊り下げられ、歌っていたジュリー・クルーズのまさに急激な落下、転落が答えであった。あたりまえだが暗転で人形とのすり替わりであるが、一瞬でわからない。

直後に展開するのが、皮を引剥がれた血まみれの鹿が赤い悪魔のように台車から立ち上がる異様な場面だ。なぜ鹿か？ リンチ流聖なる鹿殺しなのか、『ツイン・ピークス』で使った鹿の剥製への鎮魂なのか？

アンダーソンは途中、混乱する観客にこのショーの狙いをわからせるかのように、これが悲しい失恋ドラマであることをマイクで伝え、冒頭の男女の会話を繰り返してみせる。このとき、彼はローラ・ダーンの声音も真似てみせるのだが、これが最高。マイクを隣の女性（半裸から今はローブをまとっている）から受け取るとき、一瞬、仕事後の食事以上の約束を目で確認したようにみえたが、これは後年のアンダーソンは実は手がはやい説（川勝仕込みネタ）の余計な影響かもしれない。どんな機会も逃さない、さすが赤い部屋の道化の凄み、といっておく。

ここでも、舞台を締める歌は、光への祈念曲〈The World Spins〉なのである。『ツイン・ピークス3』への前哨戦でもあったか。

最初はスーツケースだけが車輪を鳴らしながら近づいてきた——。

## PART I
# 1992年、東京
### 小人 ーマイケル・J・アンダーソンー 来日

TV局のスタッフらと有楽町ガード下のもつ焼き屋「登運とん」にて。周りの客の反応ぶりがいい。

ナンとともに出演した。そこでスタッフが気まぐれに書いてくれた「舞蹴・暗蛇尊」という漢字表記をいたく気に入り、清書してくれとせがんでいた。他にも『CUT』などのカルチャー誌でも紙面を割いてインタビューをした。雑誌『ブルータス』は、いまはなき神谷町のロシア・レストラン「ヴォルガ」を貸し切りにして、大規模な撮影を行い特集を組んでいただいた。連日の取材続きに終盤は疲れ気味だったが、嫌な顔ひとつせず取材をこなしてくれた。

最後の晩は、スタッフとの食事会にも参加してくれた。たしか新宿の京王プラザホテルに宿泊していたと思うが、その近くのレストランに向かう際に、徒歩で移動した。すっかり日が暮れた夜、新宿の雑踏の中、『ツイン・ピークス』を知っている人々は一様に、我々と歩くマイケルを見て愕然とした表情を浮かべ、悲鳴に近い声をあげる人も少なくなかった。左右の脚の長さが違うマイケルは、ソールの厚さが違う特注の靴を履いていた。

食事をしながらマイケルは、自分がナチュラルに逆回転のしゃべりができること、そしてそのコツを教えてくれたが、誰も真似することはできなかった。そして、かつてNASAに勤めていて「大きなコンソールデスクに座る小さなマイケル」として有名だったことを教えてくれた。飾らずに自分の身の上を話してくれる態度とおしゃべりの多彩さに、その場にいる人たちは魅了されずにはいられなかった。

翌日、彼はまた、自分と同じくらいの大きさのスーツケースを引きずりながら成田を離陸した。別れ際にマイケルはハグしてくれた。着ていたマイティ・マウスのTシャツからはけっこうな汗の香りがした。

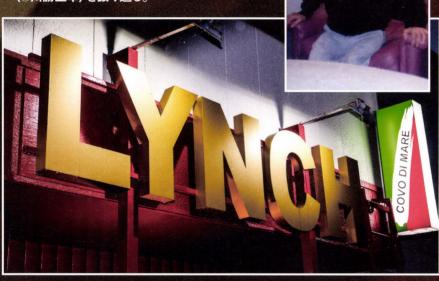
# DAMN GOOD!

PLAYBACK TWIN PEAKS FEVER

# ぶらリンチング旅

## 1992–2018

あのころ僕らは、時ならぬ『ツイン・ピークス』ブームに浮かれていた――。

**92年の小人来日から、至福のシアトル聖地巡礼、パリのリンチ展、さらには宮城に突如出現した赤い部屋まで、リンチを追いかけて旅を重ねた25年。懐かしの貴重写真とともに、ぶらリンチング旅（©川勝正幸）を振り返る。**

文◎本田敬

逆回転の小人、ことマイケル・J・アンダーソン氏が来日したのは92年8月20日の蒸し暑い季節だった。そのころの私は『ツイン・ピークス』のレーザーディスクを発売していたパイオニアLDCという会社に所属しており、社内丸ごと時ならぬTPブームに浮かれていた。マイケルの来日はその『ツイン・ピークス』のプロモーションの総まとめとして。そして、作中では今ひとつ影の薄いディック・トレメイン役イアン・ブキャナンも、リンチ/フロストの新作ドラマ『オン・ジ・エアー』（92年）の主演俳優として、共同でのプロモーション来日を果たしていた。

不思議なことに、ブキャナンに関してはほとんど記憶がない。昼食で訪れた銀座のカレー屋「ナイル」で、隣にいた外国人がブキャナンに向かって「I know you!」と話しかけてきたことくらいだ。LDを買ってくれたファンの方には申し訳ない。

逆にマイケルはとても印象深いキャラクターだった。まず成田空港に迎えに行ったとき、彼は我々の前に単身で現れた。というか、最初はスーツケースだけが車輪をキコキコ鳴らしながら近づいてきたのだ、本当に。そして、カバンの影からひょいと顔を出したのが、作品の中のイメージと変わらないマイケルだった。彼が着ていた黄色のマイティ・マウスのTシャツが、その愛らしさを際立たせていた。結局、4泊5日の東京滞在の間、このTシャツと黒いトレーナーの2着しか持参していなかった。

マイケルは滞在期間中、とにかく多忙だった。日本テレビの深夜情報番組として当時人気を誇った『EXテレビ』の生放送にブキャ

ダブルRダイナー近くの土産物屋

ゆるめの手作りグッズがずらり

ンチング旅もご一緒した。いや、私が行きたがるイベントにおふたりがのっかってくれたといったほうが良いかもしれない。10年12月には、工藤キキちゃんを迎えた4人で、三鷹天命反転住宅で「滝本誠評論活動20周年記念読者感謝祭『余命反展ー EXHIBITION?：TAKIMOTO × LYNCH × ARAKAWA ー』と題した滝本さん所蔵のリンチ・コレクション展示イベントも開催した。チラシのイラストは今をときめく五木田智央画伯だった。

いくつかの旅の記録は川勝さんの著書やブログ（https://ameblo.jp/popholic/）に詳しいが、恥ずかしながら私はこうした時間がどれほど貴重なものか理解しておらず、リンチング旅の目撃者としての記録業務を怠っていた。今となっては悔やまれるものの、『ツイン・ピークス』旅を振り返るこの機会に可能な限り思い出しておきたい。

### ◆初日——8月16日金曜日

成田空港での待ち合わせ。総勢6名程度のツアーにもかかわらず特設カウンターがあり、「ツイン・ピークス フェスティバル2002」の文字が掲示されている。いよいよ滝本さんが彼の地に向かうのだと実感が湧く。8時間のフライトの末、シアトル・タコマ国際空港で出迎えてくれたのは、JTBシアトルの林さん。おそらく50代半ばとお見受けするが、92年のツアーでは丸太おばさんに扮してガイドをしていたとの逸話を持つ、TPツアーにこの人ありと言われた大ベテラン。02年当時すでに退職されていたにもかかわらず、TPツアーならばと特別勤務してくださった。運転手はいかにもアメリカンな風貌の若者デイヴィッド。世代的にTPに興味はないようだが、なんてったって名前がいい。林さんは、曇り空を見上げながら「今日はツイン・ピークス日和ですね」とひとこと。イチローブーム真っ只中のシアトルの町並みを案内してもらいながら、車はゆっくり走っていく。

シアトルから2時間超、お昼過ぎにスノコルミーに到着。このフェスティバルは、有志のファン手作りのイベントだけあって、素朴な光景が広がる。開会式を開催する公民館には、手書きの「TWIN PEAKS FESTIVAL 2002」の看板にフクロウの風船。ウェルカムドリンクとしてスターバックスのコーヒーが大量に用意され、血のりのようなジャムがクリスピークリームのドーナツの山を彩っている。ロビーには、ファンジンや、ファンメイドのTシャツ、グッズなどの手売りコーナー。前年に公開されたばかりということもあって『マルホランド・ドライブ』（01年）グッズも豊富だ。場内にはファンが描いたさまざまな『ツイン・ピークス』の絵が飾られており、カルトクイズ大会も催されていた。02年は、TPのテレビ放送から10年が経ち、その後『The Return』が作られるなどミリも想像もしていない凪のような時期。だからこそ、参加者は皆熱かった。

無事、受付を済ませた我々はランチへ出かけた。向かったのはダブルRダイナーの舞台。前身のマーティーカフェが00年夏に放火にあって全焼したが、その後、トゥ

# 聖地巡礼 PART II
# 2002年、シアトル
## 「ツイン・ピークス・フェスティバル」ツアー DAY 1 8.16（FRI）

ジュリー・クルーズの歌声と赤いカーテンのゆらめきが、まるで夢の中にいるようだった――。

町の看板のロケ地レイニング・ロードにて

文◎北原香

02年夏、『ツイン・ピークス』シーズン1初のＤＶＤ化にあたり、シアトル・スノコルミーで毎年行われている「ツイン・ピークス・フェスティバル」に取材に行く計画が持ち上がった。企画したのは映画.comの駒井尚文編集長。92年のＪＴＢ主催『ツイン・ピークス』ツアーを始めた張本人だ。奇しくもこの年は、フェスティバルが始まって10年目。いつもの年よりゲスト陣が豪華でジュリー・クルーズのライブも観られるということもあり、スノコルミー初訪問の滝本誠さん、10年ぶり2度目の川勝正幸さんの参加が決定した。川勝さんは当初、ロケ地に2回も行くのは……と渋っていたが、滝本さんが一緒なら、と決断された。

### ◆リンチング川勝正幸&滝本誠、10年目の現地ツアー

そもそも滝本さんと川勝さんがリンチングになったのは、92年『ローラ・パーマー最期の7日間』のカイル・マクラクラン来日記者会見。満席の会場内で、川勝さんが滝本さんに席を譲ったのがなれそめだ。おふたりは本当に仲がよく、用がなくても毎週のように電話で生存確認し合っていた。02年の旅を皮切りに、私はリンチの動向をチェックしておふたりにご報告したり、海外でリンチものが発売されるとまとめて購入したり、07年5月のパリ・カルティエ現代美術財団でのリンチ大回顧展「The Air is on Fire」や、10年7月コムデギャルソン大阪のスペース「Six」で開催された「DARKENED ROOM展」などのリ

保安官事務所

保安官事務所の向かいにあるパッカード製材所

ロネットが見つかる鉄橋

ドナとジェームズの密会場所

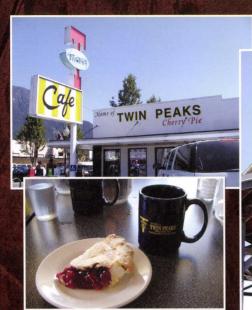
## 旅のおもいで

イド物語』（65年）のスターだというのに威圧感がまったくない物腰の柔らかいジェントルマン。他にもハロルド、ハンク、ボビー、ベティ・ブリッグス（シャーロット・スチュワート）らがそれぞれ楽しそうに談笑中。『マルホランド・ドライブ』のマジシャン、リチャード・グリーンは、ピート役のジャック・ナンスのドキュメンタリー『I Don't Know Jack』を自ら監督、そのVHSをフェスティバル限定ジャケットで販売していたのでもちろん購入。彼は、18年6月現在、丸太おばさん役のキャサリン・E・コールソンのドキュメンタリー『I Know Catherine, The Log Lady』を準備中で、つい先日、クラウドファンディングで25万ドルの資金調達に成功したばかり。19年5月の完成が今から待ち遠しい。

バーベキューディナーを食べながらのゲストへの質問タイムが始まる。当時の撮影秘話や、リンチの人となりへの質問が多い。目玉の催し物コスプレ・コンテストは、参加者が好きなシーンを再現するパフォーマンスつき。審査員はゲスト陣だ。クーパーにオードリー、リル、『ワイルド・アット・ハート』のセイラーとルーラなど。アイパッチのネイディーンは5人もいた。遅れて参加したブリッグス少佐ことドン・S・デイビスは、自分のコスプレをしているファンと肩を組んでのご登場で大喝采。優勝したのは、手首の縄に裸足、汚したキャミソールとディテールにこだわったロネット。会場外で撮影をお願いしたら、けだるい表情で一枚。わかってる感が最高だった。

その後、片目のジャックを模したカジノでのプレイタイムを挟み、『マルホランド・ドライブ』のマジシャンによる「ノー・アイ・バンダ！」の口上でライブが始まった。まず、リンチが組んだユニット「ブルーボブ」の片割れであるジョン・ネフのギターソロ。続いて、本命ジュリー・クルーズの登場だ。『フォーリング』『イントゥ・ザ・ナイト』など5曲ほど歌っただろうか。曲名をここに記せるのは一部記録があるからだが、実はあまり覚えていない。このときは、ジュリー・クルーズの歌声と赤いカーテンのゆらめきのせいか現実感がまったくなく、文字通り夢の中にいるような気持ちのまま観ていたような気がする。

◆2日目――8月17日土曜日

この日もまずはロケ地めぐりから。グレート・ノーザン・ホテルの内観と、パッカード家であるブルー・パイン・ロッジの外観やキッチンとして使用されたキアナ・ロッジへ。普段はよく結婚式が行われるというだけあって、光が多く差し込むとても気持ちのいい場所。実際のロケ地を訪れると、通路の幅や部屋の奥行きを確認できるわけだが、滝本さんが「ここからこうやって入ってきたリーランドが、ローラの死を知るのよね」と、狭い入り口をうまく使ったリンチ組の撮影テクを説明してくれる。管理人のお兄さんにコーヒーをふるまってもらい、しばらくのんびり座って過ごす。作品の息づかいを感じながら『ツイン・ピークス』に思いを馳せる贅沢な時間。

ローラの死体が見つかる巨木のある湖畔

オープニングに出てくる巨木

ウィーディー・カフェとして再建し、『The Return』の撮影にも使用された聖地のひとつだ。店内は、取材記事の切り抜きやキャストのサイン、ロケの記念写真などが壁一面に貼られている。モニタではドラマ本編が流れ、Tシャツやマグカップも売られている。この日は、フェスティバル開催にあわせたスペシャルメニューがいくつか供されていた。丸太おばさんのアフタヌーンティー・セットは紅茶とクッキー。ゴードン・コールのエピックポエムというセットがチェリーパイとコーヒーで、クーパーのセットは目玉焼きふたつとベーコン、グレープフルーツジュースという朝食仕様。とはいえ、ここに来たらまずチェリーパイだよね、と全員で注文。美味しかったのだが、甘さが強烈でおかわり自由のコーヒーをがぶ飲みしたのを覚えている。店の前の交差点にあった風にゆれる吊り信号機は、残念ながらすでに普通の信号機になっていた。

地元の土産屋、アルパイン・ブロッサム・フローリスト&ギフト・ギャラリーはダブルRダイナーから徒歩1~2分。かつてはTPグッズがどっさり用意されていたそうだが、このときはひとつの什器に、ポストカード、キーホルダー、ステッカー、Tシャツなどが申し訳程度にあるくらい。92年に訪れた際に4人で30万円近く爆買いした川勝さんいわく、当時のデッドストックを置いているだけだろうとのこと。今はまた活気を取り戻しているだろうか?

ランチの後はロケ地めぐりへ。オープニングで使われている巨大な材木や、ジェームズとドナが密会した東屋をまわる。暴行を受けた下着姿のロネットが放心状態で歩いていた鉄橋の線路は普通の道路へと舗装され、地元の少年たちが下の川へ何度もダイビングする遊び場になっていた。脳内で再生される痛々しい映像と、目の前のキラキラした光景のギャップに軽くめまいがする。保安官事務所は、ウェイアーハウザーという製材所の事務所で、パッカード製材所として使われたスノコルミー製材所がすぐ目の前にある。こうしてまわると、実に効率の良いロケ地選びだったことがうかがえる。「WELCOME to TWIN PEAKS」の看板があったのはレイニング・ロードという道沿い。夏なので木が生い茂り、微妙に違う景色ではあったが、看板が刺さっていた穴の跡は確認できた。

ツイン・ピークス高校であるマウント・サイ・ハイスクールを眺めつつ、ロッジ風のレストラン「バーン」に到着。18時からは、『ツイン・ピークス』の出演者たちをゲストに迎えたディナー・パーティが開催される。バーベキューの支度が整うまで、ゲストたちはファンとの交流を楽しんでいる。保安官事務所の受付ルーシー役のキミー・ロバートソンは、あのアニメ声からはとても想像できない胸元が大きく開いたセクシーな装い。ジャコビー先生ことラス・タンブリンは赤青メガネを持参してにっこりポーズをとってくれる。滝本さんは、ダブルRダイナーのウエイトレス、ハイジを演じたアンドレア・ヘイズを見つけて大興奮。彼女が付けていた髪飾りを借りてご機嫌で2ショットを撮った。ベンジャミン・ホーン役のリチャード・ベイマーは、『ウエストサ

# ぶらリンチング旅 1992–2018

ベンジャミン・ホーン

ハロルド・スミス

『マルホランド・ドライブ』のマジシャン

「イントゥ・ザ・ナイト」を歌うジュリー・クルーズ

ビックフォードはフランク・ザッパのミュージックビデオなどで知られるクレイアニメ作家で、『ツイン・ピークス』好きが高じて趣味でジオラマを作っており、毎年フェスティバルでファンにお披露目してくれているそうだ。展示されていたのは、殺害現場の列車からリーランドがローラの死体を運び出すシーンや、ツイン・ピークスの町並み、クーパーがブラックロッジへ入っていくところなど。ダブルRダイナーは、外観はもちろん屋根をとると店内の様子まで細かく再現されている。

そして、ホワイト・テール滝ことスノコルミー滝が見える展望台へ。ここからの眺めがいわゆるグレート・ノーザン・ホテルの外観だ。夏は水量が少ないらしく、寒い時期の方がより『ツイン・ピークス』らしい景色になるという。

フェスティバル主催者であるデイヴィッド・アイゼンスタッドさんが、極東からはるばる取材にやって来た我々を歓迎し、ゲストたちがランチ懇親会をするレストランを教えてくれていた。当時27歳で、化粧っ気もなく英語も話せない私が相当子どもに見えたに違いない。初日からたびたび気にかけてもらい、この日も「よく来たね。みんなと話したいの？ ちょっと待っててね」と食事の最中にもかかわらず、昨夜話せなかったジュリー・クルーズや丸太おばさん役のキャサリン・E・コールソンを順番に呼び出してくれた。出演者たちは皆フレンドリーで終始笑顔。その後のキャリアが順調でない面々もいたはずだが、『ツイン・ピークス』＆デイヴィッド・リンチとの出会い

シルビア・ホーン

「最期の7日間」の
ケーブル保安官

川勝正幸氏とルーシー

ジャコビー先生

滝本誠氏とハイジ

ブリッグス少佐夫妻

は、キアナ・ロッジの裏庭だ。ちょうど引き潮のタイミングだったせいで、あのシーン通りの雰囲気ではないものの、やはりテンションは上がる。お約束のローラごっこをする滝本さんは、死体というよりも気持ちよく昼寝しているようにしか見えない。はしゃぎながらお互いに撮影しあうリンチングのおふたり。もしまた行くチャンスがあるなら、ローラの死体を見つけるピートと、死体が消えて普通に釣りに出かけるピートの両方を再現したい。

エドとネイディーンの家はスノコルミー公園脇の民家。ロードハウスはコロニアル・インというレストランで、どちらも言われなければまったく気づかない普通の建物だったため、改めて美術スタッフの手腕にうなる。

ロケ地のなかには、火事で焼けてしまった場所や廃墟になった建物もある。ローラとドナがピクニックをした丘にあったスノコルミー・ワイナリーや、エドのガソリンスタンドがそうだ。滝本さんは「リンチが撮影するとその場所はリンチ化する」と言い、「リンチの描いた絵のタッチのようだ」と、崩れた壁や汚れたボンベの写真を撮っておくよう私に指示した。そのときは「はいはい」と撮ったものの、あとで写真を整理しながら「こんなシーンあった？ 何のロケ地？」と記憶喪失状態に。この原稿に向かい合ったおかげで、ようやく意味不明の写真の意図を思い出せた。

グレート・ノーザン・ホテルことサリッシュロッジのロビーで行われているブルース・ビックフォードのジオラマ展を見る。

丸太おばさん役のキャサリン・E・コールソン

エドとネイディーンの家

ロードハウス

グレート・ノーザン・ホテル（上下とも

サリッシュ・ロッジ

<リンチ化>

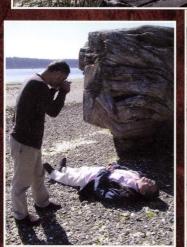
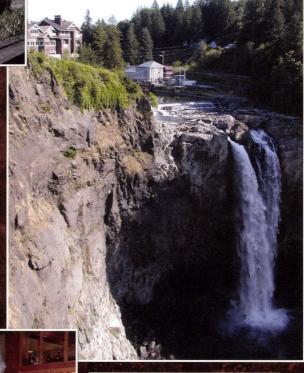
分のお土産用に買ったプレスリー仕様のモノポリーを「ワールドツアー中の暇つぶしに」と小山田圭吾さんに差し入れた。

この日の宿泊は念願のサリッシュロッジだったが、翌日は早朝出発の予定。夜遊びをたせいで滞在時間は実質5時間ほど。旅の締めくくりに、と滝本さんの部屋に皆で戦利品を持ち寄り記念撮影をする。そんなに買うものがないとぼやいていたはずが、実際はベッドに並べきれないほど大量だったのが笑った。

サリッシュロッジの部屋は、グレート・ノーザン・ホテルの部屋よりもずっと豪華で、暖炉がそなえつけてあり、ジャグジーがあるバスルームと寝室が窓で直接つながっている新婚カップル仕様。だが、ここで過ごすのは一夜限り。優雅に楽しんでいる暇はない。朝4時、静まり返ったホテルの中を忍び足でクーパーの部屋である315号室の前まで行ってはみたが、こそこそしすぎて手元がぶれ、ピンぼけ写真しか撮れなかった。ほとんど寝ずに帰り支度をし、朝、レストランが始まると同時に駆け込んで出発寸前まで朝食をとる。ファンたるもの、グレート・ノーザン・ホテルのコーヒーを飲まずに帰るわけにはいかないのだ。これがもう最高で、コーヒーはいわずもがな、オムレツとベーコンも10分でかきこむにはもったいない美味しさ。クーパーが「DAMN GOOD!」とうなりたくなる気持ちがわかった。

# DAY 2&3 8.17(SAT) ― 8.18(SUN)

クレイアニメ作家のブルース・ビックフォード氏

ローラの死体を運び出すリーランドを再現

に感謝し、仲間との再会を楽しんでいた。
夜は町の映画館ノース・ベンド・シアターで『ローラ・パーマー最期の7日間』の特別上映。本編の前には、リンチ、クリス・アイザックらからフェスティバルへのビデオレターと、日本のジョージア・コーヒーのCM4本の一挙上映が行われた。ゲスト陣の舞台挨拶も和気あいあい。あの雰囲気で『The Return』第8話を観たらきっと最高だろう。

**◆最終日――8月18日日曜日**

スケジュールによればこの日は、ローラとドナ、ジェームズがピクニックをした丘で「チェリーパイ・ピクニック」なるイベントが開催された。サンドイッチやチェリーパイ、コーヒーがふるまわれ、さらにはチベットの演繹法的捜査テクニックを再現した石投げコンテストが行われているはずだったが、我々はイベントには参加せず。アイゼンスタッドさんに「明日はピクニックがあるから必ずおいで」と言われていたのでじゃっかん後ろめたい気持ちを抱えながらも、滝本さんといそいそとマリナーズ×ヤンキース戦を観に行ってしまった。スポーツに興味がない川勝さんは別行動で、少し足を伸ばしてエルビス・プレスリーのお墓参り。今思えばピクニックに参加してもよかったが、英語も話せない身としては肩身がせまかったというのが正直なところだ。夜の食事から再び川勝さんと合流し、たまたまその日行われていたコーネリアスのライブをシアトルで観た。川勝さんは自

雨の中、3時間も待ち続けた

「インランド・エンパイア」上映中のmk2

事魔多し。楽しみにしていたジュリー・クルーズのライブが始まると、「クネクネしすぎ」（滝本さん）のスタイルに、滝本・川勝両人が訝しげな表情を浮かべる。さらに来場していたリンチ自身が、アンコールを前に退席するというハプニングも起こり、会場もザワザワしたおかしな雰囲気に包まれ、クルーズが動揺の色を見せつつ唐突にライブは終了。不完全燃焼の一夜となった。しかし、翌日も訪れたライブで演奏した3人組の新人ガールズ・バンド「Au Revoir Simone」は、そのツンデレなスタイルにおふたりも満足げだった。

日中に楽しんだ美術展も素晴らしいものだった。時計や拳銃や洋服をそのままキャンバスに埋め込んだ、見たこともない大がかりな絵画や、水墨画のようなミニマルなもの、逆にリンチがダイナーの紙ナプキンに描いたいたずら描きのようなアートまで、ものすごい量の作品が網羅されていた。また、通り過ぎるとセンサーで映像や音楽が流れるなど、リンチらしさに溢れたインスタレーションの数々が一堂に会していた。

それらを堪能した一行が、昼食のためたまたま入った中華レストランで、偶然の出会いがあった。作家の玉村豊男さんがいらしたのだ。そして玉村さんはかつて、川勝さんとワインに関する雑誌の仕事をされていたとのこと。おふたりのおかげで、期せずして華やかな雰囲気となり、玉村さんのパリ話と中華料理に、耳と舌を大いに楽しませていただいたのだった。これもリンチの思し召しと今でも信じている——。

**PART Ⅲ**

# 2007年、パリ
## リンチ大回顧展「The Air is on Fire」

これもリンチの思し召しと、今も信じている——。

ジュリー・クルーズ

リンチのドローイングからデザインされた「David Lynch」のネオンサイン

FONDATION CARTIER
POUR L'ART CONTEMPORAIN
261, Bd Raspail 75014 PARIS
DAVID LYNCH "THE AIR IS ON FIRE"
mercredi 23 mai 2007
ENTREE VALABLE ENTRE 11H ET 20H
BILLET 1 JOUR
Prix TTC : EUR 6.50
Normal
20070521/S02/B0729941164

Les Soirées Nomades présentent
**Conférence audiovisuelle : Michel Chion et Dean Hurley**
Mercredi 23 mai 2007 à 21h
Fondation Cartier pour l'art contemporain
261 boulevard Raspail, 75014 Paris
Tarif unique 10 €
Billet n° 101

Les Soirées Nomades présentent
**Au Revoir Simone**
Lundi 21 mai 2007 à 19h30*
Fondation Cartier pour l'art contemporain
261 boulevard Raspail, 75014 Paris
Tarif unique 10 €
Billet n° 269

Les Soirées Nomades présentent
**Pluramon *featuring Julee Cruise***
Dimanche 20 mai 2007 à 19h30*
Fondation Cartier pour l'art contemporain
261 boulevard Raspail, 75014 Paris
Tarif unique 10 €
Billet n° 200

David Lynch

文◎本田敬

カルティエ財団によるリンチのアート大回顧展「The Air is on Fire」に行ったのは、2007年5月のことだった。メンツは映画評論家の滝本誠さんと、エディター／ライターの川勝正幸さん、そしてウェブデザイナーでリンチの熱烈なファンの北原香さんだった。個人的に未だ生涯2回目のパリ旅行で、1回目は『WASABI』（01年）というリュック・ベッソン映画の宣伝を担当していて、その現地プロモーションのために渡仏したのだが、そのときは折しも9・11テロの直後で、その煽りを受けてかなり規模が縮小された宣伝活動と、やたら厳戒態勢だった市内の雰囲気にすっかりくたびれてしまい、パリを楽しむ余裕などまったくなかったというのが事実だった。

なので、今回のパリ行きはリンチを楽しむ滝本さんと川勝さんを中心に、そのオーソリティのふたりのやり取りを、脇から楽しませてもらうという気楽な旅だった。

カルティエ財団の会場は、宿泊したホテル（名前はなぜかルイジアナ）のあるサン・ジェルマン・デプレから5駅ほど行ったラスパイユという駅にあった。初日から雨にたたられた我々一行は、あらかじめチケットを予約していたジュリー・クルーズのライブを観るため、ずぶ濡れになりながらも3時間あまりも会場の門の前でただただ待たされた。あまりの埒の開かなさ加減に、次々と観客が脱落して帰っていく。が、こちらはわざわざ東京からやってきた身、入場の意志は誰よりも固く、根負けしたゲートはついに開かれるのであった。しかし好

の男もすぐ亡くなった）を呼んで「ウエルカム・トゥ・ヤマナシ」と悪趣味ポスターを製作したが、そのとき、ボブがわが国に放たれてしまったのかもしれない。虚構と現実の壁など実はない。そして究極の疑念、もしや、ボブはオレなのか!?と。

川勝さんから預かりっぱなしのDVD。ドノヴァンとリンチの共演

京都の寺で開催された〈リンチ写真展〉のとき、川勝、岡崎さんと一緒で、帰りに花街の小さなお化け屋敷に行った。閉館間際でお化けがデート時間を気にしてか、まるで気乗りのしない態度だったことが記憶に残っている。

パリのカルティエ現代美術館財団でのリンチ展は別格として、川勝とのもっとも楽しい長旅は、シアトル郊外のスノカルミーで催された「ツイン・ピークス・フェスティバル」への参加だろう。これはスポンサー付きで、北原香団長のもと川勝ともども子どもじみた興奮状態で動き回った。川勝とオレの共通項は、グッズ好きにつきるが、このときわかったのは、川勝のショッピング・パワーには負けるということである。カルチャー現場一括丸買いのパワーだ。福岡のお坊ちゃまの底力だ。フェスティバルは10周年記念で最大数のゲスト出演者を数え、パイロット版で撮影現場となったあらゆる場所に出かけたが、この旅から、どちらが歳上なのか歳下なのかふたりの間の年齢の壁が消失、もうなにがなんだかわからなくなったのである。顔も似始めた。まさにチン具、2つのタマのごときものに。

川勝と会った最後の日は2011年の12月29日、東京・築地の布垣更科という川勝と何度も行った、あるいは偶然会ったお蕎麦屋さんである。ちょうど、娘がパリから帰国していて、川勝へのお土産としてはショボいが、リンチ参加のカルティエ美術館「数学展」のポストカード（横尾忠則デザイン）、それにバッジを手渡すことが目的であった。東電の馬鹿野郎どものおかげで最悪となった1年の最後を川勝と締めたいということもあった。娘はおれにカルティエ製作のリンチ全版画本を持ち帰っていたが、その話を聞いて川勝は同じものの廉価版を仏米版異なると思い、両方ポチり、しかし届いた中身は同じだった、と後日落胆のメールをくれることになる。こうしたうっかりミスは川勝の日常でけっこう多い。

また、この蕎麦の日はちょうど、リンチ・ガール北原香嬢からリンチのアルバムのLP盤『クレイジー・クラウン・タイム』が届いたというので急遽、運命的に合流、川勝ともどもこのアルバムを受け取ることになった。川勝との最後の夜は、やはりリンチが締めてくれたのである。『クレイジー・クラウン・タイム』BOXの表装はベルベット。しかも、ブラック・ベルベットだ。そこに、炎の赤でタイトルが印字されている。

初出：『映画秘宝』2012年5月号。

ボザール版リンチ展小特集

PART Ⅳ

# 2011年、築地

In Memory of ... MASAYUKI KAWAKATSU

川勝との最後の夜は、やはりリンチが締めてくれた——。

カルティエ現代美術財団入口でリンチング記念写真

川勝正幸（以下敬称略）は、ネーミング名手であった。小生のことを〈デイヴィッド系評論家〉とくくったのも彼である。たしかに一時期、リンチ、クローネンバーグ、フィンチャー、ボウイほか、評論対象に〈デイヴィッド〉名の映画監督が多かった。自著のタイトルさえ、『美女と殺しとデイヴィッド』（98年映画秘宝コレクション）としていた手前、世界を狭められても文句はつけられない。また、『大日本人』（06年）をもじって〈大リンチ人〉と呼ばれることになり、そのニックネームを肩にパリのリンチ個展に出かけていったこともあった。川勝との、誰かがふたりの後ろ姿の酷似を称して言ったような夫婦徳利のぶらり旅の目的はことごとくリンチが関係していた。そもそも、川勝との最初の出会いは92年の『ツイン・ピークス』ブームが巻き起こった際、主演のカイル・マクラクランが来日した日だ。記者会見場であまりの人の多さに、後ろのほうで立ち往生していたとき、滝本さ〜ん、と前のほうから、黄色い騒然を裂いて黒々とした野太い声が飛んできて、誰かと見ればそれまで会話したこともない川勝がにこやかに手招きしていた。彼はそのとき、優しくも8歳年上の小生に席を譲ってくれたのである。

川勝がわれわれふたりの関係を表す言葉として作り出したのが〈リンチング〉であった。リンチ+チング、英語とハングルの合成語だ。ふたりの関係には常にリンチが絡むからだ。チングはいいね、チン具ってグを具にするとなにか自分の道具が誇らしく思えるね。女性もこの具材、料理しやすいよね。滝本さん、なにをしょうもないこと言ってんですか！

それにしても、関係に濃淡はあるとしても、リンチ好きということで知り合ったりンチングが不幸な事故にあったりするとはどういうことだ？　今野雄二さん、そして川勝。では、おれにはどういった死が待ち受けているのか？　と自らに問いかける。さらに言えば、彼らにボブが取り憑いたのか？と考えてしまったこともある。山梨県が『ツイン・ピークス』ブームのとき、ボブ（あ

今野雄二さんと東高現代美術館リンチ展（91年）にて

自家製ミートソースのボロネーゼ780円+tax

上から、ボロネーゼ780円+tax
シーザーサラダ680円+tax
オムライス780円+tax
ポテト&ソーセージ500円+tax

自家製ピザ生地のマルゲリータ780円+tax

がそこかしこからあふれ出ていた。トイレに入ってみるといいと言われて入ったトイレは、真っ赤だった。ベルベットのカーテンの部屋。いちど入ったら抜け出せない感じ。だがリンチを知らない人が来たら、いったいどう思うのだろう。隣のスナックで飲んだ帰りの人とかも、ときどきやってくるらしい。そんな無関係な人と共にあるこの濃密にマジカルな部屋というねじれたシチュエーションこそ、リンチの映画そのものといえるだろう。魂入ったファンでしか、こんなことはできない。

2018年6月5日（火）に催されたイヴェントは「リンチにデヴィッド・リンチを呼ぶ計画」と題されたものであった。5回シリーズの第1回目。たまたま爆音映画祭のために仙台にわたしが行くというので、その宣伝も兼ねての第1回目のゲストとなったのである。本気かどうか疑わしいタイトルだが、どうやら本気である。みなさん本気のファンである。わたしのように、リンチといえばロイ・オービソンですねとかついうっかり語ってしまう人間のいい加減さとは違う。でもしかし、この日はそのいい加減さも含めて、ロイ・オービソンを聴いてもらうことから始めたのだった。あのとろけるような甘い歌声抜きに、リンチは語れない。まずは「クライング」である。『マルホランド・ドライブ』に出てくる「クラブ・シレンシオ」のシーンで登場する「泣き女」が歌うのがこの歌。『ブルーベルベット』の「イン・ドリームス」のほうが有名かもしれないが、わたしはリンチとオービソンと言っ

PART V

# 2018年、宮城の赤い部屋

## café LYNCH

「ツイン・ピークスみたいでしょ」

映画のタイトルロールをイメージした外看板。ここだけ松島から浮いている。

シンボリックなLYNCHの祭壇

挽きたてフレッシュコーヒー400円+tax

文◎樋口泰人　lotus photo◎木村めぐみ

もちろん松島のことは知ってはいる。日本三景、松尾芭蕉。誰でも知っていることくらいしか知らないということなのだが、仙台から車で30分ほどで行けるのであった。松島にデイヴィッド・リンチ・フリークの作ったカフェ・バー「café LYNCH」というスペースがあるので、そこでトークをやりませんかと誘われたとき、その松島とあの松島がまったく結びつかなかった。でも、あの松島であった。観光地のはずれ、すでに道路の周りには何もない、単なる田舎道沿いに「LYNCH」はあった。赤い壁に浮かび上がる「LYNCH」の文字がでかい。とはいえ、ここを通り過ぎる人のいったい何人がこの文字と建物の造りに反応するだろう？ 本当に単なる田舎の道路沿いなのだ。そもそもカフェの前を通り過ぎる人の絶対数が無茶苦茶少ない。どうしてこんなところにとオーナーに尋ねたところ「ツイン・ピークスみたいでしょ」という答え。なるほど。松島の町はずれとワシントン州の北部の町が一瞬にして重なり合う。世知辛い東京に生きていると、どうしてもこんな場所で経営は成り立つのかとか、いったいお客は何人来るのかとか、自分の暮らしの範囲のなかでしかものを考えなくなる。ファンの心はでかく、視界は広い。

店内はさらにリンチだった。わたしにはどれがどれだかよくわからないのだが、とにかく全部がリンチだった。入って正面に置かれた額縁に入ったリンチの写真が、店内のあらゆるものをリンチにしている、そんな雰囲気でもあった。マジカルなパワー

『ツイン・ピークス』のあの赤い部屋をイメージしたトイレ

ディープな常連さんが集うカウンター

松島一景

**Cafe & Bar LYNCH**

営業時間 10:00 ～ 22:00
定休日：水曜日
（変更の場合有り 要問合せ）

〒981-0212
宮城県宮城郡
松島町磯崎字長田 80-121
http://cafelynch.com/

TEL：022-354-3743
twitter：@CafeLYNCH

した「リンチ」のように、思わぬところにリンチを見つけていく、無理やり生み出していく作業ともいえる。本物のリンチを松島に導くための軌道づくりのための開拓作業といってもいいかもしれない。先は長い。

ちなみに現実的な招聘へのアイディアとしては、映画監督としてではなくミュージシャンとして呼ぶ、というのを提案した。本業で招聘するのは大ごとになってしまうけど、副業なら本人も遊びで引き受けてくれるのではないか。そんな思惑である。その際はロイ・オービソンの霊を引き連れてやってきてくれることを願うばかりである。

「魔法は映画だけではない。音楽もまた魔法」

イギリスアンティークのチェスターフィールドソファ。夢と現実の境目を消してくれます

たらこちらをとる。

TV版の『ツイン・ピークス』のなかでローラ・パーマーのお父さんがレコードをかけながら泣き続けているのだが、あのシーンでお父さんが聴いているのも、ロイ・オービソンではなかったかといまだに思いつづけているのだが、事実はわからない。確かめもせず、勝手にそう思い込んでいて、その根拠のない確信こそがわたしのリンチとオービソンを支えているのだと思っている。しかし、この日は来場者やカフェのオーナーたちにそのことを確認してみた。だが、誰も確かな事実を知る者はいなかった。『ツイン・ピークス』であのお父さんのシーンに、わたしほど感情移入してしまう人間はそう多くないのかもしれない。ローラのお父さんのように一生泣き続けていたいと、わたしは思ったりもするのだが。

いずれにしてもこの日は、リンチ・ファンの方々に、リンチの映画を想起させる50年代の音楽や、そこから派生する音楽を聴いてもらおうという意図だった。エルヴィスやシナトラからスコット・ウォーカーへの系譜。クランプスやクリス・アイザックといった50年代音楽の読み替え作業。あるいはヴィム・ヴェンダースの『夢の涯てまでも』（91年）で流れたジュリー・クルーズの、エルヴィス「夏に開いた恋なのに」のカヴァー。ロイ・オービソンのあの歌声がどこから生まれ、どう引き継がれたかという検証作業でもあった。デイヴィッド・リンチの映画の本道からは少し外れたところで、デイヴィッド・リンチを見直すということでもある。松島の田舎道に不意に出現

「ベイビー・ベア」

**CAFÉ : MONOCHROME**

営業時間：平日 14:00 ～ 22:00
土日祭日 13:00 ～ 23:00
（変更の場合あり）
定休日：不定休（営業時間、定休日は公式 HP：http://cafemonochrome.com/sp/ をチェック）
〒 150-0042
東京都渋谷区宇田川町 4-10 渡辺ビル 2A
TEL：03-6452-5735
twitter @cafemonochrome

すね。リンチはやっぱり創造性の源なのかなって思います」。

結果、事務所としては打ち合わせに活用する程度だが、さまざまな人脈がこのお店から生まれた。

きっかけはリンチ。「コーヒーを出すなら、リンチ印のコーヒーを！」とコロラドのリンチ・コーヒーを取り寄せたことからリンチ・ファンが集まり始め、タイミングよく『The Return』の放送が開始。あれよあれよとＷＯＷＯＷの特別番組にも出演。さらにはソフト販売元であるＮＢＣユニバーサルの『A Limited Event Series』プロモーション映像も手がけた。

リンチ風味のグッズを売り出したのは、17年5月ごろから。チェリーパイ用にジグザグ模様のお皿を作ったところ、ほしいという声が相次いだことから販売開始。今ではリンチ風味のマグカップやグラス、Tシャツ、バッジなども販売している。

現在、日本では入手困難なDAVID LYNCH COFFEE豆3種も、このお店なら購入可能。リンチのＬＤや当時の雑誌に映画パンフなど、店内はリンチ・ファンのお客さんが寄贈した90年代の『ツイン・ピークス』グッズであふれている。

バダラメンティのサントラが流れ、リンチのインスタレーション・アートに触れられる店内で、懐かしい『ツイン・ピークス』記事の切り抜きを読み耽りながら、コーヒーとチェリーパイを心ゆくまで堪能できる、贅沢で貴重な空間だ。

PART VI

# 渋谷のブラックロッジ

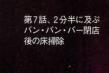
## CAFE:MONOCHROME

「きっかけはリンチ。趣味が極まってこうなってしまいました（笑）」

取材・文◎岩田和明＋北原香
撮影◎菊池茂夫

かつてレコードショップが軒を連ねた東京・渋谷の公園通りのほど近くに、白と黒のこじんまりとした小さなカフェがある。オープンは『The Return』放送よりも1年以上前の16年1月20日。その日はデイヴィッド・リンチの誕生日であり、奇しくも店主の誕生日でもある。

もともと映画ファンが集えるサロン的なカフェを目指したため、映画にちなんだメニューを多く取り揃えている。チェリーパイ、ドーナツ2種&リンチコーヒーブラック、カクテルの名称はブラックロッジ、デッカードグラスでウイスキーも飲める。ワインはフランシス・F・コッポラのワイナリーから取り寄せた「コッポラ・ディレクターズカット」に加え、日本では入手困難なカイル・マクラクランがプロデュースした「ベイビー・ベア」も味わえる。毎月デザインが変わるというこの日のクッキーは、『シャイニング』の有名な床模様をあつらえたキューブリック風味だった。

店主の川村誠さんのリンチ原体験は、中学時代に観た『イレイザーヘッド』。もちろん『ツイン・ピークス』にもハマった。映画好きが高じて映像ディレクターの仕事に就いた川村さんが、渋谷の喧騒のど真ん中に事務所を構えようと思い立ったことがこのお店のそもそもの始まり。建築士と話し合いながら、映画を観られるようにしよう、お茶も飲めるようにしたいという流れから、実際にカフェをオープンするまでに至ったという。

「趣味が極まってこうなってしまいました（笑）お客さんはクリエーターさんが多いで

町山智浩の THE BANG BANG BAR ESSAY

# 遅さ、夢、ノイズ、夜道、電気、機械、絶叫

第7話、2分半に及ぶバン・バン・バー閉店後の床掃除

**『ツイン・ピークス The Return』の遅すぎる展開に身を任せ、夢とうつつの境界線上を漂いながら、リンチの電波にチューニングすると、あることが起こる——。**

文◎町山智浩

## この遅さはもはや催眠術だ！

過激なまでに、遅い。

『ツイン・ピークス The Return』の遅さは破壊的だ。リチャード・ベイマー（80歳）、ロバート・フォスター（76歳）、マイケル・ホース（68歳）ら、お達者な方々のやりとりの遅さはもはや催眠術だ。

「保安官」

5秒経過。

「なんだ」

万事がこの調子。単にキャスト全体の高齢化のせいではない。リンチは現場で常に「もっと遅く！」と演出していたという。最近のアメリカ映画の目まぐるしい編集に慣れた目から見ると、この遅さはあまりに過激だ。

スローじーさんず。ホークチーフ保安官補（マイケル・ホース／68歳）、フランク・トルーマン保安官（ロバート・フォスター／76歳）

第7話、バン・バン・バーでブッカーT&MGズの「グリーン・オニオン」をBGMに床を掃除する光景を固定カメラで撮り続ける。何が起こるんだろう、という期待は、2分後に裏切られる。何も起こらない。こんなシーンの連続なので、そのうちに何かが起こるという期待はだんだん薄れ、何も期待しないまま、リラックスして、遅すぎる展開に身を任せていくと、あることが起こる。

寝落ちだ。

うとうととして、目が覚めると画面では何も変わっていない。そのうちに画面を観ているのか、夢なのかわからなくなる。それがデイヴィッド・リンチの狙いに違いない。リンチは映画を作るにあたって、瞑想という半覚醒状態によって理性の奥深くに隠された無意識の井戸の底に下りて、アイデアを汲み出そうとしてきた。

観るほうも、覚醒した理性で論理的にパズルを解こうとするべきではないだろう。過激な遅さに誘われて、夢とうつつの境界線上を漂いながらリンチの電波にチューニングするのが正しい鑑賞法ではないか。

劇中、セリフや歌詞で何度も「夢」という言葉が繰り返される。甘い、甘いオールディーズのポップスやステージでの曲も、決してダンスに誘う縦ノリのリズムではなく、眠りを誘うゆらゆらふわふわした横揺れのリズム。

絶えず聴こえるインダストリアルなノイズ。それは、胎児が母の子宮の中で羊水を通して聞く血流の音ではないのか。赤ん坊を自動車に乗せるとすぐ眠るのは、轟音と揺れが

キラー・ボブの球(魂)が生み出される
『ツイン・ピークス The Return』第8話

母体を思い出させるからだという。

暗闇の中をまっすぐ伸びる車道。『ロスト・ハイウェイ』(97年)と『マルホランド・ドライブ』(01年)では作品のテーマになっていた夜の道路が、『The Return』でも何度も反復される。あのような夜道には催眠効果があり、居眠り運転の事故が多い。

「あの道は無意識に向かっているんだ」マルホランド・ドライブにある自宅を訪ねたとき、リンチはそう言った。誰の無意識ですか?「私の。そして、君たちの」

何のために、無意識に下りていくのか? 外側からの「電気」をキャッチするためだ。

## なぜローラは殺されたのか?

デイヴィッド・リンチには『イレイザーヘッド』(77年)から一貫した世界観がある。『イレイザーヘッド』は、リンチがフィラデルフィアの美術学校にいたころ、恋人が妊娠した事実を基にしているが、映画の冒頭でクレーターだらけの謎の惑星の向こうに、肌のただれた男がいて、何かの機械のレバーを引くと胎児が生み出されるシステムが映し出される。その「惑星の男」は、人々の運命を司る、いわば神のような存在を意味している。

惑星の向こう側にある神々の世界というイメージは、フランク・キャプラ監督の映画『素晴らしき哉、人生!』(46年)の引用で、工場のような機械的なイメージは、『オズの魔法使』(39年)で機械を操るオズの魔法使いの影響だろう。とにかく、我々の日常の外側には、それをモニターして操る管制室のようなものがある、というのがリンチの世界観なのだ。

そうした外側の世界は夢や瞑想で垣間見ることができる。つまりそれは我々の意識下にある。また、リンチにとってアイデアとは、そこからの電気をキャッチすることなのだ。『The Return』では第8話でそれが明確に描かれる。1945年、ニューメキシコの人類初の核実験によって、キラー・ボブの球(魂)が生み出される。その光景を天文台のような建物にあるモニターで観ているのが、ダイドー(戯れ)夫人と巨人のファイアマン(消防士)。ふたりは『オズの魔法使』や『ワイルド・アット・ハート』(90年)における、良い魔女の役割で、悪玉ボブに対抗するため、ローラ・パーマーの善玉を作り出し、不思議な機械で地球に送り込む。

では、なぜそのローラが殺されたのか? おそらくは、生贄として死ぬことで、永遠に若く美しい女神として世界を見守り続ける役割だったのだろう。キリストのように。

だが、クーパーは時間をさかのぼって、ローラが殺される前に救う。多くの視聴者が望んでいたことかもしれない。だが、それによって『ツイン・ピークス』の世界は消え、女神ローラも消えてしまった。最後にローラ・パーマーの実家の住人として登場するのは、実際にその家に住んでいる女性だという。そして、51歳で『The Return』に呼び戻されたシェリル・リーは、夢から無理に起こされた赤ん坊のように絶叫するのであった。

キャリー・ペイジ(シェリル・リー)の絶叫

*FIRE INTERVIEW WITH NAE YUUKI*

# 「時代は変わっても、リンチは変わらない」

『ツイン・ピークス The Return』

# 裕木奈江

as ナイド NAIDO

**PROFILE**

ゆうき・なえ／70年神奈川生。04年9月から1年間、文化庁新進芸術家海外研修制度の在外研修生としてギリシャに国費留学し、英語と演劇を学ぶ。06年クリント・イーストウッド監督『硫黄島からの手紙』に海外で活動する際のNAE名義で出演。その後、デイヴィッド・リンチ監督『インランド・エンパイア』（06年）や、アイスランド映画『レイキャヴィク・ホエール・ウォッチング・マサカー』（07年）に出演。2017年、デイヴィッド・リンチ脚本・監督の『ツイン・ピークス The Return』にアジア人で唯一、監督から直接キャスティングされ出演を果たす。

取材・文◎編集部（馬飼野＋岩田）

## 自分がいつ出てくるか聞かされない

——今日はデイヴィッド・リンチ監督とのお仕事について、裕木さんにディープにお伺いできればと思っております。

**裕木**　でも、リンチについては『映画秘宝』さんのほうが詳しいんじゃないですか？（笑）

——いえいえ、やはり現場にいらした方のエピソードに勝るものはありません！　まずは、『The Return』全18話をご覧になった率直な感想からお伺いします。

**裕木**　２０１７年の５月〜９月までアメリカで放映があったのですが、私は第１話と第２話はプレミア上映の際にロサンゼルスのダウンタウンにあるThe Theatre at The Ace Hotelで観ていました。その後は毎週、自宅や友だちの家で観ました。コーヒーとドーナツとチェリーパイと一緒に（笑）。

——それは正しいリンチマニアの鑑賞法ですね！

**裕木**　でも、実は私たちキャストは、自分が出ているところしか内容を知らされていないんですよ。他の役者さんも、自分が出ているところの脚本しかわからないんです。私も第３話で自分が出てくることをオンエアまで知りませんでした（笑）。

——シナリオでは、どこで出てくるなどは記載されていなかったんですか？

**裕木**　基本的なことは、脚本に振ってあるナンバーなどで推測できますが、第3話では出ないと思っていたので、出てきたときは心臓がバクバクしました。カイル・マクラクランさんがボックスの中に一瞬現れて、その後、ナイドのモーグルームのところの窓にカイルさんがポンッて落ちてきたシーンを観たときに「あれっ？」と思って。私が撮影したとき、当然そこのセットはありましたから、急に自分が知っているセットが出てきて「ちょっと待って！　まだ観れない！」って（笑）。

——心の準備ができてなかったんですね（笑）。全体的なご感想はいかがでしたか？

**裕木**　もちろん、予測不能な展開ですよね。旧作の『ツイン・ピークス』の世界観とは全然違うじゃないですか。あっちこっちいったりして、クーパーさんもなかなかクーパーさんにならない（笑）。私が会っているクーパーさんも、クーパーさんではあるんですよ……見えてはいないんですが。

——第３話のクーパーさんは、キラー・ボブによってブラックロッジに閉じ込められたクーパー捜査官ですよね。

**裕木**　ええ。だけど、観ていくうちに「何の話なんだコレ⁉︎」となりながらも「そうか！

撮影時にトレーラーに置いてあったあのカツラは、このときのこの人用だったんだ」とか「逆にこの衣装は悪いほうのクーパーさん用だったんだ」とか、確認しながら観ました（笑）。

――本当に観るまで全体像がわからないんですね（笑）。

**裕木**　みんな自分がいつ出てくるのか聞かされていないので、たとえば緑の手袋をして留置所にとらわれているジェイク。彼も、役柄的には最後のほうの登場だと思っていたら、前半の、ライブハウスのところでチラッと出てきて。そのときにもうちゃんと緑の手袋をはめてるから。彼（役者：Jake Wardle）に「ねぇ、今日出てきたじゃん⁉ ビックリしたよ！」ってメッセージ入れました（笑）。

## 「向こう側の世界」のシーンに出たい！

――裕木さんはそもそもどういうオファーで『The Return』に出演することになったんですか？

**裕木**　以前『インランド・エンパイア』（06年）に出たときのことを監督が覚えていてくださったんです。監督は脚本も書かれますし、画家でもあるので、キャラクターもすべて彼のイマジネーションから生まれるんです。だからまずはヴィジョンが最初にあって、ナイドという役を作りだしたときに「これは奈江で」と周りの方に私のマネージャーさんのスケジュールを確認してくれて「いま、ちょっと呼べる？」って。マネージャーさんもデイヴィッド・リンチが大好きなので、もちろん断る選択肢などないわけですよ。メールでマネージャーさんから「やるから～」と言われて、「うれしいうれしい！」って。

――それはいつごろの話ですか？

**裕木**　最初にお話をいただいたのは、2015年です。だいぶ前から撮っていたのは知っていて、出たいとは思っていたんですが、やっぱり『ツイン・ピークス』なので、私もいちファンとして、ジョアン・チェン以外のアジア人は出てきてほしくないな、という思いもあって。だって『ツイン・ピークス』にアジア人女性は彼女だけでいいでしょ？ 彼女は魅力的ですし、お金持ちに連れられてきたアジア人の美女で、後妻になって、でも財産があったからいじめられて、という役に90年代はリアリティがあった。たとえば警察官の役ならアジア人の中年女性でも出番はあるのかな？ なんてことは考えていましたが、やはり願わくば向こう側の世界、赤い部屋のシーンに出られたらカッコいいなあと思っていたんです。

――では、夢が叶ったんですね！

**裕木**　叶いました！ だけど、顔は出せないので、私かどうかはわからない（笑）。でも、アメリカでは「裕木奈江」は知られた女優ではありませんし、私にとっても自分の名前がどうとか、顔がどうとかいうことではなく、ナイドという役をやらせてもらえるってことのほうが重要でしたね。

――現場でもカイルをブラックロッジから助け出すという動機で演じられたのですか？

**裕木**　動機までは監督が説明してくれないので、まったくわかりません（笑）。私もあの場所に匿われているわけですよね。もうひとり

リンチとツーショット！

同じ空間にいる女性（『The Return』での役名はアメリカン・ガール）は、前のシーズンでは、ローラ・パーマーと一緒に学生売春をしていて生き延びたほうのロネット・ポラスキーを演じていた方なんです。私がパスポートを持って飛ばされて、戻ってきたら部屋の番号が変わっていた。そこにアメリカン・ガールが待っていて「早く逃げて」と。でも私は目も縫われているし、明らかに「人」ではない存在として、ヴィクトリア・スタイルのベルベットのロングドレスを着て、高さ8cmくらいのピンヒールを履いて貴婦人のように暮らしていたんですよ。だから本来はあそこに来るべきではない。クーパーが来てしまったことで、ボブ的なものが立ち現れてくる。それでなんとかして逃がそうとしたら、自分が感電して吹っ飛んでしまった、という感じですね。

――今、裕木さんがおっしゃった解釈というか、シーンの説明みたいなものはリンチ監督がおっしゃるんですか？

**裕木** いえ、まったく言いません。オンエアを観て、そういう流れだと後からわかってきました（笑）。

――現場で演技指導的なものは？

**裕木** それは、とても細かくあります。でも役の「気持ち」の流れの説明ではなく、ここではこういう「動き」をこうやってほしいといった動作の指示です。「この段階では、ナイドはまだ誰かはわからない。音が聞こえたときに〝あれっ？〟という感じでカイルに手を出して。で、顔に触って、これぐらいで〝あぁ、彼だ〟と解るように演じてほしい」そういった指示を細かく出されましたね。

――動きの動機についての質問はされないんですか？

**裕木** それは必要ないんですね。結果、観た人がイメージしなくちゃいけないことですから。リンチの世界は、いわば絵画世界なんです。たとえば、モネを観たときに感じることであったり、ピカソが戦時中の叫びを作家性の強いタッチで描いた「ゲルニカ」とかと同じです。そういうアーティストが表現するとき私たちは素材でしかないので、演技がリアルである必要もないんです。作品の中で、リンチという作家の色にどれだけ染まって、どれだけ彼のイメージに近い演技を提供できるかが大事なことなんです。

## 涙が溜まってくると、溺れそうになる！

――裕木さんのシーンはどのくらいの日数で撮られたんですか？

**裕木** 1週間くらいですね。でも連日ではないです。現場に行ってもまったく撮らない日も2日くらいありました。

――ナイドの顔の特殊メイクをするのに、どれくらい時間がかかるんですか？

**裕木** あれは3時間くらいですね。目はまったく見えないんですよ。

――目を隠されている演技というのはどんな感じなんでしょうか？

**裕木** 見えないっていう設定の身振り、手振りなので、実際に見えないことで、それは逆にリアルにできて良かったですね。当然、自分で

IT IS HAPPENING AGAIN
TWIN PEAKS
A LIMITED EVENT SERIES
Friday, MAY 19 SHOWTIME *No admittance after 6PM
AISLE J 5 SEAT

2017年5月19日（金）の夜にロサンゼルスの「The Theatre at The Ace Hotel」で開催されたプレミア上映のチケット

モニターを見ながら修整をすることができないわけですよ。もちろん、メイクをし終わった後にスマホで写真を撮ってもらって、どういう髪型で、どういう衣装でというバランスは見せてもらえました。でもそれを確認できるのも特殊メイクを落とした撮影後なので、撮影現場で今日の自分はどんな感じかを客観的には見られない。それはいままでにまったくない経験でした。しかも、見えないまま長時間待ってなくちゃいけないわけですから。待ち時間にずっと我慢してたら、涙が溜まってきてしまって……。ちょうど目のところ、アイホールの部分は空間にしてくれているんですが、涙が溜まってくると、溺れそうになるんですよ！ こういう気持ちになるんだ！ って、そういうことを1個1個やりすごして、深呼吸しながらじっとしていました。眠ったりもできないので。

David Lynch／Emily Scream ＃1（08年）　Between Two Worlds 展図録より。

――いま裕木さんの話を聞きながら思ったのですが、それこそ水中をたゆたうような手の動きなど、ナイドには溺れるイメージもありました。それがむしろ監督の狙いだったのではという気もしますが。

**裕木**　かもしれませんね。たとえば泳げない人が、洗面器に顔をつけただけで溺れそうになるから怖いって話を聞いたことがあるんです。私は閉所恐怖症ではないのですが、この役を受ける前に、長い時間ずっと顔に特殊メイクをつけることになるから「私は閉所恐怖症や、暗所恐怖症ではありません」ってことを表明しなくちゃいけなかったんですよ。精神的にパニックになったりしないようにということで。それでも、顔の半分くらいにずーっと特殊メイクがついていて、しかも目のところに水が溜まってくると、人間の体というのは溺れるというふうに脳が認知して怖くなるものなんだ……ということを経験しました。

――まさに水中に溺れていくような感覚で、宇宙に落ちていくシーンがありますが、あれもかなり怖いのでは？

**裕木**　あれはスタントの人を用意してくれていたんですが、パーンとハジけて飛ぶシーンは怖かった！ まず宇宙に浮いているマシーンが、スタジオのけっこう高い場所に設置されているんですよ。もちろんブルーバックですが、そこにハーネスをつけてハシゴを登って、中継地点を経て、もう1回ゆっくりゆっくり自分で登って行くんです。ハーネスは後で処理されて見えなくなるんですね。周囲のスタッフさんが「奈江はスタントじゃないから、あの高さからほとんど目が見えないまま

飛ばすのは怖すぎる。負担がかかりすぎるから、目が見える状態でもやったことがない子にやらせるのはいかがなものか?」ということになって、結果スタントの方にやっていただきました。私は『ツイン・ピークス』に出ていることでハイになっちゃっているので、「やるやる!」って言ってたんですが。でもその後の「アァ〜ッ!」って後向きにクロールしているように落ちていく場面は、そこまでの高さではなかったので、自分で演じました。そのとき、監督は「クロール! クロール!」って言ってました。

——やっぱり水中を泳ぐイメージなんですね。

**裕木**　ですね! 後ろにワーッと落ちていく感じを、手と足をバタバタともがいて、「クロールして!」と言っていたので、言われた通りに演じました。目が見えていないからなのか、意外に怖くなかったんです。スタントの方たちも周りで怖くないようにケアしてくれていましたし。

——知らぬが仏(笑)。クロールのようにバタバタしているシーンは、裕木さん自身はどのくらい落ちたんですか?

**裕木**　あれは、カメラが上に引いていったんです。けっこう高い位置で吊るされているんですが、20メートルとかそんな高さではなくもう少し低い位置だったので、下の床にマットを敷いて、吊られた状態のままカメラをクレーンで上に引いていく感じでした。

## 小さな声で、耳元でリンチがささやく

——監督は何度も取り直す方ですか? それとも1〜2テイクくらいでOKの早撮りですか?

**裕木**　明確なヴィジョンがある方なので、ヴィジョンが撮れたら1回でOKです。リハーサルで「あ、それでいいから」って、本番1回でおしまいという場合もありますし、そうじゃなかったら、言葉のアクセントを監督が実際にしゃべって、俳優さんが監督のモノマネをして言って、同じセリフを何回もそれに近くなったらOKになるというケースもあります。今回のブルーレイの「Disc8」に入っているメイキング・ドキュメンタリー『ツイン・ピークス 舞台裏の旅』を観たのですが、他の俳優さんに芝居をつけている様子が観られたので愉しみました。

——監督自ら実演をされるんですね。

**裕木**　はい。ナイドに指導してくれているときと、他の役者さんに指導しているときで全然違って、どのシーンでも監督が役になりきって指導するんですね。私のときには、本当に小さな声で、耳元でささやいて「……何か音が聴こえるでしょ? そしたら手を伸ばして、あぁ……来てはいけないものがここまで追って来た……というのを感じて」と。私が「それは怖がってるの?」と聞くと、「怖がってるというよりは、まず感じてほしい。何か来ている、ナイドが嫌なものなんだ、それを感じて」と、本当に怖い感じで話してくれるんです。逆に、ラスベガスでマフィアの人たちに演技指導をするときは「高額の小切手が君のものになったんだよ!」って、ニコニコしな

がら「こういう風に見せて！」って豪快に演技の見本を見せていました（笑）。その役の感情になりきって演技指導をしている感じでしょうか。私は目が見えないから、監督は全部言葉で私に伝えなきゃいけないから大変ですよね。ちゃんと近くまで来てくれて、「シーっ」のときは手の位置とか、もっとこう指で動かしてとか、「カマキリみたいに」とか、いろいろやってみて、当たったやつで「あ、それそれ！じゃ回そうか」という感じです。

――14話以降、留置所のなかでキーキー言っている声には、どんな演技指示があったんですか？

**裕木**　とある「鳴かない動物の鳴き声」をやってくれと言われました。「こんな感じ？」ってやってみたら、「ああ、それそれ！ＯＫ！」となりました。あとは、留置所にいるとき、顔が腫れてよだれを垂らして、ずーっと私の声をマネしてる人がいたじゃないですか？あのシーンは監督がものすごく長く撮ったんですよ。「いつカットかかるのかな？」と不安になるくらい。私が「アァ～ッ！」とか「ウーキィ～～！」とか言ってると、向こうで「うぅ～、うぅ～……」とリフレインして。拘留されている警官がドンドン狂っていく表情を押さえているわけですが、もうあまりにもカットがかからないので、スタッフさんも途中から笑いを噛み殺していて。その間、私はず～っと変な声出して泣かなきゃいけないし、警官役の俳優さんもず～っと「気が～狂う～、黙れ～、シャラ～ップ！プリーズ！」ってえんえんアドリブで応酬していました。

――異様な現場ですね（笑）。

**裕木**　もうプリズンっていうよりも、サナトリウムっていう感じ（笑）。でも、実際に使われているのは前半のまだそんなに狂ってない、落ち着いてる部分だけだったので「えーっ！あんなに長回ししたのに、これしか使わないんだ！」ってちょっと拍子抜けしました。

## ブルーローズもらっちゃいました！

――出来上がった映像は、当初の脚本通りですか？現場で変わることは？

**裕木**　脚本とほぼ一致しています。現場で変わることも多少ありますが、私のシーンではなかったですね。特典映像を観ると、やっぱり監督の現場でのひらめきやヴィジョンがあったりすると、多少変わることもあるみたいです。でも、『ツイン・ピークス』は、プライベート・フィルムに近い『インランド・エンパイア』のように余裕のある作り方ができる作品ではなく、スケジュールがタイトに決まっていますからね。監督がそれに対して

「なんで2日しかもらってないんだ!」ってカリカリしている特典映像を観ながら、かわいそうだなって思いました(笑)。

――実際に作品をご覧になって、ご自分が想像していた世界観や演技と一致していましたか? それとも違うものになっていましたか?

**裕木** 自分が出ているシーンにかんしては、セットの色や照明の感じは実際に見ていたのですが、本当に不思議な印象でした。美しい仕上がりになっていましたし、とにかく『ツイン・ピークス』が大好きでしたので、できるかぎりセットも見学させてもらいました。出番もないのに赤い部屋のセットに行ったりしていました(笑)。第8話のラジオステーションのセットをちょうど作っていたときにも見学して、出来上がったセットも見に行って「カッコいいねぇ~」ってスタッフさんに言ったら、「カッコいいでしょ? これは1日しか使わないんだよ」って。さすがハリウッド、羨ましい制作環境ですよね。

――贅沢ですね!

**裕木** ホントに! ウッズマンが訪ねてきて、井戸に水を入れる云々とえんえんポエティックなことを言うシーンですね。あのシーンだけのためにすごい完璧なラジオステーションを作っているんですよ。「うわっ! これすごく楽しい!」って。あと、小道具置き場に青い薔薇があって、「あっ! ブルーローズだ!」って喜んでいたら「持ってっていいよ」というのでブルーローズもらってきちゃいました!

――裕木さんがリンチのアトラクションをライドして楽しんでいる様子が、ものすごく伝わってきます(笑)。

## 生の肉体のままで

――撮影前に脚本をもらってから、撮影に入るまでにどういうご準備を?

**裕木** 今回の役はセリフがないので、演技のコーチはつけませんでした。リンチ監督は脚本も美術セットも手がけているので、私が勝手な解釈をするよりも忠実にオーダーに従ったほうが良いと思ったんです。役が決まってからはトレーニングはしましたが。

――トレーニングとは?

**裕木** 肉体的なトレーニングです。体がちゃんとしていると、現場に行ってもメンタルが平気なんですよ。体重とか体型よりも、自分のベストな体調を整えるために食事に気をつけて、水分もちゃんと摂るようにして、撮影前に神経質にならないようにカフェインを摂りすぎないようにするとか、すごくベーシックなことをやってましたね。

――健全な精神は健全な肉体に宿ると。身体のコンディションを整えるということですね。

**裕木** そうですね。たとえば舞台やカメラの前でがんばりすぎちゃったり、ハイになったり、役者って特殊な脳内物質が出ちゃうんですよ。ナイドの場合〝見えない〟というのもありましたけど、怪我をしたりすると本当に現場に迷惑をかけてしまう。アメリカは組合があるから、そこは守られているぶん逆に迷惑をかけちゃうんです。保険とかかかっているので金銭的な迷惑はかからないようになっていますが、やっぱり怪我を防ぐために体がフレキシブルにちゃんと動けるように整えていました。10時間以上目が見えない状態でハイヒールを履いているので、普段ならなんでもないようなことが、足を踏み外しちゃうこともあるだろうからと、ストレッチをして新陳代謝をよくしてましたね。もちろん声がちゃんと出る、最低限の発声練習をするとかの準備もしました。そうしないと、急に「動物っぽい声出して」って言われても出ないものなんですよ。普段みんなで飲んでふざけているときなら変な声なんていくらでも出ますけど、やっぱり現場でカイルさんを目の前にして、デイヴィッド・リンチ監督に言われたら緊張しますから(笑)。

――肉体のコンディションを調える、という意味で言うと、14話でヌードのシーンがあり

ますが、そのことも影響していますか？
**裕木**　そのシーンのために何かをするということはなかったです。ヌードシーンと言っても、セクシーである必要はないシーンでしたし、性的な意味合いがないので楽でした。肌を若く見せるためにファンデーションを塗ったりなども、特にしていません。「生の肉体のままで」ということ以外、特別な注文もありませんでした。むしろ、萎縮しないことが大事でしたね。「向こうの世界の人」であるナイドとしては、ヌードとしての体もあまり生々しさを見せないほうがいいんじゃないかという話になりました。とはいえ、私も生活に支障がない程度には絞りましたが(笑)、だからといって、それ以上のことは特にしていません。ハリウッドなので、見せようと思えば、腰や胸の間にエアブラシで立体だってつけられる世界じゃないですか。たとえば胸元が開くシーンだっていくらでもセクシーに見せるために陰影をつけられるんですよ。でも今回の私は、特に何も施さなかったですね。特典映像にもありますが、メイクさんが「ナイドにボディメイクや汚れを作る？」と監督に聞くと「いらない。口笛のように清潔」と答えていました。とにかく目の見えない姿のままでヌードにならなくちゃいけなかったので、そこで体が萎縮しちゃったり、変な被害者意識を持ったりしないように心がけました。現場で緊張したりナーバスになったりすることは、プロとして長くやっているので全然平気なのですが、周りの人が勝手に写メとか撮ってたらどうしよう？とか、そういうマインドにはならないように、メンタルを整えていた感じですね。

——監督から続編のお話は来ましたか？

**裕木**　まだ聞いてないですね。ぜひ続編撮ってほしいですね！

裕木奈江さんの膨大な長ゼリフが印象深い『インランド・エンパイア』(06年)より。実際のハリウッド&バインでロケを敢行し、ホームレス・カップルを熱演！

## 『インランド・エンパイア』秘話！

——最後に、『インランド・エンパイア』のお話も伺いたいのですが、これはもともとオーディションですか？

**裕木**　『インランド・エンパイア』はアメリカでエキストラの話をいろいろもらっていたときに、デイヴィッド・リンチ監督がプライベートで映画を撮ってるよ、と聞いて参加しました。あの当時、私はユニオンに入っていなかったので、ノンユニオンの作品にしか出られなかったんですよ。『インランド・エンパイア』はプライベート・フィルムのような作品なので、リンチ監督の現場が見られるからぜひ、ということで現場に行ったんです。

——裕木さんがアメリカに行って、すぐぐらいでしょうか。

**裕木**　あのときはロサンゼルスに移って1年も経たないくらいで、日本とアメリカを行ったり来たりしていましたね。エキストラとして参加したのは『インランド・エンパイア』が初めてでした。その際に監督にお会いして「もうちょっと出たい？」「出たい！出たい！」という話になって、1年くらい何も連絡がなかったのですが、突然FAXがガーッときて、そこにはものすごい量のセリフが書

かれていて。「私、こんなの無理ですよ。まだ英語下手だからアクセントの講師つけないと」って言ったら、「そこがいいんじゃない！今のままでいいから、一所懸命覚えて現場に来てよ！」って監督に言われました。

――「友だちがハリウッドの近くに住んでて、2週間泊まって……」と言う長ゼリフがありましたね。あれは台本通りですか？それともアドリブ的な形で？

**裕木**　アドリブなんか絶対言えません(笑)。もうカタコトの英語で「サル飼ってるんだけど、向いてる人が飼ったほうがいいのよねぇ」とか言って(笑)。「そのへんでサルが排泄しちゃって」とか「友だちが売春婦で～」って話をどういうセリフなんだこれは……と思いながら必死で覚えました。仕事ですから。

――じゃあ、あれは一字一句台本通りなんですね。

**裕木**　はい、台本通りです。私たちはそれぞれアジア人とアフリカ系アメリカ人のホームレスで、私も彼もおそらくアルコールかドラッグの中毒を患っていて、あそこにいるもうひとりのアフリカ系の女性もホームレスで、みんな仲良し、という設定でしたね。

――「ミコが、ミコが……」とずっとお友だちの話をされていましたね。

**裕木**　そうです。彼女はホームレスだけど売春婦ですよね。あれはその後に出てくる、金髪ウィッグの人の話をしているんですよ。

――そのホームレスのキャラクターは、最初に裕木さんがエキストラで参加された際に、リンチ監督が裕木さんのイメージで作られた役なんでしょうか？

**裕木**　役者にアテ書きというよりは……監督のイマジネーションだと思います！　私、監督に初めてお会いした際に、一所懸命に「ファンです！」って話したんですよ。「日本でも『ツイン・ピークス』はすごく流行って、みんな観ていて、私もコーヒーとチェリーパイを用意して観たんです！」って話を、下手くそな英語でキラキラしながら話したんです。それが面白がられたんだと思うんですよ(笑)。

――なるほど。『インランド・エンパイア』の裕木さんの出演場面は、どのくらいで撮ったんですか？

**裕木**　エキストラのシーンは1日、私が役をもらってからのシーンも1日です。

――役をもらってからのシーンは何度も撮り直したんですか？

**裕木**　2回通しで撮っただけですね。2回目はその場でちょこっと変えた感じです。

――あのシーンはロケですよね？

**裕木**　私のセリフに出てくるハリウッド＆バイン(ハリウッド大通りとバインストリートの交差点)でのロケでした。匂いもちょっとヒドくて、昼は観光地ですが、夜にはホームレスさんたちが実際に寝床にしているような地域でした。

――もともとリンチ監督の作品はお好きだったんですか？

**裕木**　はい。当時はみんな『ツイン・ピークス』を観ていましたよね。他にも『ブルーベルベット』(86年)や『エレファント・マン』(80年)ももちろん好きでしたし、他には無い独特な世界観が大好きでした！

――今回、『インランド・エンパイア』から11年ぶりのご出演となりましたが、久しぶりに演出を受けて、何か気づかれたことは？

**裕木**　リンチ監督はいつもリンチ監督で、いつ会っても何ひとつ変わらないですね。アーティストさんは性別や年齢を超越している方が多いじゃないですか。そもそも、リンチ監督は魂が本体だから、普通に体の年齢とか性別は関係なくて、クオリティが一定してるのでしょうね。完全に自分のスタイルがあって、自分のヴィジョンが明確に見えている。今や綺麗な波打つような白髪で、そういう意味では年を重ねてらっしゃるわけですけど、アティチュードはいつも一緒ですね。

――ブレないってことですね。

**裕木**　リンチ監督はブレない！　時代が変わっても、デイヴィッド・リンチは変わらないんですね。

別冊映画秘宝　洋泉社 MOOK

# 決定版『ツイン・ピークス』究極読本

滝本誠＋高橋ヨシキ：監修

## CONTENTS

最もおぞましい暗黒は、最も陳腐な「ソープオペラ」のふりをして、リビングに侵入してくる！

# なぜ、「ツイン・ピークス」は、ここまで人を惹きつけるのか？

『ツイン・ピークス』は、ひとことで言って「変容」である。
ということを、まずは覚えておいていただきたい。
それと、430という数字。
「ひとつの石で2羽の鳥を落とす」。
リチャードとリンダ。
カリカリと何かを引っ掻くような、奇妙なノイズも。

文◎高橋ヨシキ

## センセーショナルでスキャンダラスな『ツイン・ピークス』

「『ツイン・ピークス』は2度、TVの歴史を変えた」と言われる。1990年4月8日にパイロット版がABCネットワークで放映されたときと、2017年5月21日にSHOWTIMEが『ツイン・ピークス The Return』の第1話を放映したとき、デイヴィッド・リンチという異能の映画作家のビジョンが、伝統的で保守的なTVドラマの世界に亀裂を入れたというのである。ここで「伝統的で保守的」というのは、決して悪い意味で言っているわけではない。ストリーミング放送が日常の一部となり、AmazonやNetflixといった新興勢力が潤沢な資金力をバックに魅力的な映像作品(映画・TV問わず)を次々と送り出している現代、かつてTVが持っていた一種の独占的な支配力(と言って構わないと思う)と、それがもたらす視聴者の均質性に思いを馳せることは難しくなった。アメリカでは80年代の後半まで、いわゆる3大ネットワーク(ABC、CBS、NBC)が放送を事実上独占しており、この「ビッグ3」が流す映像が「TV番組」の概念とイコールだった。「ビッグ3」はそれぞれ、自分たちがアメリカ的な価値を創造するメディアだということを理解していたし、その影響力の巨大さもわかっていた。

そのため、TV番組は基本的に「健全」であることが一義的に求められたし、また俳優だけでなく、キャスターやアナウンサーも道徳的に問題のない、品行方正な人物であることが当然であり——逆説的に「品行方正で倫理がしっかりしているからこそ、TVに出演することができる」という錯覚を視聴者に与えてもいた。

農家の庭に石油が噴き出したことで、田舎者丸出しの一家が突如として大金持ちになり、ビバリーヒルズに引っ越してくる……というカルチャーギャップもののコメディ『じゃじゃ馬億万長者』(62〜71年)や、西部開拓時代、ミネソタ州で貧しいながらも正しい生活を送る一家を描いた『大草原の小さな家』(74〜83年)などを観ればわかるとおり、アメリカのTVドラマは常に「健全さ」や「正しさ」を重視しており、そのこと自体を問題視する必要はない。と書くと、例に挙げたドラマが特に健全すぎる、殺人を描いた『ヒッチコック劇場』(55〜65年)や、超常現象やSFを扱った『ミステリーゾーン』(59〜64年)、『アウターリミッツ』(63〜65年)だってあったし、『事件記者コルチャック』(74〜75年)は、『マッシュ』(72〜83年)は……と際限なく例外を持ち出すこともたしかに可能だろう。しかし、そうは言っても相当程度の健全性がTV番組に求められていたことは事実であり、現在の目からすれば、著しく文化的多様性に欠けるものではあれど、白人中産階級を中心としたボリュームゾーンが依って立つ「アメリカ的な価値観」がブラウン管から滝のように流されていたことは間違いない。なお、ネットワーク局は1970年代に入って自分たちの番組があまりにも「農村地帯の価値観を反映しすぎた、無邪気すぎるものである」ことに気づき、もっと都会的で多文化的な番組を増やすべく、それまでの、言葉は悪いが言ってみれば「田舎っぽい」人気番組を次々と打ち切った。この運動は「Rulal Purge(田舎追放運動)」と呼ばれている。

また、70年代以降、「ビッグ3」が「ミニシリーズ」という形で、奴隷制度を生々しく描いた『ルーツ』(77年)、江戸初期の日本をエキゾチックに活写した『将軍 SHOGUN』(80年)、壮大なスケールで第二次大戦を描く『戦争の嵐』(83年)といった、大作映画もかくやのプロダクション・バリューを備えたドラマを製作するようになり、大きな社会的・文化的なインパクトを与えていたことも覚えておく必要がある。

つまり、アメリカのTV界がいかに「アメリカ的な価値観」と「健全さ」を標榜しようと、そこには常に例外があったし、映画と見紛うようなビジュアルを備えた大作もあった。超現実的な恐怖の世界を描いた作品だってなかったわけではない。

だから『ツイン・ピークス』の特異性として巷間言われる「映画のようなクオリティ」である

とか「超現実主義的な表現」がもたらした「斬新さ」が、『ツイン・ピークス』の爆発的なヒットに繋がった、とする論にはやや無理があると言わざるをえない。『ツイン・ピークス』を『ツイン・ピークス』たらしめる要素は数多く、そのすべてが奇跡的に一点で交わった……というのなら、まだ理解はできるが、しかし、これは『ツイン・ピークス』以外の番組にもそのまま転用できる物言いでしかない。

では『ツイン・ピークス』の何がアメリカ人をここまで惹きつけたのだろうか？

確実に言えるのは、『ツイン・ピークス』が言葉の最も正しい意味でセンセーショナルであり、スキャンダラスだったから、ということだ。

アメリカは建前の国である。建前を理想、あるいは理念と言い換えることもできる。正義と自由を高らかに謳う合衆国憲法を礎とした人工国家として、アメリカが建前を手放すことは絶対にない。建前はアメリカにとって建国の理念であり、それは言論・出版・集会・信教の自由という形でアメリカ人のアイデンティティと不可分である。そういう建前がベトナム戦争やウォーターゲート事件を経てぐらつくようになった。あるいは、大義なき戦争の連続によってアメリカ的な価値観が回復不可能なほどダメージを受けた……という物言いはよく耳にするところであり、言わんとするところが理解できないわけではないが、だからといって「アメリカ的な価値観」を手放したアメリカ、というものが果たして想像可能か、と問われれば、永遠にありえないと答えるよりほかにない。

ところが『ツイン・ピークス』は、きわめて「アメリカ的な」建前そのものが、見るもおぞましい暗黒と表裏一体だということを視聴者に突きつけた。

『ツイン・ピークス　ローラ・パーマー最期の7日間』のテレサ・バンクス

街中から愛されたホーム・カミング・クイーンの美少女が、その実コカインに溺れ、自ら積極的に売春を行っていたとしたら？

劇場版『ツイン・ピークス　ローラ・パーマー最期の７日間』では、「（テレサ・バンクスに続けて）殺人者がまた凶行に及ぶような気がしてならない」と言うクーパーに対し、アルバートがこう尋ねる。

「次の犠牲者は男性か女性か？　髪の色は？　他に手がかりは？」。クーパー「女の子で、髪はブロンド。高校生で性的に奔放。ドラッグを使用しており、助けを求めて悲鳴をあげている」。アルバートが首を振って言う。「素晴らしい、これでだいぶ絞り込めたぞ。アメリカ中の女子高生の約半分にまでな！」

実際には１９９０年の時点で、コカインを吸引したことのあるアメリカの高校生は全体の6.6％くらい（高校3年生だとこの割合は9.3％にまで上昇する）とのことだが、いずれにせよ、ドラッグにはまり、売春をするような高校生女子は決して想像上のものではなく、実際に、それもかなりの人数、存在していたはずである。

しかし、ニュース番組ならいざ知らず、そのような人物像をアメリカのTVドラマ――それもソープオペラのふりをした――が描くことはついぞなかった。「健全」と「正しさ」をもって任じる「万人が楽しく観ることのできる」ドラマの世界の建前のうちに、ローラ・パーマーが入り

込む隙は『ツイン・ピークス』以前には存在しなかったのだ。

　といって、「コカイン中毒で、売春すら厭わない高校生女子」そのものをストレートに描かなかったところに『ツイン・ピークス』の勝機はあった。ローラ・パーマーがいかにふしだらで自堕落で「非・アメリカ的」な不健全さを体現していたとしても、番組が始まった時点でローラは既に殺害されていたため、視聴者は彼女をそれ以上断罪することができなかった。ローラ自身の不健全な日常は結局、劇場版まで描かれずじまいだった。そのため、TVの前の視聴者は彼女のインモラルさを直接目にすることはなく、「無残に殺された、こぼれんばかりの笑顔の美少女」というイメージに基づいて「ではいったい誰が彼女を殺したのか？」という目の前のミステリーに没頭することができた。

　ローラと一緒にドラッグや売春に手を染めていたロネットにしてもことは同様で、常に被害者としての側面しか観ることができないため、視聴者の「建前としてのモラル」が侵害されることはない。筆者はここにTV版『ツイン・ピークス』の成功の秘密が潜んでいるように思えてならない。

　『ツイン・ピークス』は、建前の世界では「なかったことにされている」闇の世界を描きつつ、巧みに視聴者をモラル上の安全地帯に避難させるというアクロバットを成し遂げた。ローラ殺しの犯人が父親リーランドである、と判明しても——犯人を明かしてしまったことで番組は苦境に追い込まれたわけだが——観客のモラルは傷付けられなかった。なぜなら、リーランドはボブに魅入られており、そのことで「良き父親」としてのリーランド自身が免罪されていたからだ。服を脱いだ父親が娘にのしかかる、グラフィックで正視に耐えない描写は、やはり劇場版まで封印されたままであった。

『ツイン・ピークス　ローラ・パーマー最期の7日間』のローラ・パーマー

　身も蓋もないことを言ってしまえば、オリジナル版の『ツイン・ピークス』は、あらかじめ殺菌済みの「安全な暗黒」としてブラウン管に登場した。しかしながら、その暗黒はアメリカのTV界、もっと言えばアメリカ社会が建前上、見て見ぬふりをし続けてきたものであったがゆえに、それがソープオペラ／メロドラマという、最も陳腐でありきたりなドラマを通じてお茶の間（アメリカの場合、リビングと言い直すべきか）を侵食してきたことは大きな衝撃を持って受け止められた。フィクションの中ですら「健全な建前」が成り立たなくなったとき、現実とドラマの世界の境界線は消失する。残るのは絶望と不信である。あなたの娘もローラ・パーマーかもしれないし、一家の父親はリーランド・パーマーかもしれない。『ツイン・ピークス』が映画ではなくTVドラマだったことは決定的に重要だ——『ツイン・ピークス』は、少なくとも建前上は安全地帯であったはずの一般家庭に、図々しくも薄汚いGジャン姿で乗り込んできたのだ。

　その意味で、Gジャンを着込み脂ぎった長髪をなびかせた〈ボブ〉が、中産階級のカウチを乗り越えて迫ってくる映像は非常に重要である。『ツイン・ピークス』だけでなく、リンチ作品における邪悪な存在は多くの場合、「まともな

人たち」が見てみぬふりをする階層の人間の姿をとって現れる。ボブはもちろんのこと、『マルホランド・ドライブ』（01年）の老婆や、『The Return』の〈ウッズマン〉など、そうした例は枚挙にいとまがない。

　こうして『ツイン・ピークス』は「健全」で「アメリカ的」なドラマの世界を一変させてしまった。が、話はそこで終わらない。

## 究極の恐怖は、異世界と関連する

『ツイン・ピークス』は、あたかもプラスチックの造花の横に病気に犯されて半分腐った花束を併置するようにして、ソープオペラのグロテスクな人工性を可視化してみせたが、同時にその人工性を限界までエクスプロイトすることも怠らなかった。逆説的に聞こえるかもしれないが、『ツイン・ピークス』はソープオペラの世界に野蛮な現実の手触りを持ち込むいっぽう、そうして再定義されたソープオペラの「現実」を超現実で上書きしてしまった。『ツイン・ピークス』は殺人や暴力、近親姦といった、実在する悲惨を描きつつ、究極的な悲惨と恐怖は、異世界の超現実と関連していると主張する。

　というのも、端的に言ってこの世の悲惨は、人間の許容値を越えて耐え難い領域にまで達しているからだ。『ブルーベルベット』（86年）のサンディ（ローラ・ダーン）も、『ワイルド・アット・ハート』（90年）のルーラ（こちらもローラ・ダーン）も、それぞれこの世が悲惨で埋め尽くされている、ただそのことに打ちのめされてひとりは泣きじゃくり（『ブルーベルベット』）、もうひとりは絶叫すると夕陽のなかで狂ったように踊り始めたのではなかったか（『ワイルド・アット・ハート』）。

　『イレイザーヘッド』（77年）の超現実的なモチーフが『ツイン・ピークス』において反復されるのも当然だ。『イレイザーヘッド』の主人公ヘンリーは、悲惨で耐え難い現実とバランスをとるためにラジエーターの中に自らの天国を見出さざるをえなかったわけだが、おしなべて表現というものが表現者にとってそうであるよう

『ブルーベルベット』のローラ・ダーン

に、悲惨で耐え難い現実を別の体系のなかに位置づけることで、それを超克するというプロセスが『ツイン・ピークス』にもはっきりと見てとれる。

## エクスタシーに変換される現実の悲劇

『エレファント・マン』(90年)でジョン・メリックがパントマイム劇『長靴を履いた猫』に我を忘れて没入したのは――これは史実でもある――それが悲惨で埋め尽くされた彼の人生をはじめて肯定するものだったからだ。超現実的な表現のうちに、リンチははっきりと救済の可能性をみる。現実の悲惨をエクスタシーへと変換する装置は、赤いカーテンの向こう側にしか存在し得ないからだ。

『ワイルド・アット・ハート』のローラ・ダーン

「痛々しい傷口も、文脈を無視して造形だけをみれば、ビューティフルなものとしてとらえることが可能になる」とリンチは嘯くが、その美しさに触れるためには、現実と超現実の境界線を打ち破る必要がある。「世界で一番美しい死体」というのは『ツイン・ピークス』が日本で放映されたときの宣伝文句だが、ローラだけでなく、レイプの痕跡が生々しいテレサ・バンクスの死体も、首の部分で切断され、片目を中心に腐敗の進んだルース・ダヴェンポートの死体も、超現実の地平では同じように「美しい」。

この感覚は『The Return』において、文字通り「超自然的に殺害された」数々の死体、すなわちトレイシーとサムのカップルやビル・ヘイスティングスの死体が皆、いわゆる「リアリティ」を無視したアーティスティックなオブジェとして造形されていたこととも直結する(腐敗はしていたが、ルース・ダヴェンポートの死体も同様であり、血と肉が入り混じり融解して流れ出したかのようなマチエールに、ムンクやココシュカ、フランシス・ベーコンの絵画の影響を見てとることは――ニューヨークの謎のガラス箱へのクーパーの落下が、ロバート・ロンゴの『MEN IN THE CITIES』の、ダミアン・ハーストの死の箱『A Thousand Years』への落下であると言いたくなるのと同様に――不可能ではない。だが、それを指摘したところでいったい何になるのか、ということは言っておかなくて

はならない。

トレイシーとサムの超現実的な死体は、リンチ扮するゴードンが口走ったように「What the Hell!」と表現すべきものだし、ガラス箱へのクーパーの落下は文字通り「ガラス箱へのクーパーの落下」だからである)。

オリジナルの『ツイン・ピークス』はしかし、このような野心的なポテンシャルを活かしきれなかった。視聴者もTV局も、『ツイン・ピークス』を一風変わったフーダニットものとして消費しようとしてきたし、それはリンチ/フロストの想定を遥かに越える激烈さをもって行われた。

現実を超現実で上書きするためには、当然のことながら超現実の論理が現実の論理より上位に置かれなくてはならない。超現実の論理が上位にくるということは、現実世界において、我々が知る論理体系を用いたやり方では、謎が永遠に解明されないということでもある。だからリンチ/フロストは、ローラ・パーマー事件の謎を解明するつもりなどさらさらなかったのだが、TV局の「現実の論理」の前にその企みは通用しなかった。結果的にローラ・パーマー事件は「解決」してしまい、それに伴って『ツイン・ピークス』の人気は凋落の一途を辿ることになる(リンチは「第14章」でマディ殺害場面を限界までブルータルに、同時に超現実と混ぜ合わせて描くことで対抗したが、残虐な殺人シーンはABC上層部の怒りを買い、報復として放映時間および曜日が変更され、このことで『ツイン・ピークス』の視聴率は壊滅的な打撃を受ける)。

雪崩のように悲惨のウェーブが押し寄せる、オリジナル・シリーズのエンディング(「第28章」および「第29章」)は、不本意な展開とそれに伴う打ち切り宣告を受けたリンチとフロストが、いまいちど『ツイン・ピークス』を『ツイン・ピークス』たらしめようとした最後の一撃である。伝統的なソープオペラそのものに限りなく接近していた幾多の人間関係は、再び悲惨のどん底に叩き落とされる。すべてを恐怖が覆い尽くすなか、木々の間に赤いカーテンが浮かび上がる。超現実の世界が手を差し伸べたかのように見えた瞬間、視聴者はまたもや絶望の縁に追いやられる。たとえコミカルに歪んでいても、「アメリカ的な価値観」と「健全さ」を体現する存在としてシリーズを牽引してきた主人公が、超現実の論理により、悪のドッペルゲンガーに上書きされてしまったからだ。

ダミアン・ハーストの死の箱

## ソープオペラとの絶縁状

劇場版『ローラ・パーマー最期の7日間』と、25年後の『The Return』は、『ツイン・ピークス』を永遠に解き明かされない謎としての「ローラ・パーマー殺人事件」へと引き戻そうとする再帰的な運動である。その過程で「電気」が重要なファクターとして浮上してきたのは当然で、電気を通じてブラウン管へと届けられた『ツイン・ピークス』を再変換するには、もういちど電気を通じて超現実の世界と接続し直す必要があった(ここで、劇場版および『The Return』

における電線を猛スピードで追った一連の超現実的なカットが、エドガー・G・ウルマー監督作品『恐怖のまわり道』(45年)で主人公が「非・存在」の可能性が高い「恋人」に電話する場面とほとんどそっくりと言っても過言ではないという事実については言及しておく必要があるだろう。さらにまた『恐怖のまわり道』における、死体のように見えた女が頭をむっくりともたげてこちらを注視する恐怖の瞬間が『ツイン・ピークス』だけでなく——『The Return』で病気の少女が車の助手席の影から姿を現す場面を想起していただきたい——他のリンチ作品に影響を及ぼしている可能性も無視できない。が、表現における「関連の網の目」をたぐり始めるときりがないので、ここではいちおう指摘するにとどめておく)。『最期の7日間』はソープオペラとの絶縁状だ。華やかな美男美女が、恋の駆け引きに興じるドリーミーな町ツイン・ピークスに代わるものとして、不潔で不快なディア・メドウの町と不気味な住民ばかりのトレイラー・パークが提示される。「アメリカ的な価値観」も「健全さ」も完膚なきまでに暗黒で塗りつぶされる。これが第一の変容である。

では、現実の耐え難い悲惨がソープオペラの人工の楽園を破壊し尽くしたとして、それで本当に良いのだろうか?

いや、そうではない。そのような悲惨はやはり——表現の持つ超現実的な力によって——変容させることができるし、されるべきだ、というのが『The Return』を貫く希望の感覚である。人工の夢のなかに希望を見出すことは無意味ではない、と『The Return』はときにユーモラスに、ときに感動的に主張する。

そもそも現実と超現実、覚醒と夢の間に境界線などなかったのではないか? 現実が夢を打ち砕くことができるのならば、夢が現実を揺さぶり、改変する可能性だってあるはずではないか。

「アメリカ的な価値観」がまだ意味を持つことのできる世界、「正義」や「善」という言葉が空虚に響かない場所が夢の世界にしかないというならば、その「夢」のほうが「現実」よりもずっと好ましいに決まっている……のだろうか?

『The Return』はその疑問に対する答えを提示しないで終わる。長い長い悪夢から醒めて自分を取り戻したクーパー捜査官が、ツイン・ピークスの保安官事務所に姿を現し、邪悪の塊たるボブがフレディ青年のメガトンパンチでブッ飛ばされ、ピンクの衣装に身を包んだかわいらしいショーガール3人娘を連れた、気のいいギャングの兄弟が喝采を送る、文字通りの大団円のさなか——まるで『オズの魔法使』(39年)のエンディングのようだ——、画面の向こうから、クーパー捜査官の目が視聴者をじっと見つめ始める。それとも、あれはTVのガラス面に映った我々自身の顔だったのだろうか? いま目にしている人工の天国は、どういう論理で正当化されるのだろうか? そういえば……いまは何年だっただろう? ローラ・パーマーの絶叫が響くなか、電気がショートを起こしてすべてが闇に包まれる。

デイヴィッド・リンチがTVの世界に刻み込んだ亀裂は、いまや巨大な裂け目となってすべてを飲み込もうとしているのである。

『恐怖のまわり道』の米版タイトル・カード

わからないから面白い。でも、あえてやる！

# 真魚八重子の『ツイン・ピークス』大長編論考

## 『The Return』の謎を因数分解する

文◎真魚八重子

なんという緩急がキマッた18話構成だろう。新たな謎を乱打する回あれば、狂騒的なユーモアに満ちた回、または立て板に水の如く解明をしまくる回もあって、毎回どんな心構えで臨めば良いかすらわからない。視聴者に適応性を求めるような内容は、なんとも支配的で贅沢なドラマだ。

そのなかでも、やはり散りばめられた謎が気になるし、答えを知りたいのが人情。明らかに回収しきれていない逸話もあるし、デイヴィッド・リンチが瞑想で得たイメージなだけで、答えがない挿話なら仕方ないが、いちおうキーワードに対して解釈できそうな部分を並べてみたいと思う。

## クーパー／バッド・クーパー

第1話冒頭では、モノクロームの画面に巨人とデイル・クーパーが登場する。これまでにはレッドルームやブラックロッジ、コンビニの2階といった異世界が登場した。さらにシーズン3の本作からは、モノクロームで現実世界の過去や未來への介入が可能な空間が現れる。類似したスペースもある中で、特に巨人、のちに「消防士」と名乗る男がいる場所は、悪が迂闊に立ち入ることのできない善性が守られた場所のようだ。この開幕を飾る1話目において、消防士はクーパーに蓄音機のたてる音へ注意を促し、さらに「430」「リチャードとリンダ」「2羽の鳥と1つの石」というキーワードを口にする。

そして場面が変わり、いきなり摩天楼が広がるニューヨーク。だだっ広いビルの一室で、ガラスの箱を監視するだけの仕事をする青年がいる。しかしアホな彼が彼女を連れ込んで目を離したすきに、箱の中に白い幽体が現れた。こいつが凶暴で、ガラスを越えて目の前のカップルをあっという間に惨殺してしまう。頭に角らしきものも見えるこの不気味な存在〈エクスペリメント〉は、8話でも再登場する。エクスペリメントの頭部を正面から見た模様は、この後の回でも繰り返し現れるモチーフだ。そして謎の多いこのガラスの箱は、誰がなんの目的で設置したものなのか？

旧シリーズのラストでは、デイル・クーパーの悪のドッペルゲンガーが登場する。本作でも引き続き、元のクーパーはレッドルームに囚われたままだ。現実世界では分身のバッド・クーパーが黒いレザージャケットを着て、ワイルドな姿で跳梁跋扈している。

今回重要なテーマとなるのは、「時間」と「座標」に加えて「ドッペルゲンガー」だ。それも分身は善悪の性質を真っ二つにしたような人格を持ち、特にクーパーは元々が正義漢であるためか、悪いクーパーも反転したように極端な悪人である。さらに分身は二体だけに留まらない。誰かがなんらかの意図で作り出した、自分でも誰かの分身だとは気づいていない〈化身〉までもが登場する。

場所は再び変わり、サウスダコタ州のバックホーン。ルース・ダヴェンポートという図書館司書の遺体が発見される。だが見つかったのは頭部のみで、胴体は彼女とは異なるでっぷりした男性のものだった。ダヴェンポート殺害容疑で逮捕されたのは、地元の学校校長であるビル・ヘイスティングス。その事件に

のちに「消防士」と名乗る巨人

合わせて、バッド・クーパーがバックホーンに姿を現した。彼はタチの悪そうな手下たちを使い、殺害された司書が知っていたという、とある座標を手に入れようとしていた。この座標にはなんらかの形で、ヘイスティングスも関わっているらしい。

ダヴェンポートは死んでしまったが、バッド・クーパーの手下レイ・モンローが、首尾よく座標を手に入れた。果たしてダヴェンポート殺害の実行犯は、バッド・クーパーの一味なのだろうか。もし犯人がヘイスティングスだとしても、なぜこんな入り組んだ殺人を行う必要があったのだろう。そして行方不明のままのダヴェンポートの胴体と、男の頭部は一体どこにあるのか?

片腕の男とレッドルームのクーパー

舞台は新たに、ネバダ州のラスベガスに移る。クーパーに瓜二つだが、ちょっとコレステロール値の高めな体型で、趣味の悪いウグイス色のジャケットを着た男がいる。彼は戯れている娼婦のジェイドから「ダギー」と呼ばれている。

ここで3人のクーパーが交錯することになる。じつはバッド・クーパーは、この日の2時53分にレッドルームへ召還され、代わりにクーパーが解放されて元の世界に戻るはずだった。しかしなぜか歯車が狂う。

我々がよく見知った、黒いスーツのクーパーはレッドルームを離れ、異次元の宙や海のような場所を移動している。そこで紫を帯びた奇妙な部屋に辿りついたクーパーは、目を封じられた東洋系の女性Naidoに出会う。彼女はクーパーの身をしきりに案じている。この部屋では2人の動きが、明らかに現実ではないカクカクとした編集になっていて、なんともいえない恐怖や不安が漂う。その室内でクーパーは、電気がバチバチと音をたてる巨大なコンセント穴に吸い込まれていく。同じ頃、2時53分直前にハイウェイで苦悶し始め、車道脇に乗り上げながら盛大にゲロを吐くバッド・クーパー。しかしラスベガスでもダギー／クーパーが煩悶し、やはりゲロを吐いて電気が弾けるような音とともに姿を消す。次の瞬間、ダギーはレッドルームで椅子に腰かけている。「妙な気分だ」と言うダギーに、お馴染みの片腕の男マイクが話しかける。

目を封じられた東洋系の女性Naido

「誰かがおまえを、ある目的のために作ったのだ。おそらくその目的は達成された」

ダギーはしぼんでいき、緑色の指輪と金色の小さな玉(種)を残して消滅する。緑色の指輪は旧シリーズからも引き続く、死や異世界への転送の象徴だ。

2時53分を経過し、意識を失いながらもバッド・クーパーは地上に留まっている。そしてラスベガスのダギーがいた部屋のコンセント穴からはクーパーが登場した。だが我らがクーパーは以前とは違い、まるっきり知能が退行して無垢な子どものようになっている。そのままクーパーはダギーとして、ラスベガスで暮らすことになった。どうやらレッドルーム

への帰還を拒否したバッド・クーパーの企みが成功したらしい。

　ちょっとズルをして、マーク・フロストの『ツイン・ピークス　ファイナル・ドキュメント』を紐解いてみよう。そこでは新たにブルー・ローズ特捜チームに加入したタマラ（タミー）・プレストン捜査官が記した、ゴードン・コール宛の報告書が載っている。そこで彼女は二つの分身の定義を記している。ひとつはツイン・ピークスに住む、先住民の血を引くホーク保安官補が語った伝説。「精神修行中の人間が悟りの境地に接近し、その内側に完全に入り込もうとする瞬間〝戸口に住む者〟が現れるという。〝戸口に住む者〟と対決し、打ち勝たないことには、その先へと進むことはできない」「〝戸口に住む者〟はあらゆる人間の内面に巣食う、暗く、邪で、得体のしれない資質の総体を表す」。

　バッド・クーパーは本来のクーパーにとっての〝戸口に住む者〟だった。クーパーの高い知能を悪に活用するバッド・クーパーは、当然手ごわい。そして正義の純粋さは、疑念を張り巡らせた悪の謀略に勝てず、バッド・クーパーは野に放たれてしまった。同じ報告書の中で、タミーは「化身（トゥルパ）」という存在もあげる。これは邪悪な魔術師や悪霊使いが、古代の秘術を悪用して創造する化け物のようなものだ。誰かが目的をもって作り出す存在。ダギーとは、クーパーがこの世に戻される際に押し込む偽の器として、バッド・クーパーが作り出したトゥルパではないか。

プラチナのおかっぱ頭をしたダイアン・エヴァンズ

　ちなみに、本作に登場するプラチナのおかっぱ頭をしたダイアンも、バッド・クーパーが作ったトゥルパである。彼女は後半に至り、バッド・クーパーからメールで与えられたトリガーによって、ゴードンたちに銃を向けたため射殺される。だが死体はサッと斜め上に飛び去って跡かたなく消えてしまい、化身はレッドルームで金色の種に戻される。

　のちにFBIブルー・ローズ特捜チームは、ニューヨークの惨殺事件においてバッド・クーパーが現場で写り込んでいる画像を入手する。そう、彼こそがあの謎めいたガラスの箱の持ち主だった。その観察装置は、異世界から現れるクーパーやエクスペリメントを見つけるために準備されたのだろう。

　ツイン・ピークスも25年の歳月の中で、緩やかに変化を遂げている。保安官事務所では、丸太おばさんことマーガレット・ランターマンのメッセージによって、紛失していたローラ・パーマーの日記の3ページ分をホークが発見する。そしてさらに、ガーランド・ブリッグス少佐がトルーマン保安官たちのために残したメモもみつかった。

　ローラの日記には「良いクーパーはロッジから出られない」という記述があった。クーパーはデズモンド捜査官失踪事件の際にツイン・ピークスを訪れているが、このときはまだローラとは接触していない。それに劇場版『ツイ

ン・ピークス ローラ・パーマー最期の7日間』において、ローラは夢でクーパーに出会うものの、その時点では日記をハロルド・スミスに預けていたはずだ。勝手に自動加筆されている日記。でもシーズン3の中では、ホークが先住民伝来のなめし革の地図を広げて、こともなげにネットの地図より詳しい最新版だと言っている。『ツイン・ピークス』において異世界に片足を突っ込んだ物質は、自動アップデートされるのは自然な現象らしい。

　ブリッグス少佐のメモは、トルーマンたちがいずれ訪ねてくることを予知して残されたものだ。山やエクスペリメントの頭部のようなイラストに、253という数字。そしてもう一枚の数字が打たれたメモの中に、ホークは「COOPER／COOPER」という文字列を見つけ「クーパーが2人？」と驚く。だがそのメモは折れ曲がっていて、もうひとつCOOPERと続いているのが読み取れる。これは旧シリーズで、ブリッグス少佐がグレート・ノーザン・

バッド・クーパー

ホテルに滞在するクーパーを訪ねてきて、機密事項を見せてくれた際のメモでもある。クーパーはやはり分身やトゥルパの数え方によって、2人でもあるし3人でもあるのだ。

　レッドルームや片腕の男は、ラスベガスのダギー／クーパーに協力的である。突然うつろになってしまったダギーを持て余した娼婦のジェイドは、とりあえず彼をシルバー・ムスタング・カジノへ送る。そこがなんの場所かも知らぬまま、スロットマシンに導かれていくダギー。すると並んだマシンのなかで、

ミッチャム兄弟（ロバート・ネッパーとジム・ベルーシ）

まるで合図のようにゆらゆらと小さなレッドルームが浮かんで見える台がある。ダギーがそのマシンでスロットをすると、なんとジャックポットが出た。次々とレッドルームが浮かぶマシンを回し、連続してジャックポットの大当たりを出すダギー。

　ラスベガスのくだりは全般に渡り微笑ましい。ダギーがカジノから帰宅するなり、ビンタとともに叱り飛ばして彼を委縮させる妻のジェイニーE。しかしダギーの奇妙な変化にイライラしつつも、あまりお構いもせずテキパキと日常をこなしていく。ダギーが勤めていた保険会社も、周囲は様子がおかしいと感じながらも、彼の振る舞いを勝手に解釈して事が進む。仕事で進退窮まれば、レッドルームが緑色の光で導いてもくれる。ナオミ・ワッツが陰のないキャラを溌剌とこなす好演もあって、とにかくベガス篇は幸せな気持ちで観ていられる。それは回が進むとともに、冥府魔道を突き進むバッド・クーパーの陰惨さによって、より両極端になっていく。

　ダギーは当然バッド・クーパーに存在を知られているので、念には念を入れるバッド・クーパーは、ダギーをこの世に放置せず殺し屋たちを雇って命を狙う。しかしなにがしかの力——たとえばレッドルームの片腕の男や、その失った腕が独立して変化したシカモアの木が、ダギーの危機に現れ窮地を救う。

殺人が業務委託で、バッド・クーパーが直接姿を現さないためか、殺し屋の急襲の後もコミカルな展開となり笑って観ていられる。

ベガス篇の朗らかさは、シルバー・ムスタング・カジノを経営する、ミッチャム兄弟の人柄にもっとも現れているだろう。ダギーはジャックポット連発の件や、保険金を巡ってミッチャム兄弟の怒りを買ってしまう。だが夢の力によって誤解が解けたとたん、彼らはなんとも義侠心に厚くダギーを庇護するようになるのだ。

このミッチャム兄弟の元にいる、3人のピンクの衣装を着た女性たちもイイ。特に一番ぼんやりして調子っぱずれなのがキャンディだ。底抜け具合では退行したダギーとタメをはる勢いで不安になるほどだが、そんな困った娘に手を焼きながらも面倒を見ているんだから、確かにミッチャム兄弟は善人としか言いようがない。

シーズン3で顕著なのは、こういったキャラの善悪の区別をかなりはっきりとつけていることだ。特に17話でツイン・ピークス保安官事務所に集結するメンバーは、善の側の人々といえるだろう。

それにしてもベガス篇の、自分を取り戻したクーパーがジェイニーEと息子のサニージムを乗せてBMWを走らせる別れのシーンの、陽光の晴れやかさは何度見ても泣ける。

## 異空間の2人

シーズン3は異空間において、時間の流れが現実とは異なった動きをするのも特徴的だ。異次元の中心となるのはブリッグス少佐と、フィリップ・ジェフリーズである。

妻のフィリースとビル・ヘイスティングス

ルース・ダヴェンポートの頭部とともに見つかった男性の胴体は、指紋からブリッグス少佐の遺体であるのがわかる。だが軍の機密情報によると、25年前に基地で焼死したはずのブリッグスは、現在に至るまで16度も様々な場所で指紋が発見されていた。だが今回は指紋だけではなく胴体も回収された。不思議なことに遺体の状態は5～6日前に亡くなったばかりで、40代半ばという焼死した時期のままだった。本当なら70代前半の肉体になっていないとおかしいはずだ。さらにその胃袋からはジェイニーEがダギーに送った指輪が出てくる。

クーパーは異次元に迷い込んでいたとき、ブリッグス少佐の巨大な頭部の浮遊を目撃している。胴体は地上で死体として回収されたが、彼の頭部はまだ異空間のなかで意識を保っているようだ。また前述の通り現実で亡くなる25年も前に、いずれ息子のボビーがトルーマンたちと共に来訪するのを予知していて、メッセージを残していた。

ルース・ダヴェンポートとビル・ヘイスティングスは「異空間(ゾーン)を探して」というブログを運営していた。ブリッグスは異次元に興味を持つ彼らに接触した。そして軍のデータベースから座標を手に入れるようルースた

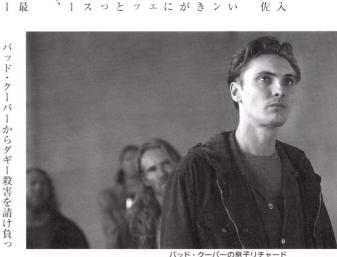
ちに頼んだ。少佐の指示通り、それを手に入れたルースは左腕に座標を書き記して、少佐に再度会った。

バッド・クーパーが手に入れようとしていたのは、その座標だ。彼の手下のレイ・モンローが、ルースから座標の情報を得たらしきあと、彼女は殺害された。だが本当にレイがルースと接触して、座標を手に入れたのかについてはグレーゾーンだ。レイはじつはジェフリーズの息がかかった者であったし、バッド・クーパーに対しては「金になるんだろ」と言って座標をなかなか教えようとはしなかった。ルースの死の模様を、ヘイスティングスは「襲ったやつは大勢いた」と語っている。ルースの殺害はバッド・クーパーやレイではなく、おそらくウッズマンたちの仕業だろう。

ヘイスティングスはブリッグス少佐を最後に見たとき、彼は宙に浮かびながら「クーパー、クーパー」と言ったという。そしてそれはとても美しい光景だったと。確かに異空間をさまよっていたクーパーが目撃したブリッグス少佐の頭部は、表情も毅然として静かに中空を流れており、クーパーに「ブルー・ローズ」と一言告げている。

そしてフィリップ・ジェフリーズは、ブエノスアイレスで消息を絶ったままになっていたが、本作では端々で声ややかんの姿となって登場する。

バッド・クーパーの息子リチャード

バッド・クーパーからダギー殺害を請け負っていたロレインという女性が、手先の殺し屋から失敗の連絡を受ける。彼女は焦燥感を見せながらどこかにメッセージを送り、次のカットではそれを受信する側の、皿に乗った羊羹のような黒い立方体が写る。また、刑務所に入ったバッド・クーパーがアナログな電話でハッキングを行ったあと、画面には「ブエノスアイレス」という字幕が入り、再びこの通信機が写って中央の小さな穴二つが点滅したのち、突然キュッと縮んで小さな鉱石のようになってしまう。これはこの通信機に使用者がいるのではなく、もはやガジェット自体が本人なのだと思う。だとすると、ブエノスアイレスという土地や物質的異変からして、やかんの姿になっているようなフィリップ・ジェフリーズがふさわしい。

ブリッグス少佐は異空間について「冬眠」に近いと語ったり、穏やかに宙を流れたりしていた。ジェフリーズも異空間にいるのだが、まだ片足を血なまぐさい教唆などに突っ込んでいるようだ。消防士の部屋は古風なモノクローム、少佐は宇宙らしき場所にいるが、ジェフリーズに接触する際は、ウッズマンの集まっていた不吉なコンビニの2階となる。これはグラデーションを描く善悪の階層を表しているのかもしれない。

ただその辺りについて現実的な解釈をすると、ブリッグス少佐役のドン・S・デイヴィスと、フィリップ・ジェフリーズ役のデイヴィッド・ボウイが亡くなっているというのは、当然大きい問題であると思う。どこまで生前の映像を加工利用して良いかといった条件が、結果的にボウイがやかんになるような珍妙な事態を生んだ気がする。

本作は黒い四角、または先端が丸みを帯びた立錐型の物体が頻出する。それらがフィリップ・ジェフリーズの象徴といえるだろう。消防士のいる部屋にも丸い円錐があり、それら

には二つの小さな窓が開いている。ブエノスアイレスでメッセージを受信していた通信機と同じだ。

バッド・クーパーは座標を、最終的にレイ・モンロー、フィリップ・ジェフリーズ、そしておそらくダイアンの3人から受け取る（ただしダイアンはスマホで座標を確認する場面はあるが、発信した描写がない）。バッド・クーパーいわく、そのうちのふたつは同じ座標だ。

バッド・クーパーには、爆発事故で昏睡状態のオードリーを犯して出来た、リチャードという息子がいる。子どもを轢き逃げして逃亡中の、いかにも悪の因子を引き継いだ青年だ。バッド・クーパーは初めて対面した息子を連れて、二つの座標が合致する地点に向かった。だがその目的地で、座標の場所に辿りついたリチャードが、感電したかのように光を放ち肉片も残さず塵になる。

座標を教えた3人のうち、2人が地雷というべき嘘の場所を伝えた。それはおそらくバッド・クーパーの命を狙ったことのあるフィリップ・ジェフリーズと、彼の使いであったレイ・モンローだろう。そしてリチャードが死亡したのちダイアンも座標を送るのだが、それは正しいものだったのか。

この座標はルース・ダヴェンポートの遺体の左腕に書かれていたのを、ダイアンが盗み見てバッド・クーパーに伝えたものだ。そしてそもそも、ルース・ダヴェンポートに頼んで、軍のデータベースからこの座標を探させたのが、ブリッグス少佐だった。

だが軍のデータベースでみつかるとわかっているなら、ブリッグス少佐をもってすれば、すでに知っていてもおかしくないのではないか。

彼はバッド・クーパーがその座標を探しているのを知っていた。だから異次元に関するブログを書いていたルースたちに接触し、少佐の元にその座標が届けられるという情報を流した。その座標をいずれバッド・クーパーが手に入れると想定したうえで。そして座標を手にしたバッド・クーパーは、まんまとその場所を訪ねた。「ツイン・ピークス、ジャック・ラビット・パレスから253ヤードの地点」。そしてバッド・クーパーは消防士の部屋に転送され、ブリッグス少佐の顔が浮いている横で、檻に入った状態になる。さらに彼は、ツイン・ピークス保安官事務所の前へと転送されてしまうのだ。

「消防士」とセニョリータ・ディド

座標は3つともフェイクだった。2つは訪れた者を吹き飛ばす地雷、残りの1つはバッド・クーパーを葬る力を持った人々が集まる、ツイン・ピークス保安官事務所への転送位置。

消防士は事前にアンディ・ブレナンを部屋に召還し、一連の出来事を未来も含めて見せていた。それと消防士の指示に従ってイギリスからやってきた、右手に緑のゴム手袋をした青年フレディ。彼はこれまで、怪力を発揮する自分の右手の意味をわからずにいたが、バッド・クーパーの体内から球状のボブが現れた瞬間、それを倒すために自分はツイン・ピークスに呼ばれたのだときづく。

このバッド・クーパー&ボブ退治の現場に、ツイン・ピークス保安官事務所の面々と、FBIブルー・ローズ特捜チーム、そしてベガスからクーパーを送ってきたミッチャム兄弟たちが居合わせるのが、善人ばかりでとてもハッピーな気持ちになる。もちろんブルー・ローズ特捜チームが、ベガスのダギー／クーパーの相関関係に気づくのは、ブリッグス少佐の遺体が胃に収めていたジェイニーEがダ

ギーに送った指輪がきっかけだ。

## 通り沿いに住んでいた少女

今回、もっとも意味不明で視聴者をふるいにかけた8話について語ろう。ロードハウスにナイン・インチ・ネイルズが登場したのち、その物語は始まる。

ニューメキシコのホワイトサンズ。1945年7月16日に初めて行われた核実験「トリニティ」の様子が映し出される。視線はキノコ雲の中に突入していき、エクスペリメントが邪悪さの象徴であるボブを世に送り出す姿を捉える。以前、フィリップ・ジェフリーズが突然姿を現した時、「ジュディについては語らない」と言った。そして今回、ゴードン・コールはブルー・ローズ特捜チームの古参が探していた、ジュディといういちじるしい負の力について、アルバートたちに語る。悪の種子を続々と地上に送り出すエクスペリメントは、明らかにジュディの一部だ。

消防士と、着飾った女性セニョリータ・ディドがいる部屋では、スクリーンにその様子が映し出されている。ボブの誕生を見た消防士とディドは、ローラを含んだ金色の玉を地上へと送り出す。ボブを封じるための善としての役割だろう。

時を経て1956年8月5日、ニューメキシコ。エクスペリメントの吐き出した邪悪な気体は、まだ滅することなく地上に影響を与え続けている。今日もカエルに羽が生えたような不気味な昆虫が孵化した。そんな折にも若い男女が夜道をそぞろ歩き、遠慮がちにキスをする。初々しい恋だ。

その頃、煙草をだらりとくわえたウッズマンが「火、あるか」と言いながらラジオ局に入っていく。『ツイン・ピークス』において火は邪悪さを示す。電気は変化の兆しや転送なども意味するが、悪用すれば火と同様に人間を死に至らしめる。だから邪悪な火を消し去る役割を担う者が、消防士となるのだ。

クーパーとジェイニーE(ナオミ・ワッツ)

放送がジャックされたラジオ局では、ウッズマンがマイクに向かって「これは水だ。そしてこれが井戸。すべて飲み干し落ちていけ。その馬の目は白いが、中は闇」という呪詛の言葉を繰り返す。家や職場で放送を聞いていた人々が次々に気を失っていく。帰宅した少女もラジオを聞いており、途絶えた放送に怪訝そうな表情をする。そして眠りにつくと、エクスペリメントの生み出した不気味な昆虫が彼女の口に入っていく。

タミーの報告書では、ローラ・パーマーの母セーラ・パーマーが、少女時代に父の仕事の都合で、ニューメキシコのロス・アラモスに住んでいたことが記されている。父親は「トリニティ」実験に携わっていた。

昆虫を飲み込んだ少女はセーラだ。そして邪悪さを抱えたまま成長し、みずからを罰するような日々を送りながら、今も悪影響を放ち続けている。

## ここにいるのは誰だと思う?

大団円というべき17話の中盤を経て、意識を取り戻したクーパーはフィリップ・ジェフリーズの力を借りて、ローラ殺害を未然に防ぐためにタイムトリップをする。1989年

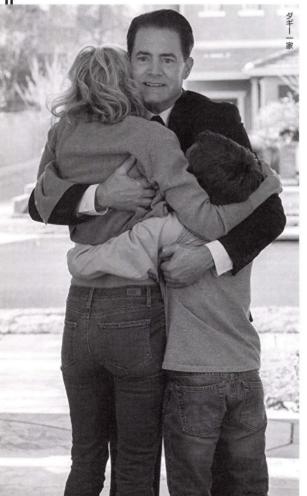
2月23日に転送されたクーパーは、殺人が起こる直前にローラ・パーマーの前に姿を現した。その過去への介入によって、翌日発見されるはずだったローラの遺体は消えた。彼女は死を免れたのだ。

この出来事に、最初に消防士が語っていたキーワードのひとつである「2羽の鳥と1つの石」があるのかもしれない。ゴードンが最後にクーパーと会った時、「僕が消えたらあらゆる手をつくして僕を見つけ出してほしい。僕は1石で2羽の鳥を狙う」と語っていたという。ゴードンと再会を果たしたクーパーは、その後フィリップ・ジェフリーズに時間移動を依頼する際に「ここで君はジュディを見つけるだろう」と言われている。この次元の移動の一石で、ローラを死から救い、ジュディにも打ち勝つ――。それで一石二鳥とはいささか無理があるだろうか。

ラストを飾る18話はぐったりしそうな不穏さに包まれ、退廃的な香りがしている。そんな中でもベガスはやはり明るい。クーパーの作ったトゥルパがダギーとなって、ジェイニーEと息子の所に戻ってきた。彼らは良い家庭を築きそうだ。

その頃、ローラの母セーラは部屋で荒れ狂い、ローラのポートレイトをめちゃくちゃに痛めつけている。エクスペリメントが生んだ悪を飲み込んだ母と、消防士が世に送り込んだ善たるローラ。母娘であっても彼女たちの関係は敵対している。そしてセーラ、またはジュディも過去に介入する力を持っているらしい。そのため、クーパーはローラの死を未然に防いだものの、彼が手をつないでいたはずのローラは忽然と姿を消す。その時、消防士がクーパーに聞かせた蓄音機の音がする。

いったんレッドルームに戻ったのち、クーパーは赤いオカッパ頭のダイアンと再会する。しかし彼を待ち構えているタイミングといい、彼女の人工的な赤い髪も何かヘンだ。Naidoに変化したりしていたダイアンは、あまりに異世界に深く関わりすぎている……。

2人は車に乗って砂漠に近いハイウェイをとばし、４３０マイル地点を越えようとしていた。「ここを越えればすべてが変わるだろう」と言うクーパーに対し、どこか不安げなダイアン。2人が４３０マイル地点を越えたその瞬間、電気の光が明滅し、彼らは一気に夜のハイウェイに移動する。「４３０」は最初に消防士が話していたキーワードのひとつだ。

ひと気のない土地で、クーパーとダイアン

ダギー一家

はモーテルに入る。クーパーが車から先に降りてチェックインしている間、残されたダイアンはモーテルの柱の陰から、自分の分身がこちらを覗いているのを見る。車中のダイアンは驚きもせずに、ただじっと見つめ返しているだけだ。

おそらく柱の陰のダイアンこそが本来の存在であり、車中の彼女は自分が分身だと知っていたのではないだろうか。モーテルに入った2人がセックスを始めても、画面には幸福感はない。バックではずっとプラターズの「My Prayer」が流れている。これは8話目でウッズマンがラジオ局の人々を惨殺していた時に流れていた曲で、当然善性を呼ぶ曲ではない。

翌朝、クーパーが目覚めるとダイアンの姿はなく、手紙だけが残されている。

「リチャードへ
あなたがこれを読むとき、
わたしはもういない。
わたしを捜さないで。
わたしはもうあなたのことがわからない。
わたしたちが共有したものは
終わってしまったの。
リンダより」

クーパー／バッド・クーパーが同じ次元には存在し得なかったように、分身に威嚇されたダイアンはもうこの次元にはいられない。そして別のタイムラインにスリップした彼らは「リチャードとリンダ」になった。これも最初に消防士が口にしていた名前だ。クーパーがコンビニの2階で会ったフィリップ・ジェフリーズは「ここは滑りやすい」と言っていたが、まさに彼らは簡単に元の次元から滑り落ちていく。しかし、クーパー自身は自分の変化にまだ気づいていないようだ。モーテルを出ると昨夜と建物の外観は変わり、乗っていた車も異なっている。

ジュディのコーヒーショップ

車を走らせていると、「ジュディのコーヒーショップ」というダイナーを見つける。ジュディという名前に啓示を受けて店に入るクーパー。だだっぴろい店なのに、中央のテーブルや椅子が乱雑に片付けられていて、なんとなく様子がおかしい。そしてクーパーがコーヒーに関心を示さない。これは我々の知っているクーパーではなく、もはやリチャードだ。

そもそも本作の冒頭で、消防士はリチャードとリンダが登場することになるのを知っていた。クーパーが住んでいる時間軸では、ローラを完全に救い出せはしないと見越していたように。そしてローラは死ななかったが、まだジュディの支配下にある別のタイムラインが生み出された。

このタイムラインでのローラ・パーマーは、キャリー・ペイジという名前だ。高校時代に命を落とすことなく、オデッサという街でウェイトレスをし、部屋の中には額を撃ちぬかれた男の遺体があるような人生。過去に介入したことでローラの死は免れた。だがスリップした次元は決して幸福に経過したわけではなく、負け組の中年女性を生み出しただけだった。

だが、そんなものではないだろうか。現実の時間でいえば25年も前に異世界に移ったブリッグス少佐やフィリップ・ジェフリーズも、いまだに悪を倒す遠大な企みを張り巡らして

いる状態だ。物事は漸次的にしか解決していかない。

フィリップ・ジェフリーズは異次元に迷い込んでから2年後、突然FBIのフィラデルフィア支局のオフィスに現れた。彼は混乱した状態で、コンビニエンスストアの2階の集会の話をし、クーパーを指さして「ここにいるのは誰だと思う?」と言う。おそらくバッド・クーパーと取り違えていたのだろう。つまりまだクーパーのドッペルゲンガーが現れる以前に、その現象をすでに見知っていたことになる。彼は過去も未来も渾然とした世界にいつつ、この普通に時間の流れる世界に対し、やかんへと変貌を遂げながら漸次的な解決に向けて介入をし続けている。

リチャード/クーパーの時間も、過去と未来が渾然とし始めたのではないか。

時間や空間の問題は、善の側だけでなく、セーラをはじめとするジュディ側の人間にとっても同様にあるはずだ。18話の最後でクーパーたちが訪れるパーマー家だった建物。時間への介入によって、家の持ち主は変化した。しかしこのタイムラインではトレモンド家になっていたとしても、元々トレモンド=シャルフォン夫人も邪悪な側の存在だ。おそらくこの建物自体が、悪の異次元に開く、いうなればセーラの座標に当たるものなのではないだろうか。「台所の何か」が往き来するような……。異次元の入り口には電気の放電現象がみられるが、ラストでパーマー家/アリス・トレモンド家の中でも電気の音と光が弾ける。

家の持ち主が代わり、ジェフリーズが人間からやかんになる、タイムラインへの介入による変化。クーパー/リチャードもこれから長きに渡って、変遷を経ていくことになるのだろう。

まだまだ腑に落ちない挿話もある。7話のラストではダブルRダイナーで、店をのぞいた男が「ビリーを見なかったか」と声をかけていく。次の瞬間、カットが切り替わるとそれまでいた客がまったくの別人たちに変わっているのだ。その後のカットでも一部の客を残してほぼ総入れ替えとなっており、ウェイトレスたちの立ち位置も急変している。ビリーもどうやら、転調の兆しを表す存在のようだ。

夢をみているらしいオードリーはビリーを愛人だと言う。そして夢の中のビリーが鼻や口から血を流していたと。ロードハウスで母親がビリーとできているらしいと語る娘は、先日ビリーが鼻や口から血を流しながらうちのキッチンにやってきて、すぐ出て行ったと話す。これだけ前振りとして話題にのぼるのだから、ビリーも因数分解的には何か役割を担っていないと気持ちが悪い。なんとなくNaidoが留置所に入ったあたりから檻の中にいて、みんなの言葉をオウム返しにしている顔面に怪我をした男がビリーかと思うが、彼があの場所で果たしている役割が掴めず、いまいち断定もしづらい。

クーパーとキャリー・ペイジ

解答があるのかないのかわからない湯加減が、なんともリンチはうまいと思う。適当な編集なのかもと訝しんだシーンも、改めて見て考え込むうち、また新たな発見があるのがリンチの世界だ。ソフトの発売とともに、さらなる深読みなのか浅読みなのかもわからない謎解きを、これからもやってしまうのだろう。

# パラノイア陰謀史家 マーク・フロスト history

Mark Frost history

文◎髙橋佑弥

「世界はリンチのために準備されようとしている。そしてリンチもまた、世界のために準備しようとしている――」by マーク・フロスト

Electricity（電気）……な悲劇

SINCE 1989

## LYNCH / FROST PRODUCTION

**『ツイン・ピークス』はリンチだけのものではない。リンチと二人三脚で作り上げた、もうひとりの創造神の軌跡。**

**『ツイン・ピークス』と『The Return』は、間違いなく映画作家デイヴィッド・リンチの作品である。それはまぎれもない事実だ。しかし果たしてリンチだけのものなのか？ 否である。企画段階から『ツイン・ピークス』をリンチと二人三脚で作り上げた〝もうひとりの男〟マーク・フロストがあまりにも過小評価されているのだ。リンチがスティーブ・ジョブズならば、フロストはスティーブ・ウォズニアックである。人々はジョブズのカリスマ性、エキセントリックさに目を向けがちであるが、その輝きは裏で支えるウォズニアックの手腕あってのものであったろう。フロストの献身は、そろそろ顧みられても良いころだ。**

## ◆ローラ殺人事件の幕開け

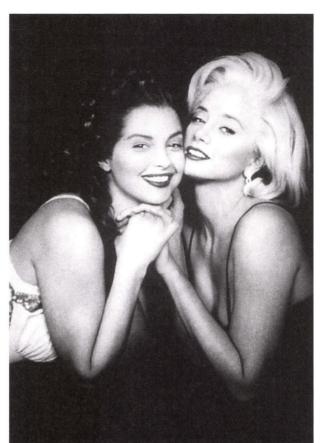
リンチとフロストが初めて出会ったのは、『ツイン・ピークス』放送から4年前、1986年まで遡る。当時ワーナー・ブラザースからの打診で、英国人ジャーナリストのアンソニー・サマーズが著した『女神―マリリン・モンロー〝永遠のスター〟の隠された私生活』（86年サンケイ出版）の映画化を持ちかけられたリンチは、CAA［クリエイティヴ・アーティスト・エージェンシー］から、リンチとパッケージにされた脚本家のフロストと出会うことになった。既に当時のフロストは、リアルな警官たちのTVドラマ『ヒル・ストリート・ブルース』（81～87年）を成功させた実績を持っていた。

〝女神〟がふたりを惹き合わせた――。

しかし、企画自体は結果的に頓挫してしまう。リンチは『ローリングストーン』誌のデヴィッド・ブレスキンとのインタビュー（94年大栄出版『インナー・ヴューズ 映画作家は語る』所収）でこう語っている。

「ぼくは昔から、10兆人並みにマリリン・モンローが好きで、彼女の生涯に魅せられていた。だから話がきたときは当然興味を持ったわけだが、じゃあそこで、どんなふうにやるか？（中略）ぼくらは、本を書いたアンソニー・サマーズに会った。調べれば調べるほど、話はUFOみたいになってきた。魅せられるんだけど、存在してるとは決して証明できない。たとえ写真を見て、話を聞いて、みんな夢中になってても、本当のことはわからないんだ。マリリ

『アスファルト・ジャングル』の若きマリリン・モンローと『インナー・ヴューズ 映画作家は語る』（大栄出版刊）の表紙

ン・モンローとケネディ兄弟とかについてもまったく同じだ。今になっても、何が真実で何がお話なのかわからない。てな具合で、ますます伝記映画とケネディがらみの話になってきて、堕ちてゆく映画女優の話じゃなくなってきた。気乗りもしない。そして、誰が彼女を殺ったのかを脚本で名指ししたら、スタジオはたちまち手を引いてしまった」(柳下毅一郎訳)

この企画はそれから10年後、ふたりの手を離れたところで『ノーマ・ジーンとマリリン』(96年)として映画化された。そのいっぽう「堕ちてゆく映画女優の話」ではなくなったことで、『女神』の映画化自体に興味を失くしたリンチの〝ハリウッド・バビロン〟嗜好は、のちに『マルホランド・ドライブ』(01年)として結実することになる。当初、まだタイトルだけしか決まっていなかったころ、『マルホランド・ドライブ』は『ツイン・ピークス』の後にフロストと共に新たに手がけるTVシリーズの予定だった、というのは有名な話である。

『ノーマ・ジーンとマリリン』(96年)より、ノーマ・ジーン役のアシュレイ・ジャッド(左)とマリリン・モンロー役のミラ・ソルヴィノ

話を元に戻そう。『女神』の企画は頓挫したものの、ふたりの関係は続いた。その後、映画『One Saliva Bubble』と『The Lemurians』の脚本2本(どちらも実現せず)を共に準備し意気投合したふたりは、89年に「リンチ/フロスト・プロダクション」を設立。そして90年には『ツイン・ピークス』放送開始となる。モンローを巡るふたりの出会いの経緯は『ツイン・ピークス』にも痕跡を残している。第1章でデイル・クーパーはテープレコーダーにこう吹き込む。

「捜査官としても個人としても知りたい。モンローとケネディの関係は? 暗殺の真犯人は誰か?」

こうして〝ローラ殺人事件〟は幕を開けたのだ——。

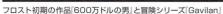
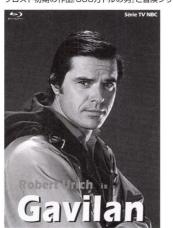
## ◆フロスト初期の執筆活動とリンチとの出会い

少し時間を巻き戻そう。

マーク・フロストは1953年に俳優ウォーレン・フロスト(ご存知のように、『ツイン・ピークス』ではドナの父ヘイワード医師役で出演)の息子としてブルックリンに生まれた。10歳の

ころから始めた執筆活動は15歳のころには本格的なものとなった。ピッツバーグのカーネギー工科大学で演技や演出、脚本を学び、大学卒業後ロサンゼルスに戻ると、TV界でキャリアをスタートさせた。まず『600万ドルの男』(74年～78年)や『Gavilan』(82～83年)の数エピソードに参加したのち、6年間続くことになる警官たちの群像ドラマ『ヒル・ストリート・ブルース』に携わり、エミー賞ほか多くの賞で候補となる。

フロスト初期の作品『600万ドルの男』と冒険シリーズ『Gavilan』

そんなフロストが映画界に参入したのは87年のことだ。この年フロストは、2本のホラー映画『死霊の棲む館』、『サンタリア 魔界怨霊』(共に87年)の脚本を担当した。とはいえ、前者はオリジナル脚本ではありながら、監督リチャード・フリードマンと製作ダニエル・F・ガバナーとの連名。後者もニコラス・コンデによる原作小説の脚色仕事。しかし、どんな条件下においても滲み出るのが作家性というもの。のちの『ツイン・ピークス』から逆算してみると、フロストのこだわりは初期の仕事から既に一貫していることがわかる。

『死霊の棲む館』は、1857年に呪い殺された奴隷商人の館に、130年後に越してきた一家が今なお残る過去の呪術に苦しめられるという物語である。まず物語のキーとして「殺された女の日記」が登場するほか、悪夢的な幻視、水(といっても噴水だが)に浮かぶ死体など、『ツイン・ピークス』との共通点が多い。また『サンタリア』との共通点でいえば、両作ともに呪術にまつわる物語である点、そして子どもが呪術のターゲットとして設定されている点がある。何より両作とも「呪いによって人格が変わり凶行に及ぶ」という部分が、後のキラー・ボブとひと足早く共鳴している。加えて『サンタリア』に至っては、絵に描いたような冒頭の家族の朝食シーン、こぼしたミルクとコーヒーマシーンの火花で母親が突如感電死するという幕開けが凄い。まさに

ヒット・シリーズ『ヒル・ストリート・ブルース』のレギュラー陣とタイトル・ロゴ

『死霊の棲む館』と『サンタリア 魔界怨霊』のVHSジャケット。両作とも未だにDVD化されていない

「Electricity…（電気）」な悲劇。

当時の『サンタリア』劇場用パンフレットを読むと、フロストは『エンゼル・ハート』（87年）を引き合いに出して、こう語っている。「あれは恐怖をテーマにしたジャンル・ピクチャーに近いが、我々の映画は現実に根ざしている。向こうのは西洋人による黒魔術を描いているけれど、我々はアフリカがルーツの黒魔術が主題になっている」。なんとなく社会派ぶっているのが少し笑える。

前述したリンチとの出会いは、まさにこのころだった。

『女神』映画化企画が頓挫した後、のちにリンチとも仕事を共にするロバート・エンゲルスが「コンピューターから泡が出てきて、それが町中に広がり、住民の性格を変えていくというストーリーだった。ある日突然、5人の牧場主が全員、自分は元中国の体操選手だと思い込んだりするようなとんでもない話だった」（99年フィルムアート社『映画作家が自身を語る デイヴィッド・リンチ』廣木明子・菊池淳子訳）と証言するコメディ映画『One Saliva Bubble』の脚本を、リンチ曰く「気違いみたいに笑いころげ」ながらフロストと一緒に書き、この企画がボツになると、エージェントであるトニー・クランツの「ドラマを作らないか」という呼びかけに応え、突然リンチの頭に浮かんだイメージである「湖の岸辺に打ち上げられている死体の画」を着想元とした『ノースウェスト・パッセージ』、すなわち後の『ツイン・ピークス』を作ることになる。

幸いなことに、放送を予定していた当時のABCは活気がなく、脚本家協会のストライキの影響で結果的には相当な時間がかかったとはいえ、リンチとフロストが売り込みをかけるや否やパイロット版の製作が決定。製作期間はたったのひと冬、24日間の突貫工事だった。極寒のスノコルミーで撮影されたパイロット版は、製作上の事情、不本意な「海外用の別エンディング」を撮る必要に迫られたが、かえってそれが契機となって、のちに『ツイン・ピークス』の最も重要な要素となる〝赤い部屋〟〝小人〟〝逆再生〟が生み出された。キラー・ボブこと大道具係フランク・シルヴァの出演が決まったのも、パイロット版の撮影時のアクシデントがきっかけである。そして最終的にパイロット版を観たABCのゴーサインを受けて、さらに7話分追加で製作することになる。

リンチとフロストが作り出した『ツイン・ピークス』は、一躍センセーションを巻き起こした。パイロット版のチャンネル占拠率はスーパーボウル並みの33％。雑誌はこぞって『ツイン・ピークス』の面々を表紙に採用、放送翌日は職場の話題を独占した。ローラ殺人事件を物語の核に置きつつも、大半はツイン・ピークスの住民たちの生活にスポットが当たる本作は、多くの謎を散りばめつつも回収しない挑戦的なファースト・シーズンの幕切れまで高視聴率を持続。秋から追加22話の製作が決定した。

セカンド・シーズン半ばでローラ・パーマーの殺人事件がひとまず解決すると、リンチは『ワイルド・アット・ハート』（90年）、フロストは初の劇映画監督作品『ストーリービル／秘められた街』（92年）に着手するため『ツイン・ピークス』を後にした。その後『ワイルド・アット・ハート』はカンヌ映画祭のパルム・ドール

『ツイン・ピークス』のセットにて、デイヴィッド・リンチ（左）とマーク・フロスト

を受賞。『ツイン・ピークス』ファースト・シーズンの大成功後、リンチとフロストはキャリアの絶頂を迎えたといえる。しかしながらそのいっぽうで、生みの親ふたりの手を離れた『ツイン・ピークス』は、死に向かって一直線に堕ちていった。さまざまな要因がタイミング悪く重なった。あまりにも視聴者が熱狂しすぎた結果、作り手が事件解決を求める圧力に屈し、犯人の明示を早めたこと。さらに、事件解決による視聴者の興味＝視聴率の低下を受けて、突然の放送日時変更。湾岸戦争勃発による数回の放送中止。クリエイティヴな側面を担っていたリンチとフロストのコントロール外で、これだけの出来事が同時多発すれば、いかにセンセーションを呼んだシリーズであろうとも、耐えられるはずがなかった。

　メインプロットが力を失った『ツイン・ピークス』は、本来意図的に強調されていた〝通俗的土台〟である「ソープ・オペラ」に次第に浸食され始めた。無意味に増えていく脇役。重要ではないエピソードが大半を占めていった。宿敵ウィンダム・アールとの因縁も、シリーズを救うには遅すぎ、そして弱すぎた。『ツイン・ピークス』は、諸々の要素が暴走したのち、最終話のリンチの奮闘空しく（といっても最終話は傑作だが）、自滅した。

　シリーズが打ち切りの憂き目に遭い「とても寂しかった」リンチは、その後、前日譚となる映画『ローラ・パーマー最期の7日間』（92年）を製作。この批評的・興行的失敗によりさらなる挫折を味わうことになる。当時は「会見の会場に入っただけで、みんなが激怒しているのを肌で感じた」ほどだったという。これにて『ツイン・ピークス』はひとまず長い眠りについた。

## ◆未来のクラシック(!?)『オン・ジ・エアー』の衝撃

『ツイン・ピークス』には終止符が打たれたが、幸いなことにフロストとリンチの関係は続いた。引き続きふたりはABCで『オン・ジ・エアー』（92年）というTVのコメディ・シリーズを手がけることになった。舞台は1957年のTV局ZBC（言うまでもなくABCのもじり）。戦時中、男不足だったことが幸いしてスター俳優になった男レスター・ガイをホストにした生放送番組の舞台裏で起こるドタバタを描

いた『オン・ジ・エアー』は、当初全7話が放送予定だったにもかかわらず、本国では結局3話までしか〝オン・ジ・エアー〟されずに打ち切りを迎えた。主演男優のイアン・ブキャナンはこう振り返る。

「この結果は少々意外だった。放映前のマスコミ試写では評判がよかったんだよ。それがふたを開けると低視聴率だろ。驚いたよ。シリーズの背景となっている57年はビートニック時代で、アメリカにさまざまな文化の波が押し寄せた。絶対の権威だったアメリカ文化が崩壊しようとする時期でもある。それを現したようなラストの〝カタストロフィ〟は、演じるぼくらもスゴイと思った。これはドタバタを通り越しているからね」(『キネマ旬報』92年11月下旬号)。

正直、今観返しても『オン・ジ・エアー』はスゴイ。登場人物たちが作ろうとする番組の演目は、毎度ベタで通俗的なもの……なのだが、本番中のたび重なるアクシデントが、番組をアヴァンギャルドに変えていく。画面内では絶えず多くの登場人物が奇行を披露。ひとつのアクシデントの後ろでは本筋とは無関係なアクシデントが幾重にも映り込んでいる。「何をやってもいいんだ」という感覚のおそろしいまでの潔い貫徹ぶり。あまりにも訛りが強すぎて通訳なしでは指示できない監督、頭のネジが全部飛んでるとしか思えないヒロイン女優、常人の25・62倍の視力を持つ(ゆえに1周回ってほとんど視覚が使い物にならない)音効マンなどが繰り広げる狂騒は、誰が観ても何が起きているのか自体は理解できるのに、同時になぜこんなことが起きているのかはまったくもって意味不明というアナーキーな感動がある。『ツイン・ピークス』ファンならば、ミゲル・フェラーやブキャナンが出ているだけで(そして毎回、素晴らしい怪演を披露するのだから)うれしいだろう。特に第5話のラストのミュージカルシーンなど、あまりに馬鹿馬鹿しいシチュエーションでありながら、涙なくして観られない。

『オン・ジ・エアー』は間違いなく今こそ顧みるべき価値ある1作である。観れば必ず脳のどこかがショートして、芸術の真髄に一瞬触れてしまったかのような錯覚を覚えることうけあいだ。これぞ未来のクラシックである、と無責任に豪語したい。フロストは1話をリンチと共同で、2話と5話を単独で脚本担当しているが、他にもジャック・フィスク、ロバート・エンゲルスなど『ツイン・ピークス』の流れからのリンチ人脈総動員という意味でも観逃せない。

『ストーリービル／秘められた街』のチラシ

## ◆唯一の映画監督作『ストーリービル／秘められた街』とホームズ

フロストの初映画監督作にして、唯一の映画監督作『ストーリービル／秘められた街』(92年)についても触れておこう。フロスト自らが弁護士フランク・ガルバリーが書いた小説『Juryman』を脚色した本作は、わざわざ『ツイン・ピークス』から離れてまで作った映画であるにもかかわらず、あまりにも類似点が多い。意識的か無意識なのかは定かではないが、いちど『ツイン・ピークス』にかかわった者は、終生あの町に縛られ続けるということなのか？ 本作は、湖に浮かぶ水死体で幕を開け、ラストも

また湖に浮かぶ水死体で閉じる円環構造。議員選に出馬中の青年弁護士クレイが、一夜を過ごした女性との現場録画ビデオの脅迫に追い詰められながら、自らの一族がかかわっているらしい怪しげな土地売買問題を暴きつつ、選挙戦を戦うという物語。「土地売買」という点はベンジャミン・ホーンを思い浮かべるし、主人公の妻と元恋人が「そっくり」であるという言及は、ローラ・パーマーとマディ・ファーガソンを想起させる。印象的に登場する合気道の場面は、ホームズ好きのフロストがホームズの得意とする格闘術「バリツ」を思い浮かべながら楽しそうに演出している姿が目に浮かぶ。ちなみに『ツイン・ピークス』のデイル・クーパーは、ホームズを元にしているのは有名な話。同人誌『ビニールに包まれて』の発行人による電話インタビューでも、フロストはこう証言している。

「シャーロック・ホームズを意識したのは認めるよ。推理の方法というのは今も昔も変わらない。演繹法や帰納法を使い分け、また時には直感がモノを言う。クーパーもそうだ。直感が鋭く、チベットの影響を受け、夢を分析する捜査官にした」

ちなみにクーパーの直感的捜査法は「ダライ・ラマに会って、チベットを見舞っている苦難の話」を聞いてショックを受けたリンチが、フロストにその話を伝えたことから生まれたそうな。

『ストーリービル／秘められた街』の主演は、現在も放送中のTVシリーズ『ブラックリスト』で復活したジェームズ・スペイダー

## ◆「陰謀」「パラノイア」「邪教」の小説家フロスト

フロストは主に脚本家として映画界で活躍する傍ら、作家としての顔も持っている。ホームズ好きのフロストの著作でまず知られているのは、若き日のコナン・ドイルを主人公にした『リスト・オブ・セブン』(93年)、『ドイルと、黒い塔の六人』(95年／共に扶桑社)のドイル2部作である。『シャーロック・ホームズ』を執筆する前、細々と医者として働きながら三文小説を書いているという設定のドイルが、女王直属の特別捜査官ジャック・スパークスなる男と共に、イギリスを股にかけた黒魔術的陰謀に巻き込まれるこのシリーズは、まさにクーパー&トルーマン、ホームズ&ワトソンなどを彷彿とさ

シャーロック・ホームズの生み親コナン・ドイル自身が探偵役で大活躍する『リスト・オブ・セブン』(93年)と『ドイルと、黒い塔の六人』(95年)

せる"バディもの"で、読み始めるとすぐに「医学でも学ぶか、ワトソン博士みたいに」というトルーマン捜査官のセリフを連想させる。またフロスト作品の特徴といえる「陰謀」「パラノイア」が顕著に現れだすのもここから。超自然的な現象や黒魔術を用いる「邪教」というモチーフも、思えば初期脚本作2作にも見て取れる。

また、日本で読むことができるフロストのもうひとつのシリーズものである「秘密同盟アライアンス」3部作(13〜15年/第1作『パラディンの予言篇』、第2作『動き出す野望篇』までが早川書房より翻訳されているが、最終作は未訳)は、明らかに昨今のヤングアダルト小説(及びその映画化)ブームにあやかった超能力学園ものだが、定石を行くストーリーの端々にあるセリフや設定がいちいちフロスト印だ。遺伝学教師のセリフ「この分野はわれわれにとって、まったくの未知の世界だ。ルイス&クラーク探検隊が、北西航路を探しに旅立ったときの大平原のようなものだ。わたしの世代にとっての宇宙探検と同じくらい謎めいている」。さらに、クロスカントリー部コーチのセリフ「光と闇との戦いにおける戦士になれ」「イタチの夢を見たら、俺に知らせろ」etc.

「秘密同盟アライアンス」3部作のうち、第1作『パラディンの予言篇』、第2作『動き出す野望篇』が翻訳済

ルイス&クラークについては後述する『The Return』や『ツイン・ピークス/シークレット・ヒストリー』(16年角川書店)で言及されているし、イタチは『ツイン・ピークス』でベンジャミン・ホーンが保護運動を展開していたことを思い出していただきたい。フロストの脳味噌はつねに『ツイン・ピークス』でいっぱいだ。

この2シリーズを読んで驚くのは、どちらも映像化を念頭に置いて書かれたのではないか、というほどアクション満載、極めて映像的な見せ場に溢れている点である。そう考えると、いささか評価に困るフロストの脚本仕事『ファンタスティック・フォー[超能力ユニット]』(05年)及び『ファンタスティック・フォー 銀河の危機』(07年)に起用されたのも、その適性からということなのだろうか?

とはいえ『ファンタスティック・フォー』2作品に関しては、登場人物が超能力を手に入れることになる原因が「人間のDNAを解読するための秘密宇宙実験の失敗」によるものだという点、悪役ドクター・ドゥームが"電気"を操る能力を持っている点など、半ば強引に"フロスト的"と結びつけることもできる。だが、脚本で組んだ人物(『超能力ユニット』はマイケ

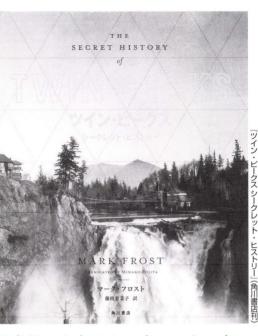
脚本作『ファンタスティック・フォー[超能力ユニット]』と『ファンタスティック・フォー 銀河の危機』のポスター

『グレイテスト・ゲーム』05年米／監：ビル・パクストン／製・原・脚：マーク・フロスト／出：シャイア・ラブーフ、スティーヴン・ディレイン、ピーター・ファース、イライアス・コティーズ、ジョシュ・フリッター／121分／DVD：ウォルト・ディズニー

ル・フランス、『銀河の危機』はドン・ペインとの共同脚本）がどちらもアメコミ関係の作品に多く携わっていること、またメイキングや音声解説でもフロストは姿を現さないどころか、監督・脚本家の口からもロクに言及されないことを鑑みると、あくまで実際はTV界で成功を収めたベテランの〝交通整理〟能力を見込まれたと推測するのが妥当かもしれない。

## ◆ゴルフ愛と『The Return』との因縁

フロストは小説以外にも、ゴルフにまつわる3冊のノンフィクションの著作がある。日本では第3冊目の『ザ・ゴルフ・マッチ サイプレス・ポイントの奇跡』（07年ゴルフダイジェスト社）が翻訳されているが第1、2作目は未訳、その1冊目『The Greatest Game Ever Played』（02年）を自ら脚本化し、映画にしたのが『グレイテスト・ゲーム』（05年）である。監督は2017年に急逝したビル・パクストン。主役以外の登場人物も過不足なく描き込みがなされる丁寧な脚本は、長年ドラマで多くの登場人物を掘り下げてきたフロストの実力がスマートに発揮されたといえる。本作は、1913年の全米オープンゴルフを舞台に、20歳の無名ゴルファー、フランシス・ウィメットが当時のプロゴルフ界の伝説的ゴルファー、バリー・ヴァートンを打ち破るまでを描くゴルフ映画でありながら、ゴルフのルールを知らなくても大いに楽しめる親切設計。なぜならエモーショナルな試合の魅力はそのままに、ゴルフを戦場とした階級格差や、土壇場での内なるプレッシャーと自分自身との内面で起きる戦争の物語が、数々の映像的趣向を凝らした、普遍的な王道のドラマとして昇華するからである。メイキングを観ると、文字どおり戦争映画で、監督のパクストンが「ここは銃撃戦みたいに」と演出しているのがおかしい。「役者のオーディションではスイングを重視した」と熱く語るフロストのゴルフ愛を考えると『The Return』が18話構成であることも、ゴルフの1ラウンド＝18ホールに倣ったものなのか

スポーツ・ノンフィクション『ザ・ゴルフ・マッチ サイプレス・ポイントの奇跡』

と邪推したくなってくる。

ちなみにゴルフと『ツイン・ピークス』には『The Return』日本放送時の「9・16放映延期事件」という因縁もある。誰もがド肝を抜いた『The Return』第8話の翌週、同じく誰もがジリジリと続きを待っていた第9話が、女子ゴルフのため放送が1回休みとなったのだ。なんという奇妙な偶然。フロストが取り憑かれているふたつの題材が、WOWOW番組編成上で主導権争いを繰り広げたわけだ……まるでクーパーの内面のように。

『ツイン・ピークス シークレット・ヒストリー』(角川書店刊)

## ◆虚実皮膜の集大成『ツイン・ピークス シークレット・ヒストリー』

何にも増しても重要な作家マーク・フロストの執念の労作は『ツイン・ピークス シークレット・ヒストリー』である。本著は「管理者」と名乗る何者かによって編まれ、注釈がつけられたツイン・ピークスという〝実在の町〟にまつわる記録（新聞記事から事件の捜査資料、手紙など）の全集成……という形式の架空歴史書。多岐にわたる代表的なトピックスは、ルイス&クラーク、トマス・ジェファソン、フリーメイソン、ネズ・パース族、トリニティ実験、ロズウェル事件、レムリア人（フロストとリンチの実現しなかった脚本の1本が『The Lemurians = レムリア人』であったことを思い出そう。リンチによると「太平洋に沈んだ架空の大陸レムリアから邪悪が漏れ出して、世界の善きものを脅かすコメディ」なんだとか）、SF雑誌『アメージング・ストーリーズ』、ケネディ暗殺、L・ロン・ハーバートとサイエントロジー、アレイスター・クロウリー、ニクソン……。実在の事件や人物に言及する多くの資料の合間合間に、ツイン・ピークスの産業の興亡や登場人物についての情報が挟まれる構成だ。虚実皮膜。すべてが「ツイン・ピークス」の名のもとに、偏執狂マーク・フロストの脅威的手腕で「つながる」のである。本著によって、アメリカの歴史の暗部と接続された『ツイン・ピークス』が、そのまま『The Return』になだれ込むという仕掛けである。

「あの人物のその後。知られざる物語」的な側面をお望みの方は、後続の『ツイン・ピークス ファイナル・ドキュメント』（17年角川書店）のほうで欲求を満たすことができるだろう。『シークレット・ヒストリー』ではいささか物足りなかった『ツイン・ピークス』の直接的な前・後日譚と『The Return』関連の人物資料によって成るこちらは、分量的には少々薄味とはいえ、空白の25年間をしっかり補完してくれる（ララ・フリン・ボイルの復帰が望めない今、ドナ・ヘイワードのその後の物語が読めるという点でも一読に値する）。2冊合わせて、パラノイア陰謀史家フロストの集大成といえるだろう。『ツイン・ピークス』後、さまざまな作品に携わりながら、文筆業に勤しみながら、フロストはずっと『ツイン・ピークス』のことばかりを考え続けていたと思うと涙が出てくる。著作に散見されるツイン・ピークス的記述の数々は、言うならばこの2冊のための先走り汁といった

ところか。

そして〝25年後〟の2017年、『ツイン・ピークス』は帰ってきた（厳密には25年後ではないが、そこを指摘するのは野暮というものだ）。製作はSHOW TIME、全18話、全話リンチが監督、フロスト&リンチが全話脚本を手掛けるというまさに純度100％のコントロール体制。「長期にわたる連続番組をたったひとりで作ることはできない。できたらどんなに素晴らしいか。でも現実には無理だ」とクリス・ロドリーとの対話で苦しげに語っていたリンチが、近年なかなか長編を撮れなかったリンチが、「現実」にしてしまった。コントロールしきれなかった『ツイン・ピークス』の雪辱を果たすチャンスを得た。フロストも同様だ。彼が『ツイン・ピークス』に長年執着してきたことは、前述の2冊を読めば痛いほどわかる。

『The Return』はリンチの映像作品の集大成であると同時に、フロストが積み上げてきたさまざまなロジックの集大成でもある。リンチは自らのイマジネーションと絵画再現を、フロストは前述した2冊の助走を経て、ツイン・ピークスの接続先を、アメリカ史から宇宙規模の視点にまで拡大した。もはや「ソープ・オペラ」という既存のジャンルを借りることなく、ましてやセット撮影が多くを占めていた『ツイン・ピークス』というタイトルの田舎町に束縛されることすらなく、ジャンル分類不能なまま、世界中の時間と空間を自由自在に往復する容赦ない続編となった。定期的なクリフハンガーもなく続く18時間。ツイン・ピークスはかつて箱庭だったが今は違う。世界全体が染み出した〝ツイン・ピークス〟に侵食されているのだ。

『The Return』は人智を超えた未知の暗黒領域を手探りで進んでゆく一種の開拓者の物語。あるいはコズミックな視点で繰り広げられる善と悪の闘いに巻き込まれ、人生が歪んでしまった者たちの物語。そして永き因果のなかに絡められ、もがき続ける人々の物語である。そしてそんなまがまがしさの犠牲になったひとりの少女の物語なのである。リンチは『ローラ・パーマー最期の7日間』についての言及で「ローラにはもっと生きていてほしかったんだ」と語っていた。つまり『The Return』は、なにより運命の犠牲者ローラを救う物語なのだ。

かつてパイロット版（インターナショナル・バージョン）のラストで、シェリル・リーがカイル・マクラクランに囁いた。そしてそのまさに25年後の『The Return』もまた、同じふたりによる囁きの再演で幕を閉じる。

ツイン・ピークスは確かに還ってきた。しかし本作もまた新たなる〝序章〟にすぎない。

かつてフロストは言った。

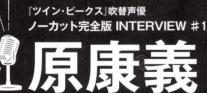
「世界はリンチのために準備されようとしているし、そしてリンチもまた世界のために準備しようとしている」

今こそ改めてこの言葉を信じたい。「リンチ／フロスト・プロダクション」のロゴに、再び「ジジジジ……」と電気音が流れるのを、今か今かと待っている——。

『ツイン・ピークス ファイナル・ドキュメント』（角川書店刊）

「自分のなかにはクーパーがいるんだな、と実感しました」

『ツイン・ピークス』吹替声優
ノーカット完全版 INTERVIEW ＃1

# 原康義

as FBI特別捜査官デイル・クーパー（カイル・マクラクラン）

**PROFILE**

はら・やすよし／52年東京都生。俳優・声優。1975年に文学座附属研究所入所、数々の舞台で活躍する。アニメでは『おさるのジョージ』（06年）の黄色いぼうしのおじさん役や、『ジャイアントロボ THE ANIMATION -地球が静止する日』（95年）の指パッチンで相手を切り裂くヴィラン、素晴らしきヒィッツカラルド役などで知られる。近年の外国映画の吹替作品では、『GODZILLA ゴジラ』（14年）でブライアン・クランストンが演じた博士ジョー・ブロディ役、『ダンケルク』（17年）でマーク・ライランス演ずる決死の救出作戦に向かう船長ミスター・ドーソン役などを務めた。

**取材・文◎吹替秘宝（岡本敦史＋岩田和明＋田口俊輔）**

## 原康義 as FBI特別捜査官デイル・クーパー（カイル・マクラクラン）

### 真犯人はクーパー？

——続編制作決定の第一報を聞いたときは、どう思われましたか？

**原**　それはもう、うれしいのひとことですよ。『ツイン・ピークス』は、僕にとって思い入れの深い作品ですから。そもそも、なぜ僕がデイル・クーパー捜査官（カイル・マクラクラン）の吹替声優をやることになったのか、いまだに理由がわからないんですよ（笑）。それまで洋画の吹替はちょこちょこやっていましたが、こうしたTVシリーズもので、主役をやるのは『ツイン・ピークス』が初めてだったんです。

——オーディションではなく、オファーだったんですね。

**原**　はい。音響監督は左近允洋さんという大御所の方で、10年ほど前に亡くなられてしまいましたが、僕がクーパー役に選ばれた理由は最後まで聞かずじまいでした。しかも、僕以外のキャストはベテランの先輩ばかり。銀河（万丈）ちゃんがいたり、秋元羊介さんや、池田勝さんがいらしたりと、そうそうたるメンバーが集まっていますよね。そんな状況だから、僕は主役なのに怖くて仕方がなくて（笑）。僕もツイン・ピークスに放り込まれたクーパー捜査官と同じように、知らない街にたったひとり、わけがわからないまま放り込まれたような感覚でした。

——左近允さんの演出自体が、そもそも原さんをクーパーのように見知らぬ環境で惑わせる演出だったのでは？

**原**　そうなんですよ。周りの住民に訝しがられながらも、クーパーが事件にのめり込んでいくというストーリーだったので、僕もまさに同じ心境で作品のなかに入り込んでいきましたね。現場では当時まだアテレコの融通もよくわかっていなかったから、本当に手探り状態でしたね。今から考えると、そんな状況になることを見越して僕がキャスティングされたのかもしれませんね。周りの声優さんに対しても、今回の主役はいつも現場で一緒の勝手知ったる声優仲間ではない、部外者を呼んだほうが作品の世界観やクーパーの心境とシンクロして面白くなるんじゃないか、という演出意図があったのかもしれません。

　ただ、当時はそんな演出意図についてなんて考える余裕は全然ありませんでした（笑）。第1話でクーパーが初登場するシーンからして、車の中で「ダイアン。これからツイン・

25年前、シーズン2・第16章のクーパー捜査官

25年後、『The Return』第17話のクーパー捜査官

記念すべき『序章』の初登場シーン！

ピークスへ向かう」とテープレコーダーに向かって喋るじゃないですか。いったい誰に話しかけているんだ⁉ と。

――ダイアンって誰⁉ って思いますよね。

**原**　そうそう。なのにまったく説明がない(笑)。いきなりそんな感じだから、もしかしたらクーパーはテープレコーダーだけが話し相手で、普段は寡黙な人物なのかな？ なんて思っていたら、訪問先でコーヒーを勧められると「月のない、真夜中のようなブラックで」と気取ったセリフを言ったと思ったら、ホテルのレストランでは「体には悪いが、目玉焼きはコチコチに、ベーコンはカリカリに焼いて」とか、わけのわからないこともよくしゃべる人で(笑)。僕だけでなく、周りの声優陣も困惑していましたね。ストーリーがどう転がっていくのか誰にもわからなかったので「この話、どうなるの？」「犯人、誰なの？」って、みんな頭に？マークを浮かべながらアテていたことを憶えています。僕も演じながら混乱して「真犯人はクーパーなんじゃないか？」とか思ったり、どんなふうに声をアテていいのかわからなくなることもありましたね。

――まさに視聴者と同じ気持ちで、翻弄されるように演じられていたんですね。

**原**　はい。だから最終的にはもうデイヴィッド・リンチ監督の世界観に身を任せて、自然に、流れのままに、誰が犯人だとかは考えずにアテていました。そんなふうに収録を重ねていくうちに、吹替キャストみんなも『ツイン・ピークス』の世界観にどんどんハマっていって、次の回の映像と吹替台本が事務所に届くと「どんな内容なんだ⁉」と、家に帰って食い入るように観ていました(笑)。だって、僕らはWOWOWで放映する前に、日本で誰よりも早く最新話を観ることができるわけですから。その点は役得でうれしかったですね(笑)。

――そして誰よりも早く翻弄されると。

**原**　アハハ！ だから毎回の収録もすごく楽しみでしたよ。キャストのなかには、シリーズの途中から登場するキャラをアテる人もいて、「これって今までどういうストーリーなの？」って現場で訊かれるわけです。でも、誰も答えられない(笑)。普通のミステリー作品とかなら人物関係やストーリーを解説できるんだけど、誰もわからないのでとりあえず「赤い部屋が出てきてさぁ……そこに片腕の男と小人がいて……」って説明して、「何なの、それ？」と言われたらもうそれ以上返せないから、最終的には「うーん、デイヴィッド・リンチに訊いて！」と言うしかなかった(笑)。

――正しい解答はそれしかないですね！

**原**　特に今回のシーズン3『The Return』は、最初からみんな目がテン！ だから新しく『ツイン・ピークス』にかかわる人には「わかろうとしちゃダメ！」としつこく言って回りました(笑)。吹替の現場は終始そんな感じ

# 原康義 as FBI特別捜査官デイル・クーパー（カイル・マクラクラン）

だったので、第1、第2シーズンを収録しているときも、まさか日本で『ツイン・ピークス』ブームが起きるとは思っていませんでしたね。いくらアメリカでヒットしたからといって、同じ現象が日本でも起きるとは限りませんから。

## 無意味なものが逆に意味をもつ

——『ツイン・ピークス』ブームは90年代前半のレンタルビデオブームの渦中でもあって、ビデオ店に行くと『ツイン・ピークス』のＶＨＳが全部貸し出し中になったりしていましたよね。

**原**　そうでしたね、懐かしい！　ストーリーはさっぱりわからないのに、なぜか人を惹きつけてやまない、不思議な魅力がある作品だと思いますね。

——それはなぜだと思われますか？

**原**　なんなんでしょうね。たとえば、このテーブルの上に置いてあるお茶を、長時間ずーっと撮っていて、何が起こるんだろう……お茶がどうにかなるのかな……と思わせておいて……結局何も起こらずにそのまま終わる。そういう魅力かな（笑）。

——『The Return』7話にも、ロードハウスの掃き掃除をえんえん撮っているだけのオチがないシーンがありましたよね。

**原**　そうそう。伏線なのかと思っていたら何のオチもなかったり、誰かが殺される凄惨な事件が起きても、その後いっさい触れずそれっきりだったり。いったい何の意味があったの!?　と観ている側は翻弄されるんだけど、それ自体が『ツイン・ピークス』の面白さなんじゃないかと思います。音楽も含めて、全編に流れる気怠いムードと、説明されない謎が残る余韻が魅力になっていますよね。現代社会は時間の流れるスピードがものすごく速くて、せわしないじゃないですか。ドラマや映画でも、パッパッとカットが切り替わってスピーディに展開して、意味のないものは極力排除される。『ツイン・ピークス』はそれとは正反対の世界。常にゆったりとした時間が流れていて、意味のないものしか映ってない（笑）。でも、その無意味なものが逆に意味を持ってきたりする。たとえば、えんえんと続く床掃除のシーンでも、じっと眺めていると意味があるように思えてくる。

——観る側の想像力を喚起させますよね。

**原**　そうなんですよ。それがリンチの手法なのか、それとも何も考えずにただ撮っているだけなのか判然としませんが（笑）。まるで時間と競争しているようにセカセカした世の中で、『ツイン・ピークス』のようなゆったりした映像と気怠い音楽に浸っていてもいいんじゃない？　人間にはそういう余裕が必要なんじゃない？　『ツイン・ピークス』という作品を通じて、リンチがそんなふうに言っているような気がするんですよね。

シーズン1・第2章より

## クーパーはキャラ付けしない

——最初のシリーズでは、クーパー捜査官を演じるにあたって、どんな役作りをされたん

ですか？

**原**　正直、最初はクーパーがどういう人物なのかさっぱりわからなくて、役作りのしようがなかったんですよ。だからまずはキャラクターの色を決めずに、淡々とプレーンにしゃべるほうがいいのかなと。第1話でダイアンに語りかけるセリフは淡々としゃべって、自分の好きなコーヒーやチェリーパイを前にしたときは、ちょっとテンションを上げて（笑）。基本的にはその後もずっとそのままです。ほとんどプレーンな状態で演じましたね。他のキャラクターたちがみんな立っていたので、僕があまりキャラ付けをしなくても結果的にバランスがとれたんじゃないかなと。

――そのプレーンな状態というのは、音響監督さんからの指示ですか？

**原**　いや、僕の感覚でやりました。音響監督との打ち合わせで決めたことは、特にありませんでしたね。

――台本は1話ずつ届いて順録りしていく流れだったんでしょうか？

**原**　そうでしたね。あのころの台本は今とは違って、全部のページが手書きなんですよ。それも何人かで分担して書いているので、途中で書き手が変わると、字も変わる。だからキレイな字もあれば、汚くて読めない字もあってね（笑）。汚い部分は、自分で読めるように書き直すんです。セリフも今の台本のように、画面のなかの実際の役者との呼吸が合うように1行ずつ区切られてはいなくて、ひと続きに改行なしでセリフが塊で書いてあるんです。だから息継ぎやセリフの切れ目のポイントは、自分で書き込むんですよ。当時は毎回台本をもらうたびに、まず自分で使いやすくなるように、いろいろ細かく書き込む作業から始まるんですね。今考えると、あんな面倒なことをよくやれていたな、と思います（笑）。

――そういう作業をすることで、より内容を深く読み込むことができたのでは？

**原**　そういう面もありましたね。ただ、僕の周りのベテランの方々は読み込みがもの凄く早くて、パッパッパッとやってしまうんです。だからみなさんについていくのに必死でしたね。しかも長ゼリフが多かったので、変なタイミングでページをめくった音が録音されちゃわないように、次のページにまたいでしまったセリフを前のページに書き写して収録に臨んだりしてましたね。

――収録時は、セリフの言い回しを多少変えたりなどのアドリブも？

**原**　いえ、いちおう『ツイン・ピークス』は謎解きをしっかりやらなければならないミステリー・ジャンルなので、簡単に言い回しは変えられないんですよ。後々の伏線になってるかもしれないから。結果的に、何の伏線にもなってないことが多いんですが（笑）。原則的に収録時は、トチって臨機応変に誤魔化すのもNG。その意味ではだいぶ厳しい現場でしたね。

――原さんは収録前に予習をみっちりされるタイプですか？　それとも現場で感覚的に演じるタイプ？

**原**　どちらかというと、感覚的にやるほうかなぁ。もちろん家で映像を観ながら声の出し方の練習はしますが、そこまでガチガチに固めては臨まないです。現場に行くと音響監督がいろいろと注文を出してくるので、まずはそれに応えないといけませんから。ある程度の余白がないと、監督の提案に対応できない。それは舞台でも、映画でも同じですね。僕自身の声質でやるしかないと思っていますので声色も変えられない。だからあとは気持ちの問題ですね。その点では感覚的な俳優だと思いますね。

――収録前に映像を確認する回数も多くないんですか？

**原**　そんなに多くはないですね。特に『The Return』はセリフが少なかったから、いちどだけ映像を観て、あとは雰囲気で演じたほうが面白いなと思って。「今回は1回観ればいいや」みたいな（笑）。

――主役なのに、セリフがない回もあります

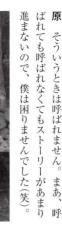
からね。

**原**　そうなんですよ！ 12話なんか、画面には出ているのにしゃべらない。

――セリフがない回は収録には呼ばれるのですか？

**原**　そういうときは呼ばれません。まあ、呼ばれても呼ばれなくてもストーリーがあまり進まないので、僕は困りませんでした（笑）。

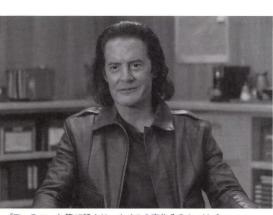
## 早くクーパーに戻ってほしかった！

――『The Return』では、実際のキャスト陣同様、吹替の現場でも25年ぶりの再会となったわけですね。

**原**　そうなんですよ。みんなで「久しぶりだなぁ！ 懐かしいなあ！」と言い合いましたよ（笑）。最近は声の仕事をしていなくて、『The Return』でアテレコに復帰する人もいたりしてね。声を聞いたら一発で当時のことを思い出して、まるで25年ぶりの同窓会を開いているような気分でした。トルーマン保安官（マイケル・オントキーン）も出るのかなと思っていたら、何年か前に俳優を引退されたそうですね。

――代わりに今回は弟のフランク・トルーマン保安官（ロバート・フォスター／吹替：有本欽隆）が登場しましたね。

**原**　トルーマン役の銀河ちゃんに久々に会える！と思っていたので、会えなかったのは残念でした。ドナ（ララ・フリン・ボイル）も再登場しなかったから、声をアテた高山みなみちゃんも今回はいませんでしたね。彼女が『ツイン・ピークス』に参加したのは『名探偵コナン』（96年～）で大ブレイクする前で、まだ声優になりたてのころだったんじゃないかな。「私、いつも子どもの役ばかりだから、こんな色っぽい女性をやったことないんですよ～」って初々しく話してくれていてね。そうなんだ～とか言っているうちに、アッという間に『名探偵コナン』で大スターになっちゃった（笑）。大塚明夫もだけど、あのころの若手はすっかりみんな偉くなって、ビッグに売れちゃいましたよね！

――江原正士さんが演じるＦＢＩ捜査官の

シーズン1・第3章より。これが問題のチベット式捜査法

アルバート（ミゲル・フェラー）も、相変わらず性格の悪いキャラでうれしかったです（笑）。

**原**　江原くんは25年前から変わらず、現場の雰囲気を明るくしてくれますよ。とにかくずっとしゃべってるから（笑）。みなさん独特のクセを持った方ばかりで、収録時は毎回みんなで前に突進していく！ みたいな姿勢で臨んでいましたね。いちばん大変だったのは、ゴードン・コール役の池田勝さんじゃないかな。リンチが自分で演じている役なので、今回の『The Return』では自ら説明役を担うような部分もあったじゃないですか。だから説明ゼリフが多いし、しかも常に大声でがなり立ててるキャラクターだからね。池田さんは「冗談じゃねえよぉ……」って言いながら、必死になって長ゼリフを叫んでいましたね（笑）。

『The Return』第17話より。カイル３変化その１、Mr.C

――そんなふうにみなさんが前のめりな演技をされているなか、原さんはどちらかというと〝受け〟の演技をされている印象を受けました。原さんの一歩引いた冷静さが全体のバランスを形作っているような。

**原**　カイル・マクラクラン自体がポーカーフェイスなので、声で色を付けすぎてしまうと変になってしまうんです。だから『The Return』でもそこは変わらずクールに演じました。カイル自身もすごく楽しんで演じていたと思いますよ。悪の権化のようなMr.Cの人格を演じたり、ダギーという終始ぼーっとした役を演じたり。

――『The Return』では、クーパー、ダギー、Mr.Cという3つの役を演じることになると事前に知らされていたんですか？

**原**　いえ、全然。まったく別人格の3役を演じるなんて夢にも思っていませんでした。最初に1話の映像を観たとき、カイルが出てきたと思ったら「えっ？ クーパー捜査官が人を殺すの!? これからどうなっちゃうの!?」ってビックリしちゃって。そのときはMr.Cがクーパーのドッペルゲンガーだとは知らなかったんですよ。

――第2シーズンの最終話でクーパーは善と悪に分かれてしまい、その悪のドッペルゲンガーがMr.Cとして『The Return』に登場したわけですね。予習として前のシリーズを観返しましたか？

**原**　いや、もうすっかりクーパー捜査官を演じるつもりでしたし、25年経って、カイル・マクラクランの声や体も僕自身と同じだけの歳月を重ねていると思ったので、昔の映像を観て「前はどんな芝居してたっけ？」みたいなことは考えずに演じようと。だけどまさか第16話までクーパーを演じられないとは思わなくて、面食らいましたね（笑）。

――音響監督から、3役の役作りについてのオーダーはありましたか？

**原**　第1話では、「Mr.Cは強面なので、声のトーンを低くして、怖い感じでやってください」という注文はありました。ちょっとでも優しく甘くなると「甘くならないように！」と指摘されましたね。

――第3話から登場する、ダギー・ジョーンズに関してはどんな指示が？

**原**　特になかったですね。「自由にお願いします」と（笑）。そもそもダギーはセリフがひ

## 原康義 as FBI特別捜査官デイル・クーパー（カイル・マクラクラン）

とこと、ふたことくらいしかないシュールな存在ですし、しかも繰り返しが多いから、役作りもなにもないんですよ。むしろ、主役がこんなに楽でいいの？と不安に思うくらい（笑）。片やゴードン役の池田勝さんが毎回ハァハァ言いながら大声で長ゼリフを叫んでいるのに（笑）。

――その横で、原さんはひとこと「コーヒー」と。

**原** その日の収録、それで終わり（笑）。

――3人のキャラによって声のトーンや抑揚がそれぞれ違ったりしましたか？

**原** カイルの演技って、どの役を演じても声のトーンがあまり変わらないんですよ。だからそこまで違いは意識しませんでしたね。Mr.Cの場合は声を低めに、ダギーの場合はもう何も考えずに「ハロー」（笑）。そのくらいですね。

――ダギーの状態がこんなに長く続くとは思わなかったのでは？

**原** いつまでダギーなんだろう？とは思ってました（笑）。早くクーパーに戻ってほしかったのに、なかなか出てこないから正直フラストレーションが溜まりましたよ。だって18話あるシリーズで、クーパーが覚醒するのは16話ですからね。もうシリーズも終わろうかというときに「私がＦＢＩだ！」という名ゼリフをやっと言うんですから。

――観ている側としても「やっとか！」と痺れを切らしました（笑）。

**原** 僕自身もやっとクーパーに戻れた！と思ったら大喜びしたのもつかの間、あと2話で終わり（笑）。しかも、あのラストですからねぇ……まだ続きがあるんでしょうね。でも、また同じくらい期間が空くと思うとおそろしい。吹替キャストのみんなとも18話の収録が終わったときに「あと25年はがんばらないとね！」って。僕ら日本の声優陣もがんばるし、僕もがんばって仕事を続けるから、リンチもカイルもそれまでがんばってほしい！そうじゃないと僕が声をアテられない（笑）。

――25年後のシーズン4で会いましょう、と（笑）。

**原** そう誓い合いました（笑）。今回クーパーを演じてみてうれしかったのは、25年前に演じたときの感覚を体が覚えていたことなんです。だから16話でクーパーに覚醒したときも、一瞬で役に入れたんですよ。長く携わってきた愛着あるシリーズだし、再放送のたびに観返していたので、役を思い出すのも全然苦ではなかった。自分のなかにもクーパーがいるんだな、と感じましたね。

――じゃあ、25年後の再会も大丈夫ですね！

**原** そのころには、僕もカイル・マクラクランもヨボヨボのお爺さんですけどね（苦笑）。僕はそれでもいいから、続きが観たいなと思っ

『The Return』第3話より。カイル3変化その2、ダギー

『The Return』第2話より。ローラ・パーマー（高島雅羅）が逆回転言葉をしゃべるシーン

ています。リンチは映画からは引退したと言っていますが、ドラマのほうは続けてくれるんじゃないかな〜と期待してるんですよ。

## バカバカしいことに手間暇かける収録現場

——他に『The Return』の収録現場で印象深かったことは？

**原**　自分のセリフは少なかったとはいえ、周りの役者さんたちの演技を観るのがすごく面白かったので、収録は毎回楽しかったですよ。今回はローラ・パーマー役の（高島）雅羅ちゃんが逆さ言葉をしゃべるのが大変そうでしたね。「赤い部屋」でのセリフは、役者さんはセリフを逆さに言って吹き込んでるんですよ。でも、逆再生してもひとことひとことがちゃんと聞こえるようにしなきゃいけないから、試行錯誤の収録現場でした。

——前のシリーズの吹替版では、声にエフェクトをかけるだけで逆再生感を出していましたが、今回は原音に忠実に、吹替版でも実際に逆さ言葉を逆再生してるんですね。

**原**　そうなんですよ。たとえば「ありがとう」というセリフを言うときは、母音と子音の並びを逆さまにして「U-O-T-A-G-I-R-A」としゃべると、逆再生したときに「ありがとう」と聴こえるんですよ。だから台本にもセリフが全部逆さに書いてあって、雅羅ちゃんも「えぇ〜っ、何コレ!?」と頭を抱えてましたね。しかも、字幕で補足しなくても言葉だけでちゃんと伝わるくらい、明瞭に聴こえなければならないので、その場で録音したセリフをその場で逆再生して聴いてみて、聴こえなかったら微調整してまた録り直し……の繰り返しでした。「この母音を強めに言えば、いま不明瞭だった"り"の音がもっとクリアに聴こえるよ！」とか。そんな現場でした。

——『ツイン・ピークス』の収録現場以外ではありえない作業ですよね。

**原**　ホントですよ（笑）。端から見ればバカバカしいし、意味がないように見える。でも、それだけ手間をかけることによって、リンチが狙った奇妙な感じは確実に画面に立ち現れるわけです。それが『ツイン・ピークス』だと思うんですよね。そこに何か魅力があるんですよ。

——ものすごく時間をかけて、不自然なものを作っている（笑）。

**原**　そう、遊んでますよね。一見意味のなさそうなところに意味があるというのが、『ツイン・ピークス』の神髄のひとつだと思います。特に今回の『The Return』は、リンチ色がとても濃い世界観になってますよね。面白い場面もたくさんあるけど、思わず「ええっ!?」と声をあげるほどグロテスクで残酷な場面もある。いきなり裸の男女がセックス中に血まみれで殺されたり、子どもが唐突に車に轢かれたり、殴られた男が口から泡を吹いて痙攣したり、首と胴体が違う人物の死体が現れたり。ついに頭がおかしくなっちゃったのかと思うくらい（笑）。ここまでグロテスクな場面は、第1、第2シーズンにはなかったですからね。シュールで残酷、それがリン

# 原康義 as FBI特別捜査官デイル・クーパー（カイル・マクラクラン）

チの世界なのかと。でも昔から『イレイザーヘッド』（76年）や『エレファント・マン』（80年）はもちろん、『ブルーベルベット』（86年）で切り落とされた人間の耳が出てきたり、シュールと残酷はずっとやってきてますよね。だからリンチの作家性はまったくブレてないと思います。

## 『ツイン・ピークス』には美女しか出ない？

――そして『The Return』最大のサプライズといえば、ついにダイアンが生身で登場したことですね！

**原**　出てきましたねぇ！　あれにはキャストのみんなもびっくりしてました。僕も「ダイアンって、実在したのか！」って驚きました（笑）。僕はテープレコーダーのことをダイアンと呼んでいるのかと思っていたので、実在するとは思っていなかったんですよ。しかもリンチ作品ではおなじみのローラ・ダーンが「Ｆｕｃｋ！」とか悪態つきながら、タバコを燻らせてダイアンのドッペルゲンガーとして最初に登場してね。僕はダイアンが実在するとしたら、もうちょっと秘書っぽい、かわいらしい感じかと思ってたんだけど（笑）。僕の想像とはかけ離れてましたね。

――クーパーがテープレコーダー越しに語りかけていたのはこの人だったのか、と思うと……。

**原**　全然繋がらない（笑）。だから地味にショックだったんですよ（笑）。とはいえ、リンチが「この人がダイアンだ」と言っているわけですから何を言ってもしょうがない。

――ただ、彼女もクーパーがMr.Cになってしまったように、25年の間に人格が大きく変わってしまったとも考えられますよね。

**原**　そうなんですよ。そういうところを自由自在に想像するのも『ツイン・ピークス』の面白さですよね。それにしても『ツイン・ピークス』に出てくる女性は皆さん綺麗ですよね！　最初のシリーズでも、田舎町が舞台なのにやたらと美女ばかり登場するし、『The Return』にも、かわいらしいカジノの女の子3人組が、無意味に出てくるし（笑）。

――ゴードンの傍らにいる女性捜査官のタミー（クリスタ・ベル）も、べらぼうに美人ですしね。

**原**　ホント綺麗な人ばっかり！　『ツイン・ピークス』の世界には美人しかいないのかと。リンチはホントに美女好きなんだね。

――ルーシー（キミー・ロバートソン）も相変わらずキュートですし。

**原**　ルーシーは25年経ってもほとんど印象が変わらない！　彼女が出てくるとホッとしますよね。陰鬱なストーリーのなかで、彼女には安心感があって、画面に登場しただけで自然と笑顔になる癒し系ですよね。それに、ルーシー役の安達忍さんの声もまた全然変わらなくてね。あの声を聴くと「懐かしいなぁ！」と、よりいっそうホッとするんですよ。

――今回はリンチ自身がすごく楽しみながら作ってる感じが出てますよね！

**原**　いやあ、楽しかったと思いますよ。だって謎を振るだけ振って回収しないで、本人は役者として出てきて美女を傍らに置いて気持

『The Return』第17話より。カイル3変化その3、クーパー！

ちよさそうに長ゼリフを叫んで、毎回ラストに自分の好きなミュージシャンを呼んできてライブシーンをたっぷり堪能するなんて、夢のような番組ですよね！

## 不条理さは、実は不条理ではない

——『The Return』の最終回は、原さんはどのように解釈して演じましたか？

**原**　最後にローラは死なないことになりますが、今度はさらにおかしな事態になりますよね。夢だったのかと思ったらそうでもなさそうで、気持ちがスッキリしないというか。映像を観て、カイルの表情を見て、そこで感じた雰囲気をそのまま言葉に乗せたという感じです。あとはもう観る人の想像力に任せるというか、僕のほうでは解釈を決めつけすぎずに、起こっている出来事で判断してもらおうと。ただ、いち観客としては釈然としない終わり方だなぁ……と。僕自身はクーパー捜査官というキャラクターが大好きなので、もっと活躍してもらいたかったんですよ。やっとエンジンがかかってきたところなのに！という心残りがあります。

——16話で覚醒したクーパーの決めゼリフには、原さんご自身の解放感と喜びが込められていたんですね(笑)。

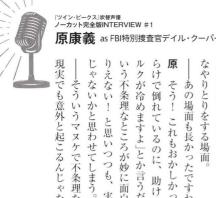
**原**　その通りです。クーパーが「私がＦＢＩだ！」と言った瞬間は、こうですよ！(と、親指を立てる)。僕自身、「必ず続きはある」と確信してます。そして今度こそ、クーパーが大活躍してくれるはずです！だからさぁ……早く次のシリーズを作ってよ!!

——今日最大級に熱がこもった言葉です！(笑)。監督もキャストも元気なうちに早く続編を作ってほしいですね。

**原**　そうですよ。僕なんて今回、正直クーパーをやった気がしてないんですから(笑)。でも、リンチは絶対に作ってくれると思います。だから僕が監督の代わりにファンの皆さんに言っておきます。「皆さん、シーズン４で会いましょう！」って(笑)。

——最後に、『ツイン・ピークス』シリーズ全体のなかで、原さんがお気に入りの場面はありますか？

**原**　第１、第２シーズンは結構ありますよ。

## 原康義 as FBI特別捜査官デイル・クーパー（カイル・マクラクラン）

まず第2章で、犯人と思われる「J」のイニシャルを持つ人間の名前を読み上げて、そのたびにクーパーが遠くに置いた瓶を目がけて石を投げる。で、割れたヤツが犯人だ！　というバカバカしいシーン。それまではFBI捜査官らしくしっかり捜査をしていたのに、いきなり「チベット式でいく」とか言って、トルーマンたちにも協力させて。最初に観たときは「えっ、これをマジメにやるの⁉」と驚きました。

――しかもえんえん長いんですよね（笑）。

**原**　そうなんですよ。別にギャグというわけでもなく、原音のセリフを聴いても真面目に演じているし、でもどう見ても変だしなぁ……と混乱しましたが、大好きなシーンです。もうひとつは第8章。クーパーが銃で撃たれて瀕死の状態にあるなか、ホテルの従業員のお爺さんがやってきて、しつこく無意味なやりとりをする場面。

――あの場面も長かったですね（笑）。

**原**　そう！　これもおかしかったなぁ。血だらけで倒れているのに、助けるどころか「ミルクが冷めますよ」とか言うだけ（笑）。そういう不条理なところが妙に面白くてねぇ。ありえない！　と思いつつも、実はありえるんじゃないかと思わせてしまう。

――そういうマヌケで不条理な出来事って、現実でも意外と起こるんじゃないかと。

**原**　そう！　人間の心のなかにも、我々が生きている現実世界のあらゆる出来事にも、理屈では説明できない、不条理なことっていくらでも転がってるじゃないですか。たとえば殺人事件の犯人の動機に「なんでそんな理由⁉」って驚いたりね。そんなふうに『ツイン・ピークス』的な不条理は現実世界にもいくらでも溢れていて、そこかしこに存在しているんだと思うんですよ。だから、『ツイン・ピークス』はむしろリアルを描いていると思うんです。

――よくできたミステリー小説やドラマのように、論理的整合性がとれている物語のほうが、むしろ不自然で非現実的なのかもしれない。

**原**　そうなんです。だからリンチのなかに「不条理さは、実は不条理ではない」という考え方があるんじゃないかなと思うんですよ。

――深い……！　原さんは、リンチ・ワールドを完全に理解されてらっしゃるように思いました。

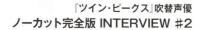
**原**　いえいえ（笑）。若いころはそこまで想像できませんでしたが、歳を重ねてそういうことかな？　と思い至りまして。これだけ多くの人が『ツイン・ピークス』に魅入られる理由は何だろう？　と、自分のなかで考えてみたらそういうことなのかもなって。

――原さんがお好きな2つのシュールな場面も、まさに無意味で不条理でバカバカしく見えながら、実はリアルな『ツイン・ピークス』の世界観の本質を表す場面ですね。

**原**　それを逆に言えば「意味のないものなどない」ということかもしれませんね。何気ない風景や、偶然の現象みたいなものを切り取っていても、実は見えない意味や力が存在しているのかもしれない。

――それこそ『イレイザーヘッド』のように、宇宙のどこかで誰かがレバーをガチャン！　と引いた結果に生まれた状況なのかも。

**原**　そうそう（笑）。リンチのなかにも、人間が宇宙や神と繋がっているような、そういう超常的な世界観があるんでしょうね。『The Return』にも超常空間が存在しますしね。僕ら人間は自分の周りの狭い世界のなかで、理屈で物事を考えてしまうから、その範疇から外れたことを不条理と思ってしまいがちだけど、もっと広く宇宙や神の視点に見方を変えたら、不条理でもなんでもないのかもしれない。そういう考えを自由に巡らせながら、独特のムードとゆったりと流れる時間に身を委ねて、長く浸っていたくなる作品が『ツイン・ピークス』なんだと思います。それと、映像の美しさだけでも陶酔させてやまない魅力がありますよね。なにしろ、美女がたくさん出てきますから（笑）。

# 安達忍

as
ツイン・ピークス保安官事務所ルーシー・モラン／ルーシー・ブレナン（キミー・ロバートソン）

***PROFILE***

あだち・しのぶ／声優。少年や大人の女性役に定評があり、代表作にアニメ『魔動王（マドーキング）グランゾート』（89年）のラビ、『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』（88年）のロンド・ベル所属モビルスーツパイロット、ケーラ・スゥ、『機動戦士Vガンダム』（93年）のシュラク隊メンバー、ケイト・ブッシュ、「忍たま乱太郎」シリーズ（93～）の田村三木ヱ門役など。洋画吹替作品では『エディット・ピアフ～愛の讃歌～』（07年）のエディット・ピアフ、『ゴーストバスターズ』（84年）のマイペースな受付嬢ジャニーン・メルニッツ、海外ドラマ「フレンズ」シリーズ（94～04年）のレイチェル、「ビバリーヒルズ高校白書」シリーズ（90～00年）のドナなど多数。

取材・文◎吹替秘宝
（岡本敦史＋岩田和明＋田口俊輔）

## 「ルーシーは、リンチのおうちにある着ぐるみなんです（笑）」

# 安達忍 as ツイン・ピークス保安官事務所ルーシー・モラン／ルーシー・ブレナン（キミー・ロバートソン）

## 変な声の女優でよかった！

――今回『ツイン・ピークス』が25年ぶりに復活すると聞いたときのご感想は？

**安達**　それはもう「びっくり！」と「うれしい‼」という感動に尽きますね。25年ぶりにルーシー（キミー・ロバートソン）と画面で再会したときは「ああ、いい歳の重ね方をしているなぁ！」と思って、すごくうれしかったです。

――旧シリーズと『The Return』のキミー・ロバートソンの声を聴き比べると、多少枯れた感じもありますが、ほぼ変わっていないんです。そして安達さんの声も、さらに輪をかけて全然変わっていないのが驚きでした！

**安達**　本当!? それはうれしいですね。『The Return』の日本語版演出の高橋剛さんにも、第1話の収録のときに「はい、ＯＫです。25年前とお変わりないですね」と言われましたよ。

――やっぱり！

**安達**　それがいいのか悪いのかわかりませんが(笑)。

――安達さんから見た『The Return』のルーシーの印象は？

**安達**　特に何も変わることもなく、25年間ずっとここにいたんだなぁと(笑)。若気の至りでふらふらしていた時期もあったかもしれないけど、きっとツイン・ピークスという町からは出ずに生きてきたんだろうなと思いました。むしろドッシリした感じというか、根を張ったすごさみたいなものを感じましたね。

――そのニュアンスを演技に入れようとは？

**安達**　まあ、私もこの25年間、一緒に年齢を重ねてきましたので(笑)。特に意識はせず、無理なく自然にスッと演じられました。こうして25年後に大好きなキャラクターと再会できるのは本当にありがたいことです。

――吹替版の収録現場でも25年ぶりに同じメンバーが一堂に会しましたね？

**安達**　もう、うれしいなんてもんじゃないですよ！ まさに25年ぶりの同窓会気分でしたね。みんなで顔を見合わせて「おお～っ、久しぶり‼」という感じ。こんな機会を与えてくれて、リンチ監督、本当にありがとう‼と感謝したいです。

25年前の『ツイン・ピークス』序章より。記念すべきルーシー初登場シーン。トルーマン保安官への要領を得ない説明ゼリフでいきなり笑わせてくれる

『The Return』第1話より。25年経っても、アンディ（ハリー・ゴアズ）役・幹本雄之さんとのかけあいは息がピッタリ！

『The Return』第3話より、ホークと一緒に失くなっている物を探すルーシー

——アンディ（ハリー・ゴアズ）役の幹本雄之さんとの再会は？

**安達**　もちろんうれしかったですよ〜。「あ、変わらないねぇ！」と、お互い懐かしさを噛みしめていました。

——ルーシーとアンディの会話シーンでは、25年前と同じ感覚が蘇りましたか？

**安達**　それはありましたね。まず、本国の役者さんたちがスッと当時と同じ感覚で役に入っているんですよね。それに倣って、私たちも同じ立ち位置で演じれば、同じようにスッと役に入れてしまうものなんです。『The Return』の収録で最初にOKをもらえたときはうれしかったですね。何せ、前のシリーズのときは音響監督の左近允（洋）さんに、ものすごくシゴかれましたから。

——そんなに厳しい方だったんですか？

**安達**　左近允さんは厳しかったですねぇ……。25年前、いちばん最初に『ツイン・ピークス』の吹替版キャストを決めるとき、ルーシー役に「変な声の女優が必要なんだけど、誰かいないか？」という話になったらしくて。そのとき、別のディレクターさんが私の名前を挙げてくださったそうなんです。だから、オーディションも何もなく、いきなり決まったという記憶があります。

——最初から決め打ちでオファーされたんですね。

**安達**　そうです。「変な声の女」でよかったですよ（笑）。いまでも覚えているのは、最初の『ツイン・ピークス』の収録のとき、左近允さんに「おまえを呼んだのはなぜかわかるか？」と言われたことです。「この作品で、このシーンで、おまえに何をやらせたくて呼んだのか、よく考えて芝居しなさい」と。つまり、自分が演じるキャラクターが、作品のなかでどんな役割を担っているのか、それをしっかり理解したうえで芝居をしなさいということを、左近允さんから教わったんです。

——それは大きな教えですね。

**安達**　「この一行のセリフを読むためだけに、おまえを呼んでいるんだ」とも言われました。たくさんのセリフでストーリーを運んでいく主役級のキャラクターはもちろん大切だけど、脇役は脇役で、ほんの短いセリフでもガツン！と作品を面白くするための芝居をしなくちゃいけない。その意味をちゃんと考えて芝居をするように、と教わりました。

## リンチのルーシー愛を感じた！

——ちなみに、ルーシーはどんな役割を担っていると考えて収録に臨まれましたか？

**安達**　あのころはもう左近允さんのOKをもらうのに必死でしたから（笑）、あまり深くは考えられませんでしたね。ただ、いまになって思うのは、まるで近代美術やアウトサイダー・アートのような『ツイン・ピークス』という作品を観たときに、観客が「あっ、ここは意味がわかる」とか「ここは笑っていい場面なんだな」と感じられるためのポジションだったのかなと思います。この子、ちょっと大丈夫かしら？と視聴者が心配になるよう

## 安達忍 as ツイン・ピークス保安官事務所ルーシー・モラン／ルーシー・ブレナン（キミー・ロバートソン）

な天然気味の女の子だけど、ものすごく生活感あふれる俗っぽい部分も担っている。そういう存在って、『ツイン・ピークス』の世界観のなかでは異色だと思うんですよ。今回の『The Return』では、夫婦愛や家族愛といった部分を担っているし、アートと現実社会との橋渡し役のような導線を引いてくれる、視聴者が安心して共感できるような存在なのかなと思いますね。

――たしかにルーシーは、一貫してシリーズの和みの中心ですよね。

**安達** そうそう。でも『The Return』では相変わらずの和みキャラなのかと思いきや、最後の最後にまさかの大活躍！

――あれにはド肝を抜かれました。

**安達** 私、あの場面でリンチのルーシー愛をものすごく感じたの！ ナイド（裕木奈江）を救うのもアンディだし、最後に活躍するのは、普通の庶民たちなんですよ。リンチはそれまであまり表立ってストーリーを掻き回してこなかったキャラクターたちにも、実はものすごく愛情を注いで育んでくれていたんだっていうことがわかって、感動しました。

――実は旧シリーズから、アンディとルーシーは捜査の役に立っているんですよね。

**安達** そうなんですよ！ ヒョコッと言ったことが実は深かったり、事件を掘り下げるきっかけになったり。実はアンディとルーシーが物語のキモを担ってるところに、リンチの深い愛情を感じますね。

――アンディの閃き、そしてルーシーの勇気がなければ、今回の事件はなにも解決しなかったわけですからね。

**安達** そのとおりですよ！ トルーマン保安官のお兄さん（ロバート・フォスター）なんて、意味ありげに登場して、特に何もしなかったじゃないですか（笑）。『ツイン・ピークス』は意味ありげな人ほど、意味がないんですよ！

――たしかに（笑）。『The Return』はアンディ&ルーシー夫妻こそが物語の中核を担っていたんですね。

**安達** そうです！ クーパーなんて目じゃありませんよ！ むしろ今回のクーパーは邪魔してばっかりだったじゃないですか（笑）。クーパーこそ「意味ありげで何もなかった」張本人ですよね。

――まさか覚醒するのに16話までかかるとは夢にも思わなかったと、クーパー役の原康義さんもおっしゃってました。

**安達** （笑）。原さん、今回ほとんどしゃべってないですからね。みんなで「ギャラ泥棒！」って言ってました（笑）。そうそう、私が原さんと初めてご一緒したのが、25年前の『ツイン・ピークス』だったんですよ。

――そうなんですか！

**安達** それまで原さんは舞台がメインだからあまり吹替をやってらっしゃらない印象があったんです。そしたらいちばん最初の収録で、原さんがものすごくフラットな声のお芝居をされるのを間近で見て、すっごく感動したんです！ 変なところで癖やニュアンスをいっさいつけないプレーンな表現をされていたんですよ。かといって、棒読みでもな

マーク・フロストが衝撃的展開をこれでもかと詰め込んだシーズン1最終話・第7章では、ルーシーがアンディに妊娠を告白！

い、本当にニュートラルな演技で。それがクーパー捜査官のキャラクターにぴったりとハマっていて、だからこそ『ツイン・ピークス』は成立したんじゃないかなって思います。「わぁ〜、すごい！」と驚きながら眺めていたのを覚えています。

## リンチは女性にピンクを着せる

**安達**　私、リンチは映画監督というより、近代美術のアーティストなんじゃないかと思うんです。個人的にはグロテスクな描写が苦手なもので、全作品をちゃんとは観ていないんです……。観たとしてもストーリーをちゃんと理解できる自信もないし（笑）。『ツイン・ピークス』も、そういうところがありますよね。友だちに内容を話そうとしても説明できないんですよ。「赤い部屋が出てきてね」とか「私は腕だ！　って言う木が出てきてね」とか、まるで昨日見た夢の内容を話しているみたいで。

――それこそがリンチ作品ですよね。

**安達**　観ていない人には全然意味がわからないし、説明した私がおかしいみたいなことにもなりかねない（笑）。だから言葉ではなく〝感覚で共有する〟しかないんです。あの腕って、本当になんなんでしょうね？

――赤い部屋の小人が変身した姿かもしれないし、片腕の男マイク（アル・ストローベル）の失われた腕かもしれない。

**安達**　そうなんです。そういう「かもしれない」の羅列で出来ているから、感覚的に共有するしかないんです。でも映像がすごく綺麗だから見入ってしまうんですよね。色彩とか女性の衣装は特にそうだし、細部へのこだわり方がものすごい。ルーシーの羽織るカーディガンの刺繍にしても、女性キャラクターには必ずと言っていいほどピンク色を着せるところも、何か深い意味があるのでは？　と考えさせるんです。

シーズン2・第10章で、ディックと食事しながら怒りを爆発させるルーシー。あのルーシーがキレる！　というピークへ巧みに持っていく安達さんの芝居も楽しい名場面

――たしかに、ピンク色をまとう女性は多いですね。

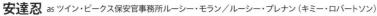
**安達**　ジェイニー（ナオミ・ワッツ）の服もピンク色だし、カジノの３人娘もピンクのドレスだし、モーテルでMr.Cに殺されるダーリヤもピンクの下着だし、女性たちのピンクや赤の色使いがすごく気になるんです。『シェイプ・オブ・ウォーター』（17年）を観たときも、監督のギレルモ・デル・トロはリンチと同じような感覚を持っているなって思ったんですよ。おそらく２人とも、ストーリーを追いかけることよりも細部を味わいながら勝手に解釈してね！　っていう作品を作る芸術家肌の監督なんでしょうね。

――『ツイン・ピークス』で、特にアートを感じたシーンはありましたか？

**安達**　やっぱり伝説の『The Return』第８話ですね。もう全シーン、全カットがアート。これはちょっとスゴすぎるなぁと思いました。近代美術の良さって、説明的ではないところじゃないかと思うんです。説明して人を説得したり、誘導したりするのではなく、その画を見せることで能動的にインスパイアする力が第８話には圧倒的にありましたよね。CGに触りたての人が作ったような謎の生命体も出てくるじゃないですか。あれもチープなんだけど同時にアートでもあるというか。

## 安達忍 as ツイン・ピークス保安官事務所ルーシー・モラン／ルーシー・ブレナン（キミー・ロバートソン）

わざと質素で安っぽく作ってる感じがいいんですよね。

——旧シリーズで印象的だった演出は？

**安達**　旧シリーズはもっと映画的というか、ちゃんとドラマを作ろうとしてましたよね。序章にあったビデオ映像のローラの目の中にバイクが映ってるシーンとか、うまい演出だなぁと思いました。あのころは大人の事情もいろいろあって、しっかり物語を作ってくださいと言われていたのかもしれないけど(笑)、今回は外野の顔色をうかがう必要もないですからね。お歳を召されて、もはや捨てるものも何もないでしょうし(笑)。『The Return』は、いわばリンチが自ら作り上げた〝リンチ美術館〟ですね。で、館長自ら出たがりという(笑)。

シーズン2・第28章では、ミス・ツイン・ピークス・コンテストに参戦。見事なダンスも披露する

——今回はゴードン(デイヴィッド・リンチ)の出番がやたら多かったですね。しかも必ず美しい女性を傍らに置いて。

**安達**　絶対に女性大好きですよね！　しかも、ただの女性でなく「美しい女性」が好きなんですよ。でも、きっとそれはアーティストとしての「好き」なんでしょうね。造形として美しいものが好き、というのは25年前からわかっていたことですから(笑)。

——旧シリーズの時点で見破っていましたか(笑)。

**安達**　だってリンチさんはローラ・パーマー(シェリル・リー)のことが大好きだったでしょう。オードリー（シェリリン・フェン）も、ほかの女性キャラもそうですし、ただ綺麗なだけでなく、強い女性も好きですよね。『The Return』で初めてダイアン(ローラ・ダーン)が出て来たときに「ダイアンって、屈強な人だったんだ‼」って驚きましたから。ああいう綺麗で口が悪くて強い女性が大好きなんですよ(笑)。そのいっぽうで、ルーシーみたいなほんわかしたタイプの子も好きなんですよ。かなりの女好きですね(笑)。

——リンチは美しい女性はもちろんですが、小さい人や大きい人、片腕の人や目が見えない人なども同じく愛情深く撮りますよね。

**安達**　あっ、それは絶対にある！　広い意味での「造形美への興味と執着」がきっと普通の

旧シリーズのラストを飾るシーズン2・第29章はリンチ自ら監督。その冒頭はルーシー＆アンディの美しいラブシーンであり、リンチの彼らに対する愛情は『The Return』のクライマックスにも再び溢れ出る

人よりもすごく強くて激しい人なんですよね。

――エレファント・マンも、モニカ・ベルッチもリンチのなかでは同じなんですよね。

**安達**　そうそう、だから近代美術のアーティストなんでしょうね。特に今回の『The Return』は、美術館でずっとアートを眺めているような感覚の作品だと思います。ただ、近代美術って、ずっと眺めていると疲れませんか？　気付くとすごく頭を使っているんですよ。

――それはどういったところで？

**安達**　人間はどうしても意味を探したり、理解しようと考えてしまう動物だと思うんです。だから意味のわからないアートを見ても「どんな意味があるんだろう？」と頭を捻ってしまう。それで疲れちゃうんですよ。本当は「考えるな、感じろ！」ということなんだと思うんですが。とはいえ、いくら自分にそう言い聞かせても、やっぱりがんばってわかろうとしてしまうこの悲しさよ……。『The Return』第1話のシャベルを塗装するシーンなんて、何もオチがなかったですよね（笑）。何コレ？　何の意味が？　と思って観てたら、途中で「あ〜、ダメダメ！　こういうのに意味を見出そうとしたら絶対ダメ！」って。

――しかも意味なく長い（笑）。

**安達**　そうそう。意味のな〜いことをえんえんと引っ張るんですよね。第8話もセリフが全然なくて、映像だけで押していく力がものすごかった。私は出てないから参加してないんですが、共演者に聞いたら、吹替の収録がアッという間に終わったって。その意味でも伝説的なエピソードですね（笑）。

## プレイバック！　緻密極まる左近允演出

――ここでまた25年前に逆回転しますが、旧シリーズの収録現場はどんな様子か覚えておられますか？

**安達**　左近允さんの収録って、まず最初に台本直しにものすごく時間をかけるんですよ。2時間くらいかけるので、朝10時に入っても収録のスタートがだいたいお昼過ぎになっちゃうんです。

――具体的にどんなところを直すんですか？

**安達**　誰が何番のマイクを使うとか、このセリフでこの息を入れるとか、録音をスムーズに一気に進めるためのプランを綿密に打ち合わせて作っていくんです。たとえば、台本のセリフの頭に「安達」「幹本」と、役者名が書かれていて「このセリフは何秒で言いきる」とか、この言葉を強調するとか、ご自分で映像を観てチェックした演出プランを各役者たちに全部叩き込むんです。収録現場のすべてをコントロールしているので、ある意味、左近允さんもデイヴィッド・リンチみたいな方でしたね。

――ものすごいこだわりを持った方なんですね。

**安達**　はい。朝みんなが現場に入ったところで、セリフをアタマからひとつひとつしらみ潰しに確認していって、語尾の直しや、長さの直しも丹念にしていくんです。長尺の作品だと、2時間以上はホン直しに費やしていましたね。『ツイン・ピークス』は各話1時間枠のドラマだったので、そこまではかかりませ

# 安達忍 as ツイン・ピークス保安官事務所ルーシー・モラン／ルーシー・ブレナン（キミー・ロバートソン）

んでしたけど。

――そのときは左近允さんが実演されるんですか？

**安達**　いえ、「ここのセリフはこうして」「ここにブレスを入れて」「何秒後のガヤ、誰々さんが何か言って」……といった細かい指示出しがえんえんと続くんです。それだけ左近允さんは繰り返し作品を観て、しっかり理解して、完璧に下準備をされているということの証明なんですね。私たちが同じくらいの回数を観てくるのはさすがにムリだけど、それに負けじと自分なりのリハーサルをやってこないと、現場でエラい目に遭うという緊張感が常にありました。

――左近允さんの頭のなかには既に完成形が出来上がっているんですね。

**安達**　そうなんです。だからいざ収録が始まると早いんです。せーの！ で始まって、みんなでセッションしながら左近允さんの指示通りに仕上げていく。すべてが緻密に計算し尽くされているから、ひとりでもつまずけば止まってしまう。全員が大変な緊張感のなかで本番に臨んでいましたね。

――自分は誰よりも細かく作品を研究して、これだけ深く考えているんだ、というオーラで役者陣を圧倒するのが左近允さんの演出スタイルなんですね。

**安達**　そう！ だから「なんのためにおまえを呼んでいるか、わかるか？」と左近允さんに問われたら、もうとにかく「ハイ！」と言って、遮二無二やってみるしかないんですよ。それでやってみてOKが出たら「よかったぁ……」と安堵する。だから答えなんていつもわからないんです（笑）。

## 目の動きと、対象者との距離感を見る

――『ツイン・ピークス』以外の現場で、左近允さんとご一緒したことは？

**安達**　私はそれほど多くはないんです。『刑事コロンボ』を2本くらいやったのかしら？

――『刑事コロンボ』も左近允さんなんですね！

**安達**　代表作ですよ。あの有名な「うちのカミさんがね」というスタイルは、左近允さんと翻訳家の額田やえ子さんが生み出したものなんですよ。とにかく言葉のチョイスが素晴らしいんです！ 昔の『刑事コロンボ』を観ていると、小池朝雄さんの長ゼリフを聞いているだけでシビレますよね。台本を読んでいる感じがまったくしない、その人がその場でしゃべっているリアリティがものすごくて、なおかつ出てくる言葉のすべてがカッコいい！ 小池朝雄さん、そして我が事務所の羽佐間道夫、このおふた方はセリフを聞くだけでシビレます！ これはぜひ書いておいてくださいね（笑）。

――もちろんです！

**安達**　あのすごさは勉強して体得できるものじゃないですよね。自分もあんなふうにできたらいいな～っていつも思います。

――安達さんはその後どんなふうに左近允さんの教えを学んで、役作りをされるようになりましたか？

**安達**　まずは作品の全体像を観ますね。そして厳然としてある作品のタッチを汲み取ろう

『The Return』第4話には、ルーシー＆アンディ夫妻の自慢の息子、ウォリー（マイケル・セラ／中央）が登場。安達さんお気に入りの一家団欒シーン

『The Return』第9話より。通販サイトを見ながら、椅子の色の好みで意見が割れるルーシー&アンディ。「末永くぉ幸せに！」と言いたくなるようなオチがつく

とします。そのなかで、自分が演じるキャラクターの担う役割やそのシーンに出てくる理由を理解して演じようと努めていますね。でも役者さんは全員そういうふうに考えていらっしゃると思いますよ。

――安達さんは、予習で映像を見るとき、演じる俳優のどの部分を注視しますか？

**安達**　私の場合はなんだろう……目の動きかな？　たとえばシリーズものになると、役者さんの目を見ていると「この回は気持ちがノッてないな」とか「いま、体調が悪いのかな？」とか、わかるようになるんです。

――目は口ほどにものを言うと。ルーシー役のキミー・ロバートソンの場合、目からどんなことが掴めますか？

**安達**　この人の芝居の作り方は……なんなんでしょうね（笑）。彼女はこれって即興なの？　と思うくらい、笑ってるのか泣きそうなのか判別できない表情をするんですよ。もはやOKカットなのかNGカットなのかすらわからないくらい、キョトンとした表情をする。まるでドキュメンタリーを撮ってる監督がいいとこ待ちをしているような状態が、25年経った今もキミーさんの芝居には感じられるんです。その質感が出たら面白いな、と思いますね。

――演技なのか、それとも本人の素の表情なのかわからないような目をするんですね。

**安達**　その生々しさが、この人のうまさなんですよ。それが過剰になると、作った天然っぽさに見えてしまうんですが、私から見ると彼女にはそれがないんですよ。だからカワイイし、愛すべきキャラクターなんだなと思います。

――目のほかに、注意して見る部分はありますか？

**安達**　たとえばアンディのような対象者との距離感ですかね。なおかつ、会話をするときにどれくらいの音量でしゃべっているのかは気になります。

――それこそ『ツイン・ピークス』は、アンディとのかけあいがキモになりますよね。

**安達**　幹本さんがアンディ役を演じるうえで意識されていることは、純朴で朴訥、ピュアなムードと、相手との距離感なんですよ。アンディはすごく至近距離でしゃべったりはしない、独特の人物像なんですね。『The Return』では、加えて25年もルーシーと寄り添っているというニュアンスも入ってきますから、似たもの夫婦じゃないけど、ルーシーもどこかそのアンディの距離感に沿わせたいなとは思いますね。

――なるほど。幹本さんのニュアンスに安達さんが合わせた部分もあるわけですね。

**安達**　でも、どっちが先なんでしょうね？　もしかしたら私の芝居を見て、幹本さんがそのように合わせてくれたのかもしれない。どちらが先ということもなく、自然に寄り添い合っているような気もしますね。

――25年を経ても、幹本さんとの掛け合いはスムーズに演じられましたか？

## 安達忍 as ツイン・ピークス保安官事務所ルーシー・モラン／ルーシー・ブレナン（キミー・ロバートソン）

**安達**　はい、今回もすごく気持ちよくできました。やっぱり体に刷り込まれたものって大きいですよね。もし相手役が変わっていたらまた違うんでしょうけど、幹本さんもゴードン役の池田勝さんも、25年前と全然変わってなかった！まるで旧シリーズの収録が昨日のことのように自然に演じられましたよ。声優って、息が長いんだな〜って改めて実感しました。若い子は大変ですよね、上がつかえちゃってるから（苦笑）。

――変わらない秘訣はなんでしょうか？

**安達**　やっぱり、その人独特の〝節〟を持っていることじゃないですか？その〝節〟を聞くと、皆さんのなかに刷り込まれた蓋がポンと開くんじゃないでしょうか。若本規夫さんなんて、〝節〟そのものでしょう（笑）。だから今回、銀河（万丈）さんがいらっしゃらなかったのがものすごく残念で。銀河さんのトルーマン保安官のセリフ、聴きたかったなぁ〜。オードリー（シェリリン・フェン）役の紗ゆりちゃんが今回いなかったのも寂しかったですね。『The Return』でオードリーを演じた小林優子ちゃんもすごく合っているんですよ。でも、紗ゆりちゃんのオードリーとも再会したかったな……。

### ルーシー一家のスピンオフ企画、始動!?

――演じる役のバックボーンについては考えますか？

**安達**　それは私だけじゃなく、役者はみんな考えると思いますよ。その役の背景や内面について考えることが深層心理に染みついているくらいじゃないかしら。「特に何も考えないよ」という役者さんがいたら、それはきっと照れですよ（笑）。

――ルーシーについては？

**安達**　ルーシーのバックボーンはですね……着ぐるみなんです。

――えっ、着ぐるみ!?

**安達**　リンチのおうちにある着ぐるみなんですよ。普段は玄関の洋服掛けのところにダラーンと垂れているんだけど、『ツイン・ピークス』の撮影期間になると、リンチが背中の空気穴から息を吹き込んで、生命を与えるんです。で、撮影が終わってリンチの家に帰ると、ガーッと脱がされて、また次の出番までダラーンと垂れている。

――それは斬新な発想ですね！

**安達**　完全に私の妄想ですけどね（笑）。そもそもルーシーとアンディが普段はどんな生活をしているのかを考えてみたことがあるん

ですよ。でも、どうしてもイメージできなかったんです。でも彼女にだけは生活感があるし、唯一庶民的なキャラでリアリティがある。それはきっと、リンチ自身が抱いている女性像の肉親的な部分……つまり母であったり、姉であったり、妹であったり、娘であったりする部分を、ルーシーというキャラクターに詰め込んでいるからじゃないかと思うんです。

――なるほど！

**安達**　ちなみにこれは『The Return』の話ね（笑）。

――あ、そうなんですか？　では旧シリーズのときは？

**安達**　多少変な子だけど、もっと普通に人間的なキャラクターとして捉えていました。仕事が終わればダイナーにも寄るだろうし、浮気をしてアンディを泣かせちゃったりもするだろうし、そういう俗っぽい日常生活が想像できたんですよ。でも『The Return』のルーシーは、家に帰ってご飯を食べている姿が全然思い浮かばなかったから……。

――着ぐるみなんですね（笑）。

**安達**　保安官事務所以外の場所では何をしているんだろう？　っていうのが想像できなかった。たぶんリンチという人は、女性に対してかなり複雑なコンプレックスを抱いていると思うんですよ。そのなかにある安らぎの部分をルーシーが担っているんじゃないかなって。でも『The Return』のルーシーが体現しているのもまた、リンチが作るアートのなかの女性像でもある……と、収録しながら妄想していました（笑）。すごく複雑で抽象的な人物像ですよね。それでもやっぱり、シュールな世界観のなかにおけるオアシスのような存在という捉え方は、旧シーズンから変わっていませんね。

――作り手にとっても、視聴者にとっても安心できる存在なんですね。

**安達**　そうですね。今回も彼女とアンディが通販サイトで椅子を迷いながら選ぶシーンなんて最高ですよね（笑）。あと第4話で息子のウォリー（マイケル・セラ）が出てくるじゃないですか。私、あの場面が大っっっ好きなんです！

――旧シーズンの後半で、妊娠が発覚したルーシーが生んだ子どもということですよね。父親候補のどちらにも似ていませんが（笑）。

**安達**　あの親子3人のシーンは、今シーズンでいちばん笑いました！　家でリハーサルしながらゲラゲラ笑っちゃった。

――どのへんがツボに？

**安達**　だって微妙に小太りだし、マーロン・ブランドの格好をしているのに全然似てないし（笑）。そのあとストーリーに絡んでくるのかな？と思ったら、やっぱり何もない（笑）。でも本当に素敵な親子ですよね。これはもう、ルーシー一家のスピンオフを作ってもらわないと！

――それはナイスアイデア！

**安達**　でしょう？　私の希望としては、絶対にバイオレンスにしない、クスッと笑えて、色が綺麗で、ちょっぴり怖い。そんな作品を短いシリーズでいいから作ってほしいんですよ。息子の恋愛話とかもあったりしてね（笑）。

――そこでは、ルーシーはどんな立ち位置なんですか？

**安達**　ルーシーもアンディも、息子に対して完全にイエスマンなんですよ。息子を完全に信頼しきっていて、やることなすこと全面的に肯定しますから。

――そんなに甘やかしすぎると、息子が暗黒面に堕ちてしまうのでは……。

**安達**　いいえ、堕ちません（キッパリ）！　だって、ウォリーはすっごく親思いの子ですもん。あの第4話の長ゼリフで、彼が両親のことをすごく愛していることが伝わってきましたから。それに彼は旅にも出ていて、自立できてますからね。かわいい子には旅をさせよ！ですよ。

――すごく健全な親子関係ですね（笑）。

**安達**　そうです。で、たまに寅さんみたいに

## 安達忍 as ツイン・ピークス保安官事務所ルーシー・モラン／ルーシー・ブレナン（キミー・ロバートソン）

息子が帰ってくる（笑）。ああそうか、『男はつらいよ』方式ならシリーズ化も夢じゃないんじゃないかしら? ルーシーとアンディは毎回、我が家という「とらや」で息子の帰りを待っているの。

――そのときはドーナツを用意して待ってないといけませんね。

**安達** おお、繋がった!（笑）もうシーズン1の全貌が見えてきちゃいましたね。そうなるとやっぱり息子を物語の中心に立てないとダメね。あのダサい格好を女の子がカッコいいと認めてくれるときもあれば、悲しくフラれちゃうこともある。毎回マドンナが出てきて失恋してもいいし、なんならバイセクシャルでもいいですよ。息子がどんな人を連れてきても、すべてを優しく受け容れる父と母なんです。そうでありたいじゃないですか!

――どんどんアイデアが湧いてきますね（笑）。

**安達** 時折、ダイナーの人たちも登場して、『ツイン・ピークス』ファンならニヤリとするような場面も挿入してね。でもそれはストーリーには何も関係ないんですよ。単にご近所さんとして通り過ぎるだけ（笑）。

――贅沢な作りですねぇ（笑）。完全に安達さんの頭の中で箱書きが出来上がってますね。

**安達** ネイディーン（ウェンディ・ロビー）も、ここでは幸せなんですよ。『The Return』で彼女は吹っ切れたから、自分に満足した状態で出てくるんです。このシリーズは登場人物みんなが幸せ! 裕木奈江さんにも、今度は美しい素顔で登場していただかなきゃ（笑）。

――もう、安達さんがプロデューサーとして名乗りを上げて実現するしかないですね!

**安達** 私もイケる気がします! でも、この方向性でいく場合、リンチが監督したらダメね（笑）。彼は絶対シュールでグロな方向に行っちゃうもの。

――安達プロデュース作品は人情ものですからね。

**安達** でも、ルーシーに命を吹き込むのはリンチにしかできないからなぁ……。

――となるとやはり、スピンオフもリンチ本人に登板してもらうしかなさそうですね。

**安達** 悩みどころね……でもリンチさん、お願いだからなるべくグロいのはやめてね（笑）。

『The Return』第17話のオフショット。まさかの銃撃シーンに挑んだルーシー役のキミー・ロバートソンと、その銃弾を喰らったMr.C役のカイル・マクラクラン

FIRE INTERVIEW WITH AKIKO NOGI

## 「『The Return』の凄さは、両極端な“恐怖”と“笑い”です」

『アンナチュラル』『逃げるは恥だが役に立つ』『アイアムアヒーロー』etc.

# 脚本家・野木亜紀子

PROFILE

のぎ・あきこ／74年東京都生。脚本家。日本映画学校卒業。主な脚本作品にTVドラマ『空飛ぶ広報室』（13年）、『重版出来！』（16年）、『逃げるは恥だが役に立つ』（16年）、『アンナチュラル』（18年）、映画脚本作品に「図書館戦争」シリーズ（13〜15年）、『アイアムアヒーロー』（16年）など。『アンナチュラル』は第55回ギャラクシー賞の優秀賞、第44回放送文化基金賞の最優秀賞と脚本賞を受賞。Twitter：@nog_sub

取材・文◎北原香

――WOWOWでの『The Return』放送に合わせて、ツイン・ピークス用のツイッターアカウントを開設されてましたね。

**野木**　『The Return』が観たいがためにWOWOWを契約したんですよ。ツイッターでも『ツイン・ピークス』のことを存分に語りたかったんですが、本名のアカウントは基本自分の仕事の宣伝用なので、そこで語っちゃうと宣伝が流れちゃう。だから『ツイン・ピークス』用サブアカウントを作ったんです。『The Return』の前半はリアルタイムで観ることができたんですが、途中から『アンナチュラル』（18年1月～3月／TBS系列）の執筆に追われて観られなくなって。書き終えてから一気に10話ぶんくらいをまとめて観て、そのあとで感想タグを遡って読みました。「へー、そうだったんだ！」と思うことがたくさんあって楽しかったですね。最終回のトレモンド夫人がローラの家に実際に住んでる人だったとか、観ているだけじゃわからないですもんね。『ツイン・ピークス』ファンの皆さんはとにかく熱い人が多くて、相関図を作ったり放送前から「○話放送まで○日」とかカウントダウンしたり、お祭り状態だったの

天使で小悪魔なオードリー（シェリリン・フェン）の厳選ベストショット！

で全部ちゃんとリアルタイムで観て、語り合いたかったです。

## オードリーは『月曜日のユカ』の加賀まりこ!

――前シーズンを初めてご覧になったのはいつですか?

人生の酸いも甘いもかみ分けた感満点の佇まいで帰ってきた『The Return』のオードリー。例のダンスも披露!

**野木**　高校時代にレンタルビデオ屋でバイトしてたので、ブームをきっかけに観始めたような気がします。高校にはクラスにオタクがほとんどいなくて、当時身近に語れる人がいなかったんですよ。私はとにかくブラックロッジに衝撃を受けて、伏線も謎も多いので、地上波で放送したときにＶＨＳに録画して、何度も繰り返し観ましたね。映画学校に入ってから『イレイザーヘッド』や『エレファント・マン』、『ブルーベルベット』などのリンチ映画はすべて追っかけて観たのですが、『ツイン・ピークス』を観るまでは、こういうわけのわからないものを観たことがなかったので、そのファースト・インパクトが凄かったですね。とにかくオードリーがかわいくてかわいくて……コケティッシュで小悪魔的な魅力がありましたよね。日本で言うなら『月曜日のユカ』(64年)の加賀まりこって感じで、最高でした。シェリーもノーマも美人だし、とにかく現実離れした美女だらけで、いったいどんな田舎町なんだよっていう(笑)。

――いっぽう男性陣で萌えたキャラは?

**野木**　わりと男性陣はどうでも良かったんですが(笑)、クーパーは別格で好きでした。「江戸川乱歩の美女シリーズ」で天知茂が演じた明智小五郎も好きだったんですよ。ストイックでクレバーで、まれに動揺する(笑)。クーパーは、日本語吹替版を担当した原康義さんの声の魅力も大きかったですね。最初に観たのが吹替版で、あの淡々とした理知的な声が良かった。当時は字幕版を観ていないので、カイル・マクラクランの声のイメージはあまりなくて。今回、ＷＯＷＯＷの再放送で字幕版も吹替版も両方観たのですが、原音も吹替版のイメージとそんなに違わなかったですね。当時、強く印象に残っているシーンが、2章でクーパーが石を投げて犯人を推理する……。

――チベット式演繹法的テクニックですね。

**野木**　そう! あれを観たとき「面白いなあ、わけわかんないけど」って。今回、再放送で久々にそのシーンを観て「やっぱりわかんねえ! むちゃくちゃだよなこのシーン!」ってうれしくなりました(笑)。レオの名前で瓶が割れたとき、クーパーがハッとするじゃないですか。何かがわかったみたいな顔をする。「何がわかったんだよ! 絶対何もわかってないだろ!」っていう(笑)。あとは1章のコーヒーに魚事件も印象的。

――ピートが淹れたコーヒーのポットに魚が入っていたという。

**野木**　そういうちょっとした細かいところの面白さが、異様に記憶に残ってますね。ドーナツを積んである画ヅラとか、テープレコーダーにしゃべり続けてる感じとか。

――理屈じゃない部分ですよね。

**野木**　全然わからないのに、すごく面白い。でも構成としてはシーズン2の17章までは、ミステリー・ドラマとしての引きがすごくうまいんですよ。隠された人間関係がじょじょに明かされていく流れとか、「ココとココがつながってたの⁉」「この人がこのネックレスを⁉」とか。今回の『The Return』の面白さは、そういうところがちゃんとしてない面白さだと思うんですが、旧作の前半はミステリーものとして作り込みがしっかりしてる。そのなかに赤い部屋みたいな、不可解で歪な飛び道具的要素がたくさん練り込まれている世界観が魅力だったんだなと思います。当時はそういう構造を意識しないまま「なんだこれ！　面白い！」って夢中で観てたんですが、いま観直してみて「なるほど。うまいな」って、大ブームになったことにもすごく納得しましたね。

## 私のクーパーを返して！

――続編ができると聞いたときは？

**野木**　「えー！　観る観る！」ですよね。「でも何やるの？　みんな歳とってるよ⁉」って。同時に、今のリンチが作る『ツイン・ピークス』ってどうなるんだろうというワクワク感はありましたね。シーズン2終盤のウィンダム・アール編には当時から納得がいかなかったんですよ。もういちど観たら違うかもと思って、今回再放送で改めて通しで観たんですが、やっぱり面白くなかった（笑）。でも、『The Return』はもうすべてが期待以上でびっくり！

――ウィンダム・アール編からの反動がもの凄いですね（笑）。

**野木**　ですよね。とはいえ、言いたいこともけっこうあるんですよ。オードリーの扱いとか、リンチ本人が女優とイチャイチャしすぎ問題とか、タミーみたいな首の長い系の女性ってリンチ好きそうだなーとか（笑）。絶対リンチの趣味ですよね。終始そういう感じで今回は描き方が極端なんですよね。ローラ・ダーンは私も大好きですが、彼女に注いでいる愛を、もう少しオードリーにも注いでほしい（笑）。リンチは今のシェリリン・フェンが好きじゃないんだろうか？　と考えちゃいました。ノーマは相変わらず美人で、美魔女どころじゃない若さで、バケモノの域でした。シェリーはお歳を召されたけど迫力かーちゃんみたいになってて面白かった。その点、オードリーは使いづらかったのかなとは思いつつ、メインキャラとの絡みがいっさいなかったのはさみしかったですね。

まさかの"ダギー萌え"に視聴者を導いたスローテンポの憎いヤツ。奥さんのジェイニー・E（ナオミ・ワッツ）の健闘ぶりも光った

――今回は全話リンチが監督ですよね。

**野木**　やりたい放題ですよね。観る側としては、クーパーを待ってるのにいざ始まったら黒くてロン毛で鬼畜なMr.Cに変わり果ててるし。ようやく3話でクーパーがブラックロッジから出られたと思ったら、ダギーでしょ（笑）。しかも子どもみたいになってるし、あまりの衝撃に「私のクーパーを返して！」ってなりましたよ。しかも4話のダギーのジャックポットのシーンがまーーー長い！　『The Return』は、全体的に贅沢で余裕のある作りのドラマですが、普通なら3発も当てればじゅうぶんでしょう？　それをあれ

だけえんえん繰り返すわけですよ。あの長いカジノのシーンを観て「……あれ、これヤバくない?」って初めて不安にかられて(笑)。もしかしてボケっぱなしのまま延々引っ張るつもりか? って。そのときはさすがに16話まで引っ張られるなんてことは想像してなかったけど。だから「いつクーパーになるんだろう?」って若干イラつきながら観てたんです。でもこれは皆さんも同じだと思いますが、途中から楽しくなって、ダギーのシーンが癒しパートに感じられて、しまいにはダギーと離れるのが寂しくなってきて……完全にダギーファン(笑)。カイル・マクラクランの演技は本当に素晴らしかったですね。同じキャラで同じ顔のはずなのに、3役とも完全に別人にしか見えませんでしたから。

――16話でクーパーが帰還する瞬間の切り替わりも見事でしたね。

**野木** いやあ、あれはもう大感動でしたよね! 泣きました。目覚めた後のあのテキパキ感と「ツイン・ピークスのテーマ」が流れ始めた瞬間、「クーパーおかえり! ここまで待った甲斐があった! 観てきてよかった!」と盛り上がりました。いっぽうのダギーの家族はどうなっちゃうの? と心配しましたが、ちゃんと本物のダギーが帰還してひと安心。

――ダギー家を不幸にしなかったところが良かったですよね。

**野木** リンチ、大人になったのかなって(笑)。昔なら地獄に突き落としかねないですもん。ナオミ・ワッツが演じたダギーの奥さんのジェイニーは、最初は単にキリキリしてるだけのヒステリックな女性かと思いきや、借金取りを撃退したり警察とやりあったり、タフネスさが面白かった。引き締まったダギーの体を見てメロメロになるのも大笑いしました。

――ミッチャム兄弟の弟と仲良くなったのも微笑ましかったです。

**野木** ラスベガス編は和みましたよね。ダギーが持ってた段ボールが大きすぎるとか、ああいう細かさが本当に面白い。まさか中身があんな薄っぺらいチェリーパイだとは思わなかったから、笑ったなあ。

『The Return』第8話でムチャクチャ怖いキャラであることが判明した「火くれおじさん」ことウッズマン

――あの後、ミッチャム兄弟がダギーに夢中になる感じも素直でよかったですね。

**野木** 13話でダギーの会社にみんなでドカドカやってきて、トンチキな音楽を鳴らしてるところも最高でしたね。あのシーン、癖になって何回も観ちゃった(笑)。カジノの3人娘のなかでは真ん中のキャンディがすごく美人さんで、リンチっぽいキャラクターがまた出てきたなあという独特なムードを醸し出していて、好きでした。この3人娘って、もはや記号ですよね。完全にマネキンの役割で意志がない。そういうキャラクターは日本のTVドラマではまず入れられないので興味深かったです。あの現実味のなさ、生活感のなさを含めて、すごくリンチっぽい存在だなって思います。といいつつリンチっぽさが何なのかと問われると、イマイチよくわかんないんですが……(笑)。

## ジェームズは色男なのかな?

**野木** 『The Return』の冒頭で、ニューヨークが出てきたときにはびっくりしました。『ツイン・ピークス』の世界って、あの田舎町でしか描かれないものだと勝手に思い込んで

いたので妙に驚いちゃって。舞台が変わってどう成立させるんだろうと思ったら、全然成立してた。ていうか成立するしないは関係なかった(笑)。ただのリンチの好き勝手だから。でも、この作品がすごいのは、やりたい放題やっているいっぽうで、ちゃんと怖いところなんですよ。8話の謎の「火くれおじさん」とかも怖くて。ツイッター上で「火くれおじさん」はネタ化していたりもするんですが、観てるとおそろしいし、ラジオを聴いてる人がどんどん倒れていくシーンとか半端なく怖い！ 底知れない恐怖があります。

──あのとき、もし火をあげていたらどうなったのかと思います。

**野木** ほんと！ それ知りたかった。口裂け女みたいな感じでね。蟲が口の中に入るシーンもすごかった。

──虫の手が口の端をなぞってゆっくり口内へ入っていくから、感触が想像できてぞわっとしますよね。

**野木** その生理的にイヤな感じの醸し出し方がうまいからものすごく怖いんですよね。恐怖と笑わせるところ、その両極端な要素をともにたっぷり盛り込んでくれてるから、作品としてものすごくハイレベルなものを見せてもらったな、旧作よりもはるかに研ぎ澄まされているなって感じましたね。

──残酷描写も容赦なかったですね。子どもをひき逃げしたり。

**野木** あれは辛くて震えました。殺すことに何のためらいもないリチャードの人でなしっぷりもすごかった。最後は爆散ですしね(笑)。同僚のアンソニーがダギーを毒殺しようとして泣き出しちゃうところも笑えたけど、異様だった。殺し屋スパイクの雰囲気も怖かったし、ああいう容赦ない感じがたまらないですよね。巨人さんがまた出てきたのもうれしかった。ローラ・パーマーは、迫力美女になっててよかったですよね。丸太おばさんの登場もテンション上がりました。あと、ジャコビー先生の金のシャベルのくだりも無駄に長くて笑いました。さらに、それを夢中で見てるネイディーン(笑)。旧作のネイディーンは少女で怪力で最高だったでしょう？ でもその後、記憶が戻って悲しい雰囲気だったのが、今回は意外と楽しそうで。それに比べて旦那のエドはちょっと寂しい感じになってましたよね。エドと保安官になったボビーが歳を重ねて、ノーマにもシェリーにも相手にされず、ふたりでいたわりあってい

野木さんお気に入りの南北戦争コスプレのオードリー
(シーズン2・第22章より)

るところも良かった。女性陣は現役なのに、男性陣は哀愁漂わせてましたよね(笑)。

――たしかに(笑)。ネイディーンのカーテンレールがビジネスとして成功してるのもうれしかった。

**野木**　あれはニヤリとさせられましたね。ベンジャミン・ホーンもいいおじさんになっててよかった。シーズン2後半のウィンダム・アール編は面白くなかったけど、南北戦争のくだりは好きだったんです。オードリーがコスプレして手伝ってたのがかわいかったし。って結局そこかい(笑)。

――ほとばしる野木さんのオードリー愛(笑)。

**野木**　そういえばハリーはなぜ出なかったんですかね? 入院している設定のハリーとフランクの電話シーンが挟まれるたびに、ハリーの不在が余計に際立って、ハリーには出てほしかったなって。

――ハリー役のマイケル・オントキーンさんは役者を引退されてるんですよ。クーパーとの相棒っぷりを観たかったんですが。

**野木**　そうかー。ドナも見事に抹消されてましたね。ツイッターの実況でおかしかったのが、みんな13話のジェームズの歌が下手だって(笑)。

――当時から全員思ってました(笑)。なんであんなへにゃへにゃなのかって。

**野木**　感動的なシーンのはずなのにって、笑ってしまいました。

――あの歌はリンチが作詞作曲してるんですよ。

**野木**　そうなの!? リンチすごい……いや、すごいんだかすごくないんだか(笑)。再放送で観直しても旧作のジェームズにはイライラさせられましたね。昔から思ってたんですが、ボビーがちょっと悪くてモテそうなのはわかる。でもジェームズとはなんなのか。『The Return』の最初のほうでジェームズを見たシェリーが「今も変わらずカッコいい」と言ってて、『ツイン・ピークス』ワールドにおけるジェームズの評価が甚だ疑問でした(笑)。最後までどういう立ち位置かわからなかった。リンチの中でジェームズって色男なのかな?(笑)

## 『The Return』は序章にすぎない?

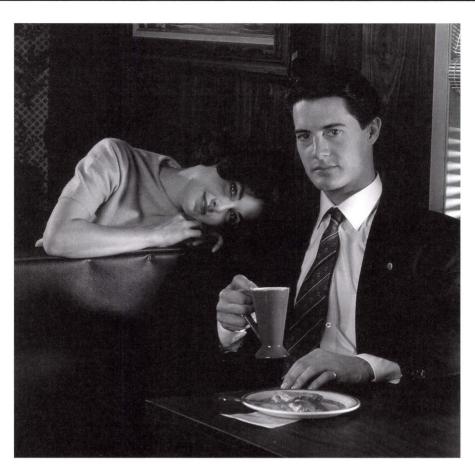
**野木**　相変わらず、シェリーもダメ男好きでしたね。5話で娘のベッキーが車に乗ってハイになる、いかにもリンチ的ショットを観たとき、ベッキーは死ぬのかなと思ったんですが、特に何もなく単に母親の血を受け継いでダメ男につかまってただけで、そういうところがやたらリアル(笑)。シェリーは親バカっぽいところも含めてすごく面白かった。ボビーは改心していいお父さんになってましたが、いやいや、お前も大概だったよって(笑)。あのへんは25年後ならではの面白さですよね。

――マイクも仕事ができる会社社長になってたし、過去のキャラのその後が楽しめたのも『The Return』の醍醐味でしたね。

**野木**　そう思うと、みんなそれなりの光の当て方をされてるのに、オードリーは……ってますますなりますよね(笑)。オードリーはいつ出てくるんだ? ってすごくヤキモキして、やっと出てきと思ったらあのヒステリー・シーンだったから本当にショックで……。オードリーのダンスもちょっと嘲笑まじりの扱いで切なくて、リンチは意地悪だなーって。でも、懐かしさも含めてファンはあのダンスを喜びましたよね。その後のとどめが、白い部屋のシーンで、すっぴんでボロボロのオードリー。残酷ですよ。リンチひどい!

――白い部屋は、オードリーだけ別世界にいるという暗示もあったと思いますね。

**野木**　彼女は昏睡状態から目覚めてない説もありますもんね。17~18話の揺らぎっぷりを観ていると、そもそもこの作品の世界自体が、誰かの夢であることの暗示なのかなって気もしたんです。

――クーパーの顔が画面全体にぼんやりと浮

かび上がっているせいで、ボブをやっつけた後もハッピーエンド感がいっさいなかったですもんね。

**野木**　あの匂わせ方は本当にやめてほしかった……これだけ一所懸命観てたのに、すごく突き放された気分で終わったので……。赤ダイアンも実在するんだろうかって考え込んじゃいました。あれだけカッコよかったダイアンが急に衣装もメイクもダサくなって、性格も気弱で不安な女の子みたいでしたよね。いったいどっちが本当のダイアンなんだって。

――ラスト2話の不穏さは本当に尋常じゃなかったですよね。

**野木**　『The Return』の1～2話を観たときは、今回はブラックロッジからローラを救う話なのかなって思ったんですよ。で、最終回まで観たらやっぱりそうだった。でも、冷静に考えたら、今回はクーパーが帰還するまでの物語にしかなってない(笑)。つまり、本当の意味での新作はまだ始まってもいないんじゃないかとすら思えてきたんですよ。

――『The Return』全体が、ローラを救うためのいわばシーズン4への序章であったと。

**野木**　そう。だってFBI捜査官のクーパーがよみがえったところで終わっちゃったから(笑)。でもやっぱりあれだけ待ったからこそ、クーパーの帰還は感動的だったんですよね。もし3話くらいでクーパーが戻ってきて

たら果たして面白かったのかどうか。16時間の「溜め」があったからこそ「我らがクーパーが遂に帰ってきた!」って号泣したんです。その意味では良くできた構成なんじゃないかなって思いますね。『The Return』というタイトルは「クーパーの帰還」の意味にもとれますし、失敗はしましたが「ローラの帰還」という意味でもありますよね。時間を置いて、もういちど通しで観たいですね。

『The Return』第16話の衝撃的なラストシーン。オードリーが覚醒した白い部屋はどこなのか?

――そのときは無意味なシーンがどこなのか全部わかっていますが(笑)。

**野木** そこをどうやり過ごすか問題も重要ですよね(笑)。でも、ドラマって言うなれば、壮大な暇つぶしみたいなものじゃないですか。だから『The Return』みたいに、話が前に進まなくても毎週楽しませてもらえればいいじゃん! って。でも日本のドラマでは、それじゃ企画が通らないから、『The Return』は本当に贅沢な連続ドラマだと思います。特に今回は、リンチが打ち切りにさせないために、最後まで撮り終えてから放送したのが大正解でしたよね。脚本家視点で観ると「ここ、単なる思い付きだろ」「ここ、いい加減だなー」という場面も盛りだくさんでしたが、面白さのほうが勝ってるからいいんですよ。たとえば、1話でブリッグス少佐の胴体が見つかって隣のおばさんが部屋から変な臭いがすると通報するシーン。死体部屋の中に入るまでに、本筋とまったく関係ない、どうでもいいやりとりがえんえん続くじゃないですか。鍵を借りてこなきゃ入れないとか、実は持ってたとか……ほんっとに無駄なんだけど、ほんっとに面白い!

――しかも、あの人たちはあのシーンだけの出演。

**野木** (笑)。普通は「このシーン要る?」って、問答無用で切られる無駄なシーンがいちいち面白い。でもそういう笑えるシーンならいいんですが、思わせぶりのまま結局何もない、単なるミスリードみたいなところはちょっとどうなの? って思う部分もありました。1話に「この3つは覚えておけ」みたいなセリフがありますよね。

――冒頭の「430/リチャードとリンダ/2羽の鳥とひとつの石」という巨人のセリフですね。

**野木** それ真面目に覚えたんですよ! 自分のメモツイートをたまにセルフリツイートして「いつこのフリが回収されるの?」ってワクワクしてたら、終わりのほうですっごく雑に処理されて「なんだよそれ!」ってひっくり返りました(笑)。もし普通のドラマでそんなことをされたら石投げるくらい腹立つんですが、『ツイン・ピークス』だと笑っちゃう。必死に意味を考えて、後で無駄だったと気づいて「やられた!」と思う。『ツイン・ピークス』ってそういう無駄な考察の繰り返し。それも含めて楽しいんですけどね。あと腋の下をひたすらかきむしってる女の子って何?

――はっきりとはわからないです。明確な答えはないと思います。

**野木** きっとそうですよね。ただの思わせぶりだろうなって。それでもやっぱり一所懸命考えてしまう(笑)。そういえば、ブックハウス・ボーイズってどこいきました?

――25年の間にどこかに……設定も脇役も取

捨選択はリンチの自由なので……。

**野木**　ですよね。もしリンチ自身の脚本じゃなかったら、どのくらい大事か判断できないから入れなきゃいけない気がしますもんね。ああいう投げっぱなしって、普通のドラマなら怒られますよ(笑)。そんなふうにドラマの制作者側視点で観ると、8話のパイプオルガンみたいなところでボブの顔が浮かぶ演出とか、日本のドラマでやったら「ショボいな!」ってなるので通用しません。進化した腕の木の画も、今回小人さんが出られないからだとは思うんですが、普通は無理。というか、リンチだからアリになってる感じが、ズルい反面、諸刃でもありますよね。

――なぜリンチだと許されるんでしょう?

**野木**　結局は、ファンの贔屓目ということかなぁ。『The Return』の特徴って、笑いだと思うんですよ。とにかく笑える。笑いのポイントは、前シーズンよりも圧倒的に多かった。旧作はそこまで笑いはなくて、あくまでメインはミステリー。サブ要素でたまにクスっと笑わせる程度だったのが、今回は爆笑シーンの連続。9話のジェリーの靴のくだりとかまったく必要ないですし、3話でルーシーがうさぎのチョコレートを食べちゃったとか、本当にどうでもいいと思いながら大笑いしました。17話で保安官事務所にみんなが集合したときは盛り上がりましたよね。いよいよクライマックスだって。でもそこで、あのボブがグーパンチ1発でやられちゃうって、これだけ引っ張ってグーパンチかよ⁉ リンチすごいな! って大爆笑しました。いやーほんとに面白かったなぁ。面白かったしか出てこないですね。

――シーズン2後半の鬱憤が全部解消されましたね。

**野木**　そうですね。オードリーを除いては。ってまだ言ってる私(笑)。

Mr.Cと行動をともにし、壮絶な末路を迎えるリチャード・ホーン(エイモン・ファーレン/左)。オードリーの善の部分を全然受け継がなかった親不孝者

## グレーは大いなる闇の力?

**野木**　オードリーといえば、リチャードはオードリーの息子ですよね? 旧作の最後、クーパーが鏡に頭をぶつけておかしくなって、Mr.Cになったあと、入院中のオードリーに会いに行ったというエピソードの意味に気づいたときは「ひゃーー!」ってなりました。

――本編でも「じゃあな、息子よ」というセリフがあったので驚きましたね。

**野木**　そういう間接的な匂わせ方や見せ方って、実は観る側にもすごく高度なリテラシーを要求するんですよね。日本のドラマでそれをやると「わからなかった」と言われるのがオチなんですが(笑)。

――作品に対して、観る側が本気で興味を持っていないと成立しないですもんね。

**野木**　どれだけ集中して観て、どれだけ読み解こうという意志があるか。その点、『ツイン・ピークス』は観る側が全員やる気まんまんですから(笑)。

――むしろ、意味のないところにも根こそぎ意味を汲み取っちゃう(笑)。

**野木**　そうなんですよ。WOWOWの放送時は、死体の色をグレーに処理してましたよね。私、てっきりあれはリンチの演出意図だと思い込んでいて。「大いなる闇の力」を表現

しているんだって本気で思ってたんですよ。アップのときはグレーだけど、引き画だと赤くなるから。つまり、皆の目には普通に赤く見えてるけど、本当は闇の力で殺されたんだよという意味なんだと。15話くらいまで観て初めて「あれ？もしかしてこれ違うんじゃないか？」と思ってググったら勘違いだったと発覚(笑)。無駄な深読みをしてしまった……我ながら情弱！と悲しくなりました。そういう意味でもやっぱり語りがいのあるドラマですよね。無駄打ちも含めて、観た後にツイッターで他人の考察を読んで、二度三度楽しめる。特に8話なんて時間泥棒ですよ。どうすごいか知らないままで観たから、わけがわからなすぎてすごかった。「いったい何を観せられてるんだ？」って、結局3回観ましたが、解釈しようとするほうが間違いだと気づいて、やめました(笑)。

## 謎のシンクロニシティ！

——今は展開が早くて情報量が多いドラマが溢れているから、『ツイン・ピークス』のようなわからないものへの耐性を強化してくれるドラマが観たいですよね。

**野木**　考えさせることって大切で、そういう意味では『アンナチュラル』もリテラシーの強化をめざしてました。まさに展開が早くて情報量が多いドラマなんですが、そのなかでも少し高度というか、説明しすぎない。それでも視聴者はついて来てくれると信じて。

——だからこそ『アンナチュラル』は大ヒットしたんじゃないかと思います。中堂系(井浦新)が爪を調べるシーンとか、勝手に深読みしてしまいました(笑)。

**野木**　あれね、狙ってなかったんですよ。本当に偶然。

——中堂さんが「クソ、クソ！」って言ってるキャラクターだったのも、偶然だとツイッターでおっしゃってましたよね。でもその偶然がかえって『ツイン・ピークス』っぽい。

**野木**　脚本を5話くらいまで書き終えたころ、ダイアンが登場して「クソ！」と言いだして吹きました。「あれ？私も今クソクソ言うキャラ書いてるぞ？」って(笑)。謎のシンクロニシティ。

——自作で『ツイン・ピークス』に影響を受けている部分はありますか？

**野木**　ないですね。天才が作る作品ですから。私はまったくそういうタイプではないので、堅実に作るだけです。リンチ作品は自分にフィードバックのしようがないから、取り入れようとすら思わないんですよ。自分が作るものと遠すぎるからこそ、観ていると楽しいというところはあると思いますね。自分に近似値の作品だと、細かいところが気になって「もっとこうすればいいのに！」と思いがちなんですが、『ツイン・ピークス』はひたすら楽しいだけ。結局、それは作風の違いとしか言いようがないんですよね。「わからない面白さ」ってリンチの『ツイン・ピークス』だからという部分が大きいですよね。テキトーに作ったものを「わからないから面白いんだ」と言い張られても「それは違うだろう」という気がしちゃうので。『ツイン・ピークス』にかぎっては、わからないことを楽しむドラマなんだよって。でも、他人がリンチを真似できるかっていうと、断言しますが絶対できません。だからこそ『ツイン・ピークス』は尊いと思うんですよ。

——「リンチはどうすれば面白く観られますか？」ともよく聞かれるんですが。

**野木**　「わからないから面白いんじゃん！」って力説したいですね。

——あとは今回、ツイッターで皆さんの感想を読むのってこんなに楽しいのかって改めて思いました。

**野木**　25年後の今だからできたことですよね。私の身近に当時は語れる人がいなかったことを考えると、今は物理的に近くにいなくても語り合えますもんね。実際、今も身近には観てる人はいません(笑)。ドラマ業界に入って良かったことのひとつは、ドラマの感想をオタク的に語り合える人が身近にたくさ

んいることなんですよ。でも『ツイン・ピークス』はいなくて、それはちょっと悲しいですよね。クーパー帰還の瞬間を味わってないなんてもったいない！　シーズン2を最後まで乗り越えられた人なら、『The Return』も脱落しないで観られるでしょうから、ぜひ観てほしいですね。

## 『ビューティフル・ドリーマー』説！

**野木**　続編ってあるんでしょうかね？

——2018年5月のインタビューでは、リンチが「シーズン4は？」という質問に「今は何も言えない」と返答したんですよ。

**野木**　『The Return』では、ローラがまだ救われてませんからね。私はあのラストに関しては『ビューティフル・ドリーマー』説を唱えてるんです。『うる星やつら2 ビューティフル・ドリーマー』（84年）は、学園祭の前日を繰り返したいと意識下で思っている人がいて、そのためにループ現象が起こって時が前に進まない。その「誰かの夢」というループのかたちが、『The Return』ではローラのママのセーラなんじゃないかと思うんです。セーラは今回、ボブより怖い存在に見えるから。クーパーが25年前に戻って、ローラをあの夜から救い出したシーンは感動的で、心からよかったなと思ったんですが、にもかかわらず最終回があの終わり方で……「いま何年？」と言う瞬間にすごい鳥肌が立ちました。世界中の電気がすべて消えてしまうような終わり方が、とんでもなく夢の中っぽいんですよ。

——なるほど！

**野木**　なぜクーパーがあそこから抜け出せなかったのかというと、今、救うべき人物はローラではなく、セーラだから。実はセーラはずっと救われないままで、今回も飛び抜けて荒んだ生活をしている。セーラは部屋の中でずっとボクシングのループ映像を観て、ローラの写真立てをガンガン割る。あれは現実が辛すぎて、ローラの存在を否定し始めてしまっているという表現なんじゃないかと。バーで絡んできた男を闇の力で殺すシーンによって、セーラが変質していることも示唆された。いっぽう、クーパーはローラをあの夜から救い、ローラが生きているパラレル・ワールドにたどり着く。かつてのローラはそれほど母親と仲が悪かったわけじゃないのに、パラレル・ワールドでのローラは、母親を嫌悪しているように見えました。最後、世界中の電気がすべて消えてしまう直前に聞こえた「ローラ！」という叫び声はセーラですよね。世界が閉じる合図のようでした。だから『The Return』のキーパーソンは実はセーラで、セーラの時が動き出さないかぎり、つまりセーラを救わないかぎり、ループから抜け出せないし、ローラを救うこともできない。そんな仮説を勝手に唱えてます。もし続きを作るとしたら、そのへんがキモかなって。でも、わからないですよね。観た人の数だけ解釈がありますから。

実は今、最も救うべき人物は彼女ではないか？ と野木さんが推理する『The Return』のセーラ・パーマー。彼女が孤独に過ごしてきた25年間を考えると、悲しく重い……

——もしも、野木版脚本のシーズン4だったら……ということですね？

**野木**　ドラマと映画の脚本を書く合間に『ツイン・ピークス』も!?　無理です（笑）。クーパーみたいに体が3つほしい！　ダギーと、Mr. Cと、クーパー。ダギーは使い物にならないけど（笑）。

FIRE INTERVIEW WITH KEIICHI SUZUKI

「美女と原爆とリンチ。」

# 鈴木慶一のロードハウス

ミュージシャン鈴木慶一が鮮やかに読み解く、オールディーズとディープ&ダーク・アメリカーナをつなぐ、リンチ・リミックスによるミュージシャンたちの饗宴。
そして、美女を傍らに置き、背中に巨大なキノコ雲を背負い、世界の重要な秘密をばらし、結論を捏造するという悪だくみ――。

取材・文◎山崎圭司

*PROFILE*

すずき・けいいち/51年東京都生。ミュージシャン。ムーンライダーズのリーダー。71年はちみつぱい結成。73年にアルバム『センチメンタル通り』を発表し、74年にはちみつぱい解散。翌75年にムーンライダーズを結成。76年にアルバム『火の玉ボーイ』でデビュー。音楽を手がけた北野武監督の映画『座頭市』(03年)と『アウトレイジ 最終章』(17年)で2回、日本アカデミー賞最優秀音楽賞を受賞。18年5月、高橋幸宏とのユニットTHE BEATNIKS最新アルバム『EXITENTIALIST A XIE XIE』を発売。8/1(水)、恵比寿ガーデンプレイスにて開催の赤塚不二夫没後10年「フジオロックフェスティバル2018」にTHE BEATNIKSで出演。LIVE情報などは公式Facebook(https://www.facebook.com/MoonridersRecords/)をチェック! twitter:@keiichi_suzuki

――まずは、90年代の『ツイン・ピークス』ブームを振り返ってひとこと、お願いします。

**鈴木**　シーズン1は非常に興奮したよね。犯人は誰なんだ？って。もう飲み屋でも当時はその話題ばっかり。だからリアルタイムで観ないとついていけなくて。夜中に放送回を観終わって寝ようとすると、興奮した友だちから電話がかかってきて、えんえんと推理を話し合ったりね。結局、誰も犯人を当てられなかった（笑）。ドラマ自体もシーズン2の中盤で親父のリーランド・パーマーが狂っていくあたりが盛り上がりのピークだったかな。そのあとは抜け殻になるんだよね。だんだん脱落組も出てくる。自分も含めてね（笑）。

――けっこうな中毒患者だったんですね。

**鈴木**　チェリーパイとコーヒーを買ってきて観てたからね（笑）。当時はコンビニでも売ってたよね、チェリーパイ。クーパー捜査官の食べ方を真似たりしてさ。マシュマロを焚き火で炙るのも覚えて、キャンプに行くと食べてた。焼けてトローッと溶けたのが美味いんだよね。ドラマは「25年後に会いましょう」で終わったけど、その約束を守ったのもすごいよね。

## 保安官トルーマンが原爆とつながった

――帰ってきた『The Return』の第一印象は？

**鈴木**　いきなりやられるよね。第1話から4話まで観てこうくるか！と期待をひっくり返された。3話で宇宙へ行ったのもたまげたね。で、続きを観ずに時間を置いて寝かせたの。そのうち「第8話は説明不能！とにかく大変なことになってしまうのだった」という『映画秘宝』の連載記事を読んで、俄然観たくなっちゃって（笑）。そしたらまた予想をひっくり返された。原爆か！って。

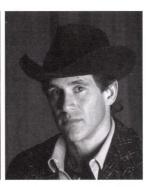
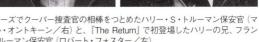
――やはりキノコ雲ですよね。

**鈴木**　もう第8話に尽きるよね。ベストエピソードだよ。キラー・ボブやローラも出てくるけど、ドラマ部分よりもとにかく映像が圧巻でね。3回くらい観返したよ。クシシュトフ・ペンデレツキの「広島の犠牲者に捧げる哀歌」が流れて、まるで『2001年宇宙の旅』（68年）だよね。あっちはジェルジ・リゲティの前衛音楽だけど。最後に変な虫カエルに寄生される若い女性がローラのお母さんじゃないか、とかさ。

――いくらでも裏読みできますよね。

**鈴木**　なにしろ説明不能だからね（笑）。私がずっと気になってたのは、保安官の名前なんだよね。ハリー・S・トルーマン。1945年に原爆を落とす決断をした大統領。でも実際の本人は外交に弱くて、事情がよくわかってないまま実行したらしいけど。ここでつながったと。

――シーズン1のころからその名前が気になっていたんですか？

1945年7月16日にアメリカ・ニューメキシコ州で行われた人類最初の核実験、トリニティ実験。『The Return』第8話で突如映し出されたこの映像が、これまでの物語の解釈を根底から揺るがすことになる

旧シリーズでクーパー捜査官の相棒をつとめたハリー・S・トルーマン保安官（マイケル・オントキーン／右）と、『The Return』で初登場したハリーの兄、フランク・トルーマン保安官（ロバート・フォスター／左）

**鈴木**　うん、原爆を連想させる名前だからね。物語を追いながら、軍が関係している？　宇宙人が出てくる？　なんて想像してたけど、まさか『The Return』でこんな展開になるとはたまげたね。ＦＢＩの事務所のシーンで、デイヴィッド・リンチ扮するゴードンの背後にキノコ雲のアートが配されていて、変な絵だなあと疑問に思ってたんだけど、８話で腑に落ちた。核実験でパラレルワールドが出現して、ワープやドッペルゲンガーが具現化した。原爆のおかげで世界に穴が開き、量子発狂。リンチはそう考えてるんじゃないかな。

――アメリカ現代史のダークサイドを描こうとしてるんでしょうね。

**鈴木**　美女の助手を傍らに置き、背中には巨大なキノコ雲を背負い、世界の重要な秘密をばらす。美女と原爆とリンチ、だね。

――『ツイン・ピークス』を紐解くヒントが８話にはたくさん散りばめられてますよね。

**鈴木**　うん。それも『ツイン・ピークス』の面白さだよね。わからない箇所がたくさんあるから観返したくなる。謎の言葉や手がかりの数字。服の色の意味とか。クーパーが覚醒する16話あたりからグッと物語にスピード感が出てきたよね。

――「私がＦＢＩ捜査官クーパーだ」と名乗って以降、怒涛の展開ですよね。

**鈴木**　堰を切ったようにいろんなことが急展開する。アメリカでは17話と18話は同日放送だったと聞いたけど、実質、17話で終わった感じだな。17話では湖の畔に死体がないよね。昔の映像に加工を加えて、モヤっと消えていくチープな味がいいね。

――素材がビデオだとデジタル加工は大変ですが、そこはフィルム撮りの良さですよね。

**鈴木**　画も音も今回はリンチの望みどおりに精度が上がっているんだろうけど、あえて特撮はチャチくしてるよね。25年前よりチャチいかも（笑）。ボブ玉とか、セーラの割れる顔とかさ（笑）。

――『ウエストワールド』（73年）のユル・ブリンナーみたいに顔がパカッと。

**鈴木**　そうそう。あとＴＶドラマにしては暗すぎる画作りも異色だなと思ったね。最終話を観たら困っちゃったけど、体感時間がやけに短かったな。でもクーパーとダイアンがモーテルに向かう道中、車から見た夜道のショットがえんえん続くんだよね。道端に誰かいるのかな？　と暗闇に目を凝らすけど、誰もいない。

――まるで『ロスト・ハイウェイ』（97年）の冒頭のように……。

**鈴木**　８話の冒頭もそうだったけど、いつも車に乗ってるショットが無意味に長いんだよね。長いといえば、最終話でおそらく50代を迎えたクーパーとダイアンの熟年セックス・シーンも長かった！　クーパーがローラを迎えに家に行くと死体が転がってるよね。あれは誰の死体なのかね？

――何の説明もありません（笑）。

**鈴木**　またパラレルワールドに行ったのかな……こういう自由な解釈をいくらでも塗りこめられるよね。私も歌詞を書いてるとき、後から意味がついてくることは何度もあるよ。他人から言われて「そうだったのか！」と

納得した解釈を自説にしちゃったりね（笑）。ひょっとしたら、作品づくりというのは後づけで設定を作っていくほうが簡単なのかもしれない。結論的なものを次々と捏造していけばいいわけだからね（笑）。

## タミーは体幹がずれている

――今回、気になったキャラクターは？

**鈴木**　トルーマン保安官が兄貴になってて最初は混乱したけど、うまく兄弟に見える顔を揃えたと感心したね。ブリッグス少佐役の俳優も亡くなってるんだよね。

――はい。今回は顔だけの風船みたいに処理されてましたね。

**鈴木**　丸太おばさんも劇中で死んじゃったしね。俳優が引退したり亡くなって不在のキャラが多かったのは悲しかったな。でも変人ジャコビー先生役のラス・タンブリンが生きてたのは驚いた。『親指トム』（58年）の子役だよね。古～い俳優。気になる顔を挙げたらキリがないけど、主役のカイル・マクラクランが奇跡的にほとんど老けてなくてね。彼が昔のままのイメージを保っていたから成立している部分は大きいよね。もし劇場版に出ていたデイヴィッド・ボウイが生きていたら、確実に今回も顔を出したんだろうね。同じく劇場版にも出ていたハリー・ディーン・スタントンが老け顔でギターを弾く場面も味わい深かったな。ゴードンはさらに耳が遠くなってたね（笑）。芝居ができないからセリフを怒鳴ればいいっていうのは、うまいアイデアだよね。

『The Return』でまさかの初登場を果たしたダイアン。おそろしく口の悪いエキセントリックな美女という強烈なキャラクターを、リンチ組の看板女優ローラ・ダーンがド迫力で怪演！

――25年ぶりに再会してうれしかったキャラは？

**鈴木**　片腕の男（笑）。あまり変わってなくて良かったな。ファイアーマンの巨人も変わってないよね。逆にオードリー役のシェリリン・フェンには驚いたね。ホーク保安官補も扱いが良くなっていてうれしかった。前半で保安官事務所を回しているのはホークだよね。でも、携帯電話とインターネットは、25年前には存在しなかったよなぁ、としみじみ思ったね。うれしい再会はその4人かな。

――新たに参加したキャストで、グッときたのは？

**鈴木**　まさかダイアンが登場するとはね！　しかもあのローラ・ダーン。てっきり私はダイアンは実在せず、クーパーが録音するテープレコーダーをダイアンと呼んでるだけだと思っていたので。しかも髪の色が変わると性格も一変してね。ほんと、うまいこと25年前の点と線をつないでるよね。そのあたりはきっとマーク・フロストの功績が大きいんじゃないかな。リンチの役目じゃないよね（笑）。

――では、慶一さんといえば美女。ということで、今回のお気に入り女優は？

**鈴木**　15話でマーク・フロストが犬を連れて登場するじゃない。そのとき森の木の根元でしゃべってる男女がいるよね。スティーヴン（ケイレブ・ランドリー・ジョーンズ）がラリってるように見えて、銃声だけが響く。その隣の彼女がとても美人だったね。彼女がベスト美女かな。シェリー（メッチェン・アミック）の娘のベッキー（アマンダ・セイフライド）に見えたけど、別人かな？

『The Return』で慶一さんのハートを射抜いた木陰の美女ガーステンは、あのドナの妹。演じるアリシア・ウィットは『デューン／砂の惑星』（84年）のアリアとしてもリンチファンにはおなじみ

――別人ですね。前シーズンでは子役で、妖精の格好をしてピアノを弾いていたガーステン・ヘイワード（アリシア・ウィット）の成長した姿ですね。スティーヴンの奥さんがベッキーで、ガーステンが浮気相手です。

**鈴木** あと私の好きなナオミ・ワッツも出てるけど、最初は全然気づかなかった。夫役のカイル・マクラクランとは対照的に、顔が変わりすぎているから。彼女は『キング・コング』（05年）あたりから顔が変わってるように思うね。あと、3人組の踊り子のいちばん左のマンディもいいな。いつも横を向いてるんだよね。それとゴードンの美人助手タミー（クリスタ・ベル）。常に姿勢がちょっと斜めに傾いてるんだよね。体の軸、体幹がずれてる感じが気になるんだよなぁ。

――そこですか（笑）。

**鈴木** 本当、興味が尽きないよね（笑）。観る人それぞれの妄想を研ぎ澄ませてくれて。たとえば15話でエドとノーマが結婚を決めた直後に空を見上げるカットで、雲が人の顔に見えるショットがあったんだ。他の人には「そうは見えない」って言われたけど（笑）。

――えっ、そんなシーンが⁉

**鈴木** 私だけが見た幻かもしれない（笑）。リンチは幻覚作用を呼び起こすよね。そういう自分だけの名シーンがある作品なんじゃないかな。あと1〜2回は通しで観たいね。18時間もあるから、正月あたりのたっぷり時間が取れるときに。この中毒性はすごいよ。ブルーレイが発売されたら、また夜中に誰かから電話がかかってくるかもしれない……この続きはどうなるんだ？ って（笑）。

## ディープ&ダーク・アメリカーナ

――『The Return』は音楽面も充実していますね。

**鈴木** ほぼ毎回ロードハウスで最後にバンドが演奏するよね。あれがまたいちいち良いんだ。リンチの趣味だろうけど、すごくいいアイデア。第1話は演奏なしで、スピーカーからノイズが流れるだけだったね。2話からクロマティクスが出てきて、なんだよこのバンド、いいじゃん！ って慌てて調べた（笑）。6話のシャロン・ヴァン・エッテンなんかアルバムまで買っちゃったよ。オルタナ・フォークな感じがあまりにも良くてね。

――いちばんのお気に入り曲は？

**鈴木** ダントツで1話の「アメリカン・ウーマン」だね。デイヴィッド・リンチ・リミックス。銃声みたいなドラムで始まるやつね。ピッチも遅くしてさ、ビヨーンとエコーが効いてる感じ。ダラーンとしてる雰囲気が。あれがいちばん良かった。

――〝悪い〟クーパーMr.Cのテーマ曲ですよね。

**鈴木** あれはチョップド&スクリュードっていう90年代に生まれたリミックスの手法なんだよね。特徴はテンポが遅くてピッチも低くして、アナログ盤の回転を遅くした感じ。実は今ごろ、私はその感覚にハマってるんだよ（笑）。もともとは咳止め薬を飲んでから聴く音楽なんだけど、その薬が紫色なのね。で、サンダーキャットの『Drunk』（17年）ってアルバムがあるんだけど、これが水中から男が

顔半分出してるジャケ。それのチョップド&スクリュード盤は、ジャケ自体を全部紫色に加工してるんだ。

——アメリカ南部のヒップホップ・シーンから出てきた手法なんですね。

**鈴木**　うん。2016年度にアカデミー賞作品賞を獲った『ムーンライト』(16年)の曲もそうだったよ。バリー・ジェンキンス監督は黒人で、自分でミックスとかもするんだ。リンチは目のつけどころがさすがだよね。「ディープ・アメリカーナ」って言葉は昔からあるけど、まさに最もリンチらしい「ディープ&ダーク・アメリカーナ」だよね。「ディープ・アンド・ダーク・ディセンバー」はサイモン&ガーファンクルの「アイ・アム・ア・ロック」(66年)の一節だしね。

——「レッツ・ロック」のデイヴィッド・リンチ・リミックスなんですね。

**鈴木**　そうだね。もうひとつ気になるのが「グラディ・グルーヴ」。この曲、フィーチャリング、グラディ・テイトとなっていて、この人はジャズドラマーなんだよ。ロック系のシンガーソングライターのバックでも叩いてる。エリック・ジャスティン・カズの1枚目の『イフ・ユアー・ロンリー』(72年)とかでね。で、歌も歌うんだけど去年の10月に亡くなってる。テイトは85歳で高齢だったから寿命もあるんだろうけどね。追悼コーナーがあるなら、彼も入れてね。いいドラム叩いてるから。

慶一さんお気に入りの『The Return』ミュージシャンの面々。上からクロマティックス、シャロン・ヴァン・エッテン、オ・ルヴォワール・シモーヌ

## リンチの使う曲は過去とつながっている

——リンチの息子ライリーが参加した5話のバンド「トラブル」も含めて、他の面子もリンチ・ファミリー感が濃厚ですね。

**鈴木**　息子のバンドも含めて、リンチが選択する音楽って全部いいよね。サウンドデザインに統一感がある。今回はオールディーズの選曲も含めてすごくリンチらしい。リンチの使う曲って、過去作からずっとつながってる感じがするね。今の新しい世代のバンドを使うにしてもそう。今回、ロードハウスで演奏してる連中はオールディーズとディープ&ダーク・アメリカーナをつなぐミュージシャン、というコンセプトなんじゃないかな。3話のカクタス・ブロッサムズや息子のバンドはもちろん、有名無名を問わず、その香りを持つ人たちを揃えている感じだよね。

——特に印象深かったバンドは?

**鈴木**　4話で「ラーク(ひばり)」を演奏した女性3人組のシンセグループ、オ・ルヴォワール・シモーヌが良かったね。画的にもかわいらしくて。8話のナイン・インチ・ネイルズは特別枠だな。

——オールディーズ組では?

**鈴木**　5話のパリス・シスターズの「アイ・ラヴ・ハウ・ユー・ラヴ・ミー」。「わすれた

いのに」って邦題で60年代末にカヴァーされた。深夜ラジオの女性パーソナリティ3人で結成したモコ・ビーバー・オリーブのヒット曲。11話の「ラスベガス万才」も驚いたね。エルヴィス映画の曲が『ツイン・ピークス』でかかるのか！って。しかも打ち込みドラムビートでね。カヴァーしたショーン・コルヴィンもシンガーソングライター系で、ボブ・ディランの30周年ライブにも出てたよ。

——この曲は『ビッグ・リボウスキ』(98年)でも使われてましたね。

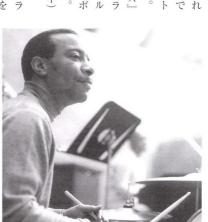
**鈴木** そうだね。あと『マルホランド・ドライブ』でロイ・オービソンの「クライング」をスペイン語カヴァーで歌った人も出てきたね。レベッカ・デル・リオ。おなじみのジュリー・クルーズはあまり変わってなかったな。あと13話で「ジャスト・ユー」をジェームズ・マーシャルが裏声で歌うのも良かった。声だけ聴くとまるで女性。この曲のギターも、さかのぼればヴェルヴェット・アンダーグラウンドかっていうくらいの……って、もういろいろつながりが複雑すぎて、音楽だけで解説本が丸々1冊必要だよね(笑)。

## バダラメンティのメロディは、千切れてる

——リンチは単独のアルバムも数枚出てますよね？

**鈴木** うん。出るたびに買ってるけど、私は正直それほどすごいと思わなかったな。でも『The Return』みたいに、既成曲やいろんなミュージシャンを起用してリミックスすると抜群だよね。ノイズの入れどころとか、選曲のセンスがものすごい。今回サウンドデザインとしてもクレジットされてるけど、リンチってエレクトロニカな人だよね。そのいっぽうで80年代的なものとオールディーズ的なもの、さらには21世紀のディープ&ダークも混じって、テクノ的な要素も入ってる。全体としてはダークなオルタナ感満載でね。そんなカオスな趣味の人、なかなかいないよ。

『ツイン・ピークス』全シリーズのサントラに参加しているジャズドラマー、グラディ・テイト。映画関連の仕事では、ほかに『ホット・ロック』（72年）や『ウィズ』（78年）のサントラなどがある

——アンジェロ・バダラメンティの有名なメイン・テーマも、今回はノイズ・アレンジ風でしたね。

**鈴木** ストリングスの使い方が明らかに生じゃないよね。確証はないけど、全部シンセで演奏してると思う。もう断言するよ(笑)。実は私も同じコンセプトで、『座頭市』(03年)の音楽を生の弦は使わずにシンセにした。前シーズンのメイン・テーマみたいな音の質感がいいなって思ったからね。弦の音についてはそれくらいシンパシーを抱いたね。

——バダラメンティを最初に意識されたのは『ブルーベルベット』(86年)ですか？

**鈴木** そうだね。でも決定的なのはやっぱり『ツイン・ピークス』だね。誰の耳にも残る有名なメイン・テーマなのに、意外とちゃんとしたメロディがない。ギターとベースの間みたいなバリトンギターの音が鳴っていて、そこにシンセの音が染みるようにザーッと入ってくる。「ローラ・パーマーのテーマ」もえんえん溜めて溜めて、ピアノのメロディが途中で一瞬、数小節だけ入る構成なんだ。その一瞬のピアノのところで一気にさらっていくから「いい曲だな」と感じる。メロディを出すのをあそこまで堪えるのは大変だよ。待つ、待つ、待つ……その溜めがあるから、印象に残るんだよね。実際、『ツイン・ピークス』の

劇中でも、この曲の使いどころはすごくうまい。感情がいちばん盛り上がる画の瞬間に、ピアノのメロディがポッとうまくハマるように使ってる。ヘタをするとメロウになりすぎちゃうところを絶妙に踏みとどまってるよね。その2曲を除くと、劇伴はかなり抽象的で過剰なメロディではないところに私は惹かれますね。

——伺っていると、慶一さんの「アウトレイジ」シリーズ（10〜17年）の音楽の作り方にも共通点があるように思えます。

**鈴木**　『アウトレイジ』に限っては、たしかに似てるね。次のメロディがなかなか出てこない、メロディが千切れてる感じが、すごく近い。そう考えると、北野映画の劇伴の作り方は、バダラメンティの音作りと通じてるのかもしれないね。というよりも、映像を観ながら自由に作っていると、自然とそうなっちゃう（笑）。ナイン・インチ・ネイルズのトレント・レズナーや、『メッセージ』（16年）のヨハン・ヨハンソンなんかもそんな感じがするから好きなんだな。もしバダラメンティが生の弦を使っていたら、私の妄想は崩れちゃうけどね（笑）。でもパッセージの激しいものは使わないし、生だとしたらもったいないくらいに音質がシンセっぽいから、やっぱり私の読みは当たってると思うんだけどなぁ（笑）。

——ちなみに「ローラ・パーマーのテーマ」は、バダラメンティが演奏するピアノの脇にリンチが立って、イメージを伝えながら作曲するさまを作曲家本人が〝再現実況〟するメイキング映像が残っています。

**鈴木**　監督の隣で作曲するのはあんまりいいもんじゃないねぇ（笑）。北野組の劇伴作りも実際の映像を観ながら作曲したけど、北野組の最終ダビングは、スタジオにコンピュータを5台くらい準備して、音楽とSEで2〜3台、あとはセリフ用とかで使い分けて、レイヤー状に重ねて音を作る。私は自分のスタジオでまずは映像を観て、次に即興で作った音楽をデータ化して、それを繰り返し聴きながら直していったね。特に『アウトレイジ』（10年）のときは、俳優のセリフが切れる隙間隙間にピアノとかの音を挟み込んでね。役者の唇を見て、閉じてる箇所に「今だ！」ってビッチリと音を入れる。

——セリフの響きも、一種の楽器として捉えるような作り方なんですね？

**鈴木**　そうだね。カメラがパンアップするところにトルゥンと音を入れたりは、『東京ゴッドファーザーズ』（03年）とかのアニメでもよくやる手法だけどね。『The Return』に話を戻すと、やっぱりリンチって映像、音響、ストーリーテリングと、あらゆる角度から五感を刺激してくれる作家だよね。特に『The Return』は音楽面の聴きどころが本当に多い。ノイズ処理の仕方もすごいよね。もともとリンチはノイズ好きでしょ。『イレイザーヘッド』（77年）なんか、オールドファッションドなノイズがずーーっと鳴ってる印象だったよね。その点、今回はテクノロジーも進化してるから、最新のスペックでピシッとハメたノイズが聴けるよね。5.1chドルビーTrueHD仕様のブルーレイで観返したら、TV放送版とは全然違う厚みのある音が贅沢に堪能できるだろうね。「今の音、どこから鳴った？」って考えながら、チェリーパイとコーヒーを片手に、じっくり時間をかけて味わいたいサウンドデザインですね。私、コーヒーはもう飲まなくなっちゃったけど（笑）。

リンチ組の座付作曲家、アンジェロ・バダラメンティ。自ら「ローラ・パーマーのテーマ」誕生秘話を弾き語りで解説する映像は、旧シリーズDVD・Blu-rayの特典として収録。「ツイン・ピークス」シリーズ全サントラ解説は、次のページから！

# "TWIN PEAKS" SOUNDTRACK REVIEW #1

## 『ツイン・ピークス』音楽解説

# 『シーズン1＆2』［異世界のジャズ］編

**リンチ×バダラメンティ×ジュリーの確立と、
ダーク・アンビエントなリンチ・サウンド・コラージュ**

音楽は『ツイン・ピークス』最大の魅力のひとつだ。
奇想天外なストーリーとドラマ、デイヴィッド・リンチならではの
映像美、個性的すぎるキャラクターたちなどとともに、
アンジェロ・バダラメンティによる映画音楽はファンの感性を揺さぶってきた。

文◎山崎智之

のどかな地方都市の風景を描写する「ツイン・ピークスのテーマ」、ヒロインの悲劇的な運命とその秘密を暗示する「ローラ・パーマーのテーマ」、酒場〝バン・バン・バー〟で歌姫ジュリー・クルーズが歌う「イントゥ・ザ・ナイト」、「フォーリング」などは我々の皮膚の下から入り込み、脳内を占拠してきた。「ツイン・ピークスのテーマ」は91年のグラミー賞〝ベスト・ポップ・インストゥルメンタル〟部門を受賞することになった。

もともとリンチは自らの作品において、尋常ならざる音楽へのこだわりを見せてきた。長編デビュー作『イレイザーヘッド』(77年)でリンチが手がけたサウンド・コラージュは、後にダーク・アンビエントと呼ばれる音楽スタイルを先取りしたものだった。〝ラジエーターの少女〟が歌う「イン・ヘヴン」(作曲はシンガー・ソングライターのピーター・アイヴァース)は映画を観終えた後も消えることのない後味を長く残した。なお『イレイザーヘッド』が公開当時よりも後にレイトショーでじわじわと支持されるようになった話は〝伝説〟となっているが、同作の音楽もじわじわと人気を獲得していき、公開から5年後の82年に初めてサウンドトラック盤LPが発売となった。

『エレファント・マン』(80年)ではジョン・モリス、『デューン/砂の惑星』(84年)ではロック・バンドのTOTOが音楽担当に起用されている。なお後者ではアンビエント・ミュージックの巨匠ブライアン・イーノがダニエル・ラノワ、ロジャー・イーノと組んで「予言のテーマ」を書いている。本当はリンチは全編イーノにやらせたかったのでは?と憶測してしまうが、1曲のみの参加となった。

『ブルーベルベット』(86年)はボビー・ヴィントンの「ブルーベルベット」や、ロイ・オービソンの「イン・マイ・ドリームス」が劇中で使用されているのに加えて、イザベラ・ロッセリーニがクラブの歌手という役柄だったり、音楽が大きな役割を担う作品だ。そして〝本職〟のシンガーではないロッセリーニの歌唱指導で起用されたのが、アンジェロ・バダラメンティだった。

## 「愛のミステリー」という天使の声

1937年、ニューヨーク州ブルックリンに生まれたバダラメンティは、イーストマン音楽学校とマンハッタン音楽学校で音楽理論を修めた後、『ゴードンの戦い』(74年)で映画音楽デビューを果たしている(このときは〝アンディ・バデイル〟という芸名を使っていた)。それから彼はTVCM用のジングルなどを手がけてきたが、『ブルーベルベット』のプロデューサー、フレッド・カルーソを介したリンチとの出会いによって、キャリアの大きなターニングポイントを迎えることになる。

当初はロッセリーニが「ブルーベルベット」を歌えるようにコーチをするために呼ばれたバダラメンティだが、その役割はじょじょに増していく。リンチはディス・モータル・コイルの「ソング・トゥ・ザ・サイレン」(ティム・バックリーのカヴァー)を気に入っており、それを踏襲したアレンジでロッセリーニに歌わせようと考えていた。だが、エグゼクティヴ・プロデューサーのディノ・デ・ラウレンティスが「許諾料に金がかかるからオリジナル曲を書いてくれ」と要請。こうしてバダラメンティが作曲、リンチが作詞を担当したのが「愛のミステリー」だった。

リンチは「愛のミステリー」で〝天使の声〟が必要だと主張。バダラメンティは友人でシンガーのジュリー・クルーズに「誰か良いシンガーはいないか?」と相談する。それに対し、彼女は「私がいるじゃない!」と答えた。こうしてリンチ・バダラメンティ・ジュリーの盤石の三角形が出来上がったのだった。当初はヴォーカル・コーチとして招かれたバダラメンティだったが、結局、映画本編のスコアすべてを彼が手がけることになった。

続く『ワイルド・アット・ハート』(90年)

でもまた、音楽が効果的に使われていた。主人公のニコラス・ケイジはエルヴィス・プレスリー狂。実在するスラッシュ・メタル・バンド、パワーマッドのライヴに行って恋人のローラ・ダーンにエルヴィスの「ラヴ・ミー」を歌うシーンはほとんど不条理描写に近いものだった本作でも、バダラメンティがスコアを手がけている。さらにリンチが90年に手がけたミュージカル／演劇作品『インダストリアル・シンフォニーNo.1』でもバダラメンティは音楽を担当、ジュリー・クルーズがヴォーカルで参加していた。

バダラメンティの才能に惚れ込んだリンチは、その後『マルホランド・ドライブ』（01年）までのすべての長編監督作品で彼を起用することになるが、自分が製作総指揮を務めるTVシリーズでも、彼に音楽を依頼する。それが『ツイン・ピークス』だった。

## 「ローラ・パーマーのテーマ」の誕生

『ツイン・ピークス』オリジナル・シリーズの音楽のメイキングは、ブルーレイ／DVDボックスに特典映像として収録されたドキュメンタリー『小鳥がさえずる世界：音楽メイキング／Where We're From:Creating The Music』でバダラメンティが「ローラ・パーマーのテーマ」を例に取りながら解説している。N.Y.のメイシーズ・デパート近くのマンションで、彼がフェンダー・ローズ（エレクトリック・ピアノ）を弾くすぐ横にリンチが立って、脳内にあるイメージを言葉にして説明していった。

「暗い森の中、フクロウの声が響きわたり、孤独な少女が佇んでいる。彼女の名前はローラ・パーマー……」

曲が盛り上がっていくところでリンチは「素晴らしい！　胸が張り裂けそうだ！」などと声を上げ、曲を弾き終えるとバダラメンティを抱きしめながら「アンジェロ、これこそが『ツイン・ピークス』だよ」と話したとバダラメンティは語っている。この一連の作業は約20分しか要しなかったそうだ。

「ツイン・ピークスのテーマ」もまた、作品のイメージを決定付けることになった。カナダ国境に接したワシントン州の人口５１２０１人の地方都市ツイン・ピークスの野鳥や製材所、観光名所の滝などが映し出されるオープニングにぴったりののどかなムードが漂う曲だが、どこか不穏なものを感じさせ、それが本編とリンクしていく。

『ツイン・ピークス』のスコアで中毒性の高い魅力を放っているのは、バダラメンティ流のジャズの解釈だ。ノワールなベースラインとフィンガースナッピング（指パッチン）、サックスやクラリネットをフィーチュアした音楽性は、我々の知るジャズのようでありながら、異なったヴォキャブラリーを持つ〝異世界のジャズ〟だ。

「オードリーのダンス」は、タイトル通りオードリー・ホーンがダイナーで踊り出す際のBGMとして流れる曲だが、彼女のやる気のなさげなダンスとともに、シュールな雰囲気をかもし出している。

「ダンス・オブ・ザ・ドリーム・マン」もまた同様だ。赤いカーテンの部屋で小人が踊るシーンで使われるこの曲は、映像と音楽がお互いを高め合うことで、さらに幻想的なムードをかき立てた。

「フレッシュリー・スクイーズド」もジャズ・テイストの曲で〝絞りたて〟という題名にはどんな意味が秘められているのだろうと訝ってしまうが、〝グレイト・ノーザン〟ホテルでクーパー捜査官が朝ご飯のときに飲んだジュースが〝絞りたて〟だったというシーンでバックにかかる曲ということだ。

足下を揺るがす不安定さを生み出すトワンギーなサーフ・ギターも『ツイン・ピークス』の世界観にマッチしている。「ブックハウス・ボーイズ」では、ヴィンス・ベルのビヨ〜ンというギターを聴くことができる。ベルはテキサスのシンガー・ソングライター兼ギタリストで、スティーヴィー・レイ・ヴォーンらをゲストに迎

えて82年にデビュー・アルバムを制作するはずが、自動車事故でチャンスを逃し、94年の再デビュー時にはヴォーンは飛行機事故で亡くなっていたという悲劇のアーティストだ（その代わりに、アルバム『Phoenix』には元ヴェルヴェット・アンダーグラウンドのジョン・ケイルがゲスト参加していた）。

「ナイト・ライフ・イン・ツイン・ピークス」は、アンビエント／ドローン／環境音楽的な異色曲だ。バダラメンティよりもむしろ『デューン』のイーノ、あるいはリンチ自身の後の音楽作品を思わせるタイプの曲だが、やはり『ツイン・ピークス』らしさを感じさせる。深夜の地方都市は車もまばらで、歩行者はいない。交差点に吊された交通信号機がゆらゆら揺れる情景が目に浮かぶ。

「ブックハウス・ボーイズ」で印象的なギターを聞かせたヴィンス・ベル

## 愛犬に向けて歌った ジュリー・クルーズ

そして『ツイン・ピークス』の音楽世界において絶対に欠くことが出来ない存在がジュリー・クルーズの歌声である。ジュリーは1956年、アイオワ州クレストン出身のシンガーだ。プロとして身を立てるべくN.Y.に向かい、ミュージカル『ビーハイヴ』でジャニス・ジョプリン役を演じていたころ、彼女はバダラメンティと出会っている。その後のことは前述した通りだ。クルーズはラウンドハウス（近隣住民や長距離トラック運転手などが集まって飲み交わす酒場。ライヴ演奏もある）〝バン・バン・バー〟の歌手として出演。『ツイン・ピークス』の音楽の〝顔〟と〝声〟として鮮烈なインパクトをもたらしている。

「フォーリング」は「ツイン・ピークスのテーマ」のヴォーカル・ヴァージョンといえる曲だ。この曲をレコーディングするにあたって、バダラメンティは「世界で最も愛する人に向かって歌うつもりで」歌ってほしいとリクエストしている。それは当時彼女が新婚だったことを踏まえたものだったが、後に彼女は「愛犬コッカースパニエルのルディをイメージして歌った」と語っている。

「イントゥ・ザ・ナイト」は、ツイン・ピークスの町内の暗闇を表現した幽玄なムードのある曲だ。「夜の中へ、私はあなたの名前を叫ぶ」という歌詞はある意味ポップのステレオタイプ的なものだが、透明感のあるヴォーカルとメロディの〝歪み〟がこの曲を唯一無二のものにしている。

「ナイティンゲイル」は50年代のオールディーズ・ポップを彷彿とさせながら、やはり微妙に違和感をおぼえるもの。前述のジャズ路線と同様に、伝統を尊重しながらあえてポイントをズラしているあたりが巧い。

ジュリーが歌うこの3曲は『ツイン・ピークス／オリジナル・サウンドトラック』に収録されているが、劇中ではさらに2曲が歌われている。

「ロッキン・バック・インサイド・マイ・ハート」は、レトロなキャンディ・ポップを『ツイン・ピークス』流にアレンジした曲で、いちども聴いたことがないのに郷愁を感じさせる ナンバ

ーだ。中盤にビッグ・バンドのホーン・セクションが入るのもハッとさせられる。

「ザ・ワールド・スピンズ」は、透明感と哀しみがあふれんばかりの神々しさすら感じさせる曲で、ジュリーは「歌うたびに涙が出る」と話している。バダラメンティもこの曲をフェイヴァリットに挙げているが「ロッキン・バック・インサイド・マイ・ハート」、「ザ・ワールド・スピンズ」の2曲はサントラ未収録だった。ただ、この2曲とサントラ盤に収録された3曲も含めて、ジュリーのソロ・アルバム『フローティング・イントゥ・ザ・ライト』(89年)で聴くことができる。さらに「ザ・ワールド・スピンズ」は、新シリーズの『ツイン・ピークス Music From The Limited Event Series オリジナル・サウンドトラック』にも収録された。

夢の中をたゆたうようなジュリーの歌声だが、レコーディングは決してスムーズには行かず、彼女がスタジオの椅子を振り回して放り投げるという出来事もあった。それに対してリンチは「I don't like your attitude! 君の態度は良くない!」と叱りつけている。

なお『フローティング・イントゥ・ザ・ライト』に先駆けた88年、リンチとバダラメンティは、ジュリーのデモ・テープを制作しており「フローティング」「フォーリング」「ザ・ワールド・スピンズ」が録音されている。いずれもアルバムに収録されたヴァージョンとはアレンジが異なっており、長年未発表のままだったが2018年、EP『Three Demos』として発表された。

〝『ツイン・ピークス』現象〟の余波もあり、ジュリーの『フローティング・イントゥ・ザ・ライト』は好セールスを記録。彼女は93年にもバダラメンティ作曲、リンチ作詞のアルバム『ヴォイス・オブ・ラヴ』を制作している。このアルバムで自作の曲をレコーディングしたいとジュリーは主張するが聞き入れられず、彼女はリンチと決別することになる。

それから7年間、ふたりは疎遠な関係になってしまう。だがジュリーが電話をして「私が調子に乗っていた。ごめんなさい」と謝罪。それをリンチも受け入れ、ひとまず和解している。だが『The Return』でのジュリー復活を経て、彼らは再び険悪になてしまうのだった。

ちなみに〝天使の声〟はジュリーのトレードマークとなったが、彼女自身は「いろんなスタイルで歌える」と自ら主張している。かつて『ビーハイヴ』でジャニス・ジョプリンを演じたり、90年代にはロック・バンドB-52'sに参加したのも、その幅広いヴォーカル・スタイルを裏付けるキャリアといえる。

『ツイン・ピークス』の音楽の〝裏〟ハイライトといえば、第9章でジェームズ・ハーレイがギターを弾きながら歌い、ドナとマディがコーラスを取る「ジャスト・ユー」だ。この甘ったるいバブルガム然とした弾き語りナンバーは、ジェームズを演じるジェームズ・マーシャルが撮影現場にギターを持ち込んできたことから始まった。作中でジェームズが歌うシーンがあったため、彼とバダラメンティ、リンチで共作することになったのである。50年代風をモチーフにするということで、彼らの頭に浮かんだのはプラターズの55年のヒット曲「オンリー・ユー」だった。その「ユー」の部分だけを残して再構成したのが「ジャスト・ユー」である。ジェームズはこの曲を自ら弾き語りするつもりだったが、既にセッション・ミュージシャンを使ってレコーディングされてしまっていた。しかもヴォーカルのキーが異常に高く、ファルセットというより裏声で歌わねばならなかった。

甘ったるくクサい曲調、そして決して最高のプロとは言い難いパフォーマンスゆえに、「ジャスト・ユー」はカルト的な支持を得るようになった。ファン・イベントのジェームズへのQ&Aコーナーでこの曲が話題に出るだけで場内が爆笑の渦となるほどで、『ツイン・ピークス』ファンのたしなみとして、ギターで弾き語りをできる人も多い(コード進行は比較的平易だ)。それゆえに『The Return』でのジェイムズによる「ジャスト・ユー」復活は、ファンの熱狂

デイヴィッド・リンチ（右）とアンジェロ・バダラメンティ

をもって迎えられた。

　出演者の音楽パフォーマンスでもう1曲忘れがたいのは、第8章でローラの父親リーランド・パーマー（レイ・ワイズ）が歌う「ゲット・ハッピー」だ。この曲は1930年にハロルド・アーレンがステージ・ショー『9：15レビュー』のために書いたもので、大恐慌の陰鬱なムードを払拭することを狙ったポジティヴ・ソングだった。その後、ジュディ・ガーランドやビング・クロスビー、フランク・シナトラなどの大物シンガーたちに歌い継がれてきた。途中から高速で歌って踊って、最後にひっくり返るリーランドのヴァージョンは「ゲット・ハッピー」の歴史に新しいページを書き加えることになった。

　リーランドはまた、ミュージカル『王様と私』からの「ゲティング・トゥ・ノウ・ユー」も歌っており、レイ・ワイズ自身は「自分のお気に入り。悪くないパフォーマンスだったと思う」と思い出している。

　で、このときリーランドが歌う伴奏をピアノで弾いていたのが、ドナの妹ガーステン・ヘイワードだった。彼女はメンデルスゾーンの「Op.14ロンド・カプリチオーソ」を弾いた後、リーランドに強引に「ゲット・ハッピー」の伴奏を弾かされる。ガーステンを演じたのはリンチの『デューン』で子役デビューしたアリシア・ウィット。カイル・マクラクラン演じるポール・アトレイデスの妹アリア役だった。このエピソードでは実際に彼女（当時14歳だった）がピアノを弾いており、エンドクレジットで弾くブギウギ・ピアノ・ナンバー「ヘイワード・ブギー」は、アルバム『Season Two Music and More』で聴くことができる。アリシアは女優、シンガー・ソングライター、モデルなどとして現在も活動、TVシリーズ『エクソシスト 孤島の悪魔』（17年）にも出演している。

## 『ツイン・ピークス』音源タイトル

　さて、『ツイン・ピークス』の音楽を単体として（セリフや効果音などに邪魔されず）聴くことは決して容易ではなかったりする。ここでは押さえておくべき『ツイン・ピークス』音源タイトルをリストアップしてみよう。

### ●『ツイン・ピークス オリジナル・サウンドトラック』

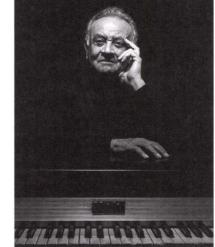
90年4月の番組放映開始からやや遅れて同年

9月に発売されたサウンドトラック・アルバム。「ツイン・ピークスのテーマ」「ローラ・パーマーのテーマ」「フォーリング」「イントゥ・ザ・ナイト」など、初期（シーズン1）の重要曲は本作で聴くことができる。全米アルバム・チャートで22位、50万枚のセールスを達成。オーストラリアではナショナル・チャートの1位を獲得するなど、スコア中心のアルバムとしては異例のヒットを記録した。『ツイン・ピークス』の音楽を知るための基本中の基本であり、2017年には日本盤CDも再発、容易に入手可能だ。

ところで90年といえば、アナログ・レコードがCDに取って代わられた時期で、日本盤はCDのみが発売されたが、ヨーロッパではアナログ盤LPも発売され、プレス枚数の少なさゆえに一時期プレミア価格で売られていた。近年のアナログ再評価ブームでLPが再発され、2016年には海外で変形ジャケット・重量盤LPとしての復刻も実現している。

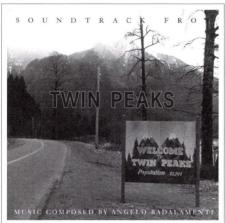
## ●『Season Two Music and More』

『インダストリアル・シンフォニーNo.1』のDVDや『イレイザーヘッド』サウンドトラックなど、リンチ関連の作品をリリースしてきた「アブサーダ／デイヴィッド・リンチ・ミュージック・カンパニー」から07年にリリースされたサウンドトラック第2作。〝ゴールド・ボックス〟DVDボックス・セット発売にタイミングを合わせたリリースだった（ただし公式プレスリリースでは〝07年は『ツイン・ピークス』誕生17周年で、ローラ・パーマーが殺されたのが17歳のときだったから〟という理由になっている）。

サントラ第1作と較べるとより突っ込んだ内容で、ディープ層を対象としているが、前述の「ジャスト・ユー」や「ヘイワード・ブギー」など熱心なファンならフル・ヴァージョンで聴きたい曲が収められている。終盤に向けてのダーク・アンビエントとおなじみのメロディが交錯するメドレー「Dark Mood Woods / The Red Room / Love Theme Farewell」も『ツイン・ピークス』の音楽を総括する秀逸な曲だ。また、シェリーやジョシー、ハロルドなどのサイドキャラのテーマ曲が収録されているのもうれしい。この作品は自主レーベルからのリリースで、日本盤は発売されなかったが、比較的海外盤CDを入手しやすいはずだ。ただCDは近年、急激に市場から消えているため、早めに押さえておくべきかもしれない。

## ●The Twin Peaks Archive

2011年から2012年にかけて、リンチの公式サイトで『ツイン・ピークス』と『ローラ・パーマー最後の7日間』を中心とした（一部『インダストリアル・シンフォニーNo.1』、『オン・ジ・エアー』からのトラックを含む）音源が公開され、全212トラックには未ソフト化音源や本編で使われなかったアウトテイクやデモなどが含まれていた。

かなりの割合を「ツイン・ピークスのテーマ」や「ローラ・パーマーのテーマ」の別テイクや効果音的なトラックが占め、初リリース曲は少な

かったりするが、サックスがムードを盛り上げる「アニー&クーパー」や、ダークで威圧感のある「ハンクのテーマ」、シンセ・ドローンが不気味な「アウルズ・ケイヴ」など聴きどころも多い。ミス・ツイン・ピークス・コンテストのオープニング曲や、「ルーシーのダンス」が〝アリモノ〟ではなく、わざわざバダラメンティが書き下ろしたというのにも驚かされる。現在はリンチのサイトからのDL（一部未圧縮音源は有料）は終了しているが、その多くはYouTubeなどで聴くことができる。

これまでも一連のリンチ作品や『エルム街の悪夢3／惨劇の館』（87年）、『ナショナル・ランプーン／クリスマス・バケーション』（90年）の映画音楽で知られてきたバダラメンティだが、『ツイン・ピークス』の成功によって、世界に冠たるトップ・コンポーザーのひとりとなった。

マイケル・ジャクソンは「ブラック・オア・ホワイト」（91年）のミュージック・ビデオで劇伴パートの音楽に彼を起用した。彼はまたポール・マッカートニーともレコーディング・セッションを行っている。この時期ポールは、英国エリザベス女王のためにプライベート・ライヴを開催することになったが、女王がなんと〝『ツイン・ピークス』をTVで観るから〟という理由でライヴ観覧をドタキャン。ポールは「何だよ！」とバダラメンティに当たり散らしたという。ちなみに、バダラメンティが参加したポールの「イズ・イット・レイニング・イン・ロンドン?」はアルバム『オフ・ザ・グラウンド』（93年）のレコーディング・セッションで録音されたが、結局収録されなかった（アウトテイクなどを含む〝ザ・コンプリート・ワークス〟特別仕様盤も発売されたが、そちらにも収録されていない）。

バダラメンティはまた92年、バルセロナ・オリンピックの聖火点灯式のテーマ曲「ザ・フレイミング・アロウ」も作曲。93年にアメリカのスラッシュ・メタル・バンド、アンスラックスのアルバム『サウンド・オブ・ホワイト・ノイズ』に収録された「ブラック・ロッジ」はバンドとバダラメンティの共作で、タイトル通り『ツイン・ピークス』へのオマージュソングであり、ヴィンス・ベルのトレモロ・ギターもフィーチュアされていた。

『ツイン・ピークス』によって一躍時代を代表するコンポーザーとなったバダラメンティだが、決して〝本業〟を忘れたわけではなく、92年には新作映画の音楽に着手することになる。それが、『ツイン・ピークス ローラ・パーマー最後の7日間』だった——。

**『ツイン・ピークス』オリジナル・サウンドトラック**

作曲：アンジェロ・バダラメンティ／解説：山崎智之／
発売：ワーナーミュージック・ジャパン／1,800円＋税

**収録曲：**

01. ツイン・ピークスのテーマ
02. ローラ・パーマーのテーマ
03. オードリーのダンス
04. ナイティンゲイル
05. フレッシュ・スクウィーズ
06. ブックハウス・ボーイズ
07. イントゥ・ザ・ナイト
08. ナイト・ライフ・イン・ツイン・ピークス
09. ダンス・オブ・ザ・ドリーム・マン
10. ツイン・ピークス 愛のテーマ
11. フォーリング

## "TWIN PEAKS" SOUNDTRACK REVIEW #2
## 『ツイン・ピークス』音楽解説

# 『ローラ・パーマー最期の7日間』［多様性賛歌］編

### バダラメンティ×リンチの双頭プロジェクトと、伝説的ジャズ歌手ジミー・スコットのハイトーン・ヴォイスの魅惑

『ローラ・パーマー最期の7日間』の音楽は、肉体的である。
アンジェロ・バダラメンティがTVシリーズから続投したこの劇場版は、
オープニング・テーマの官能的なトランペットから、
まったく異なる"何か"が起ころうとしていることを予感させる。

文◎山崎智之

## 『ローラ・パーマー最期の7日間』の音楽

TVシリーズの音楽は、ジャズのテイストを加味しながら純然たるジャズでないアンビヴァレンスが、不安定な揺らぎを生んでいた。『ローラ・パーマー最後の7日間』（92年）ではそんな音色が、より血の通った形で表現される。

TV版ではバダラメンティ自らがピアノを弾き、チャールズ・ミンガス、クインシー・ジョーンズ、ケニー・バレルなど大物ジャズ・ミュージシャンとの共演で知られるグレイディ・テイトがドラムスをプレイ。そしてテキサス出身のソングライター、ヴィンス・ベルによるギターがフィーチュアされていたが、ベースはシンセサイザーで代用しており、グルーヴ感に欠けていたことがあった。

それに対して『最期の7日間』では、バスター・ウィリアムスがツボ曲でベースをプレイ。ハービー・ハンコックやラリー・コリエルなどと活動してきた実力派の演奏には深みがある。

オープニング・テーマのトランペットはスティングやポール・サイモン、ジョージ・マイケルなどと共演してきたジム・ハインズによるものだ。

『最期の7日間』の音楽についてもうひとついえるのは、その多様性だ。バダラメンティのスコアが全編使われていることは変わりないが、外部の血を取り入れながら、さらに幅広いサウンドを聴かせている。

本作でのバダラメンティのコラボレーターとして頭角を現しているのが、誰あろうデイヴィッド・リンチ自身だ。まずバダラメンティ&リンチの双頭プロジェクト、ソート・ギャング名義で2曲、「リアル・インディケイション」、「ブラック・ドッグ・ランズ・アット・ナイト」がサウンドトラック・アルバムに収録されている。どちらも作曲はバダラメンティで、リンチは作詞とパーカッションという役割分担だが、バダラメンティの単独名義曲とは明らかに異なった音触がある。ローラがドナと下校中にボビーと痴話喧嘩するときに流れる「リアル・インディケイション」では、バダラメンティが〝語り〟も担当しており、ギル・スコット・ヘロンの名曲「ザ・レヴォリューション・ウィル・ノット・ビー・テレヴァイズド」にも似たアジテーションを聴くことができる。

第29章の赤い部屋で歌うジミー・スコット

なお、ソート・ギャングはアルバム1枚分のマテリアルを録音しており、それがリンチの自主レーベル「デイヴィッド・リンチ・ミュージック・カンパニー（DLMC）」から発表されるかも……？と本人が公式サイトでほのめかしていたが、そのまま話が立ち消えになってしまった。『The Return』のサントラ盤にもソート・ギャング名義の「ヘッドレス・チキン」が収録されているが、これが90年代の音源なのか、あるいは〝再結成〟音源なのかは明らかになっていない。

〝ヤリ部屋のテーマ〟こと「ピンク・ルーム」はバダラメンティが関与することなく、リンチ単独で書かれた曲だ。作中でエロいことをしているシーン2箇所で流れるこの曲で、煽情的なギターを弾いているのはデイヴィッド・ジョウレキィ。当初は別のギタリストが参加するはずだったのがドタキャンしたため、急遽彼が起用されることになった。そのギター・プレイを気に入ったリンチは、彼のアルバムをプロデュー

スすることを提案、94年にアルバムをレコーディングするが、そのままお蔵入りに。06年にジョウレキィが亡くなった後、『David Lynch Presents:Fox Bat Strategy:A Tribute To Dave Jaurequi』としてリリースされた。なお、ヤリ部屋のシーンではジョウレキィも出演、カウボーイ・ハットを被ってギターを弾いている。

ローラがドナに「私ってあなたの親友よね？」と確認するシーンで使われた「ベスト・フレンズ」は、リンチとデヴィッド・スラッサーの共作だ。スラッサーは『ウィロー』（88年）、『トイ・ストーリー3』（10年）、そしてリンチの『ワイルド・アット・ハート』などで音楽エディターを務めるいっぽうで、自らのアルバム『Delight At The End Of The Tunnel』（97年）を「Tzadikレコーズ」（ニューヨーク・アヴァンギャルドの奇才ジョン・ゾーンのレーベル）から発表している。

## ジュリー・クルーズとルイジ・ケルビーニ

バダラメンティの音楽コラボレーターといえば、やはりジュリー・クルーズを外すことはできない。彼女はTVシリーズに続いて『最期の7日間』でもロードハウスの歌姫として出演、「クエスチョンズ・イン・ア・ワールド・オブ・ブルー」を歌っている。この曲はジュリーのアルバム『ヴォイス・オブ・ラヴ』（93年）にも収録されている。ほぼ全曲をバダラメンティが作曲、リンチが作詞したこのアルバムだが、「もうひとつの世界」のみジュリーの自作。また「ヴォイス・オブ・ラヴ」、「もうひとつの世界」は映画にインストゥルメンタル・ヴァージョンが使われ、ジュリーのアルバムには彼女が歌うヴォーカル・ヴァージョンが収録されていた。

『最期の7日間』の音楽で重要な使われ方をしているのが、ルイジ・ケルビーニ（1760～1842年）の「レクイエム　ハ短調～神の子羊」（リッカルド・ムーティ指揮）だ。作中の終盤、ローラ殺害シーンとエンド・タイトルでこの曲が流れることで、ドラッグや売春などで汚れきったローラは浄められ、神々しい聖女として我々の思い出に残ることになる。

もちろんバダラメンティ自身の楽曲も光っている。テレサ・バンクスのバイト先だったダイナーのBGMとして「ドント・ドゥー・エニシング」が使われているし、ローラが自宅で一杯やっているシーンの「パイン・フロート」ではTVシリーズにも参加したアル・レグニのサックスも聴くことが出来る。

また、ローラとボビーがコカインをキメて、売人を射殺してしまうシーンで使われる「ドラッグ・ディール・ブルース」は、バダラメンティの作曲ながら、ギター中心のナンバーも聴くことができる。この曲でギターを弾いているのはおそらくエディ・ディクソン。ジョン・ウォーターズの初期作品でギターを弾き、『ワイルド・アット・ハート』（90年）からリンチ・ファミリー入りしたギタリストだ。『Season Two Music and More』に収録されている。

『The Twin Peaks Archive』のジャケット

## 伝説的ジャズ歌手ジミー・スコット

TVシリーズでおなじみの楽曲も聴くことができる。テレサ・バンクス事件のプロローグから〝1年後〟とテロップが出て、ローラ、ドナ、ボビー、マイク、ジェイムズという懐かしい面々が登場して流れるのは「ツイン・ピークスのテーマ」だ。父親の心が残ったリーランドとローラの交流シーンでは「ローラ・パーマーのテーマ」も聴くことができる。

実際にはTVシリーズの挿入歌だが、便宜上こちらで紹介するのが「シカモア・トゥリーズ」

**『ツイン・ピークス〜ローラ・パーマー最後の7日間』**
**オリジナル・サウンドトラック**

作曲：アンジェロ・バダラメンティ／解説：滝本誠／
発売：ワーナーミュージック・ジャパン／1,800円＋税

**収録曲：**

01. ツイン・ピークス〜ローラ・パーマー最期の7日間のテーマ
02. パイン・フロート
03. シカモア・トゥリーズ
04. ドント・ドゥー・エニシング
05. リアル・インディケイション
06. クエスチョンズ・イン・ア・ワールド・オブ・ブルー
07. ピンク・ルーム
08. ブラック・ドッグ・ランズ・アット・ナイト
09. ベスト・フレンズ
10. ムーヴィング・スルー・タイム
11. モンタージュ・フロム・ツイン・ピークス(ガール・トーク、バーズ・イン・ヘル、ローラ・パーマーのテーマ、フォーリング)
12. ヴォイス・オブ・ラヴ

だ。40年代から活動する伝説的ジャズ歌手のジミー・スコットが歌うこの曲は、バダラメンティ作曲／リンチ作詞によるもの。TVシリーズの最終回（第29章）にはスコット自らが出演して、赤いカーテンの部屋で歌っている。カルマン症候群のせいで第二次性徴を迎えなかったスコットのハイトーン・ヴォーカルは、独特の響きと魅力を持つ。

彼のバックでベースを弾いているロン・カーターはマイルス・デイヴィスとの活動で知られる大御所ジャズ・ベーシスト。ジャズ・ファンでなくとも、『ツイン・ピークス』世代の人ならばサントリー・ホワイトのTVCMでベースを弾く彼の姿を覚えているのではないだろうか。また、ジャズ・ピアニストの嶋津健一もこの曲に参加。画面にこそ出てこないが、裕木奈江以前の日本人『ツイン・ピークス』スターということになる。

スコットは一時低迷期にあったものの、『ツイン・ピークス』出演によって再注目され、盟友ドク・ポーマスの葬式で歌ったことで音楽業界関係者の耳を捉えることになる。そうして彼は『オール・ザ・ウェイ』（92年）で大復活を果たす。スコットはまたマドンナの「シークレット」（94年）ミュージック・ビデオで存在感を放っている。

『最期の7日間』サントラ盤にはスコットの歌うヴォーカル・ヴァージョンが収録されているが、映画内で使われているのはヴォーカルなしのインストゥルメンタルだ。終盤、小人と片腕の男の前でリーランド・パーマーが浮遊するシーンに幽玄なムードを加えている。なおスコットは2014年に88歳で亡くなった。

TVシリーズのアルバムが大ヒットした余波もあってか、『最期の7日間』サントラ盤はポップ音楽のフォーマットに則った曲が中心だったが、2011年から2012年にかけて、リンチの公式サイトで公開された『The Twin Peaks Archive』（全212曲）では、未CD化のアンビエント・ノイズ系の楽曲も聴くことができた。

出色なのは、デイヴィッド・ボウイ演じるフィリップ・ジェフリーズ捜査官の登場シーンで使われた「フィリップ・ジェフリーズ」、そしてリーランドがローラに対して「ごはん前には手を洗いなさい！」と狂気の片鱗を見せる「ウォッシュ・ユア・ハンズ」など。CDとは異なったバダラメンティの音楽の魅力を提示している。

公開当時（今でも？）「よくわからない」と批判もあった『最期の7日間』。サントラ盤も各国のヒット・チャートに入ることはなかった。だが一過性の興行成績やセールスなどよりも、この映画は四半世紀以上、我々の心に刻まれてきた。『最期の7日間』の炎は、我々と共に歩んできたのだ。

※『The Return』音楽解説は、P272へ！

# The PERFECT EPISODE GUIDE to TWIN PEAKS

# ツイン・ピークス 全エピソード解説

［シーズン１］編

Episode 0 〜 Episode 7

文◎北原香

season 1

**ビニールに包まれたローラ・パーマーの死体が発見され、**
**FBI特別捜査官デイル・クーパーがツイン・ピークスにやってくる**

# 序章

Episode0：Pilotfilm

◉監督：デイヴィッド・リンチ　◉脚本：デイヴィッド・リンチ、マーク・フロスト　◉米国放映日：1990年4月8日
◉94分／インターナショナル版113分

『ツイン・ピークス』は、86年、『エレファント・マン』(80年)『ブルーベルベット』(86年)で確固たる評価を得ていたデイヴィッド・リンチが、80年代の人気TVシリーズ『ヒル・ストリート・ブルース』の脚本家マーク・フロストと出会ったことから始まった。2人は「ロニー・ロケット」「ワン・サリバ・バブル」等を次々と企画するが、『デューン／砂の惑星』(84年)の製作総指揮を務めたディノ・デ・ラウレンティスの制作会社が倒産したせいですべて頓挫。彼らは、作品の主導権を自らが握るべく、89年、「リンチ／フロスト・プロダクション」を設立し、リンチのエージェントであるトニー・クランツの勧めでTVシリーズの企画に着手する。

仮タイトルは『ノースウェスト・パッセージ』。リンチとフロストは、ストーリーの前にまず、舞台となる町の詳細な地図を作った。位置するのはアメリカ北西部。そこには製材所があって湖がある。その岸辺に打ち上がる少女の死体。田舎町の平和な表の顔とは裏腹に秘密の関係があちこちにあり、殺された少女の裏の顔が徐々に明らかになる……。殺人事件の謎解きはあくまで背景で、田舎町の事情や住民たちの生活をクローズアップするというコンセプトで各局に売り込みをかけていた88年、ＡＢＣが気に入り、2時間のパイロット版を制作することにな

episode 0

る。

　脚本は、最初こそ一緒に書いていたが、後にそれぞれの家で作業するようになった。内容の確認は、当時リンチの恋人だったイザベラ・ロッセリーニの家とフロストの家をネットでつないで行われた。リンチがクーパーのセリフを電話で伝え、自宅の書斎にいるフロストがそれをパソコンに打ち込む。ベン・ホーンのセリフはフロストがメインで書き上げ、ロッセリーニ宅のパソコンに送る、といった具合に、文字通り2人の共同作業により執筆されたのだ。

　キャストには、カイル・マクラクラン、ジャック・ナンスなどのリンチ常連組のほか、パイパー・ローリー、リチャード・ベイマー、ラス・タンブリンといった往年のスター俳優を起用。音楽は、盟友アンジェロ・バダラメンティが担当した。

　リンチとフロストは物語に、コーヒー、チェリーパイ、ドーナツ、丸太、ふくろう、火といったモチーフを散りばめた。滝、ネイティブ・アメリカンなど、ロケ地であるスノコルミーからの着想も多い。ちなみに、クーパーがローラの遺体を調べるシーンで起こる蛍光灯の点滅は、意図したものではなく、もともと点滅していた蛍光灯を気に入ったリンチが交換させずにそのまま撮影したことから生まれたもの。キラー・ボブというキャラクターは、大道具係のフランク・シルヴァが誤ってセットのベッドルームに閉じ込められてしまったことをきっかけに思いつき、彼をそのまま役に起用した。こうした必然ともいうべき偶然の数々が世界を形作っていったのだ。

　米国でのパイロット版の初放映は90年4月8日。全米視聴率21・7％、チャンネル占拠率33％を獲得。かくして『ツイン・ピークス』は、TVシリーズとしてスタートを切った。

## ローラの日記とコカイン

アメリカ・ワシントン州、カナダ国境から南に8キロに位置するのどかな田舎町ツイン・ピークス。89年2月24日の朝、ビニールに包まれたローラ・パーマーの死体が湖岸で発見される。ローラはまだ17歳。町の人気者で優等生、金髪の美少女だった。

　その頃、ローラの母親セーラは、家にいない娘の行方を案じていた。

　グレート・ノーザン・ホテル。街の有力者であり経営者ベンジャミン・ホーンは、

ローラの父親で弁護士のリーランドの力を借りて、パッカード家の土地であるゴーストウッドを、勝手にノルウェーのビジネスマンたちに売り払おうとしている。そこへ保安官のハリー・S・トルーマンがやってきて、リーランドに娘ローラの死を告げる。

ローラのボーイフレンド、ボビー・ブリッグスが、密かに付き合っているダブルRダイナーのウエイトレス、シェリー・ジョンソンを迎えに来る。彼女の家の前には不在のはずの夫レオのトラックが止まっている。

ツイン・ピークス高校にもローラの死の知らせが届く。ローラの親友のドナ・ヘイワードは泣き崩れる。ボビーは事情聴取のため警察に連行される。

警察の捜索が行われているパーマー家で、ローラの部屋から日記とビデオテープが発見される。ちょうどその時、パッカード製材所に勤めるポラスキーの娘も行方不明になっていると判明。製材所のオーナーだったアンドルー・パッカードの未亡人ジョシーは、義妹キャサリン・マーテルの反対を押し切って、喪に服すため製材所の機械を止める。

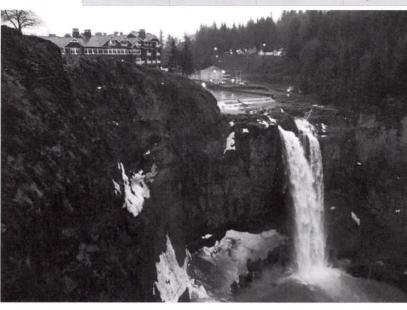
鉄橋。傷だらけの下着姿でふらふらと歩くロネット・ポラスキーが見つかる。ロネットが州境を超えたため、FBIのデイル・クーパー捜査官がツイン・ピークスに派遣されてくる。

カルフーン記念病院。数度にわたり暴行を受けていたロネットは昏睡状態に陥っている。霊安室でクーパーは、ローラの薬指の爪の間から「R」と書かれた小さな紙片を取り出す。クーパーは前の年に発生したテレサ・バンクス殺人事件と関連があると確信する。

ベン・ホーンの娘オードリーは、近くで殺人があったことをノルウェーのビジネスマンたちに話す。驚いた彼らは、土地の売買契約を白紙に戻し、緊急帰国する。

ローラの日記には白い粉と鍵の入ったビニール袋がはさまれていた。クーパーが白い粉をコカインと断定するが、優等生のローラしか知らないハリーにはとても信じられない。日記には「Jに会うのが怖い」という記述。ビデオテープにはピクニックではしゃぐローラとドナ。ローラの瞳にはバイクが映

episode 0

り込んでいる。鍵はローラの貸し金庫のものだった。中には1万ドルの現金とロネットの個人広告が載った雑誌「肉体の世界」。同じページにレオ・ジョンソンのトラックも写っている。

ローラの殺人が行われたのは町外れの古い貨車の中だった。現場にやってきたクーパーとハリーは、割れたハートのネックレスと、血で「火よ、我とともに歩め」と書かれた紙切れを見つける。

ローラの秘密の恋人ジェームズが、もう片方の割れたハートのネックレスを握っている。

ドナは、父親であるドクの話から、ハートのネックレスの片割れを警察が探していることを耳にし、ジェームズに伝えようとロードハウスへ向かう。森で落ち合ったドナとジェームズは、お互い慰めあっているうちにキスをする。サイレンの音を聞き、2人はあわててハートのネックレスを土の中に埋める。帰り道、ドナを尾行してきたクーパーとハリーに見つかり、ジェームズは留置場に勾留される。

仕事を終えたハリーがジョシーに会いに行き、2人はキスを交わす。

セーラは家でビジョンを見る。手袋をした手が土の中からハートのネックレスを取り出している……。

## 『インターナショナル版』で追加された20分

パイロット版は、評判がよければそのままシリーズ化するという前提で制作されはしたが、シリーズ化した際の追加予算獲得のため、1本の完結した映像作品としてヨーロッパで販売できるよう、事件が解決された追加エンディングがあるバージョンを制作することが契約に含まれていた。これにより、全米放映のパイロット版とは別に、事件解決までが描かれたインターナショナル版と呼ばれる別のバージョンが誕生した。

インターナショナル版のために撮影されたのは、赤い部屋、小人、キラー・ボブ。自身の最高傑作というほどこのシーンを気に入ったリンチは、シリーズに大幅に採用する。

ちなみに当時、日本で観ることができたのはこのインターナショナル版のみで、通常版ともいうべきアメリカのパイロット版を見る術がなかったため、当時のファンは第1章

への物語の流れを理解できず混乱をきたした。インターナショナル版の後半はこうだ。

セーラはローラのいなくなった朝を思い出していた。すると、ローラのベッドの足元に不審な男がいたことが頭をよぎり大声で叫ぶ。「犯人を見たわ！」

リーランドの依頼で、ホーク保安官補がその男の似顔絵を書く。

ベッドで寝ているクーパー。夢にうなされている。クーパーの見ている夢は……。

テレサ・バンクス殺人事件の犯人を知っているという謎の男からの電話。病院にいるから来いと言われ、クーパーは病院に向かう。

ローラの遺体が置かれていた部屋。変圧器の調子がおかしいから蛍光灯をつけないでくれという片腕の男。

**来るべき過去の闇を**
**見通すのが魔術師の望み**
**2つの世界の間から声が放たれる**
**火よ　我とともに歩め**

男はマイクと名乗り、コンビニエンスストアの2階に暮らしていたと語る。殺人犯の名前はボブで、ボブは傷ついた人間を餌食にするという。マイクはボブを1年以上見張っており、彼自身も悪魔に魅入られていたが、入れ墨を入れた左腕を肩から切り落として生まれ変わったことを告白。ハリーがマイクに、セーラの見た長い髪の男の似顔絵を見せると、この男こそがボブであると証言する。

ボブは病院の地下室にいた。足元には丸く並べられた12本のロウソク。宙を見ながらマイクに語りかけるボブ。

**気をつけろ　耳を澄ませ**
**親分が呼んでいる**
**夜が来て　朝になる**
**俺の死の手がお前をつかむ**

ボブは、テレサとローラの爪の間にはさんだ紙に書いた文字の意味は「ROBERT」、つまり自分の名前の一部だと話し、「また人を殺す」とのうのうと言う。その瞬間、片腕のマイクがボブを射殺。マイク自身も心臓発作で倒れる。

クーパーがロウソクを見ながら「願い事を」とつぶやくと、ロウソクの炎が消える。

25年後、赤い部屋。クーパーとローラに似た女性がソファに座っている。小人が「さあ　やろう」と手をすり合わせる……。

そして、第2章の赤い部屋のシーンにつながるのだ。

episode 0

## 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

作品論（P.88～）でも述べたように、92年の劇場版『ローラ・パーマー最期の7日間』、さらに『The Return』を経た現在、オリジナルの「ツイン・ピークス」の意味合いは大きく変化したものとなっており、90年代にオリジナル版が放映されたとき、実際に何が起きていたのか、正確に伝えることは難しくなってきている。スノコルミーおよびノース・ベンドを中心としたロケーション撮影の効果は絶大で、スタジオ撮影と、ロス近郊のロケばかりになってしまった第1章以降とは一線を画すビジュアルが圧倒的だ。

唐突なオチをつけたことで物語が実質的に終わってしまう『インターナショナル版』には賛否両論あるが、赤い部屋のフル・シークエンスが観られることに加えて、サラ・パーマーがローラの部屋に「いた」ボブを幻視する場面は一種の発明といえるもので、恐怖映画作家としてのリンチを強烈に印象づけるものだ。

# 第1章 Traces to Nowhere

Episode1

●監督：デュウェイン・ダナム
●脚本：デイヴィッド・リンチ、マーク・フロスト
●米国放映日：1990年4月12日　46分

## ローラはコカイン中毒で、死ぬ直前に3人と性交渉をしていた。セーラは髪の長い謎の男の幻影を見る

各章のサブタイトルは、リンチ／フロストによる正式タイトルではなくドイツでの放映時につけられたものだが、ファンの間に広く浸透しているため記すことにする。

リンチは第1章の監督に『ブルーベルベット』やTPパイロット版を編集したデュウェイン・ダナムを指名。彼に『ワイルド・アット・ハート』の編集を頼みたかったリンチが、すでに決まっていた別の仕事を断らせ、それを正当化するために監督を依頼したといわれている。ダナムはこれが初監督だった。

グレート・ノーザン・ホテル。クーパーはオードリー・ホーンから、ローラがオードリーの兄ジョニーの家庭教師をしていたと聞く。

保安官事務所。ドク・ヘイワードの検死報告によると、ローラの死因は無数の小さな傷からの出血多量、死ぬ前の12時間以内に少なくとも3人の男性との性交渉があったことが判明。ロネットも同じ犯人に襲われていた。

レオの洗濯物の中に血まみれのシャツを見つけたシェリーは引き出しの奥にそれを隠す。

ジェームズは取り調べで、ピクニックの映像を撮ったのは自分だと認め、事件の夜、ローラは突然バイクを飛び降りて消えたと話す。

ブルーパイン・ロッジに事情聴取に来たクーパーとハリー。ピートは誤って魚の入ったポットからコーヒーを淹れてしまう。ジョシーはローラから英語を習っていたという。クーパーは、ジョシーとハリーが恋仲であることをひと目で見抜き、ハリーを驚かせる。

パーマー家。お悔やみのためセーラを訪ねたドナ。ドナを抱きしめていたセーラは、謎の男の幻影を見て悲鳴をあげる。

ダブルRダイナー。ノーマからローラが手伝っていた食事宅配サービスの名簿を受け取るクーパー。丸太おばさんは、ローラが死んだ夜、丸太が何かを目撃したと話す。

精神科医のジャコビーは、ローラの診察テープを聞きながら涙を流す。手には土から掘り出したハートのネックレスを持っている。

episode 1

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

『ツイン・ピークス』を代表する名セリフ「Damn Good Coffee」を注いだウェイトレス（役名：トゥルーディ・チェルグレン）を演じたのはジル・エンゲルス。オリジナル・シリーズの製作者であり、全11章および『ローラ・パーマー最期の7日間』の脚本を手がけたロバート・エンゲルスの妻である。サラ・パーマーはドナの顔の上にローラの顔のビジョンを観るが、シリーズを通じてサラ・パーマーが同様のビジョンに苦しめられている悲しい理由も『The Return』で明らかになった。

監督のデュウェイン・ダナムは『ブルーベルベット』および『ワイルド・アット・ハート』の編集を手がけた人物で、編集者として『レイダース／失われたアーク〈聖櫃〉』、『スター・ウォーズ／帝国の逆襲』『同／ジェダイの復讐』の編集にも携わっている。リンチ組とルーカス組を結ぶミッシング・リンクがデュウェイン・ダナムだと見ることもできる。

# 第2章 Zen and the Art of Killer-Catching

Episode2

◉監督：デイヴィッド・リンチ
◉脚本：デイヴィッド・リンチ、マーク・フロスト
（ハーリー・ペイトン）
◉米国放映日：1990年4月19日　47分

## クーパーは夢を見る。
## 片腕の男。小人。キラー・ボブ。そして赤い部屋――

インターナショナル版のエンディングのために制作された赤い部屋のシーンを気に入っていたリンチは、第2章でクーパーの夢の一部として取り入れた。発想の源は、リンチとフロストが企画していた『ロニー・ロケット』のためのプロット「電気と3フィートの赤毛の男」。リンチは、赤い部屋のアイデアが浮かんだ際、すぐに小人役のマイケル・J・アンダーソンの起用を思いついたという。

ベン・ホーンと弟のジェリーは、カナダ側に位置するカジノ兼売春宿の「片目のジャック」へ、新人の女の子の品定めをしに訪れる。ベンの経営するこの店は、ホーンズ・デパートの香水売り場で働く女の子をスカウトしている。

グレート・ノーザン・ホテル。ホークからクーパーへ、片腕の男が病院にいたとの連絡。その時ちょうど「片目のジャック」と書かれた香水の香りがするメモが差し込まれる。

クーパーは、ローラが日記に書いていた「J」の存在を探り当てようと、夢で学んだチベットの演繹法的捜査テクニックを行う。浮かび上がったのはレオとジャコビー。

FBIの検視官アルバートが保安官事務所に到着。優秀だがデリカシーがなく、田舎をバカにする発言をしてハリーを怒らせる。

ブルーパイン・ロッジ。ジョシーは、ピートの協力を得てキャサリンが隠していた製材所の二重帳簿を見つける。

グレート・ノーザン・ホテル。夢を見ているクーパー。赤い部屋に片腕の男、そしてキラー・ボブ。小人が奇妙な声で言う。

**我々は小鳥がさえずる場所から来た**
**いつも音楽が流れていた**

すると音楽が流れ、小人が踊り始める。ローラそっくりの女性がクーパーに近づき、口づけしたあと耳元で何かをそっと囁く。不思議な夢から目覚めたクーパーは、ハリーに犯人がわかったと電話する。

episode 2

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

カナダにある地下カジノ・売春宿「片目のジャック」。ボートでやってきたベンジャミンとジェリーのホーン兄弟を迎えたグラマラスな美女（役名：スワッビー）を演じたのは、チャーリー・リン・スプラッドリング。『ワイルド・アット・ハート』で、主人公セイラー（ニコラス・ケイジ）の回想シーンに登場する美女である（『ワイルド～』では股を開いて「ピーチを味わいたくない？」と言う）。

チベット式石投げ推理シーン、オードリーのダンスなど見せ場の多い章だが、ネイディーンが既に怪力を発揮してボート漕ぎマシンを破壊しているのにも注目。赤い部屋の場面がクーパーの夢として復活……したのは良いが、赤い部屋と同じく『インターナショナル版』にはあったリーランドがルーシーの自宅に深夜、電話をしてくる場面はストーリー上復活せず。仕方のないことではあるが、アンディがトランペットを吹く唯一の場面が失われてしまったのは残念。

# 第3章 Rest in Pain

Episode3

●監督：ティナ・ラズボーン
●脚本：ハーリー・ペイトン
●米国放映日：1990年4月26日　47分

## クーパーの夢に秘められた暗号——。ハリーは言う。「森には邪悪な存在がいる」

ローラ役のシェリル・リーが、従姉妹のマデリーンとして再登場。パイロット版の時点では死体役だけの予定だったが、リンチが彼女の演技を気に入り、別の役で登場することになった。監督のティナ・ラズボーンは、自身の長編デビュー作『ゼリーと私』（88年）でリンチを主人公の恋人役として起用している。同作の主演は、実際にリンチの恋人だったイザベラ・ロッセリーニ。

グレート・ノーザン・ホテル。クーパーは香水の匂いで昨夜のメモがオードリーからのものだと気づく。クーパーを手伝いたいオードリーは「片目のジャック」が売春宿であることをほのめかし、ローラがホーンズ・デパートの香水売り場でバイトしていたことを話す。

クーパーはハリーに昨夜見た夢の話をするが、肝心の犯人の名前を覚えていない。

ローラの従姉妹であるマデリーンが葬儀のためにツイン・ピークスにやってくる。髪の色が違いメガネをかけているものの、見た目はローラと見間違うほどそっくりだ。

ダブルRダイナー。ノーマが弁護士と夫ハンクの仮釈放の審問の打ち合わせをしている。釈放を望んでいないノーマは浮かない顔。

レオへの事情聴取。レオは、ローラを知らず、事件の夜はモンタナ州にいたと話す。

アルバートの検死でローラの胃から「J」と書かれたプラスチック片が発見。ローラはコカイン常習者で、2度縛られた形跡があった。

ローラの葬儀。ボビーが「ローラが死んだのは見て見ぬふりをしていたお前たちのせいだ」と参列者を偽善者呼ばわりし、ジェームズに殴りかかる。その騒ぎの中、リーランドはローラの棺桶に飛び乗り泣きじゃくる。

ダブルRダイナー。ハリーはクーパーに麻薬の運び屋と思われるジャック・ルノーを見張っていることを打ち明ける。さらに、ツイン・ピークスの森には邪悪な存在がいて、先祖代々それと戦うブックハウス・ボーイズという自警団を運営していると話す。

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

劇中劇としてソープオペラ『愛情への招待』が登場。『愛情への招待』はメイン・ストーリーと表裏一体の関係を構築するのではないかと思われたが、そこまで深く掘り下げられることはなかった。とはいえ、安っぽいソープオペラのパスティーシュたる『愛情への招待』にも観るべき点はあって、それはこの架空のドラマのロケ地がフランク・ロイド・ライトの設計したエニス邸だということである。エニス邸は多くの映画に登場する有名建築だが、わけても『ブレードランナー』の主人公デッカードのマンションのロケ地として良く知られている。

『ツイン・ピークス』は、もともとソープオペラを脱構築するべく構想されたドラマだが、本章に顕著なように、とにかく登場人物が他人の話を立ち聞きしたり盗聴してばかりなのも「ソープオペラ感覚」を強調するものだ。アルバートのイヤミな名台詞「Look, it's trying to think」には全米が吹いた。

episode 3

# 第4章 The One-Armed Man

Episode4

●監督：ティム・ハンター
●脚本：ロバート・エンゲルス
●米国放映日：1990年5月3日　47分

## セーラが幻影で見た髪の長い謎の男は、クーパーが夢で見たキラー・ボブだった

ジャコビーの衣装や自宅の内装はすべてラス・タンブリン本人が手がけたもの。赤青のサングラスはもちろん、衣装はわざわざハワイから通販で取り寄せていたという。キャスティング・ディレクターはリンチ組の常連ジョアンナ・レイで、彼女はレオ・ジョンソン役のエリック・ダレの母親でもある。

セーラが家で見た幻をもとにホークが似顔絵を書く。それはクーパーの夢に出てきたキラー・ボブと同じ男だった。

クーパーがジャコビーから事情聴取。ジャコビーは、ローラには秘密があり、その秘密の壁を破れなかったといい、ローラが死んだ次の日の夜、ローラが話していた赤いコルベットの男を尾行したが旧道で見失ったという。

ハリーの情報によりレオが赤いコルベットを持っていることを確認。ジャック・ルノーは行方不明で、弟ベルナールも姿を消したという。クーパーの上司ゴードン・コールからの電話で、ローラを縛った紐はフィンリー社製、肩の傷跡は鳥がついばんだ跡だと判明する。

ホークから片腕の男を見つけたという電話。男の名前はフィリップ・マイケル・ジェラード、靴のセールスマンをしており、キラー・ボブの似顔絵を見ても知らないと話す。

ツイン・ピークス高校。オードリーは、ローラの親友ドナに自分の捜査への協力を頼む。

モーテルを見張りながら写真を撮っているジョシー。ベンとキャサリンはベッドの上で、製材所へ放火し、その罪をジョシーに着せようと陰謀をはりめぐらせている。

ノーマの夫であるハンクの仮釈放が決まる。

クーパーはライデッカー動物病院のカルテを取り寄せて鳥を探す。病院の隣のコンビニではフィンリー社製の紐が売られているという。

アルバートからのFAXで、ローラの胃の中のプラスチック片は「片目のジャック」のポーカーチップで、ローラの肩に傷をつけたのは九官鳥のウォルドだと判明。

ベンはレオに製材所への放火を命じる。

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

現実世界での片腕の男の名前「フィリップ・ジェラード」はTVドラマ『逃亡者』（63年～67年）に登場する警部の名前の引用。『逃亡者』は、妻殺しの罪で警察に追われる医師キンブルの物語だが、彼が目撃した真犯人もやはり片腕の男だった。片腕の男を演じたアル・ストロベルは若いときに交通事故で腕を失っている。「ライデッカー動物病院」および、ローラの殺害を「目撃」していた九官鳥の名前「ウォルド」は、オットー・プレミンジャー監督のフィルム・ノワール『ローラ殺人事件』（44年）からの引用（死んだ女ローラと知己のあった人気エッセイストの名前が「ウォルド・ライデッカー」）。

動物病院の外観として使われた「ザ・ロック・ストア」は、オートバイ・マニアが集うことで知られるハリウッドのレストラン兼ガソリンスタンドで、レストランになる前はセシル・B・デミルやルドルフ・ヴァレンチノも訪れた温泉リゾートであった。

episode 4

# 第5章 Cooper's Dreams

Episode5

●監督：レスリー・リンカ・グラッター
●脚本：マーク・フロスト
●米国放映日：1990年5月10日　47分

## 丸太が目撃したローラを追う“第三の男”の存在。九官鳥のウォルドがローラ殺人事件の犯人を知っている

TPの物語は当初、ローラと関係のある人物の描写が中心で、犯人探しのミステリーは主軸ではなく背景の予定だった。しかし、人気が高まるにつれテレビ局からの犯人を明かせという圧力が増し、リンチとフロストは第2シーズンでそれに屈する。リンチは「犯人を知りたいという観客の欲求により『ツイン・ピークス』が死んでしまった」と話している。

ジャック・ルノーのアパートの家宅捜査。山小屋の写真と雑誌「肉体の世界」が見つかり、両方に赤いカーテンが写っている。「肉体の世界」にはロネットの広告と同じページにレオのトラックも載っている。

エドのガソリンスタンド。エドとノーマは、それぞれのパートナーを見捨てることができず、しばらく会わない決心をする。

事件を調べているオードリーは、ホーンズ・デパートの香水売り場でバイトをはじめる。ダブルRダイナー。ドナとジェームズがマディに犯人探しへの協力を依頼する。

ジャコビーのオフィス。ボビーはカウンセリング中に、ローラは人を堕落させようとしていた、ボビー自身もその犠牲になり麻薬の売人になってしまったと泣きながら話す。

クーパーとハリーはジャックの山小屋を目指している道中、丸太おばさんの山小屋に招き入れられる。ローラが死んだ夜、丸太は笑い声を聞き、男2人に女2人、そしてあとをつける第3の男が通ったのを見たという。

さらに森の奥。たどり着いたジャックの山小屋から、九官鳥のウォルド、「片目のジャック」の「J」の部分が欠けたポーカーチップ、フィルムの入ったカメラが見つかる。

パーマー家。マディがローラの部屋でカセットテープを発見する。

ハンクに殴られ血だらけで家に入ってきたレオに突き飛ばされたシェリーがレオを撃つ。

グレート・ノーザン・ホテル。部屋に戻ったクーパーが誰かの気配を感じ銃を構えると、ベッドの中にオードリーが隠れていた。

episode 5

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

ヒッチコック作品『めまい』（58年）にリンチ作品が多くを負っていることは一目瞭然で、『ツイン・ピークス』を筆頭に『ロスト・ハイウェイ』や『マルホランド・ドライブ』においても「ドッペルゲンガー」テーマが繰り返し探求されている。本章では美容院帰りのノーマとシェリーが同じ髪型とメイクアップでダブルRダイナーに出勤する場面があり、ここにも『めまい』の残響が感じられるが、単に思わせぶりなだけで後の展開とは関係がない。

全体の脚本が完成してから製作に入った『The Return』と違い、打ち切りの可能性を常に抱えながら（実際、打ち切りになったわけだが）1章ずつ製作していたオリジナル・シリーズには、回収されずに終わった伏線や「思わせぶり」な描写が続出する。アイスランド美女ヘバを演じたメアリー・スターヴィンは『オクトパシー』（83年）と『美しき獲物たち』（85年）で2回ボンドガールを演じている。

season 1 | season 2 | fire walk with me | season 3 | on the air

# 第6章 Realization Time

Episode6

●監督：キャレブ・デシャネル
●脚本：ハーリー・ペイトン
●米国放映日：1990年5月17日　46分

## 「片目のジャック」に潜入したオードリー。ドナ、ジェームズ、マディがジャコビーに近づく――

TPの脚本は順を追って書かれていたため、それまでの脚本家が入れ込んだ要素を次の担当者が受け継ぎ、自由にキャラクターをふくらませていった。オードリーがさくらんぼの茎を結ぶシーンは、脚本担当のペイトンの友人の女性が実際に披露したものを取り入れたとか。シェリリン・フェン自身はうまくできなかったが、シェリー役のメッチェン・アミックは上手に結べたという。

クーパーは「君に必要なのは友だちだ」とオードリーを優しく諭して服を着せる。

保安官事務所。クーパーは九官鳥のウォルドの近くに音声に反応するテープレコーダーを設置。鑑識の結果、山小屋にはローラ、ロネット、レオがいたことが判明。ポーカーチップもローラの胃にあったものと一致。

レオは、シェリーの浮気相手がボビーだと気づき銃を構えるが、ウォルドに話しかけるルーシーの無線を傍受、ウォルドを狙撃する。

ローラがジャコビーに宛てたカセットテープを聞くドナとジェームズ、マディ。肝心の2月23日のテープがないことに気づき、ジャコビーの診療所から盗み出す計画をたてる。

保険会社の営業マンが、契約書のサインが抜けていたとキャサリンに会いに来る。キャサリンは自分に多額の生命保険がかけられていたことを知る。受取人はジョシー。

保安官事務所。録音されたウォルドの声。「ローラ。行かないで。痛いわ。痛い。やめて、やめて。いや、レオ、いや、レオ」

「片目のジャック」に潜入したクーパーとエド。カジノではクーパーが勝ち続けている。

オードリーは、「片目のジャック」の女主人ブラッキーとの面接にこぎつける。さくらんぼの茎を舌で結んでみせて見事採用される。

ローラに扮したマディのビデオメッセージを使ってジャコビーを外におびき出し、その隙にドナとジェームズが診療所に忍び込む。その様子を伺っていたボビーはジェームズのバイクのタンクにコカインを仕込む。

episode 6

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

「片目のジャック」でオードリーが名乗った源氏名「ヘスター・プリン」は、もちろんナサニエル・ホーソーンのゴシックロマン小説『緋文字』の主人公より。また、ドレッドヘアのディーラーがいるポーカーテーブルの後ろには、カウボーイの彫刻と一体となったスロットマシンが確認できる。これは1950年代にフランク・ポークが西部時代をモチーフに製造したスロットマシンをベースにしたレプリカだと思われる（レプリカは1970年代にマニー・サンチェスによって製造された）。
「片目のジャック」はポーカーの手を指す言葉だが（スペードとハートのジャックが横を向いていて片目しか見えないことに由来）、『The Return』のウォーリー・ブランド（マイケル・セラ）がもろに『乱暴者』（53年）のマーロン・ブランドの格好で登場したことを考え合わせると、やはりブランド主演の映画『片目のジャック』（61年）を想起せざるを得ない。

# 第7章 The Last Evening

Episode7

◉監督：マーク・フロスト
◉脚本：マーク・フロスト
◉米国放映日：1990年5月23日　46分

## 製材所が放火、ジャック・ルノーは窒息死、ネイディーンは自殺未遂、クーパーは凶弾に倒れる

この章で第1シーズンが終わる。映画と違いテレビでは、大勢の演出家、脚本家と関わる必要があるため、思い通りに作れなかったと振り返るリンチ。第2シーズンの出来についても悔しい気持ちを隠しておらず、フロストと共に作り続けていれば違ったものになっていたはずだと語っている。このときの後悔の念が『The Return』へとつながるのだ。

ドナとジェームズは、ジャコビーの診療所からローラのテープと割れたハートのネックレスを盗み出す。公園にいるマディをローラと思い込むジャコビー。背後からマスクの男に襲われ心臓発作を起こす。

「片目のジャック」のカジノで、ジャック・ルノーからローラとの山小屋での一夜を聞き出したクーパーは、彼をアメリカ側におびき出して逮捕する。抵抗したジャックはアンディに撃たれ病院に搬送される。

シェリーの浮気に怒ったレオは、製材所にシェリーを縛りつけ、発火装置をしかける。

エドの家。カーテンレールの特許申請を却下されたネイディーンが自殺未遂をはかる。

キャサリンは、正体不明の男から、探しものが第3倉庫にあるという電話を受ける。

テープを保安官に渡しに来たジェームズ。バイクからコカインが見つかり勾留される。

シェリーに会いに来たボビーは、斧を持ったレオに襲われるが、窓の外から銃撃されレオが倒れる。窓の外にはハンクがいる。

キャサリンが製材所の第3倉庫にやってくると発火装置が作動して倉庫に炎が広がる。縛られたシェリーを助けて共に逃げ出す。

リーランドは、集中治療室のジャック・ルノーの部屋に忍び込み、枕を押し付けて殺す。

「片目のジャック」の面接に合格したオードリーが、新人の面接に来るというオーナーを待ち受けていると父親のベンがやってくる。

グレート・ノーザン・ホテル。ドアのノックをルームサービスだと思ったクーパーがドアを開けた瞬間、何者かに撃たれる。

episode 7

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

「この回は、とにかくシーズンの存続のため、考えうる限りのクリフハンガーを詰め込んだ」とマーク・フロストが語る通り、本章ではネイディーンが自殺を図り、シェリーとキャサリンが製材所の火災に巻き込まれ、ジャック・ルノーが殺され、ジャコビー先生が殴打されて意識を失い、レオ・ジョンソンが撃たれ、さらにクーパー自身まで謎の人物に撃たれてしまうという満漢全席っぷり。

マーク・フロストが監督した唯一のエピソードでもある。「片目のジャック」でオードリーに服を着せてくれる謎の傴僂女を演じたのはレスリー・リンカ・グラッターで、彼女は監督として『ツイン・ピークス』オリジナル・シリーズを4章、また『オン・ジ・エアー』を2話担当している。ABCは本エピソードの予告に、ハリーが「貴様をローラ・パーマー殺しで逮捕する」という場面を使ったため、犯人が明らかになるのでは？と期待したファンの怒りを買うことになった。

# The PERFECT EPISODE GUIDE to TWIN PEAKS

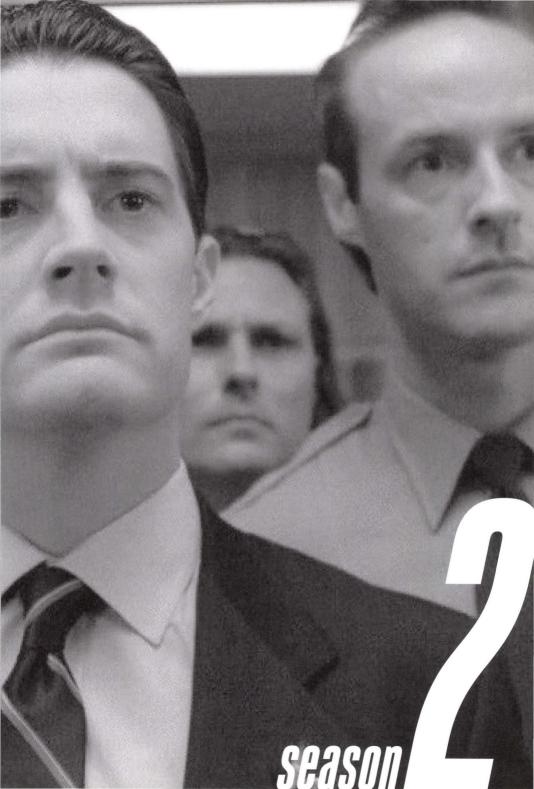
# ツイン・ピークス 全エピソード解説

［シーズン2］編

Episode 8 ～ Episode 29

文◎北原香

season 2

season 1 | season 2 | fire walk with me | season 3 | on the air

# 第8章 May the Giant be with You

Episode8

●監督：デイヴィッド・リンチ
●脚本：マーク・フロスト
●米国放映日：1990年9月30日　93分

## クーパーに3つのヒントを授ける巨人。そして、「レオの家に手がかりがある」

撃たれたクーパー。ホテルの老ウエイターがゆっくりとホットミルクを運んでくる。倒れているクーパーにも動じず、外れた受話器を直し、「お噂はかねがね」とウインクをして去る。しばらくすると部屋が暗くなり巨人があらわれ、クーパーに3つのことを告げる。

1．笑う袋の中に男がいる
2．フクロウは見かけとは違う
3．薬品なしで男は指さす

巨人は、クーパーの左の小指から金の指輪を外し、「この3つが真実とわかったときに返す」という。もう1つのヒントは「レオの家に手がかりがある」

片目のジャック。品定めする新人が娘のオードリーとはつゆ知らず手を出そうとするベン。オードリーが必死に隠れていると、間一髪、ベンがジェリーに呼ばれて出ていく。

倒れているクーパーのもとにハリーたちが到着。急いで病院に運ぶ。翌朝、クーパーが目覚めると、昨夜起きたことをルーシーが説明する。レオが撃たれ、ジャック・ルノーは絞殺、製材所は全焼、シェリーとピートは煙を吸い込んで入院、キャサリンとジョシーは行方不明、ネイディーンは自殺未遂で昏睡状態。事態を聞いたクーパーは、ドクが止めるのも聞かず、肋骨が折れたまま捜査を開始する。

パーマー家。一晩で白髪になったリーランド。セーラは再びキラー・ボブの幻を見る。

レオの家から、雑誌「肉体の世界」とコカイン、サークル印の新品の靴が発見される。

取調室。クーパーは、ジェームズが割れたハートのネックレスを持っていることを見抜く。

クーパーたちは病院でジャコビーを尋問。同じ集中治療室にいたジャックが殺されたとき、エンジンオイルが焦げたような匂いがしたというジャコビー。

ドナは、ノーマに電話をかけ、ローラがやっていた食事宅配サービスを引き継ぐ。

病院。ロネットが悪夢を見て目覚める。

episode 8

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

『パイロット版』、『第2章』に続きデイヴィッド・リンチ自身が監督したエピソードだが、監督候補として当初取りざたされていたのは、なんとスティーヴン・スピルバーグだったという。スピルバーグは『ツイン・ピークス』の大ファンで、マーク・フロスト、ハーリー・ペイトンと会食した際、第2シーズンの開幕をスピルバーグ監督回で飾ってはどうか、という話が持ち上がったのだ。

マディが「夢で見たのと同じ角度から」カーペットに起きる異常現象を目撃する場面は、のちにより洗練された恐怖場面として『マルホランド・ドライブ』で反復されることになった（『マルホランド・ドライブ』では「夢で恐ろしい人物に会った」ファミレスの裏へ向かうと、まさに夢と同じことが起きる）。白髪になったリーランドが歌う「メアジー・ドーツ　Mairzy Doats」はザ・メリー・マックスのヒット曲（44年3月ビルボード1位）。TVリポーター役でマーク・フロストも登場。

# 第9章 Coma

Episode9

◉監督：デイヴィッド・リンチ
◉脚本：ハーリー・ペイトン
◉米国放映日：1990年10月6日　46分

## キラー・ボブの幻影を見るマディ。オードリーは「片目のジャック」で囚われの身に――

ジャック・ルノーは検死の結果、枕による窒息死だと判明。クーパーを狙撃した犯人の手がかりはまだない。アルバートは、クーパーの同僚だったウィンダム・アールが精神病院を脱走し姿を消したことを告げる。

ドナが食事宅配サービスへ。トレモンド夫人に食事を届けると、孫らしき少年が手品でお皿の上のクリームコーンを消す。夫人から隣のスミスさんがローラの友だちだったと聞く。少年はフランス語で「僕の心はひとりぼっち」とつぶやく。ドナは隣の家をノックするも返事がなく、メモを残して立ち去る。

病院。意識を取り戻したロネットにキラー・ボブの似顔絵を見せると、激しく興奮し「汽車、汽車……」と口走る。

ベンとジェリーが、製材所の2冊の帳簿を眺めながら、実際の業績を示したものと業績をあげているように調整したもの、どちらを処分するか話し合っている。結論が出ずマシュマロを焼くホーン兄弟。

丸太おばさんが少佐に、丸太からの言葉として「メッセージを伝えなさい」と告げる。

保安官事務所。ルーシーから妊娠を聞かされたアンディは、自分は無精子症なのにどうして妊娠したのかとルーシーを問いつめる。

ベンはクーパーにオードリーが2日前から行方不明だと電話する。

植物人間の可能性があるというレオ。ボビーとシェリーは、障害者向けの保険金を目当てにレオを引き取ることにする。

ヘイワード家。ジェームズがマディやドナと一緒に歌を録音している。歌の途中、ジェームズとマディが見つめ合っていることに気づいたドナは思わず家を飛び出す。残されたマディはキラー・ボブの幻影を見る。

「片目のジャック」に潜入していたオードリーは、客としてやってきたホーンズ・デパートの支配人バティスから、ベンが店のオーナーであり、ローラとも寝ていたことを聞き出す。だが、クーパーに電話しているところを女主人ブラッキーに見つかり監禁される。

episode 9

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

第8章と連続して、これもリンチ監督回。リンチが監督した章は、オープニングのクレジット場面に巨大丸太の映像が挿入されているので容易に判別できる（パイロット版を除く）。異界と繋がっていると思われる老婆トレモンド夫人を演じたフランセス・ベイは『ブルーベルベット』でバーバラ叔母さんを、また『ワイルド・アット・ハート』ではミスター・となかいの館のマダムを演じていたことでファンにはおなじみ。

トレモンド夫人の孫を演じているのはリンチの実の息子オースティン・リンチ（当時10歳）。この場面では、クリームコーン＝「ガルモンボジーア」＝他者の恐怖､の繋がりが既に示唆されている（トレモンド夫人は「クリームコーンは嫌いだから食事に入れないでくれと頼んだ」と主張するが、と、いうことは彼女は恐怖をエサにしている存在ではない）。なお『劇場版』でトレモンド夫人の孫を演じたのはリンチの甥っ子にあたるジョナサン・L・レベルである。

season 1 / season 2 / fire walk with me / season 3 / on the air

# 第10章 The Man Behind Glass

Episode10

●監督：レスリー・リンカ・グラッター
●脚本：ロバート・エンゲルス
●米国放映日：1990年10月13日　47分

## ロネットの左手薬指の爪に仕込まれた「B」の文字。もうひとつの「ローラの日記」の存在が明らかになる

入院中のロネットが襲われ、左手の薬指の爪から「B」と書かれた紙が発見される。襲ったのは、テレサ・バンクスとローラ・パーマー殺人事件のつながりを知る真犯人だ。

ドナはローラと親しかったという青年ハロルド・スミスを訪ねる。ローラからドナのことを聞いていたというハロルドは、今は外に出られない体のため、自ら交配したランをローラの墓に供えてほしいという。

保安官事務所。被害者の爪にはさまっていた「R」「B」「T」の文字はボブと関係があるとして、似顔絵をもとに捜索するクーパー。

ジェームズのバイクにあったコカインはレオの家で発見されたものと同じだと判明。容疑が晴れたジェームズは釈放される。

ルーシーは、ホーンズ・デパートの紳士服売り場に勤めるキザな男、リチャード・トリメイン、愛称ディックと昼食に出かける。

ボブの似顔絵を見て、「彼を知っている」というリーランド。その男は祖父の別荘の隣の白い家に住んでいて、名をロバートソンといった。彼はマッチの火を投げては「坊や、火で遊ぼう」と言っていたという。

ダブルRダイナーで、ディックに妊娠したことを打ち明けるルーシー。

片目のジャック。ブラッキーたちは、オードリーを人質にしてベンから身代金をとることを計画。オードリーにヘロインを注射する。

保安官事務所。片腕のジェラードは注射が間に合わず全くの別人に変身する。

「ボブ、近くにいるな、もう逃さんぞ」

ネイディーンの病室で、医師に勧められてベッド脇で歌を歌うエド。ネイディーンが突然、手首のチェーンを引きちぎり、起き上がる。

病院。ジャックが殺害されたときのことを全く覚えていないジャコビーに催眠術をかけて犯人を聞き出そうとするクーパー。

クーパーたちはジャック・ルノーの殺害容疑でリーランドを逮捕。

ドナはハロルドがもうひとつのローラの日記を持っていることを知る。

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

レニー・フォン・ドーレン演じるハロルド・スミスが初登場。RRの食事宅配サービス「ミールズ・オン・ホイールズ」を通じてローラと親しくなったハロルドは、彼女の秘密の日記を預かっていた。おそらく心因性の障害で屋外に出ることがかなわない、孤独で心優しいハロルドのキャラクターは『劇場版』でよりきめ細かく描かれることになった。

本章では他にもジャン・ルノー（マイケル・パークス）やディック・トレメイン（イアン・ブキャナン）など、シーズン2を牽引するアイコニックなキャラクターがデビューを飾っているが、ジャコビー先生のハワイ人妻イオラニさん（ジェニファー・アキノ）も忘れるわけにはいかない。彼女も同席する病室で、ジャコビーは「記憶を取り戻す」ために退行睡眠を試すが、80年代に一斉を風靡したこの手法については、それが虚偽記憶を生成させているだけだとして現在は否定されている。

episode 10

# 第11章 Laura's Secret Diary

Episode11

●監督：トッド・ホランド
●脚本：ジェリー・スタール、マーク・フロスト、ハーリー・ペイトン、ロバート・エンゲルス
●米国放映日：1990年10月20日　47分

## ジャック・ルノーを殺したのはリーランドだった——。オードリー誘拐の裏で暗躍するジャン・ルノーの目論見とは？

保安官事務所でリーランドの尋問が行われている。ジャック・ルノー殺害の動機は、彼が逮捕されたと聞き、ローラ殺しの犯人だと思い込んだからだという。

クーパーは、アンディの靴がレオの家で見つかった靴と同じメーカーのものだと気づく。「レオの家を探せ」という巨人の言葉を思い出し、靴が手がかりだと確信。靴を売った片腕のジェラードを探す。

ベンは「片目のジャック」のジャン・ルノーから、オードリーと引き換えに身代金をクーパーに運ばせることと、自分を商売のパートナーにするよう要求される。苛立つベン。

ノーマは、グレート・ノーザン・ホテルのフロント係から、正体不明のグルメ評論家M・T・ウェンツがツイン・ピークスにやってくるとの情報を聞く。はりきるハンク。

ハロルドの家。ハロルドがドナにローラの日記を読み聞かせている。日記が事件解決の手がかりになると考えたドナは、保安官に見せるよう頼むもハロルドは拒否。なんとかして日記を手に入れようとマディに協力を頼む。

しばらく町を留守にしていたジョシーが、大量の買い物袋を抱えて帰宅。ハリーはどこか信じきれない気持ちをおさえつつ、求められるままジョシーを抱く。キャサリンの遺体はまだ見つかっていない。

保安官事務所にスターンウッド判事が到着。ルーシーやハリーの恋の悩みをすぐさま見抜く洞察力の持ち主である。ディックは「正しいことをしなきゃ男がすたる」と中絶費用650ドルをルーシーに手渡すが、怒ったルーシーは彼を追い返す。

グレート・ノーザン・ホテルにシアトルから来たという謎の東洋人タジムラが現れる。ジョシーがピートに、従兄弟のジョナサンだと謎の東洋人を紹介する。ジョナサンはジョシーにこっそり「香港でエッカートさんがお待ちだ」と告げる。

ダブルRダイナー。暗闇で突然ハンクがジョナサンに襲われる。

episode 11

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

謎の日本人「タジムラさん」に日本中が震撼した。タジムラさんの正体はもちろんキャサリン・マーテル（パイパー・ロウリー）だが、プレスはもちろん、監督や他のキャストにもその事実は伏せられていた。公式発表は『ツイン・ピークス』の新キャストは黒澤明作品にも出ていた日本人のスター〈フミオ・ヤマグチ〉で、彼は英語が得意ではないために通訳を必要とし、またセリフは音で聞いて覚えるようにしている」というもの。

番組のクレジットからもパイパー・ロウリーの名前は外され、また撮影に際しても別の場所で特殊メイクを済ませてから、完全に「フミオ・ヤマグチ」としてスタジオ入りするという徹底ぶりだった。撮影現場でパイパー・ロウリーは低い声でインチキ日本語をぶつぶつと話し、ときには通訳（のふりをしたアシスタント）を通じて「黒澤監督なら、こんな撮り方はしない！」と監督に伝えさせるなど、別人格をとことん楽しんだという。

season 1 | season 2 | fire walk with me | season 3 | On the air

# 第12章 The Orchid's Curse

Episode12

●監督：グレアム・クリフォード
●脚本：バリー・プルマン
●米国放映日：1990年10月27日　47分

## オードリー救出作戦に乗り出すクーパー。ドナとマディはハロルドを騙し「ローラの日記」を奪おうとする

グレート・ノーザン・ホテル。撃たれた傷の痛みをやわらげるため、毎朝ヨガをやるクーパー。逆立ちになっているとベッドの下に落ちているオードリーの手紙を発見。オードリーは「片目のジャック」にいることを知る。

シェリーの家に、レオの介護のために注文した障害者用の椅子が届く。

ロードハウスでレオとリーランドの審問が始まる。第一級殺人罪で起訴されていたリーランドに保釈が認められ、植物状態となったレオは障害が重いことから免罪となる。クーパーは判事から「森に気をつけたまえ。この森はどこか異様だ」と忠告される。

エドの家。ネイディーンが退院して帰ってくる。目覚めた彼女は自分を高校生だと思い込み、しかも怪力になっている。エドと結婚したことを忘れているネイディーンは、留守番をしていた甥のジェームズが誰かもわからない。エドは「両親は旅行中だ」と説明する。

ベンのオフィス。タジムラがベンにゴーストウッド計画に投資したいと申し出る。追い払おうとするベンだったが、500万ドルの小切手を机に置かれて考えを変える。

ベンから、オードリーの身代金の受け渡しを依頼されたクーパー。保安官事務所でハリーにだけ打ち明け、秘密裏にオードリー救出作戦を練る。片腕のジェラードを見つけたというホークの報告にも落ち着かない様子だ。

「片目のジャック」に乗り込んだクーパーとハリー。ハリーの目の前でジャン・ルノーがブラッキーを刺し殺す。2人は、ヘロインでふらふらになったオードリーを救出するも、出口で用心棒に遭遇。ここまでかと思ったその瞬間、様子がおかしいと思い2人を尾行してきたホークに間一髪のところで救われる。

ハロルドのアパート。家の中で、ローラの日記を読んでもらうドナと、外で合図を待っているマディ。ドナがハロルドの気を引いている隙に、マディに忍び込んでもらう作戦だったが、ハロルドに見つかってしまう。だまされたことを知ったハロルドは激怒する。

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

リーランドの裁判、ハロルドと「秘密の日記」、それにオードリー救出作戦。もろもろ急転直下のよく出来た章。ボビーとシェリーの前に介護器具のセールスマンとしてやってきたティム・ピンクルさんを演じたデイヴィッド・ランダーは、『オン・ジ・エアー』にも劇中のTV番組『レスター・ガイ・ショー』のエキセントリックな監督役として登場。

ピンクルさんは介護器具のセールスマンだけでなく、パイン・ウィーゼル保護イベントのプレゼンターを努めたり、「ミス・ツイン・ピークス・コンテスト」の振付師もこなしており、本職がいまいちよくわからない不思議な人物でもある。簡易裁判でレオ・ジョンソンの弁護士を演じたのは有名ミュージシャンのヴァン・ダイク・パークス。

episode 12

# 第13章 Demons

Episode13

●監督：レスリー・リンカ・グラッター
●脚本：ハーリー・ペイトン、ロバート・エンゲルス
●米国放映日：1990年11月3日　47分

**クーパーに届くウィンダム・アールからの挑戦状。
マイクに変身した片腕の男。彼の言葉が指す場所は——**

ドナとマディにだまされたハロルドは、「君は汚れている。僕まで汚れてしまった」と迫る。悲鳴を聞きつけたジェームズが2人を救い出すが、残されたハロルドはランに水をやりながら泣き叫んでいる。

「片目のジャック」から救出されたオードリーがブックハウスに担ぎ込まれる。

グレート・ノーザン・ホテル。クーパーはベンに、オードリーが「片目のジャック」にいたこと、ヘロインを打たれていたこと、女主人のブラッキーがジャン・ルノーに殺されたことを報告する。

レオが家に戻ってくる。障害者向けの保険金として毎月5000ドル支給される算段のはずが、諸経費を引いて残ったのはたったの700ドル。愕然とするボビーとシェリー。

ドナはハリーに、もうひとつのローラの日記の存在を話す。そこにFBIの支局長でクーパーの上司にあたるゴードンが到着。ゴードンは耳が遠いため補聴器を使用し、大声で話している。クーパーにチェスの手が書かれた手紙を渡すゴードン。クーパーはそれがウィンダム・アールからのものだと気づく。

湖の岸辺で、ジェームズに別れを告げるマディ。自分の町に帰るのだという。

ベンに製材所を売り渡したジョシーはタジムラの小切手を受け取る。香港へ帰るなと引き止めるハリーを振り払うジョシー。

片腕の男の取り調べ。薬を打ってくれと頼むジェラードだが、クーパーは許可しない。薬が切れたジェラードはやがてクーパーの夢に現れたマイクに変身。キラー・ボブは40年も前から近くにいるという。

**木で造られた大きな家
周りを木で囲まれ
そっくりな部屋がたくさんある
毎晩　違う魂がそこにやってくる**

グレート・ノーザン・ホテルだ。

## 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

FBIゴードン・コール捜査主任役でデイヴィッド・リンチ初出演。「ゴードン・コール」は映画『サンセット大通り』（50年）に登場する人物の名前を拝借したものだが、『The Return』で「過去の記憶と自分をなかなか取り戻せないクーパー（＝ダギー）が、TVでやっていた『サンセット大通り』の〈ゴードン・コール〉という名前に反応する」という場面があったのには驚かされた。オマージュでもパロディでも良いが、原因と結果が転倒したかのような『The Return』のくだんの場面は、普通に考えれば反則としか言いようがないからである。

グレート・ノーザン・ホテルのロビーでリーランドが歌っているのは、ミュージカル『王様と私』のナンバー「Getting To Know You」。ウィンダム・アールから初めてチェスの手が届くのは、ローラ事件が収束に向かっているため、次の展開を準備しているということ。

episode 13

# 第14章 Lonely Souls

Episode14

●監督：デイヴィッド・リンチ
●脚本：マーク・フロスト
●米国放映日：1990年11月10日　47分

## フクロウがロードハウスにいる——。巨人が再び予言する「今また起きている」

クーパーとハリーは、マイクに変身し片腕の男を連れてグレート・ノーザン・ホテルに向かう。ロビーで宿泊客の顔を次々とチェックするマイクはベンが来た途端失神してしまう。

ハロルドのアパート。捜索令状を持ったホークが中に入ると、温室の天井からぶら下がる足が見える。ハロルドが自殺したのだ。床からローラの日記を発見する。

パーマー家。自分の町に帰るマディがセーラとリーランドに別れを告げる。

保険金のアテが外れたボビーとシェリー。レオが突然「新しい靴」と口走ったことから、ボビーが修理に出した靴を受け取りに行くと、踵の中から小さなカセットテープが見つかる。シェリーはレオの看病のためダブルRダイナーを辞めることにする。

オードリーはベンに「片目のジャック」のことと、ローラとの関係を白状させる。

ローラの日記を調べるクーパー。そこにオードリーが来て、ベンの話をすべて報告する。

クーパーはハリーに令状を出すよう告げる。

グレート・ノーザン・ホテル。タジムラと投資の話をしているベンの元にクーパーとハリーが到着。抵抗するベンを連行する。

パーマー家。空回りするレコード。階段を這うセーラはユニコーンの幻を見て気を失う。

ブルーパイン・ロッジで夜食を作るピート。そこにタジムラが現れて抱きつく。驚いたピートは思わずはねのけるが、彼の正体がキャサリンだと分かり喜ぶ。

丸太おばさんの「フクロウがロードハウスに」という言葉を聞き、ロードハウスにやってきたクーパーとハリー。ステージで演奏していたバンドが消え、巨人が現れる。

### 今また起きている

パーマー家。鏡の中のリーランドの顔がキラー・ボブに変わり、2階から降りてきたマディを襲う。息絶えるマディ。ボブは左手の薬指の爪の間に「O」の文字を差し込む。

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

マディが殺される場面は数種類撮影された。リーランドが殺すバージョン、ボブが殺すバージョン、そしてベンジャミン・ホーンが殺すバージョンである（ジャコビー先生が殺すバージョンが撮影されていたという情報もある）。これは出演者やスタッフにもローラ殺しの本当の犯人が誰なのか分からないようにするためである。撮影は一日がかりで行われ、朝から晩までカメラの前で繰り返し暴行され殺される芝居を演じ続けたシェリル・リーは、一日の終りにはすっかり神経が参ってしまったという。撮影後、ひとり別室に呼び出されたレイ・ワイズは、リンチから「君が犯人なんだよ。ずっと、そうだったんだ」と告げられて動揺を隠せなかった。当時レイ・ワイズは娘ができたばかりで、役の上とはいえ、自分の娘を手にかけるなどということを想像するに忍びなかったのと、犯人であるからには近々番組を去ることになる、と理解したからである。

episode 14

# 第15章 Drive with a Dead Girl

Episode15

◉監督：キャレブ・デシャネル
◉脚本：スコット・フロスト
◉米国放映日：1990年11月17日　47分

## ローラ殺害容疑で起訴されるベン・ホーンを横目に、マディの遺体を運ぶリーランドが笑っている

マディの死体をゴルフバッグにつめ、車に載せるリーランド。お別れの挨拶を言いに来たドナとジェームズに、マディはすでに故郷に旅立ったと告げる。

一晩留置場で過ごしたベン。起訴されている顧問弁護士のリーランドに代わって、東京から帰ってきた弟のジェリーが弁護をする。

グレート・ノーザン・ホテル。ロビーで踊るリーランドにハリーは、ベンを逮捕したと報告。後ろを向いて肩を震わせるリーランド。泣いているように見えるが顔は笑っている。

レオの靴から見つかったテープには、製材所を放火する相談をしているベンとレオの会話が録音されていた。ボビーは、これを使ってベンをゆすろうと考える。

ダブルRダイナー。ノーマの母ヴィヴィアンがやってくる。投資家のアーニー・ナイルズと再婚し新婚旅行に来たという。ヴィヴィアンに食事に誘われるハンクとノーマ。母と不仲のノーマは気が進まないが、ハンクが説得。アーニーはハンクの刑務所仲間だった。

ピートが留置場のベンに会いに来る。取り出したテープレコーダーにはキャサリンからのメッセージが吹き込まれている。キャサリンは、ローラが死んだ夜のアリバイを証言することと引き換えに、製材所とゴーストウッドの土地を渡すよう要求する。

ジグザグと蛇行運転をするリーランドはクーパーたちの車にぶつかりそうになり止められる。リーランドはベンが電話で「ダイアリー」と言っていたと証言する。

取調室。片腕のマイクは、ベン・ホーンはボブではないと証言。クーパーはその言葉を信じ、真犯人は別にいると確信するが、ハリーは、日記という物証が出てきたとしてベンの勾留継続を主張。ベンを殺害容疑で起訴する。

グレート・ノーザン・ホテル。自分の証言が父を追い込んだのではと心配するオードリー。そのとき、電話が鳴る。グレート・ノーザン・ホテルの滝の近くでビニールにくるまれたマディの遺体が発見されたのだ。

episode 15

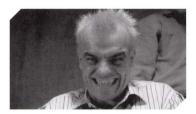
### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

逮捕されたベンジャミン・ホーンを訪ねて弟のジェリーが留置所にやってくる。留置所の二段ベッドを見て子供時代をホーン兄弟が思い出す「(かつて、子供部屋にやってきて) 懐中電灯を持ち、小さなラグマットの上で踊ったルイーズ・ドンブロフスキー」の場面は、ノスタルジックな『Hook Rug Dance』のチューンとも相まって、第2シーズン屈指の名場面となった。印象深いシーンをものにした監督はキャレブ・デシャネル。『ライトスタッフ』(83年)や『ナチュラル』(84年)、『パッション』(04年)や『キラー・スナイパー』(11年)を手がけた名撮影監督で、娘のエミリーとズーイー(代表作に『ハプニング』08年、『(500) 日のサマー』09年など)は共に女優である。ルーシーにそっくりなお姉さんグウェンを演じたのはキャサリーン・ウィルホイト(代表作に『ロレンツォのオイル／命の詩』92年、『ザ・ワイルド』97年など)。

season 1 | season 2 | fire walk with me | season 3 | on the air

# 第16章 Arbitrary Law

Episode16

◉監督：ティム・ハンター
◉脚本：マーク・フロスト、ハーリー・ペイトン、ロバート・エンゲルス
◉米国放映日：1990年12月1日　46分

## 「父が私を殺したの」と赤い部屋でローラがささやく。キラー・ボブは笑う「そろそろ退散しよう」

アルバートによるマディの検死報告。マディの遺体の爪から「O」と書かれた紙片が発見され、ローラと同じ犯人による犯行であることが判明する。クーパーは、リーランドへ連絡しようとするハリーを止め、「24時間くれ。事件を解決してみせる」という。

ドナはクーパーをトレモンド夫人の家に案内するが、出てきたのは見ず知らずの女性。ハロルドから預かったというドナ宛の手紙の中にはローラの日記が1ページ入っている。「昨夜、私は奇妙な夢を見た。小さな男と老人と一緒に赤い部屋にいる」

クーパーはローラが同じ赤い部屋の夢を見ていたことを知り、片腕のマイクに会いに行く。

タジムラがベンの留置場に面会に来る。格子の間から赤いペディキュアを見せると、ベンはタジムラがキャサリンだと気づく。

パーマー家を訪ねたドナは、リーランドにマディと録音した歌のテープを渡す。その時、マディの母親ベスから娘が戻らないという電話が入り、嫌な予感がするドナ。リーランドにダンスに誘われ動揺しているところに、ハリーがリーランドを呼びに来る。

公園。ドナはマディが死んだことをジェームズに告げる。ショックを受けたジェームズはドナを置いてバイクで走り去る。

クーパーはロードハウスに事件の関係者を集める。クーパーは突然、夢の中で聞いた犯人の名前を思い出す。

### 父が私を殺したの

署に戻ったクーパーたちは取調室にリーランドを押し込める。リーランドはキラー・ボブに体を乗っ取られていた。尋問が始まると、ボブになったリーランドはローラとマディの殺害を自供。「そろそろ退散しよう」と言うとスプリンクラーが作動し、雨のように水が降り注ぐ。自ら扉に頭を強打して倒れるリーランド。正気を取り戻したリーランドは、殺人を懺悔し、光を見ながら息を引き取る。

episode 16

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

ローラ・パーマー事件解決編。マーク・フロストは本エピソードにおけるレイ・ワイズについて「自分が今までに関わった作品の中でも最高の演技を見せてくれた」と絶賛する。とはいえ「あんたの好きなガムがおしゃれになってカムバックする」という小人の謎めいたセリフが、単にリーランドが子供時代に好きだったガムのことであったり、「夢で見た小人は踊っていた……リーランドはローラの死後、踊るようになった」、また「リーランドが子供時代に出会ったロバートソンという男は白髪だった……リーランドの髪の毛も一夜にして白髪になった」などなど、多くの謎が「解き明かされる」展開はやや不自然で、「何がなんでもローラ事件を早く解決しろ」というテレビ局の要求に対して、単にいかにもな解答を並べただけのように思えなくもない。『The Return』が「それっぽい解答」を周到に避けているのとは好対照である。

# 第17章 Dispute Between Brothers

Episode17

◉監督：ティナ・ラズボーン
◉脚本：トリシア・ブロック
◉米国放映日：1990年12月8日　47分

## ルノー兄弟の陰謀によりクーパーがFBIを停職に。フクロウの鳴き声、白い光。森の中でブリッグス少佐が消えた

3日後、リーランドの葬儀の日。クーパーはセーラに、事件はリーランドのせいではなく、死の間際に彼自身を取り戻し安らかに旅立ったと話す。「わかってるわ。あの長くて汚い髪をした男ね」と答えるセーラ。

セーラを慰めるためヘイワード家に集まる一同。クーパーはブリッグス少佐に夜釣りに誘われる。町を去りがたいクーパー。

グレート・ノーザン・ホテル。オードリーがクーパーに別れを言いにやってくる。彼女の好意に気づいているクーパーは、昔、ウィンダム・アールと共にある女性を重要参考人として保護していたが、彼女を愛してしまったため、いざという時に守れなかったと話す。

保安官事務所でクーパーが皆との別れを惜しんでいると、カナダ警察のハーディーがやってきてクーパーがFBIを停職になったと告げる。オードリー救出の際に無断で国境を越えたことが問題となり、さらに麻薬密輸疑惑も浮上。尋問され、銃とバッジを取り上げられるクーパー。麻薬取締局(DEA)も捜査しているという。ハリーは容疑はすべてガセだとして捜査協力を断る。

グレート・ノーザン・ホテル。レオのテープを手にベンをゆするが追い返されるボビー。

ダブルRダイナー。ノーマが、グルメ評論家のM・T・ウェンツにひどい記事を書かれ落ち込んでいると、母親のヴィヴィアンが、ウェンツは自分だと白状する。

「片目のジャック」にやってきたハンクとアーニー。ジャン・ルノーからコカインの売人を探すよう頼まれ引き受けてしまう。ジャン・ルノーは、クーパーを陥れるため、彼の車にコカインを仕込ませる計画を練っている。

ハリーの家、突然ジョシーが戻ってくる。

夜の森、クーパーはブリッグス少佐と焚き火を囲んでいる。少佐がホワイトロッジについて話そうとした時、クーパーが用を足しにいったん場を離れる。フクロウが鳴き、あたりが突然閃光に包まれる。驚いたクーパーは急いで戻るが、少佐は消えている。

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

本エピソードをもって、サブプロットとして水面下で進められてきたクーパーとオードリーの「ロマンス」が幕を閉じる。これはカイル・マクラクランが成人男性と女子高校生のロマンス、という展開に難色を示したためである。ローラ事件以降どうやって視聴者の興味を持続させるか、というのは制作陣の悩みの種となっていたが（だからやはりローラ・パーマー事件を「解決」するべきではなかった、とリンチもフロストも考えている）、シリーズを続ける上でのフックとなる要素の一つとして考えられていたオードリー／クーパー関係が続けられなくなったため、シリーズの迷走に拍車がかかることになった。ただ一方で、ブリッグス少佐の存在感はここから徐々に重みを増していくことになる。森と異世界とFBIを橋渡しする鍵として、ブリッグス少佐は『The Return』でも重要な役割を果たすことになる。

episode 17

season 1 | season 2 | fire walk with me | season 3 | on the air

# 第18章 Masked Ball

Episode18

●監督：デュウェイン・ダナム
●脚本：バリー・プルマン
●米国放映日：1990年12月15日　47分

## 白と黒、ふたつのロッジ。ウィンダム・アールは新たな一手をクーパーに届ける

クーパーは、ブリッグス少佐の妻ベティに昨夜のことを話すが、霊的な世界に詳しい少佐は、以前にも失踪したことがあるそうで、さほど心配していない様子。

ツイン・ピークス高校に編入したネイディーンは、ドナに、ドナのボーイフレンドだったマイクのことを狙っていると打ち明ける。

マディの死でツイン・ピークスを飛び出したジェームズは、バーで出会ったエヴリンという人妻に頼まれ、住み込みで彼女の夫の車を修理することになる。

父性に目覚めたディックが、里子のニッキーを連れて保安官事務所にやってくる。

クーパーはホークから、少佐が語っていたホワイトロッジのことを聞く。そこは人と自然を支配する霊の住処で、ホワイトロッジの影としてブラックロッジも存在するという。

麻薬取締局DEAの捜査官デニスが到着。現在は、女装してデニースと名乗っている。

ネイディーンは怪力を買われてレスリングチームにスカウトされる。

ジョシーはハリーに、香港時代の恩人にして愛人だったトーマス・エッカートに、香港に戻らなければハリーを殺すと脅されていたが、シアトルの空港まで行って逃げてきたと告げる。もう戻らなくていいというハリー。

やつれきったベン・ホーン。子供の頃に家族で撮ったフィルムを見て懐かしんでいる。

クーパーのもとにウィンダム・アールからチェスの問題とテープが届く。

新聞社社長のダギー・ミルフォードとラナの結婚式に出席するクーパー。そこに合流したデニースから、クーパーの車からコカインが見つかったと聞く。ハンクがジャン・ルノーの命令で仕込んだものだ。彼らの陰謀を暴くためには、自ら無実を証明しなければならない。

製材所の土地を取り戻したキャサリンは、ジョシーを庇護するかわりにメイドとして雇うことにする。事故死したはずのアンドルー・パッカードが姿を見せる。ジョシーを取り戻しに来るエッカートを迎え撃つ計画だ。

episode 18

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

エヴリン・マーシュやニッキー坊や、それに異性装者のデニースが登場、おまけにベンジャミン・ホーンが「南北戦争」に突入と、第2シーズン後半の重要な（？）要素が出揃った感のあるエピソード。ツイン・ピークス町長の弟ダギー・ミルフォードが幼妻ララと結婚もする。劇中のダギー・ミルフォードは新聞『ツイン・ピークス・ガゼット』の社主という役どころだったが、マーク・フロストの著書によって彼の意外な過去が明らかになった。それによればダギーは若い時分にグラストン・ベリー・グローヴで巨大なフクロウに遭遇したことがあり、また真珠湾攻撃をきっかけに空軍に入隊、戦後はロズウェルに配属されてUFO事件を体験、さらに「ブルーブック計画」のメンバーとしてニクソン政権下で超常現象の捜査を行っていた。また、その当時からゴードン・コールとは協力関係にあったという……が、ドラマで観る限り、到底そんな人物に見えないので困ったものである。

# 第19章 The Black Widow

Episode19

◉監督：キャレブ・デシャネル
◉脚本：ハーリー・ペイトン、ロバート・エンゲルス
◉米国放映日：1991年1月12日　46分

## ブリッグス少佐、帰還。怒れるジャン・ルノーがクーパーを追いつめる

ベンを再び訪ねてきたボビー。ベンはボビーに、ハンクを尾行するよう命じる。

ツイン・ピークスを気に入ったクーパーはここで暮らすことを考え、物件の写真を見ている。どれから内見しようかと選ぶために投げたコインが、候補から外したはずのデッド・ドッグ・ファームの写真の上に落ちる。

グレート・ノーザン・ホテル。新聞社の社長ダギー・ミルフォードが、新婚初夜を過ごしたベッドで死んでいる。駆けつけた兄のドウェインは弟を殺したのは新婦のラナだというが、死因は心臓発作で不審な点はない。納得しないドウェインは裁判に訴える。

ツイン・ピークス高校。ネイディーンがレスリング部で地区チャンピオンのマイクをいとも簡単に組み伏せながらデートに誘っている。

マーシュ家。エヴリンの兄だというマルコムがジェームズに会いに来る。エヴリンは夫にDVを受けているという。

不動産業者のアイリーンがクーパーをデッド・ドッグ・ファームへ案内する。最近使われてないはずが、車3台のタイヤ痕があり、椅子の上からはコカインの粉末が発見される。

クーパーはブリッグス少佐の失踪を調べている空軍のライリー大佐を紹介される。少佐の失踪は国家の安全を脅かすというのだ。

ベンはおもちゃを使った南北戦争ごっこに夢中。ボビーがベンに、怪しい人物と密会するハンクの写真を渡しに来る。オードリーが一部始終をのぞき穴から見ている。

クーパーにボビーが持ってきた封筒を渡すオードリー。中の写真には、デッド・ドッグ・ファームで密談をするジャン・ルノーとカナダ警察のキング、ハンク、アーニーの姿。クーパーは、写真とデッド・ドッグ・ファームで採取したコカインをデニースに渡す。

クーパーとデニースはアーニーに接触し、仮釈放の規定違反を理由に協力をとりつける。4キロのコカイン取引の情報を得たデニースは、クーパーを助けるため自ら囮となる。

ブリッグス家。失踪した少佐が戻ってくる。

episode 19

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

アメリカでの初放映時は、一つ前のエピソード（第18章）との間に1カ月の空白期間が挟まれたため、それだけで視聴者が200万人減ったと言われている。日本でも、このあたりで脱落した人はかなり多いと思われる。ウィンダム・アールの話は遅々として進まず、オリジナルキャストのストーリーはそっちのけで、ニッキー坊やの正体やいかに？　という物語や（しかし、ニッキー坊やの正体がたとえ殺人者であったとしても、それがシリーズに貢献することになったかといえば大変疑わしい）、みんながこぞってデレデレする割にはどこが魅力なのか判然としないラナさんが、初夜の晩に町長を腹上死させてしまった！　というようなサブプロットはいかにも牽引力に欠ける。また、『ツイン・ピークス』は監督の自由度が非常に高いシリーズではあるが、悪魔の格好をしたニッキー坊やがモヤモヤとマンガ的なフキダシの中に浮かび上がるのはさすがにやりすぎだろう。

# 第20章 Checkmate

Episode20

◉監督：トッド・ホランド
◉脚本：ハーリー・ペイトン
◉米国放映日：1991年1月19日　46分

## ルノーとクーパー、デッド・ドッグ・ファームの決斗！ 暗闇の中、保安官事務所に運び込まれる死体

ブリッグス少佐は2日間失踪していた。右耳の後ろに3つの三角形の入れ墨が入り、記憶はほとんどないが、感覚や匂い、巨大なフクロウのイメージが頭から離れないという。

少佐の任務は、ブルーブック計画という空軍が非公式に行っている未確認飛行物体に関する調査で、天空のみならず地上でもホワイトロッジを探している。

ダブルRダイナー。マイクに熱烈なキスをするネイディーン。ノーマはエドに会いに行く。

ジェームズは自分の預金を送ってくれるようエドに頼む。その話を聞いたドナは、ジェームズに直接届けに行くと申し出る。ジェームズは車の修理を完了し、フェンダーの上でエヴリンと抱き合う。その様子をエヴリンの兄だというマルコムが木陰から見ている。

ドリットホームの事務室に忍び込みニッキーのファイルを盗み見るディック。

ノーマとエドの関係を知り、エドに殴りかかるハンク。そこにネイディーンが帰ってきて「いじめっ子！」とあっけなく撃退する。

ブルーパイン・ロッジ。黙って出ていったジョシーを責めながらもキスをするハリー。

保安官事務所。アーニーに盗聴器を仕掛けるがアーニーは多汗症で汗が止まらない。

デッド・ドッグ・ファーム。デニースが麻薬の取引相手を装い、ジャン・ルノーと取引を始めるも、アーニーの汗のせいで送信機から煙が出てしまい作戦は失敗。クーパーは2人を解放させ、自らが人質になる。ジャン・ルノーは、ツイン・ピークスに災厄がふりかかっているのはクーパーが町にやってきたからだという。クーパーに銃を向ける。その時、ウエイトレスに扮したデニースが食事を運んでくる。ジャン・ルノーがドアを開けると、デニースのガーターに仕込んだ拳銃をクーパーが引き抜き、ジャン・ルノーを射殺する。

保安官事務所に戻ってきた一同は停電騒ぎに遭遇。真っ暗な事務所の中、いつの間にか浮浪者の死体が運び込まれている。チェス盤を指差す死体。アールの次の手だ。

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

ルノー兄弟をめぐる物語が、デッド・ドッグ・ファームでの銃撃戦を持って終結する。なお映画版でロードハウスを切り盛りしているジャン・ミシェル・ルノー（演じたのはジャック・ルノーと同じウォルター・オルケウィッツ）と、ジャン、ベルナール、およびジャックのルノー3兄弟との関連は不明。というのも本エピソードでジャン・ルノーが「他に兄弟はいない」と言ってしまっているからである。前回戻ってきたブリッグス少佐の回想シーン、森の中の玉座のようなものに座らされている映像はインパクトも大きく、なんらかの展開に繋がる予感があったが類似のイメージが再び登場することはなかった。ウィンダム・アールから届けられた死体役を演じたのはカイル・マクラクランの実弟クレイグ・マクラクラン。メガネと怪我で分かりにくくしているが、驚くほど兄上にそっくりなので、すわ「ドッペルゲンガー」か？　と意外な展開を予期したファンも多かった……のだろうか？

episode 20

# 第21章 Doubleplay

Episode21

◉監督：ウーリー・エデル
◉脚本：スコット・フロスト
◉米国放映日：1991年2月2日　46分

## 大動脈を切断された死体が語る4年前の因縁。ブリッグス少佐は言う。「恐ろしいことが起きる」

保安官事務所に運ばれた死体は大動脈が切断されている。証拠は残されていないだろうというクーパー。アールは天才なのだ。レオが突然意識を取り戻し、シェリーを斧で殺そうとする。ボビーが駆けつけ、その隙にシェリーが包丁でレオの足を刺す。叫び声をあげながら森に逃げこむレオ。

容疑は晴れたものの、いまだ停職処分のクーパー。保安官補として、アールによる死体遺棄事件の担当をすることになる。

クーパーはアールとの深い因縁をハリーに話す。4年前、アールの妻キャロラインと恋に落ちたクーパー。ある日、謎の敵に襲われ、キャロラインはクーパーの腕の中で、保安官事務所に運び込まれた死体と同じように大動脈を切断されて死んだ。アールは精神に異常をきたし入院したが、病院を脱走。クーパーは、精神異常はアールの演技であり、キャロラインを殺したのもアールだと考えている。

ブリッグス少佐は、自分はホワイトロッジに連れ去られていたと話し、これから恐ろしいことが起きると感じているという。

マーシュ家。エヴリンの元を去ろうとするジェームズだったが、エヴリンの夫が車で事故死し、ジェームズに殺人容疑がかけられる。

ジャコビーの診察を受けるダギー・ミルフォードの未亡人ラナ。兄のドウェインに銃で撃たれそうになるが、クーパーの提案で2人が直接話し合うことに。すると町長はラナに夢中になり、ラナを養子にすると言い始める。

ブルーパイン・ロッジ。キャサリンはピートに、兄でジョシーの元夫のアンドルーが生きていたこと、香港でジョシーの愛人だったトーマス・エッカートにアンドルーが命を狙われていることを話す。

グレート・ノーザン・ホテル。秘書を連れ立ったエッカートがチェックインする。

ハリーはクーパーに、ジョシーといたアジア人ジョナサンの殺人事件の捜査を依頼する。

森をさ迷っていたレオは目の前の小屋に入る。中にウィンダム・アールがいる。

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

クーパーのトラウマとなっているピッツバーグ事件で犠牲となった、ウィンダム・アールの妻キャロラインが（白黒映像のオーバーラップでだが）画面に初登場する。彼女は最終話、赤い部屋でアニーと入れ替わってクーパーを翻弄することになる（が、彼女の容貌は本エピソードに一瞬映っただけなのでちょっと不親切である）。数話前、生存が確認されたアンドリュー・パッカード（ダン・オハーリー）の宿敵トマス・エッカートが香港からツイン・ピークスに到着。エッカートを演じたのは名優デヴィッド・ワーナーだが、ダン・オハーリーもデヴィッド・ワーナーも絵に描いたような悪役顔な上に、そのまんま両方とも悪役なので、何を応援すればいいのか分からないという問題が生じてしまった（つまるところ、ジョシーを応援すればいいわけだが……）。ウィンダム・アールの山小屋にレオが迷い込む場面は『フランケンシュタインの花嫁』（35年）を意識している。

episode 21

season 1 | season 2 | fire walk with me | season 3 | on the air

# 第22章 Slaves and Masters

Episode22

●監督：ダイアン・キートン
●脚本：ハーリー・ペイトン、ロバート・エンゲルス
●米国放映日：1991年2月9日　46分

## クーパーを撃ったのはジョシーだった。アールが仕掛けた「死のチェス・ゲーム」の行方は――

レオを撃った犯人がハンクと判明。アルバートはクーパーに、FBIもDEAも州警察もウィンダム・アールを追っていると告げ、「アールの狙いは君だよ」と忠告する。

アールの小屋。アールは逃げ出そうとするレオを殴り、電流仕掛けの首輪をはめる。

ベッドの中にいるノーマとエド。そこにネイディーンが帰ってくるが、ネイディーンは、自分にはマイクがいるからと気にもしない。

クーパーはジョシーを訪ね、密かに彼女のコートの繊維を採取。アルバートの鑑定により、ホテルでクーパーを銃撃した際に採取した繊維と一致。シアトル警察もまた別の殺人容疑でジョシーを追っているという。

アールとのチェスは、とられた駒の数だけ住人が殺されるという死のゲームだった。アールに一度も勝ったことのないクーパーは、チェスの名人であるピートに協力を依頼、駒を取られないよう慎重にゲームを進めていく。

ダブルRダイナーで再び働き始めたシェリー。ハンクは、レオの殺人未遂容疑のためしばらく戻ってこないという。

ブルーパイン・ロッジ。キャサリンが招いたエッカートに給仕させられるジョシー。

マーシュ家。どうして自分を騙したのかエヴリンに問い詰めるジェームズ。マルコムが背後からジェームズに殴りかかろうとした時、ドナが飛び込んでくる。エヴリンは、マルコムともみ合ううちに彼を撃ち殺してしまう。

南北戦争ごっこに夢中だったベン。ジャコビーの発案により終戦場面を演出、南軍が勝利し条約が成立したとたん正気を取り戻す。

グレート・ノーザン・ホテル。変装したアールがオードリー宛ての封筒を受付に預ける。クーパーの部屋のベッドにはキャロラインのデスマスクが置かれている。手に取るとテープからアールのメッセージが流れ出す。

**私は今もキャロラインを愛している**
**君もそうだろう?**
**さあ、次の一手を指したまえ**

episode 22

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

ベンジャミン・ホーンの「南北戦争」がいよいよ大詰め。南部婦人（「サザン・ベル」と呼ばれる）の仮装に身を包んだオードリーが可愛らしい。股引姿で尺八を吹くウィンダム・アールも可愛らしい。アールは虚無僧尺八がその昔、武器として使われていたというトリヴィアを披露するが、『ツイン・ピークス』全体を通して、奇妙なオリエンタル趣味が横溢しているのは時代のせいもある。放映当時、バブル景気を背景にした日本の国際的な存在感は今とは比較にならないほど大きく、また忍者ブームや空手（『ベスト・キッド』など）、電子機器に自動車にニンテンドーなどなど、日本発のあれこれが大量にアメリカに流入していた時期だったことは『ツイン・ピークス』にも影響を及ぼしている（ジョージアのキャンペーンも忘れるわけにはいかない）。逆にいえば、そういう余裕のある時代だったからこそ『ツイン・ピークス』が日本でも大ブームになったのかもしれないが……。

# 第23章 The Condemned Woman

Episode23

◉監督：レスリー・リンカ・グラッター
◉脚本：トリシア・ブロック
◉米国放映日：1991年2月16日　47分

## ジョシーの慟哭と突然の死。クーパーの目の前に現れたキラー・ボブと小人のダンス

レオの殺人未遂で起訴されるハンクは、ハリーに司法取引を申し出、アンドルー・パッカードを殺したのはジョシーだとほのめかす。シェリー、オードリー、ドナ。それぞれのもとに謎の手紙が届く。

**愛する人を救う天使の集い ロードハウス、9時半**

レスリング部の遠征で、マイクと夢のような一夜を過ごしたというネイディーンは、ケジメをつけましょう、とエドに別れを切り出す。グレート・ノーザン・ホテル。ベンは、オードリーやジェリー、ボビーらに、かつてベンが事業に投資した青年実業家のジャックを紹介する。ベンは、以前とはうってかわって、ツイン・ピークスの自然を守りたいという。

クーパーとアジア人ジョナサンが撃たれたものは同じ銃だった。つまり犯人はジョシー。クーパーは、何も知らないと言い張るジョシーに夜9時までに出頭するよう告げる。

ダブルRダイナー。ノーマにプロポーズするエド。それを受けて、ノーマは留置場のハンクに面会に行く。アリバイ工作と引き換えに離婚するというハンクだがノーマは拒否。

怪しいと思いながらもロードハウスにやってきたシェリー、オードリー、ドナ。それぞれに届いた手紙をあわせると一篇の詩になる。

**山々は天に接吻し 波は絡み合う でも君の唇なしにはすべてが空しい**

首をかしげる3人をアールが見つめている。キャサリンの銃を手に入れたジョシーは、グレート・ノーザン・ホテルにいるエッカートに会いに行き、彼を射殺したあと突然死亡。ハリーは、泣きながらジョシーを抱きしめる。キラー・ボブの姿を見るクーパー。ボブが消え、ベッドの上で小人がダンスを始める。苦しむジョシーの顔が引き出しのノブに重なる。

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

恐怖のあまり死亡したジョシー・パッカードが木製の引き出しのノブに閉じ込められてしまう！という、まさに驚天動地のエンディングでファンをあっと言わせたエピソード。今なお海外の掲示板では「一体ジョシーはなんでドアノブになってしまったのか？」について喧々諤々の論争が続いていたりもするが、もちろん結論は出ていない。なおジョシーの顔がドアノブに浮き上がる場面のアイディアはデイヴィッド・リンチが提供したものである。本エピソードが初放映されたのは91年2月16日だが、この年は『ターミネーター２』の公開年であり、CGIで表現された液体金属のロボットが話題を呼んでいた。まだまだCGIが高嶺の花だった当時、『ターミネーター２』とは比べ物にならないほどつましい製作体制の『ツイン・ピークス』が、限られた予算の中で、果敢にも当時最先端の3DCG表現に挑んだことは特筆に値するだろう。

episode 23

# 第24章 Wounds & Scars

Episode24

●監督：ジェームズ・フォーリー
●脚本：バリー・プルマン
●米国放映日：1991年3月28日　46分

## 丸太おばさんと少佐に共通する謎の入れ墨。クーパーには運命の出会いが訪れる

ジョシーの死から立ち直れないハリーはブックハウスにこもって酒に溺れている。ジョシーの検死結果によると、死因は不明で、遺体の重さは30キロしかなかったという。

ダブルRダイナー。修道院で暮らしていたノーマの妹アニーが新たに働き始める。

アールの小屋。奴隷になったレオが新聞を運ぶ。アールは新聞広告に載ったクーパーの手を見て、協力者がいて引き分けを狙っていることを見破る。激怒して必ず後悔させてやると誓うアール。まずはドクの友人を装い、ヘイワード家でドナに小さな箱を渡す。箱の中身はチェスの駒。メモには次の手が示されている。アールが騙った友人の名前は故人のもの。書かれていた連絡先は墓地のものだった。

保安官事務所。ブリッグス少佐と丸太おばさんがクーパーに会いに来る。丸太おばさんも7歳のときに失踪したことがあり、覚えているのは閃光とフクロウの鳴き声だけ。足の裏に2つの山の入れ墨ができた。また、夫を亡くした時にもフクロウの鳴き声を聞き閃光を見ている。何か意味があるはずだという少佐。

オードリーは青年実業家のジャックとピクニックに行く。オードリーに歌を歌うジャック。2人は少しずつ惹かれ始めている。

ヘイワード家。母アイリーンの手をとって話すベン・ホーンの姿をドナが目撃する。

ダブルRダイナー。シェリーにミス・ツイン・ピークス・コンテストに応募するよう勧めるノーマ。クーパーがカウンターに座る。注文を取りに来たアニーに好意を持つクーパー。その様子をアールが見ている。

グレート・ノーザン・ホテル。ベンはキャサリンのゴーストウッド開発計画を阻止しようと、森に住む動物パイン・ウィーゼルの保護活動を始める。

トーマス・エッカートの秘書ジョーンズが、エッカートからのプレゼントだと言ってキャサリンへ黒い箱を渡す。ジョーンズはブックハウスに現れ、見張りの保安官を気絶させてハリーのベッドに潜り込む。

episode 24

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

希少種パイン・ウィーゼルを救おう！　とベンジャミン・ホーンがぶち上げたおかげで、以前に介護器具のセールスマンとして登場したピンクルさんが再登場、ディック・トレメイン（イアン・ブキャナン）と一緒にキャンペーン活動を行うことになるが、この二人はその後『オン・ジ・エアー』で再び共演している（『オン・ジ・エアー』にはアルバート役のミゲル・フェラーも出演）。オードリーが青年実業家のジョン・ジャスティス・ウィーラーと関係を深める一方、身の空いたクーパーのもとにノーマの異父妹で修道院に行っていたアニー（ヘザー・グラハム）が姿を現す。アニーは『ローラ・パーマー最期の7日間』で、テレビ版最終話の数カ月後に赤い部屋から脱出——あるいは排出され、重体のまま病院に担ぎ込まれたことが判明しているわけだが、『The Return』では言及されずじまいに終わった。ノーマがどう思っているのか気にかかるところではある。

# 第25章 On The Wings of Love

Episode25

●監督：デュウェイン・ダナム
●脚本：ハーリー・ペイトン、ロバート・エンゲルス
●米国放映日：1991年4月4日　46分

## クーパーとアニーの急接近がもたらすヒント。謎の入れ墨とフクロウ洞窟の絵

ハリーはエッカートの秘書ジョーンズに絞め殺されそうになるが、なんとか振り払う。動機が分からず戸惑うハリーに、ジョシーへの嫉妬だと説明するクーパー。

ハリーのデスクに盆栽が届けられる。カードにはジョシーの名。だがそれは、盗聴器を仕掛けたアールからの贈り物だった。

ゴードンがアールの資料を持ってくる。アールは分裂病を装うために空軍に出向し、ブリッグス少佐が話していたブルーブック計画に2年間関わっていたことを知る。クーパーの停職処分がようやく解ける。

アールの小屋。レオにトランプを引かせるアール。コンテストで選ばれたミス・ツイン・ピークスをクーパーの目の前で殺すという。

グレート・ノーザン・ホテル。ドナの母アイリーンがベンに会いに来る。「償いたい」というベンに「償いが裏目に出ることもある」と話すアイリーン。ドナはオードリーに案内された隠し部屋からその様子をのぞき見ている。

ダブルRダイナー。ゴードンがシェリーに一目惚れ。耳が遠いゴードンだが、なぜかシェリーの声だけはよく聞こえる。

クーパーが紙ナプキンに少佐と丸太おばさんの入れ墨の絵を描いていると、それを見たアニーが「フクロウの洞窟の絵?」という。クーパーは洞窟に行ってみることにする。

ヘイワード家。アイリーン宛てに、差出人不明の真っ赤なバラの花束が届く。

洞窟の岩壁には入れ墨と同じシンボルが描かれていた。飛び回るフクロウを追い払おうとしたアンディのつるはしがシンボルの上に突き刺さり、その部分の岩が落ちて、中から別の絵が描かれた石の円筒が出てくる。人は偶然と運命に操られているというクーパー。

グレート・ノーザン・ホテルのバー。クーパーはアニーの手首にあるためらい傷に気づく。クーパーの好意に最初は戸惑っていたアニーだったが、2人は徐々に親密さを増していく。

洞窟にアールがやってくる。シンボルのついた棒を回転させると壁が崩れだす。

episode 25

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

クーパーたち一行が訪れた「フクロウの洞窟」のロケ地は「ブロンソン・キャニオン」。ロサンゼルスの名所、グリフィス天文台の近くにある人工の小さな洞窟である。車で近くまで簡単に行けるのと、非常に小さい洞窟……というかトンネルにも関わらず、中が二股、三股に分かれていて使い勝手が良いので映画やドラマのロケ地として頻繁に用いられており、テレビの『バットマン』（バットケイヴの入り口として使用）、『スタートレック』全シリーズ（『スタートレック』シリーズに登場する洞窟はすべてブロンソン・キャニオンだと言っても過言ではないほど使われている）を始め、『ロボット・モンスター』（53年）や『金星人地球を征服』（56年）、『ボディ・スナッチャー／恐怖の街』（56年）などなど、時代もジャンルも異なる多くの作品が撮影され、現在も使われ続けている。

season 1 season 2 fire walk with me season 3 on the air

# 第26章 Variations on Relations

Episode26

◉監督：ジョナサン・サンガー
◉脚本：マーク・フロスト、ハーリー・ペイトン
◉米国放映日：1991年4月11日　47分

## ウィンダム・アールが放つ新たな一矢。「次はおまえの知り合いを殺す」

フクロウの洞窟へ再びやってきたクーパーたち。ホークが、アールがここに来た痕跡を発見。アンディは壁に描かれた絵を模写する。

アールの小屋。見知らぬ若者に、ホワイトロッジとブラックロッジの説明をするアール。張りぼてで作った巨大なポーンの中に若者を入れ、弓矢で射る。絶命する若者。

ブルーパイン・ロッジ。エッカートの残した箱の開け方が分からないキャサリン。

ダブルRダイナー。シェリーにミス・ツイン・ピークスへの応募を勧めるボビー。別の席ではラナが、審査員である町長のミルフォードに優勝したいと頼み込んでいる。

ダブルRダイナー。ドーナツを買いに来たクーパーがアニーをデートに誘っていると、シェリーが謎の手紙に書いてあった「君の唇なしにはすべてが空しい」とつぶやく。それはクーパーがキャロラインに贈った詩だった。クーパーはシェリーから手紙を預かり、ハリーに見せる。筆跡はレオのものだ。

レオの失踪、アールの出現、フクロウの洞窟の絵の関連性を考えるクーパー。クーパーは、ブルーブック計画について詳しく知る必要があるとしてブリッグス少佐に協力を依頼。少佐はアンディが黒板に描いた洞窟の絵をどこかで見たことがあるという。

ロードハウスでは、ミス・ツイン・ピークス・コンテストの準備が始まっている。

ブルーパイン・ロッジ。ハリーがキャサリンにジョシーの話を聞いている。キャサリンがハリーにエッカートの黒い箱を見せていると、ピートが帰宅し、誤って箱を落としてしまう。すると中からまた別の箱が出てくる。

湖でアニーとボートに乗るクーパー。キスを交わす二人を岸辺からアールが見ている。

ヘイワード家。ドナは両親たちにベンとの関係を問いただすが答えてもらえない。

イースター・パークの見晴台に巨大な箱が置かれる。中には、ポーンの張りぼてに入った若者の死体とメッセージ。「次はお前の知り合いを殺す」

episode 26

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

本エピソードを監督したジョナサン・サンガーは『女優フランシス』（82年）や『バニラ・スカイ』（01年）を製作した映画プロデューサーであり、クリストファー・デヴォアとエリック・バーゲンが書いた『エレファント・マン』の脚本の権利を入手し、メル・ブルックスに渡した人物でもある（サンガーはブルックスの『新サイコ』に助監督としてついていたので面識があった）。メル・ブルックスに若きデヴィッド・リンチを紹介したのもサンガーであり、リンチにとっては旧知の恩人といえる。エピソードのエンディング、巨大なチェスの駒に埋め込まれた死体となって届けられる若者を演じたのはテッド・ライミ。『死霊のはらわた』（81年）や『スパイダーマン』シリーズ（02年～07年）で知られるサム・ライミ監督の実弟である（顔もかなり似ている）。

# 第27章 The Path to the Black Lodge

Episode27

●監督：スティーヴン・ギレンホール
●脚本：ハーリー・ペイトン、ロバート・エンゲルス
●米国放映日：1991年4月18日　46分

## アールの狙いはブラックロッジだった。鍵、時、地図。森の中で赤いカーテンがゆらめく

死体入りのポーンについていたメッセージがチェスの次の手ではなかったことから、アールがゲームをやめたと悟るクーパー。

グレート・ノーザン・ホテル。ジャックは仕事の都合でツイン・ピークスを発つという。

ヘイワード家。屋根裏で、父親の項目が空欄の出生証明書を見つけるドナ。

保安官事務所。ブリッグス少佐はクーパーとハリーにブルーブックの資料を見せる。アールは優秀だったが、ツイン・ピークスの森の研究を始めたころから何かに取り憑かれたように変わってしまい、秘密主義で暴力的になったため解任されたという。若き日のアールが、ダグパスという魔術師と悪を培養する場所であるブラックロッジについて語ったビデオを見たクーパーは、彼の狙いが自分への復讐ではなく、ブラックロッジにあると確信。フクロウの洞窟の絵とブラックロッジの関係を調べることにする。これから森に散歩に出かけるというブリッグス少佐。この一部始終をアールが盗聴器で聞いている。

アールは、森で待ち伏せをして少佐を拉致。自白剤を注射し、夢で見た洞窟の絵のこと、閃光の向こう側のことを聞き出す。

**木星と土星が出会う時、彼らは受け入れる**

フクロウの洞窟の絵がブラックロッジへの地図だと気づき歓喜するアール。

ブラック・レーク空港。オードリーは出発寸前のジャックをつかまえて処女を捧げる。

ロードハウス。ダンスをするアニーとクーパー。アニーはクーパーの勧めに従いミス・ツイン・ピークス・コンテストへの出場を決める。

「君が女王だ」とクーパー。ステージに目をやると、周りが暗くなり舞台上の町長が挨拶をしている場所に巨人が現れる。「ノー」と口を動かしながら、腕を左右に大きくふり、何かを止めようとする巨人。

森に現れるキラー・ボブ。黒いオイル溜りには赤い部屋のカーテンがゆらめいている。

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

理論物理学者ヴェルナー・ハイゼンベルクの「自然を取り扱う科学にとって、研究の主体はもはや自然それ自体ではなく人間の訊問に委ねられた自然である」という文言をアニーが引用し、それに気づいたクーパーが「うん、ハイゼンベルクだね！」というあたりのスノビズムはマーク・フロストに由来すると思われる（リンチはそれより、どうやってゴードン・コールとシェリーをキスさせることができるか……というようなことを熱心に考えていたことが明白だからだ）。町の人々の手が急に痙攣し始める、という新たなミステリーは、テレサ・バンクスの腕が彼女の死の数日前から麻痺して動かせなくなった、ということと関連しているはずだが、それが実のところどういう現象だったのかについてはいまだ不明。警察署の会議室の壁にグリモワール図形（いわゆる魔導書に載っている秘印）が貼ってあるのも気になるが……。

episode 27

# 第28章 Miss Twin Peaks

Episode28

●監督：ティム・ハンター
●脚本：バリー・プルマン
●米国放映日：1991年6月10日　46分

## 洞窟に描かれた木星と土星のシンボル。「恐怖と愛がドアを開く」

アールの小屋。レオとブリッグス少佐が鎖で繋がれている。レオが机から鍵を奪い、シェリーを助けてほしいと少佐を逃がす。

ベンの勧めもあり、オードリーは環境保護のためコンテストに出場することにする。

保安官事務所。クーパーはハリーに、ジョシーの死因は恐怖で、彼女が感じた恐怖がキラー・ボブを呼び寄せたに違いないと話す。

山小屋で二人の会話を盗聴するアールは、恐怖こそが鍵だと分かり喜ぶ。レオは毒グモの入った籠を吊るす命綱を咥えさせられている。

グレート・ノーザン・ホテル。クーパーとアニーが初めて結ばれる。

ブルーパイン・ロッジ。キャサリンとアンドルーは、パズルボックスの最後の箱を銃で打ち抜き無理やり開く。中から鍵が出てくる。

森をパトロールしていたホークがブリッグス少佐を発見。保安官事務所に連れ帰る。少佐は話ができないほど憔悴している。

クーパーは洞窟の絵の「4」と「H」が占星術の木星と土星のシンボルに似ていると気づく。少佐が「クイーンを守れ。恐怖と愛がドアを開く」とつぶやくと、クーパーはアールの狙いがクイーン、つまりミス・ツイン・ピークスであると気づきロードハウスへ向かう。

黒板に描いた洞窟の絵を見つめていたアンディは、絵は地図であると発見。急いでクーパーに伝えるべくあとを追おうとしたとき、部屋の盆栽をひっくり返してしまい、中から盗聴器が出てくる。調べたことをすべてアールに聞かれていたと知り、愕然とする一同。

ロードハウスでミス・ツイン・ピークス・コンテストが始まる。丸太おばさんに変装したアールが現場にいる。ベンに母との関係を問いつめるドナは、自分の実の父親がベンであることを知る。ルーシーは、アンディとディックを呼び出し、お腹の子の父親はアンディにすると宣言。審査の結果、美しいスピーチを披露したアニーがミス・ツイン・ピークスに選ばれるが、その瞬間、会場の明かりが消え、アニーはアールに誘拐される。

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

白塗りのウィンダム・アールがやはり気にかかる。同様の白塗り状態になったのは他に、映画版でローラを殺害した直後のリーランド、またやはり映画版でハロルド・スミスを訪ねたローラが挙げられるが、口の中が真っ黒だったウィンダム・アールやリーランドと違い（黒いのはエンジンオイルだろうか?）、ローラの場合は歯が真黄色になっていた（黄色いのはコーンクリーム＝ガルモンボジーアだろう）。『The Return』では赤い部屋に引き戻されそうになったMr. Cが口から黒と黄と赤（赤いのはチェリーパイである）の混ざった液体を嘔吐していた。オイルとガルモンボジーアの混合体は『The Return』第17話でボブ球が叩き込まれたときに床に空いた穴の縁にもこびりついていた（メイキング映像には、嬉々として穴の縁にクリームコーンを塗るリンチの姿が収録されている）。

episode 28

# 第29章 Beyond Life and Death

Episode29

◉監督：デイヴィッド・リンチ
◉脚本：マーク・フロスト、ハーリー・ペイトン、ロバート・エンゲルス
◉米国放映日：1991年6月10日　50分

## ブラックロッジに乗り込むクーパー。ローラはささやく「25年後に会いましょう」

洞窟の絵をたよりにブラックロッジの場所を探すクーパー。ピートとの会話から地図が指しているのはゴーストウッドの森だとにらみ、ローラの日記の一部が見つかったグラストンベリー・グローヴへ向かう。

丸太おばさんに変装したアールはアニーをグラストンベリー・グローヴに連れていく。地面の黒い輪の中に引きずり込まれるアニー。

エドの家では、ネイディーンが記憶を取り戻し、35歳の女性に戻っている。

ヘイワード家。家を出ようとするドナを止めるベン。そこにドクが帰宅しベンを殴る。

グラストンベリー・グローヴにやってきたクーパーは、ブラックロッジの入口を発見。一人で静かに中に入っていく。

貯蓄貸付銀行では、オードリーが開発計画反対のため、貸し金庫の格子扉に自分を縛り付けて抗議している。アンドルーがエッカートの鍵で貸し金庫を開くと爆弾が作動し、大爆発が起こる。

ダブルRダイナー。仲の良いブリッグス夫妻の横でボビーがシェリーにプロポーズする。セーラが少佐におかしな声で「私はクーパーとブラックロッジにいる」と伝える。

夢で見たのと同じ赤い部屋にいるクーパー。「お前の魂をくれたらアニーは助けよう」というアールに「そうしよう」と命を差し出す。キラー・ボブは言う。

**やつは間違えている**
**やつはお前の魂など望めやしない**
**俺が奴をとるんだ**

クーパーの影が現れて別のクーパーを追う。何度部屋を移動してもまた同じような赤い部屋……。クーパーがクーパーを捕まえる。

翌朝、グレート・ノーザン・ホテルのベッドで寝ているクーパーにハリーとウィルが付き添っている。歯を磨くと言いバスルームに入るクーパー。鏡を覗き込み、自ら頭をぶつけて血を流す。鏡にはキラー・ボブの顔。笑いながら「アニーはどうした？」と繰り返す。

episode 29

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

老銀行員デル・ミブラーを演じたエド・ライトは『ワイルド・アット・ハート』にもホテルの従業員役で登場、やはりもたもたと後ずさったりしていたのが印象的。彼はまた映画版のカットシーン集『Missing Pieces』にもばっちり登場、よほどその佇まいをリンチが気に入っていたことが伺える。パイロット版でおなじみ、くすくす笑いが止まらないダブルRのウェイトレス、ハイジが今回再び登場したことで『ツイン・ピークス』が円環構造に封じ込められたかのような演出も見事。ハイジもリンチのお気に入りで、映画版、『Missing Pieces』に続き『The Return』にも登場、ファンを喜ばせた。セーラ・パーマーが何者かに憑依された状態でブラックロッジの様子をブリッグス少佐に伝える場面は『The Return』後に見直すと改めて感慨深い。個体・液体・ゲルと3種類のコーヒーの状態はクーパー、ダギー、Mr. Cへと繋がるのだろうか？

# ツイン・ピークス ローラ・パーマー最期の7日間

TWIN PEAKS: FIRE WALK WITH ME

◉監督・脚本：デイヴィッド・リンチ　◉脚本：ロバート・エンゲルス／出：シェリル・リー、レイ・ワイズ、ダナ・アッシュブルック、ジェームズ・マーシャル、メッチェン・エイミック、ペギー・リプトン、カイル・マクラクラン、デイヴィッド・ボウイ、キーファー・サザーランド、ハリー・ディーン・スタントン、ミゲル・フェラー、ユルゲン・プロフノウ、モイラ・ケリー、ヘザー・グレアム、デイヴィッド・リンチ
◉米国公開1992年8月28日／日本公開1992年5月16日　135分

『ツイン・ピークス ローラ・パーマー最期の7日間』は、タイトルの通り、TVシリーズで描かれる直前の物語を映画化したものだ。テレサ・バンクス殺人事件の捜査の模様と、ローラが殺害されるにいたるまでの最後の日々が描かれている。ドナ役のララ・フリン・ボイルは、付き合っていたカイル・マクラクランと別れた後だったため出演を拒否、代わりにモイラ・ケリーがキャスティングされた。オードリー役のシェリリン・フェンはスケジュールの都合で降板。マーク・フロストは脚本にはクレジットされていない。

92年のカンヌ国際映画祭では上映後にブーイングが発生。アメリカ本国でも興収はふるわなかったが、TVシリーズの余韻が残る日本では例外的にヒットした。

ローラが殺される1年と7日前。

88年、ディア・メドウの町で、テレサ・バンクスの死体が発見された。この事件を担当していたFBIのデズモンド捜査官は、ファット・トラウト・トレーラーパークでの検分中に失踪する。

フィラデルフィアのFBI本部では、2年間行方不明になっていたフィリップ・ジェフリーズ捜査官が急に姿を現した。ジェフリーズはクーパーを指差し「こいつを誰だと思っているんだ？」と怯えるような表情。大きな

WALK WITH ME

悪の存在があることを示唆して再び消える。
　1年後、ツイン・ピークス高校。ローラ・パーマーが親友のドナと学校に向かっている。ハイスクール・クィーンでもあるローラだが、裏では何かへの恐怖を断ち切るように、コカインやセックスに溺れる日々を送っている。ローラは、部屋に隠していたはずの日記の一部が破られていることに動転。日記には「ボブは本当にいる。12歳の時から私をおもちゃにしている」と書いていた。ランを栽培している友人のハロルドに「ボブ」の存在を話しても信じてもらえない。
　夜、ローラの部屋にやってきたボブ。彼女にのしかかるボブの顔がリーランドに変わる。
　89年2月23日の夜。ジェームズと落ち合ったローラは、途中でジェームズを振り切って森へ走り出し、レオ、ジャック、ロネットと合流する。彼らとの乱交のさなか、リーランドがやって来て少女たちをさらい、ローラを殺す。
　翌朝、湖の岸辺でビニールにくるまれたローラが発見される。

　14年7月、リンチ自らが編集を施した91分の未公開シーンが発表された。タイトルは『Missing Pieces』。日本では17年7月にWOWOWにて『もうひとつのローラ・パーマー最期の7日間』として放映されたほか、「ツイン・ピークス 完全なる謎 Blu-ray BOX」に映像特典として収録されている。
　削除された場面を本編と同じ時系列で再構成しているため、流れは断続的ではあるものの、『The Return』へつながる第29章のその後のシーンが含まれているので未見の方にはぜひともご覧いただきたい。もしこれから『ツイン・ピークス』の世界に触れるという方でシリーズをすべて見るのはハードルが高いというならば、序章と第29章は必ず、余裕があれば第1、第2シーズンのリンチ監督回を中心に観て、その後、劇場版本編と未公開シーン集を見た上で本丸の『The Return』に臨んでほしい。
　14年7月にアメリカで『Missing Pieces』のプレミアが行われた際、舞台に登壇したリンチは、挨拶らしい挨拶をまったくせず、一篇の詩を読み上げた。ここに紹介する。

**海にはおびただしい数の魚がいる。だが、今夜は木材について話したい。**

**世の中には誰かから電話がかかってきて、木材について尋ねられることがよくある。**

**多くの場合、それは材木置き場で起きることだが、そこに電話がある必要もある。**

**樹々が成長していくこと、それらが木材によって出来ていることは、じつに当たり前のことだ。**

**1本の樹木を観察することは幸福をもたらすものだが、(それを形成する)様々に形作られた木材について観察することも、また幸福であると言える。**

**我々が美について語るとき、それは大抵の場合、木材について語っているのだ。**

FIRE

高橋ヨシキの赤い髪の部屋 EXTRA #1

### ソープ・オペラの呪縛から解き放ち、『ツイン・ピークス』世界を「拡張」する

# 『ツイン・ピークス ローラ・パーマー最期の7日間』

**文◎高橋ヨシキ**

まことに残念なことに、この断章はパメラ・ギドリーの訃報から始めなくてはならない。劇場版『ツイン・ピークス ローラ・パーマー最期の７日間』はローラ・パーマー事件に先行する、テレサ・バンクス殺害事件で幕を開くが、ボブ＝リーランド・パーマーの最初の犠牲者たるテレサを演じたのが、他ならぬパメラ・ギドリーである。１９６５年、マサチューセッツに生まれ、魔女事件で有名なセイラムの街で育ったパメラ・ギドリーは、21歳のときにスケートボード映画『Thrashin'』(86年)で女優デビュー。生来の美貌を武器に、SFアクション『チェリー2000』(88年)、ホラー・コメディ『地獄のハイウェイ』(91年)などに立て続けに出演、TVシリーズ『ザ・プリテンダー／仮面の逃亡者』(出演は97年～00年)や、『冒険野郎マクガイバー』(出演は86年)で、アメリカのお茶の間にも知られる存在だった。

２０１８年4月16日、逝去。まだ52歳の若さだった。死因は明らかにされていない。『Thrashin'』で共演したジョシュ・ブローリンは、彼女の訃報に触れて「歯に衣着せぬ物言いをする、本当に愉快な人だった」とインスタグラムにコメントを残した。なお『Thrashin'』には、のちに『ツイン・ピークス』のオードリー役で一世を風靡することになるシェリリン・フェンも出演していた。

『最期の7日間』におけるパメラ・ギドリーの存在感は圧倒的で、劇場版のみの出演にもかかわらず、『The Return』へと引き継がれる『ツイン・ピークス』の謎すべてを一身に受け止めた究極の犠牲者テレサ・バンクスを見事に体現してみせた。ここに謹んで哀悼の意を表したい。

『最期の7日間』は、『ツイン・ピークス』の共同クリエイター、マーク・フロストが参加「しなかった」唯一の作品である(エグゼクティヴ・プロデューサーとしてクレジットはされている)。一説によると、フロストはストーリーを前に進めたがっていたため、プリクエルとしての『最期の7日間』の企画に乗り気でなかったという。文字通り世界を席巻した『ツイン・ピークス』ブームと、第2シーズンに入ってからの急速な転落がスタッフやキャストに疲弊感をもたらしていたことは事実で、当初カイル・マクラクランが劇場版への出演に否定的だったことなども合わせて考えると、フロストが『最期の7日間』に積極的にかかわる気に

ならなかったのは理解できる。が、いっぽうで当時フロストは、自身が監督した『ストーリービル／秘められた街』（92年）の製作に忙殺されており、そのため映画版にコミットする時間が取れなかったという事情もある。

とはいえ、のちの『The Return』が直接的に『最期の7日間』を継承していることを考えると、フロストが劇場版をしっかり『ツイン・ピークス』世界を「拡張」するものとして受け入れていることは明らかである。

そして「拡張」というのは『最期の7日間』を語るにあたって、まさに相応しい言葉であろう。

リンチも、そしてフロストも、TV版『ツイン・ピークス』人気が凋落した原因については、はっきりと分かっていた。ローラ・パーマー事件が解決したからである。もともとリンチも、またフロストもローラ殺人事件をわかりやすい形で「解決」することは考えていなかった。だが「誰がローラを殺したのか？」という言葉が社会現象になるほど取り沙汰され、TV局からのプレッシャーも高まるなか、いちおうの解決編を提示する以外に道はなかった。だがローラ・パーマーというブラックホールを失った番組は、同時にその引力も手放すこととなった。『ツイン・ピークス』はどこまでもローラ・パーマーの話であるべきだったのであり、『最期の7日間』はその意味で『ツイン・ピークス』をローラ・パーマーと今いちど結びつけるために絶対に必要な作品だった。

『最期の7日間』は、『ツイン・ピークス』をソープ・オペラの呪縛から解き放つ作業でもあった。公開当時に『最期の7日間』が不評を買ったのは、観客の多くが「おなじみのソープ・オペラとしての『ツイン・ピークス』」を求めていたからだが、もともと脱構築の対象として取り込んだはずのソープ・オペラ要素に番組自体が徐々に侵食されていったこと、そのことが『ツイン・ピークス』が潜在的に持っていた、出口の見えない迷宮としての魅力を削いだこと……こうしたあれこれに対するカウンターパンチとして『最期の7日間』は作られ「なければならなかった」。

『最期の7日間』のファーストカットで、ホワイトノイズが渦巻くTVのモニタが叩き壊されるのは決して偶然ではない。TV版とは比較にならないブルータルさ、やはりTVでは表現し得なかった最底辺の貧困層の描写は、ポップ・カルチュラル・アイコンと化した「ローラ・パーマー殺人事件」の本質、その悲惨、その残酷、そのやりきれなさを改めて浮かび上がらせた。『ツイン・ピークス』はもはや、ノスタルジーに包まれた甘美な悪夢ではなくなった。夢の世界が、ザラついて血まみれの現実と地続きである、という恐るべき事実が赤いカーテンの向こう側に垣間見えてしまったからである。

パメラ・ギドリーのデビュー作『Thrashin'』のポスター

『ツイン・ピークス／ローラ・パーマー最期の7日間』で死美人となるテレサ・バンクス役のパメラ・ギドリー

文◎高橋ヨシキ

“Twin Peaks：The Missing Pieces”編集室で容赦ない鋏に切り刻まれた劇場版に、新たなパースペクティヴを持ち込む重要作

# 『もうひとつのローラ・パーマー最期の7日間』

デイヴィッド・リンチは映画『ローラ・パーマー最期の７日間』を再編集して、いわゆる「ディレクターズ・カット」を作ることをしなかった。なぜなら『ローラ・パーマー最期の７日間』は既に「ディレクターズ・カット」であり、完成した作品だったからだ。あとから「特別編」や「ディレクターズ・カット」を作らない、というリンチの創作姿勢は一貫しており、『デューン／砂の惑星』（84年）が再編集されてTV放映された折には（88年）、監督のクレジットを外して「アラン・スミシー」名義に変えさせている。

『ローラ・パーマー最期の７日間』からカットされた場面をつなぎ合わせた『The Missing Pieces』は、全部で91分もの長さを持ち、シーンひとつひとつがきちんと「完成」している異色の映像特典である。しかしながら、リンチは既に『ブルーベルベット』で同じ試みを行っており、それが満足のいく結果だったことから『ツイン・ピークス』でも同様のスタイルでカットシーンを公開することに決めたと思われる――が、それだけではない。ひとつの映画として完結している『ブルーベルベット』と違い、『ローラ・パーマー最期の７日間』はTVシリーズを拡張した一種のプリクエルであると同時に、のちに製作されたシーズン３『The Return』への橋渡しをする機能をも担うことになったため、ここでカットされたシーンを復活させておくことは、新たなパースペクティヴを『ツイン・ピークス』に持ち込むために必要だったのである。

『The Missing Pieces』は33の「シーン」に分かれている。ひとつの場所で起きていることを「シーン」として入れてあるものもあれば、いくつかの場所や時空を行き来しながらも、それもまたひとつの「シーン」としている場合もある。

重要なのは、こういった「シーン」の多くが、『ローラ・パーマー最期の７日間』公開当時、劇場に詰めかけたファンたちが観る

ことを切望した場面だということだ。壁越しで観客に姿は見えない「ダイアン」に向かってクーパーが陽気に話しかける場面や、製材所にやってきたデル・ミブラーとピート・マーテルが対峙する場面（ジョシーも映っている）、エドとノーマの逢瀬、保安官事務所の面々、ローラと電話で会話するジャコビー先生、ルーシーとアンディ……。「おなじみ」の面々が登場する場面のほとんどが編集室で容赦なく鋏で切り刻まれたことがよくわかる。

　こうしたシーンのいくつかは、単に説明的であるという理由でカットされたものだ。たとえばローラとドナがトラック運転手たちと、これまで「ピンク・ルーム」という通称で知られていたカナダのクラブに入るくだり。カットシーンには、建物の正面に到着し、ビリヤード台のあるエントランスを抜けて、クラブ「パワー・アンド・ザ・グローリー」（これが正式名称であることが今回初めて明らかになった）に入るまでが含まれるが、長いうえに説明的なのでカットもやむなしと思われる。面白いことに、リンチは『ブルーベルベット』でも、ベンの店に到着する場面で、やはりビリヤード台のあるエントランスを通って奥へと向かうシーンをまるまるカットしていたが、こういう説明的な場面も撮っておかないとのち素材が足りなくて困る場合はよくあるので、このように要所要所をしっかり押さえておくことは非常に重要なのである。

「おなじみ」の場面がカットされているのには別の理由もある。TV版では物語が進むにつれて生前のローラの行動がだんだん明らかになってくるのだが、カットシーンにはそうしたローラ（や、他の登場人物）の行動を単に絵解きした場面が多く含まれているのだ。完成した『最期の7日間』にも、そういう「絵解き」要素は当然含まれているが、カットシーンを観ることで、リンチが余計な「絵解き」を可能な限り排除しようとしたことが見えてくる。

　これは昨今、スピンオフやプリクエルといった形で「観客が既に知っている話の絵解き」をすればするほどファンサービスに繋がる、とするブロックバスター映画の考え方の真逆と言っていい。我々は映画館に確認作業をしに行くわけではないし、映画監督はそのような「作品」を提供すべきでない。『The Missing Pieces』がカットされて本編に残らなかった背後には、そうしたモラルが感じ取れる。

『The Missing Pieces』には、ほかにも劇場版では痙攣的な編集と音響効果で、まさに異次元が現実を侵食しているかのように見えたフィリップ・ジェフリーズ登場場面の（特殊な編集効果抜きの）フル・バージョンであるとか、セーラ・パーマーが自分自身のコントロールができていないことに気づいて恐怖におののく場面など、『The Return』を経て重要性を増した場面も多く含まれる。ローラとロネットの悲鳴を森の中で耳にして苦悶に顔を歪ませる丸太おばさんや、TV版最終話の「その後」を描いた場面にも心を揺さぶられるだろう……それにしても、アニーの指輪を抜き取った看護師B・ラウンドツリー嬢はいったいどこへ行ってしまったのだろうか？

『～The Missing Pieces』より、アニー役のヘザー・グラハム

『～The Missing Pieces』より、ドナ役を演じるモイラ・ケリー

FIRE

# The PERFECT EPISODE GUIDE to TWIN PEAKS

# ツイン・ピークス 全エピソード解説

［シーズン3］編

Part 1 〜 Part 18

文◎北原香

season 3

# 第1話 私の丸太からメッセージがある

My log has a message for you.

The Return: Part 1

◉監督：デイヴィッド・リンチ
◉脚本：デイヴィッド・リンチ、マーク・フロスト
◉米国放映日：2017年5月21日
◉日本放映日：2017年7月22日

## 25年後。クーパーのドッペルゲンガー"Mr.C"。バックホーンでは首と胴体が別人の切断死体が見つかる

『The Return』は、12年、マーク・フロストがデイヴィッド・リンチに続編制作を持ちかけたことから動き始めた。昨今のケーブルTVやストリーミングサービスの隆盛で、リンチが抱えていたTVへの不信感が消えたことも大きいだろう。リンチとフロストは、ハリウッドの老舗レストラン「ムッソー&フランク」で落ち合い、食事と会話を楽しみ、かつてABCに勤めていたゲイリー・レヴィンがいるShowtimeとパートナーを組むことに決めた。

霧のかかるツイン・ピークス。名所である滝の水量は豊富だ。25年前の朝の風景がよみがえる。

いまだ異世界に囚われているクーパー。巨人から新たなメッセージを受け取る。

**忘れるな**
**430**
**リチャードとリンダ**
**2羽の鳥と1石**
**お前は遠く離れている**

蓄音機からは謎のノイズが流れている。

ツイン・ピークス、ホワイトテール・ピークの森。元精神科医のローレンス・ジャコビーの住むトレーラーハウスに、何本ものシャベルが配達されてくる。

ニューヨーク。古い高層ビルのペントハウスで、不可思議な装置に囲まれたガラスの箱を監視するバイトをしている青年サム。何も起こりそうもない箱をただひたすら見つめている。彼に好意を寄せるトレイシーがコーヒーの差し入れを持ってやってくる。トレイシーは部屋の中に入りたがるが、仕事内容が極秘のため、警備員が許可しない。サムは入口でコーヒーを受け取る。

グレート・ノーザン・ホテル。以前と変わらずベンジャミン・ホーンが取り仕切っている。今のベンは、美人秘書ビバリーにも手を出さず、悪事には手を染めていない様子。弟のジェリー・ホーンはホテル業から退き、マリファナの品種改良に勤しんでいるようだ。マリファナを練り込んだバナナブレッドにマリファナ入りのジャムをたっぷり塗って美味しそうに頬張るジェリー。

保安官事務所。受付にいるルーシーのもとに、保険のセールスマンが訪ねてくる。「トルーマン保安官はいますか?」。ルーシーは、トルーマン保安官は2人いて、ひとりは入院中、もうひとりは釣りに行っていると答える。

夜の森。クーパーと同じ顔をしたMr.Cという人物が、ベンツに乗ってある家を訪れ、

part 1

見張りの男を殴って中に入る。応対したのはオーティスという男。レイとダーリャという若者を連れていくMr.C。
ニューヨーク。何も写っていない映像の記録を金庫に保管するサムのもとに再び差し入れのコーヒーを持ってきたトレイシー。受付にいるはずの屈強な警備員が見当たらない。サムはこっそりトレイシーをガラス箱のある部屋に招き入れ、2人はセックスを始める。すると、ガラス箱の中が黒くなり、なにか生き物がうごめいている。ガラス箱から飛び出した煙のようなものが2人を激しく襲う。部屋一面に鮮血が飛び散る。

サウスダコダ州バックホーン。マンションの一室から異臭がするとして、隣人のメリッサが警察に通報。部屋からは首と胴体が切断された死体が見つかる。首は住人のルース・ダヴェンポート、胴体の指紋は、コンピュータで照合しても情報が出てこず、誰のものか特定できない。現場で採取された指紋から、地元の高校で校長を務めるビル・ヘイスティングスが容疑者として浮かび上がり、身柄を拘束される。
ツイン・ピークスの保安官事務所。丸太おばさんからホークに電話がかかってくる。それは丸太からの伝言だった。「クーパー捜査官に関わる何かが失くなった。それを見つけるにはあなたの祖先が関係している」。メッセージを受け取ったホークは、アンディ、ルーシーとともに〝失くしたもの〟を探しはじめる。
バックホーンの警察署でヘイスティングスの取り調べが始まる。彼と釣り仲間のデイヴ刑事が、事件の日のアリバイやルース・ダヴェンポートとの関係を尋ねるが、いまいち歯切れが悪い。ヘイスティングスの家宅捜索に出向いた警察は、彼の車のトランクから小さな肉片を発見する。

## 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

『The Return』の、というか〈ツイン・ピークス〉の良心を一心に集約したかようなフランク・トルーマン保安官を演じたのは『ジャッキー・ブラウン』(97年)、『マルホランド・ドライブ』(01年)でおなじみのロバート・フォスター。もともとフォスターはオリジナル版『ツイン・ピークス』のハリー・S・トルーマン保安官役候補に挙げられており、本人も出演を熱望していたが、友人が監督する作品とスケジュールがかぶっていたため「友との約束は破れない」と役を受けずじまいに終わったという経緯があった。というところが既にフランク・トルーマンその人としか思えない。今回は満を持しての登場となった。ガラス箱の中に浮かび上がる〈エクスペリメント〉のCGモデル用にボディのデータを提供したのはダンサーで女優のエリカ・エイノン。〈エクスペリメント〉の出現条件にはアレイスター・クロウリー直系の性魔術も関係しているそうだが……。

# 第2話 星々が巡り 時が正体を現す

The stars turn and a time presents itself.

The Return: Part 2

●監督：デイヴィッド・リンチ
●脚本：デイヴィッド・リンチ、マーク・フロスト
●米国放映日：2017年5月21日
●日本放映日：2017年7月29日

**「夢で殺したかもしれない」と語る切断死体の容疑者。**
**“進化した腕”がクーパーを赤い部屋から現実世界へと送り出す**

14年10月3日、リンチとフロストがツイッターで同時に「君の好きなガムがまた流行る」と書き込み、10月6日に続編の制作を正式に発表した。その後、水面下で予算交渉していた両者。『ツイン・ピークス』のエグゼクティブ・プロデューサーであるサブリナ・サザーランドがオファーした予算をみたShowtimeは、とてもそんな金額は出せないという反応。リンチは、次にShowtime側が提示した予算をみて、まるでダイアンのように「クソったれ」と言い放った。1年4カ月という長きにわたり交渉を重ねたにもかかわらず、「しかるべき脚本を書くために必要な予算が提示されなかった」として、15年4月5日、リンチは突然、自身のツイッターとフェイスブックのアカウントからTP続編プロジェクトからの降板を表明する。

バックホーンの留置場。逮捕されたビル・ヘイスティングスのもとに妻フィリースが面会にやってくる。ルースの部屋には行っていないが夢の中で行ったかもしれない、とわけのわからない弁解をするヘイスティングス。浮気を知っていたフィリースは夫をまったく信じない。しかしフィリースも弁護士のジョージと不倫しており、お互いにののしりあう。ヘイスティングスの隣の房に、全身真っ黒の謎の男がいる。男は、上空にすっと消える。

自宅に戻ったフィリースをMr.Cが待っていた。Mr.Cは彼女の顔面を撃つ。

ダイナーで、Mr.Cとダーリヤ、レイ、ジャックが食事をしている。Mr.Cはクリームコーンを食べている。ビル・ヘイスティングスの秘書からなにかの情報を聞き出すようレイに命令するMr.C。

赤い部屋。片腕のマイクがクーパーに語りかける。

**これは未来か？**
**それとも　これは　過去か？**
**誰かが　ここにいる**

大人になったローラが現れ、クーパーに「あなたはもう行っていい」という。マスクのように顔を開くローラ、その中は真っ白な光。ローラはクーパーに口づけをし、何かをささやく。悲鳴を上げながら飛び去るローラ。赤いカーテンがゆらめき、ユニコーンが佇んでいる。

マイクがクーパーを、進化した腕のいる部屋に案内する。

**覚えているか？**
**お前のドッペルゲンガーを？**
**まず彼が戻らねばならない**

part 2

## そうすれば　お前が出られる

どこかのガレージ。Mr.Cがジャックの顔を何度も何度も揉んでいる。

モーテル。Mr.Cが戻ってきたことに気づきあわてて電話を切るダーリャ。誰と電話をしていたんだと聞かれ、ジャックと答える。Mr.Cはベッドでダーリャを抱き寄せながら「ジャックは2時間前に死んだ」という。Mr.Cは通話の録音を聞かせる。電話の相手はレイだ。「サウスダコタの刑務所にいる。ジェフリーズからまた電話があった。Mr.Cを明日殺せ」。血相を変えて逃げ出そうとするダーリャを引き戻して殴り、あらためて問いつめる。ダーリャはMr.Cを殺せば50万ドルをもらえるはずだったと説明。「明日どこかへ行くんでしょう?」というダーリャに、Mr.Cは「明日はブラックロッジと呼ばれる場所に戻されるはずだったがまだ戻れない」と返答する。Mr.Cはダーリャを撃ち殺し、通信機でフィリップ・ジェフリーズと連絡を取る。お互いの状況を確認するが、どこか腑に落ちないMr.C。「お前は誰だ?」と聞くが通信が途切れる。FBIのサイトにアクセスして、サウサダコタ州ヤンクトン連邦刑務所のデータをダウンロードする。

赤い部屋。クーパーに「ローラを探せ」というリーランド。進化した腕が「存在しない!」と叫ぶと、床がゆがみクーパーは外界へ押し出される。異世界を落下し、ニューヨークのガラス箱に漂着するが出られず、再び異世界を漂う。

パーマー家では一人暮らしのセーラがブラッディマリーと煙草を手に、ライオンの捕食映像を見ている。

ロードハウス。今夜の出演者であるクロマティクスが「Shadow」を演奏している。友人と語らうシェリー。ジェームズがシェリーの友人レネを愛しそうに見つめる。天使の歌声が響いている。

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

クロマティクス『SHADOW』が流れる中、ジェームズがロードハウスに連れてきたのはゴム手袋メガトンパンチのフレディ君ではありませんか。第1章+第2章の間にほぼすべてのセッティングが手際よく終わっているのには改めて感心させられる。ロードハウスでは既にレッドがシェリーに色目を使っていたりもする。フィリップ・ジェフリーズ、ドッペルゲンガー、「非・存在」それにジュディのシルエットが描かれたカード。シャンタルとハッチ（ハッチは言及されるのみ）。〈ローラ・パーマー〉。なお小人役マイケル・J・アンダーソンが『The Return』に出演していない理由はいくつか示唆されているが（ひとつは要求したギャラが高額すぎたというものだ）、2015年の8月、マイケルがフェイスブック上でリンチを口汚く罵った（「未成年の自分の娘をレイプし、親友を殺した上、自分にも自殺を強要しようとした」云々）ことも無関係ではあるまい。

# 第3話 助けを呼ぶ Call for help.

The Return: Part 3

●監督：デイヴィッド・リンチ
●脚本：デイヴィッド・リンチ、マーク・フロスト
●米国放映日：2017年5月28日
●日本放映日：2017年8月5日

**クーパーがダギー・ジョーンズとしてラスベガスへ。赤い部屋に導かれてジャックポットを当て続ける**

いざ降板すると決めると、悲しみと同時に非常に大きな自由も感じたというリンチ。Showtimeが勝手にTP続編を作るというなら、そうさせてやろうとすら思ったという。だが、周囲の反応は早かった。リンチが降板を発表した2日後の15年4月7日、主要キャストのシェリル・リー（ローラ）、シェリリン・フェン（オードリー）、キャサリン・E・コールソン（丸太おばさん）、グレイス・ザブリスキー（セーラ）、キミー・ロバートソン（ルーシー）らに加え、世界中の熱狂的ファンが「リンチのいない『ツイン・ピークス』なんて……」というテーマとハッシュタグ「#SaveTwinPeaks」で、一斉にSNSに動画やメッセージを投稿。change.orgのキャンペーンも開設され、リンチ待望論が世界を駆け巡った。

異世界をさまようクーパーは、紫がかった部屋にたどり着く。目を縫われた女がクーパーに何か伝えようとするが言葉にならない。壁の装置には「15」の数字。女は、首が切られるジェスチャーをしながら装置に近づこうとするクーパーを必死に止めている。宇宙に浮かぶ屋上で女は、大きなスイッチを切り感電したように痺れながら彼方へ飛んでいく。広大な銀河の中、ブリッグス少佐の大きな顔が横切り、クーパーに「青いバラ」と告げる。

部屋に戻ると、壁の装置の数字が「3」に変わっている。ソファにはロネットに似た女性が座っている。彼女の腕時計は2時52分を指している。

現実世界で車を運転するMr.C。異世界の装置と呼応するように体調がおかしくなる。クーパーは装置にゆっくりと引き込まれる。異世界に靴だけを残して。

現実世界のハイウェイ。Mr.Cはめまいに耐えきれず事故を起こす。車内のシガーソケットからはノイズ音。Mr.Cはひたすら吐き気を我慢している。フロントガラスにうっすらと赤いカーテンがゆらめいている。

ランチョ・ロサ。ダギーというクーパーのもうひとりのドッペルゲンガーが空き家で娼婦のジェイドを買っている。娼婦がシャワーを浴びている間、気分が悪くなり倒れこむダギー。部屋に現れる赤いカーテン。ダギーは口から黒く濁ったクリームコーンのようなものを吐き出し、突然のノイズと共に消える。

ハイウェイ上のMr.Cは、赤いカーテンの幻影が消えると同時に一気に胃の中のものを吐き出す。吐瀉物は黒く濁っている。

赤い部屋のソファにダギーが座っている。目の前には片腕のマイクがいる。

part 3

**誰かが作ったのだ　お前を**
**ある目的のために**
**だがおそらく　もう目的は達成された**

ダギーの体がしぼんで緑の指輪がすり抜け、ダギー自身は金色の玉に変わる。それを見ないように目を覆うマイク。ダギーが消えた後に残された金色の玉と指輪を拾い上げる。指輪をテーブルにそっと置く。

ダギーの消えた部屋のコンセントからクーパーが現れる。ジェイドは、洋服も髪型も違うクーパーをダギーだと思い込み、ダギーが消えたことに気づかない。クーパーは赤子のように何も分からない様子。クーパーのポケットからグレート・ノーザン・ホテルの315号屋の鍵が出て来る。

ジェイドはクーパーに靴をはかせ、ラスベガスのシルバー・マスタング・カジノ・ホテルまで送り届ける。ぼーっとするだけのクーパーに5ドルを渡し、誰かに助けを求めるように諭す。「もう行っていいわよ」というジェイドの言葉に、クーパーは、赤い部屋でのローラを思い出す。

カジノでスロットをまわす客の様子を観察するクーパー。ある台の上に赤い部屋のマークがあるのに気づき、そのスロットをまわすとメガジャックポットが当たる。クーパーは、赤い部屋のマークに導かれ、次々とジャックポットを引き当てる。

ツイン・ピークス保安官事務所。「ないものを探す」という難題に挑むホークたち。

FBIのフィラデルフィア支部。タミー・プレストン捜査官からニューヨークのガラス箱の実験室の死体について、手がかりが一切ないとの報告。その時突然ゴードン宛てにクーパーからの電話が入る。ゴードンたちは、明朝、サウスダコタのブラックヒルズに飛ぶことにする。

ツイン・ピークスのロードハウス。ザ・カクタス・ブロッサムズが「ミシシッピ」を演奏している。

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

ブリッグス少佐の首なし死体が「こちら側」にあり、「あちら側」に彼の頭部だけが浮遊していること、および〈コンセント〉に引き寄せられたクーパーをナイドさんが必死に——首を掻き切る「死」のジェスチャーも交えて——止めたことを考え合わせると、数字が間違っているときに境界線を越えようとすると身体が「こちら側」と「あちら側」の間で切断されてしまうのだろう、ということが想像できるわけだが、その場合ウィリアム・ヘイスティングス校長と共に「ゾーン」の探求に勤しんでいた図書館司書、ルース・ダヴェンポートの胴体は必然的に「あちら側」に残されたことになる方が自然な気もする（その胴体にブリッグス少佐の頭が接続されていなかったのは幸運というべきか）。カジノのフロア係ジャッキーを演じたサブリナ・S・サザーランドは『The Return』のエクゼクティブ・プロデューサーであり、オリジナル・シリーズでも制作進行を務めていた。

# 第4話 思い出しちゃって

...brings back some memories.

The Return: Part 4

●監督：デイヴィッド・リンチ
●脚本：デイヴィッド・リンチ、マーク・フロスト
●米国放映日：2017年5月28日
●日本放映日：2017年8月12日

## クーパーの、ダギーとしての生活が始まる。ゴードンとアルバートがいう「青いバラ」とは？

リンチの降板表明をSNS経由で知ったShowtime のCEO、デイヴィッド・ネヴィンズは、15年4月7日、プログラム・ディレクターであるレヴィンを伴ってリンチ宅を訪問する。レヴィンは、ABC在籍時代、当時はまだ「ノースウェスト・パッセージ」というタイトルだったTP企画をリンチとフロストが売り込みに行った際、プレゼンのテーブルに同席していた縁深い人物だ。ネヴィンズとレヴィンは、ドーナツ、ではなくクッキーを持参してリンチとフロストとの話し合いに臨んだ。しかし会議は特に進展もないまま45分が過ぎ、物別れに終わったまま全員が席を立とうとした。そのとき、ネヴィンズは意を決してリンチに言った。「あなたの希望に応えられるよう、なんとかします」。それに対し、リンチはこう答えた。「こちらこそ、君たちの希望に応えられると思うよ」

ラスベガスのシルバー・マスタング・カジノで、クーパーはメガジャックポットを当て続けている。どのマシンが当たるのかを老婆に教えるクーパー。老婆も大当たりを引き、クーパーにひたすら感謝している。その数は合計30。クーパーは、ダギーの知り合いだというビル・シェイカーに話しかけられ、自分の名前がダギー・ジョーンズだと認識する。「家」という言葉に反応するも場所が分からないクーパーに、ランスロット・コートの赤いドアの家に住んでいると教えるシェイカー。クーパーは、支配人室で、引き当てた全額を受け取り、カジノが用意したリムジンで帰路に着く。

家の中からダギーの妻ジェイニーEが出てきてクーパーをひっぱたく。どうやらダギーは3日間も音信不通で、息子のサニージムの誕生日パーティーもすっぽかしてしまったとのこと。ジェイニーEは、ダギーの持つ袋に大金が入っていることをいぶかしむが、本当にジャックポットを引き当てたと聞き態度を一変させる。

ツイン・ピークス保安官事務所。25年前よりもハイテク化され、不良だったボビーは保安官になっている。ホークたちは会議室にローラ殺人事件の証拠品を並べ、まだ「失くしたもの」を探している。

ランスロット・コート。ベッドの上にダギーの洋服が並べられているが、着方が分からずじっと座っているクーパー。部屋に片腕のマイクが現れ「お前はだまされた。もうひとりは死ぬことになる」と言い残して消える。用を足し、洗面所の鏡を覗き込むクーパー。鏡をそっとさわるが、その顔に変化は見られない。ダギーの息子のサニージムがクーパーを不思議そうに見ている。微笑

part 4

み合う2人。サニージムがぐっと親指を立てると、クーパーはそれを真似しながらゆっくりまわる。

頭にネクタイをのせた不思議な格好でダイニングに降りてきたクーパー。サニージムは何も分からないクーパーを気遣って、イスを引いて座らせる。ジェイニーEが焼きたてのパンケーキを運び、サニージムがシロップをかけてあげる。クーパーはなんとかフォークで食べ始める。初めて食べたかのようなリアクションのクーパー。コーヒーの香りに反応し嬉しそうに飲むが、まずそうに吐き出す。

ゴードン一行がヤンクトン連邦刑務所に到着。Mr.Cの車に残されていた吐瀉物に毒性の成分が含まれており、立ち会った警察官は救急車で運ばれたという。

ゴードンたちはガラス越しにMr.Cに面会する。ゴードンに親指を立てるMr.C。Mr.Cの話す言葉はどこかおかしい。挨拶をなぜか2回繰り返し、フィリップ・ジェフリーズに安全だと知らせるためのメッセージを残したと報告する。その言葉に感情はなく、まるでテープレコーダーを再生しているかのようだ。いつ刑務所から出られるか聞くが、ゴードンは明言しない。

違和感が拭いきれないゴードンは、刑事たちに個人的な電話をかけさせて会話を聞いておくよう指示を出す。

タミーを先に行かせて、ゴードンとアルバートが2人きりで話している。アルバートはかつて、フィリップがMr.Cに情報を渡すのを許可したと告白。コロンビアの男の名前を伝えた1週間後、その男は死んだという。2人は、まともに挨拶もできなかったMr.Cを怪しんではいるが、この状況が理解できない。

「青いバラ……」とアルバート。

「これ以上なく青い。あの人物に会ってもらうしかない」とゴードン。

ツイン・ピークス。ロードハウスで、Au Revoir Simoneが「LARK」を演奏している。

## 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

〈ダギー・ジョーンズ〉の朝食場面は、永遠にデイヴ・ブルーベック・カルテット『テイク・ファイヴ』の印象を変えてしまった。それを言ったらジーンとジェイクの2人組を使い、ランチョ・ロサでのダギー暗殺を企てたロレインが映るたびに必ず流れるブランテッド・ビーツ『I Am』もそうだし、何よりプラターズ『マイ・プレイヤー』などなど、『The Return』でかかる曲のほとんどについて同じことが言える。ダギー一家の住む通りの名前は「ランスロット・コート」、のちにジェイニーEが借金取りと出会う公園は「グイネヴィア通り」の角にある「マーリン・パーク」、さらに〈ダギー〉がミッチャム兄弟のもとへと向かうときにはご丁寧にホテル〈エクスカリバー〉が映るなど、オリジナル・シリーズでの「グラストンベリー・グローヴ」やブリッグス少佐のセリフ「城はどこだ？」を引き継いでのアーサー王ネタは、今回もてんこ盛りである。

# 第5話 ケース・ファイル
Case files.

The Return: Part 5

●監督：デイヴィッド・リンチ
●脚本：デイヴィッド・リンチ、マーク・フロスト
●米国放映日：2017年6月4日
●日本放映日：2017年8月19日

**切断された胴体はブリッグス少佐のものだった**
**Mr.Cは電話を通してどこかと交信する**

Showtimeとの交渉再開を受け、リンチとエグゼクティブ・プロデューサーのサブリナ・サザーランドは、制作に必要なものをリストアップした。リストの提出にあたり、リンチはサザーランドにこう指示したという。「『これは交渉ではない。もし続編を作りたいなら、これらはすべて必要なものだ』と言うんだ。もしShowtimeがくだらないことを言い始めたら、『ありがとう』と言ってその場を立ち去りなさい」。しかし、Showtimeはリンチ側の要望をすべて受け入れた。その結果は見ての通りである。『The Return』が作られたのは間違いなくShowtimeのおかげだ。社内交渉も含め、彼らが根気強く諦めなかったからこそ、凄まじく濃密な18時間が生まれたのである。

ランチョ・ロサ。ダギーが娼婦を買った空き家で見張りを続ける手下たちが、ロレインに電話をかけ、まだ車が止まったままだと伝える。ロレインは、動揺しながら「ARGENT 2」とメッセージを送ると、ある場所で黒い装置が光る。

バックホーン。切断された胴体の胃袋から見つかった指輪には、「ダギーへ　愛をこめて　ジェイニーE」という文字が刻まれている。

留置所で鏡を見つめるMr.C。ボブといた25年前の赤い部屋が蘇る。

「まだ俺と一緒か。それでいい」

ツイン・ピークス。ボビーの親友だったマイクが会社の社長としてスティーヴンを面接している。履歴書にダメ出しをし、働きたければ態度で示せと説教する。

ラスベガス。ダギーがカジノで稼いだお金は42万5千ドルあったとジェイニーE。そこから借金5万ドルを返すように、という。ジェイドは車の中からグレード・ノーザン・ホテル315号室の鍵を見つけ、ポストに投函して返却する。

ラッキー7保険。ジェイニーEに送ってもらったクーパーは、会社の前にあるカウボーイの銅像をじっと見つめている。何も分からない様子で立ちすくむクーパーを同僚のフィル・ビスビーが導く。彼の抱えるコーヒーの香りにつられて歩き出すクーパー。別の同僚のためのコーヒーをひとつ分けてもらって、やたらと美味しそうに飲む。

保険の支払い状況の報告会議。アンソニー・シンクレアの報告中、彼の顔に光がちらちらするのを見て、アンソニーは嘘つきだというクーパー。会議後、社長のブッシュネル・マリンズに同僚を嘘つきよばわりしたことを咎められ、明日までに資料に目を通して結果を報告するよう指示される。

ランチョ・ロサ。チンピラが、放置されたままのダギーの車を盗もうとするが、仕

掛けられた爆弾が爆発。
ダブルRダイナー。シェリーの娘のベッキーがシェリーにお金を無心している。ノーマの心配をよそに、シェリーは自分のお財布から少し用立てる。ベッキーは車に戻り夫のスティーヴンにお金を渡す。スティーヴンに分けてもらったコカインでハイになるベッキー。
夜7時になり、ジャコビーがホワイトテール・ピークのスタジオからネットでの生放送を始める。番組では、金色に塗ったシャベルを20ドル99セント(送料別)で売っている。
国防総省。ノックス大尉が、ブリッグス少佐の指紋が発見されたことをデイビス大佐に報告。25年間で16度目の指紋発見のため、また徒労に終わるかもしれないと言いながらも調査に乗り出す。
ロードハウスではトラブルというバンドが演奏している。ボックスシートでリチャード・ホーンがタバコを吸っている。店員から禁煙だと注意を受けるが、居合わせた保安官補のチャドが「ここは俺に任せろ」と注意を交代。リチャードはチャドに賄賂の入ったタバコの箱を渡す。火を借りにきたシャーロットを乱暴にまさぐるリチャード。音楽が激しさを増す。
FBI。25年前のクーパーの写真を見つめるタミー。バックホーンで発見されたブリッグス少佐の指紋を見て何かに気づく。
ヤンクトン連邦刑務所。マーフィー所長に電話を許されたMr.C。所長はFBIの命令通り、電話の模様を録音している。モニター越しに所長を脅すMr.Cが番号をいくつか押すと、刑務所内にアラームが鳴り響くが、「牛が月を飛び越えた」と話すと異変がおさまる。
ブエノスアイレスでは、部屋にある装置がピピッと音を出して消える。
ラッキー7保険。会社の前に佇むクーパー。警備員に帰るよう注意されるが、黙って静かに銅像の足を撫でている。

## 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

『The Return』には、わずかなシーンだけ出演しているオリジナル・キャストも多いが、立派に成長した（と言っていいと思う）マイク・ネルソンが面接にやってきたスティーヴンを叱りつける場面は中でも白眉。スティーヴンがらみではその後、あのガーステン・ヘイワードの変わり果てた姿に愕然としたファンも多かったと思うが（思わず変な声が出ました）、中年になったマイクが中古車屋とはいえ管理職に付き、おじさん然と仕事をしている姿は全世界の中年男性に希望を与えた……かどうかは定かではない。シェリーの娘ベッキー（アマンダ・セイフライド）がカーステレオから流れるパリス・シスターズ『忘れたいのに』をバックにコカインでハイになる場面は切なく美しい。気分の高揚に合わせて画面の明度が変化するのも気が利いている。ランチョ・ロサの薬物中毒シングル・マザーが叫ぶ「119！」はやはり緊急番号「911」の逆さ読みなのだろうか？

# 第6話 死ぬな Don't die.

The Return: Part 6

●監督：デイヴィッド・リンチ
●脚本：デイヴィッド・リンチ、マーク・フロスト
●米国放映日：2017年6月11日
●日本放映日：2017年8月26日

## ついにダイアン登場！ チーム「赤い部屋」はクーパーに仕事も教えてくれる

そして15年5月16日。リンチが、巨人のセリフを借りて「噂は見かけとは違う。今度こそ!!! また起きている」とツイート。これを見た世界中のファンは狂喜した。TP続編プロジェクトへの復帰を果たしたリンチの要望は次々と叶えられた。話数は、当初予定されていた全9話から全18話へと倍増。前シーズンの反省を踏まえて、全エピソードをリンチ自らが監督し、400ページ超の脚本をマーク・フロストとリンチがすべて手がけるという。さらに、Showtimeからの野暮な修正要請を受け入れなくても良いよう、最終編集権も獲得した。

ラッキー7保険の前で佇むクーパー。社長に預かった案件資料を持ち、保安官に連れられ自宅に帰る。ジェイニーEは、クーパーとサンドイッチを頬張りながら、翌日病院につれていくと話す。玄関にあった封筒の中からダギーが娼婦のジェイドと一緒にいる写真を見つけたジェイニーEは怒り心頭。クーパーを問いつめると、浮気を認めるようなのんきな返事をする。ちょうどそこへ、封筒を投函した借金取りのジミーから電話があり、ダギーの借金5万ドルを返済するよう要求される。翌日の病院行きを変更し、直接借金を返しに行くというジェイニーE。クーパーは相変わらず身分証明書も財布も車もなくしたままだ。

深夜、クーパーが会社から持ち帰った資料に目を通していると、片腕のマイクが現れ、「目覚めなければならない。死ぬな」と言いながら、クーパーに何かパワーを送るような身振りをして消える。クーパーがあらためて書類に向き合うと、小さな光が浮かんでみえる。何かのひらめきに従うように、次々と落書きのようなものを書き込んでいくクーパー。

アルバートは大雨の中、ある人物に会いに行っている。今夜のミッションはとても重要だというゴードン。たどり着いたマックス・フォンズ・バーで、アルバートはダイアンに再会する。

ツイン・ピークスのとある倉庫でコカインを試しているリチャード。取引相手のレッドにコケにされ怒りがおさまらない。

ダブルRダイナー。常連客のミリアムがウエイトレスのハイジと談笑。コーヒーを持ち帰るミリアムを見送りながら、シェリーとハイジは、ミリアムの大変な生活を心配し、今度パイをおごろうと話す。

リチャードがレッドとの会話の動揺を引きずったままトラックを運転していると、ニュー・ファット・トラウト・トレーラーパークのそばで男の子を轢き殺してしまう。その姿をパイ

part 6

好きのミリアムが目撃。トレーラーパークの管理人カールは、子供の体から魂が抜け、空へとのぼっていくのを見る。悲惨な事故にショックを受ける住人たち。悲しみにくれる母親を慰めるようにそっと肩に手をおくカール。電柱の番号は「6」。電気のノイズが聞こえている。

ラスベガス。ダンカン・トッドはオフィスの金庫から封筒を取り出す。アイク・ザ・スパイクの元に、ダギーとロレインの暗殺依頼が届く。

ランチョ・ロサ。爆発した車を回収する警察。ナンバープレートからダギーのものだと判明する。向かいの家に住んでいるドラッグ中毒の女は、「1、1、9」と叫びつづけている。

ラッキー7保険に出勤するクーパー。まだエレベーターからうまく降りられない。社長室に呼ばれたクーパーは、昨夜確認した案件書類を見せる。ブッシュネル社長は、クーパーの落書きのような書き込みに呆れていたが、次第に法則性に気づき内容を理解。クーパーに感謝し、握手する。

ダギーの借金を返済するために公園に来たジェイニーE。チンピラ相手にものすごい剣幕でまくしたて、5万2千ドル催促されていた借金を2万5千ドルにまで値切る。

ロレインのオフィス。スパイクがロレインと目撃者の女をメッタ刺しにする。

ツイン・ピークス。リチャードが森でトラックについた子供の血を拭き取っている。

保安官事務所。ホークがトイレの扉にネイティブ・アメリカンの横顔が彫られたプレートがあることに気づく。その扉の割れ目には、ローラの日記から破られた3ページがはさまっていた。これこそが丸太おばさんが言っていた「失くしたもの」だと確信するホーク。

ロードハウス。シャロン・ヴァン・エッテンが「Tarifa」を歌っている。

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

「何が『雨に唄えば』だ、ジーン・ケリーてめえ、マザーファッカー!」は「カーシック!」と並んで『The Return』でも一、二を争うアルバート節の真骨頂。ファット・トラウト・トレイラー・パークから街へと向かうカール(ハリー・ディーン・スタントン)の車に便乗させてもらった、むさ苦しい男ミッキーを演じたジェレミー・リンドホルムは『The Return』放映真っ只中の17年8月16日、彼女をバットでブン殴ったとして逮捕、第二級殺人と不法監禁/暴行の罪で起訴された(なお監視カメラ映像には、彼が彼女の頭部と言わず腹と言わず、何度も何度もバットを振り下ろす姿が映っていた上、首を締めたり、倒れた女性の腹の上に膝をつく体勢で飛び乗ったりする映像が映っていたというのだから手に負えない)。麻薬密売人のレッド(バルサザール・ゲティ)は、その佇まいも含め『ブルー・ベルベット』のフランク(デニス・ホッパー)を彷彿とさせる。

# 第7話 遺体はある
There's a body all right.

The Return: Part 7

●監督：デイヴィッド・リンチ
●脚本：デイヴィッド・リンチ、マーク・フロスト
●米国放映日：2017年6月18日
●日本放映日：2017年9月2日

## 失われたローラの日記の一部が発見。ダイアンはMr.Cに問いただす「あなたは誰？」

キャスト探しは、続編制作発表よりはるか前にスタートしていたにもかかわらず難航したようだ。キャスティングという意味ではなく、当時のキャストを集め直すという点においてである。14年8月14日にリンチは「誰かエヴェレット・マッギルがどこにいるか知らないか？　彼に話がある」とツイートしており、前シリーズのキャストに『The Return』のオファーをしようにも、連絡先も分からない関係者が数多くいたのだと推測できる。時間も手間もかけて集められたキャストは、発表された時点で総勢217名にものぼった。『The Return』は、いわゆるTVシリーズ作品のフォーマットではなく、全18話を長大な映画として撮りあげてから、1話ごとに切り分ける手法がとられることになった。

どこかの森。車を盗まれて途方に暮れているジェリーが兄のベンに電話している。ハイになっていて自分がどこにいるのか見当もつかないようだ。

ツイン・ピークス保安官事務所。トイレのドアに挟まっていたのは3枚の紙は、ローラの日記の一部だった。そこには、良いクーパーはロッジから出られないことやボブが誰だか分かったこと、生前のローラは出会っていないはずのクーパーやアニーの夢を見たことが書かれている。ホークはフランクに「これは4枚のうちの3枚。残り1枚はまだ見つかっていない」と話す。ホークは、日記を隠したのがリーランドだと確信している様子。あの夜ブラックロッジから出てきたクーパーが良いクーパーではないかもしれないと考え、最後に会ったドク・ヘイワードに連絡をとる。フランクに、スカイプ経由でクーパーが戻った夜のことを話すドク・ヘイワード。銀行の爆発事件で昏睡状態だったオードリーの病室を訪ねるクーパーを見かけたが、ドクが話しかけても何も答えず立ち去ったという。

バックホーンの現場で見つかった指紋を国防総省のノックス大尉が調査に来る。その指紋は現場に残されていたものではなく、切断された頭がない死体のものだった。デイビス大佐に報告をするノックス大尉。死体の年齢は40代後半で、死亡したのはほんの1週間以内。生きていたら70代後半になるというブリッグス少佐との年齢とどう考えても計算があわない。

ダイアンの家を訪ねるゴードンとアルバート。ダイアンは相変わらず口が悪い。ゴードンがダイアンに、サウスダコタの刑務所にクーパーがいることを告げ、共にクーパーに会いに行くことにする。

サウスダコタに向かう飛行機。ダイアン

part 7

は酒とタバコが欠かせない。ゴードンとアルバートは、タミーからクーパーの指紋を見せてもらうが、その指紋と刑務所にいるクーパーの指紋は鏡写しのように逆になっているという。

刑務所に到着し、10分だけクーパーと2人きりで話すというダイアン。テープレコーダーのような話し方をするMr.C。記憶は確かにクーパーのものだが、クーパーとは別人だと確信したダイアンは、Mr.C本人に「あなたは誰」と問いただす。ゴードンはマーフィー所長に、クーパーをこのまま勾留しておくよう念押しする。あれは私の知っているクーパーではないと泣きながら訴えるダイアン。外見は彼でも魂か何かが明らかに違うと報告する。それで十分だというゴードン。ダイアンは酒をあおる。

ラッキー7保険。仕事に励むクーパー。刑事が訪ねてきたところに、妻のジェイニーEが迎えにくる。爆発した車に関する捜査のためだったが、ジェイニーEが車は盗まれたに違いないと説明し、翌日あらためて電話をすることで落ち着く。

会社の外で突然スパイクに襲われるクーパー。体がとっさに反応しスパイクを地面に叩きつける。赤い部屋からの腕の応援やジェイニーEの加勢もあり見事撃退する。

グレート・ノーザン・ホテル。社長室の妙なノイズの発生源を探すベン・ホーンと秘書のビバリー。ホテル宛に315室の鍵が届いている。25年前にデイル・クーパー特別捜査官が泊まった部屋の鍵だ。

ロードハウスではいまだにルノー一家による高校生売春が行われている。

刑務所。深夜1時半、Mr.Cの脅しに屈した所長が、Mr.Cを脱獄させる。裏口にはレイが迎えに来ている。

ダブルRダイナー。満席の店内にはサント&ジョニーの「スリープ・ウォーク」が流れている。

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

空軍のシンシア・ノックス中尉（アデル・ルネ）の上司デイヴィス大佐役は『ゴーストバスターズ』（84年の方）で4人目のゴーストバスター、ウィンストンを演じたアーニー・ハドソン。役名のデイヴィスはブリッグス少佐を演じた故ドン・S・デイヴィスにちなんだもの。ゴードン、アルバート、タミー、ダイアンを乗せて一路サウスダコタへと向かうFBIのジェット機の窓が点滅するかのように消えるカットは大論争をファンの間に巻き起こした。中には飛行機の窓が点滅するカットのフレーム数をカウントし（135フレームだそうである）、5つある窓のどれがそれぞれのフレームに映っているかをマトリックス化することで「隠されたメッセージ」を見出そうとする強者も現れたが、もちろん結論が出ようはずもない。が、この徹底的な調査の過程で「雪山の前を飛ぶジェット機」の映像そのものが既存のフッテージだったことが判明したことは思わぬ収穫だった。のか？

# 第8話 火は あるか？
Gotta light?

The Return: Part 8

◉監督：デイヴィッド・リンチ
◉脚本：デイヴィッド・リンチ、マーク・フロスト
◉米国放映日：2017年6月25日
◉日本放映日：2017年9月9日

## レイに撃たれたMr.Cのもとに現れた謎のウッズマン。そして——

リンチにとって『インランド・エンパイア』以来の長編となった『The Return』。スタッフには、リンチが信頼をおいている面々が集結した。音楽はもちろんアンジェロ・バダラメンティ。編集は『ブルーベルベット』『ワイルド・アット・ハート』を担当し、前シーズンでは3つのエピソードで監督も務めたデュウェイン・ダナム。撮影監督は『マルホランド・ドライブ』『ロスト・ハイウェイ』のピーター・デミング。キャスティングのジョアンナ・レイは前シーズンはもちろん『オン・ジ・エアー』『ホテル・ルーム』『マルホランド・ドライブ』などでも組んだ。彼女は、レオ・ジョンソン役のエリック・ダ・レの母でもある。

ただ、こうした良いニュースが聞こえてくればくるほど、心配になったのも事実だ。25年という時間は長くて重い。豪華俳優陣の顔見世興行になるのか、あるいは中途半端な同窓会めいたものになるのか……。鑑賞後の失望感を恐れる自己防衛もはたらき、さほど期待していなかったのが本音だった。しかし、蓋をあけてみればそれらは一切の杞憂であった。これまでの25年間すべてが『The Return』のための序章だった。赤い部屋の「25年後に会いましょう」のセリフが現実になって帰ってきたのだ。

part 8

ヤンクトン連邦刑務所。マーフィー所長の手引きにより、脱獄して農場へ向かうMr.Cとレイ。Mr.Cが欲しい情報を持っているレイは、座標は記憶しているから、知りたいなら金をよこせという。

レイが小便がしたいと車を止める。そのすきにMr.Cが車のダッシュボードに仕込んでおいた拳銃を取り出し、レイを殺そうとする。だが、銃の弾が抜かれており、逆に撃たれてしまう。闇の中からウッズマンたちが現れ、Mr.Cの体をまさぐる。恐怖に怯えたレイはMr.Cの生死を確認できず、その場を去る。フィリップ・ジェフリーズに電話をかけるレイ。Mr.Cを殺せたとは思うが、確信はないと報告。

ロードハウス。MCが大々的にナイン・インチ・ネイルズを紹介。「She's Gone Away」を演奏する。

むくりと起き上がり目を開けるMr.C。

## ここから先は説明不能！

とにかくなんだか、とんでもないことになっているのだった。

高橋ヨシキの赤い髪の部屋 EXTRA #3

文◎高橋ヨシキ

## 『The Return』第8話で叶えられて／叶えられなかった

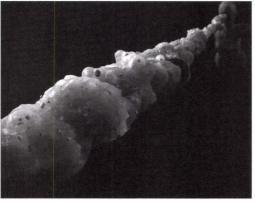
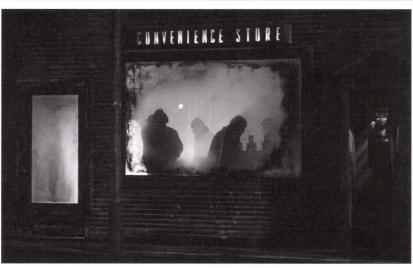
# 「可逆性」という幻想への渇望

喉は深く　口が大きく開く
向こう側に何かを見たんだ
決して人に話してはいけないと約束させられたが
分かるだろう　言わずにはおれないんだ
お前もあれを見なくてはならない
奴らは俺の内に何かを入れた
微笑みは赤く　その目は漆黒
俺は戻って来られないだろう
それを信じたくはないが
見据えなくてはならない
俺は取り憑かれて戻ってきた
俺は取り憑かれて戻ってきた

（中略）

逃げ込むべき場所はもはやない
俺はかつての自分ではなくなった
何かが始まってしまったのだ
俺がしでかしたことの結果が

（ナイン・インチ・ネイルズ『Came Back Haunted／取り憑かれて』より）

『ツイン・ピークス The Return』のラスト（17話および18話）は、「決して取り返しのつかないこと」をなんとかして取り返そうとする絶望的な試みを描いて観る者の胸を打つ。クーパー捜査官は時空を超越してローラ・パーマー殺害事件直前の森に降り立ち、赤い部屋の夢を通じて「既に知り合っていた」ローラと出会う。ローラの手をとってクーパーは暗く深い森に分け入り、先へ先へと進む。「どこへ連れて行くの？」「家（ホーム）だよ」。しかし、ローラが帰るべき「家」はどこに存在し得るのだろうか？　ジャック・ルノー、レオ、そしてロネットが待つ山小屋にローラが行かなかったことは、たしかに「ローラ・パーマー殺害事

件」をツイン・ピークスの歴史から消し去った。ピート・マーテルは釣りに出かけるが、

ブルーパイン・ロッジ正面の岸辺に転がる巨大な丸太の横に、ビニール（ラプト・イン・プラスチック）にくるまれたローラの死体は漂着していない。最悪の事態はこうして回避されたのだろうか？

そうではなかった。ひとつの具体的な悲劇としての「ローラ・パーマー殺害事件」は時空連続体から消滅したが、その空隙を埋めるかのように新たな悲惨が、また別のどこか――それはオデッサかもしれないし、ツイン・ピークスかもしれない――で発生し、質量としての悲惨は保存されたままだった。

このエンディングに至って『The Return』の大きなテーマが「不可逆性」にあったことが明らかになる。

『The Return』を通じて我々は彼方の世界から現世に再び「投げこまれた」クーパー捜査官＝ダギー・ジョーンズが、ちょうど幼児がひとつずつ世界を理解するようにして成長するさまを見つめ、「あの」クーパーが完全に復活することを待ちわびてきた。それは、かつての『ツイン・ピークス』という心地よい毛布に再びくるまれて、昔見た夢をもういちど味わいたい、という「可逆性」の幻想への渇望だった。その願いは叶えられて／叶えられなかった。「復活したクーパー」の姿を我々は確かに見たが、それはTV史上前代未聞といっていい「カギカッコ付きの」表現のうちにであり、そこには絶望と諦念があった。

人類初の核実験「トリニティ・テスト」がニューメキシコ州ソコロで行われたのは1945年7月16日のことである。翌1946年の1月に生まれたデイヴィッド・リンチは――いや、筆者も含め、実際には今地球上に生きている誰もと同様――全面核戦争という人工のハルマゲドンの予感と常に対峙させられてきた（冷戦が終わったことで全面核戦争の脅威が減じたというのが明らかな錯覚であることは非常に残念な事実である）。何万人、何十万人という単位の人間を一撃で死の淵に追いやることのできる「火」を手に入れたことで、人類の歴史は大きな転換を迎えた。ギリシャ神話のプロメテ

ウスは天界から盗んだ火を人類に与えることで「人間を神のような存在にした」と言われるが、「核という火」を手にしたことで、人類は終わりなき恐怖の時代を生きることになった。今現在もだ。

そして、そこには「不可逆性」の持つ、ぞっとするような冷ややかさがある。「火」は「今でいうところの電気のようなものだ」と、「生きている地図」を差しながらホークチーフ保安官補は言った。「核」という「火」がすなわち「電気」であるとしたら——これは電磁波について詩的に表現したものとみることもできるが——「プロメテウスの火」を手に入れたことが暗黒世界へのゲートウェイを開いたとして、またジュディを解き放ちボブを誕生させたとして、何の不思議があるだろうか。「すべてを焼き尽くす炎」へのオブセッションは、ヘンリーの壁に貼られたキノコ雲の写真という形で『イレイザーヘッド』に既に登場していたし、『ワイルド・アット・ハート』でも紅蓮の炎がスクリーンを燃え上がらせた。トリニティ実験は人類が初めて自ら起こした原子核分裂反応だったため、実験前には爆発の規模を正確に予想することができず、なかには「大気中で核分裂反応の連鎖がとどまらずに続き、地球全体が焼き尽くされてしまうのではないか」という説すらあった。

幸運なことに地球全体が焼き尽くされることはなかったが、核実験とそれに続く広島・長崎への原子爆弾の投下は、文字通り「取り返しのつかない」爪痕を人類の歴史に残し、その「核の爪痕」の溝のうちに我々の生はある。神なき世界に登場した新たな原罪のイメージが「核爆弾」なのは、それがアメリカによって初めて現実化された「アメリカの原罪」だからである。初めてのキスの感触を思い出して頬を赤らめるイノセントな少女の幸せが「プロメテウスの火」によって担保されているとしたら？ 気づかぬうちに入り込んだ真っ黒いカエルバエが、アメリカ人の心の深奥を這い回っている。やがて、リンカーンそっくりの顔を持ち、まっ黒焦げに見える不気味なウッズマンがタバコを片手に尋ねるのだろう。「火を貸してくれないか？」と。

追記：ゴードン・コールのオフィス、ならびに『The Return』第8話の核実験映像の元になっているのは1957年にネバダ州で行われた「プラムボム作戦」と呼ばれる一連の核実験のうち、7月5日に実施されたコードネーム「フード」実験のものである。この実験はアメリカ国内で行われた大気中核爆発のうち最大のものとして知られている。

# 第9話 このイスよ

This is the chair.

The Return: Part 9

◉監督：デイヴィッド・リンチ
◉脚本：デイヴィッド・リンチ、マーク・フロスト
◉米国放映日：2017年7月9日
◉日本放映日：2017年9月16日

## 生きていたMr.C。過去のないクーパー。ヘイスティングスが語るゾーンの存在とブリッグス少佐

無事に撮影開始された『The Return』。だが徹底的に情報が管理されており、俳優陣に渡されたのは、本人が実際に関わるシーンの脚本のみで、自分が演じているのが何のためのどういうシーンなのか知ることはできない。全貌を知るのはリンチとフロスト、カイル・マクラクランの3人のみ。そのマクラクランですら、編集が終わるまで、まったく想像できないシーンがいくつもあったという。特に第8話は、脚本にはほぼ書かれておらず、どういう回になるのか皆目見当がつかなかったという。

マクラクランは17年7月の来日時におこなった「映画秘宝」9月号のインタビューで、『The Return』を「もはやTVドラマの枠で捉えることはできない」として〝ムービング・アート〟と名付けた。

生きていたMr.C。血まみれのまま農場へたどり着くとハッチとシャンタル夫妻に出迎えられる。Mr.Cのために車、武器、携帯電話を準備しているハッチ。シャンタルがかいがいしくMr.Cの傷を手当をする。Mr.Cは誰かにショートメールを送った後、ダンカン・トッドに電話し、次までに殺せ、と命令。ハッチたちには、ヤンクトン連邦刑務所長の殺害と、ラスベガスに向かってさらにもうひとりを殺すよう指示する。

国防総省のデイビス大佐からの連絡を受け、急遽バックホーンへ向かうゴードン一行。刑務所からMr.Cが脱獄したことも判明する。行き先変更の理由はクーパーに関する事件だと説明するゴードンに、ダイアンは「青いバラ事件？」と聞く。

ブッシュネル社長とクーパー、ジェイニーEが、事情聴取のためにラスベガス警察に来ている。ブッシュネルは、クーパー、つまりダギーは入社前に交通事故に遭っており、おかしな言動はその後遺症のせいだと説明。12年前から勤務する優秀な社員であり、保険会社にいる以上、多少恨まれることはあっても命を狙われるような人間ではないという。

刑事たちは、ダギーには97年以前の免許証、社会保障番号などの公的記録が一切ないことから、証人保護プログラムの人物かと推測。さらに調査するため、クーパーの使っていたマグカップから指紋を採取することにする。待合室で星条旗を見つめるクーパー。赤いパンプス、コンセントにも反応する。現場に残されていた手のひらの肉片から、クーパー襲撃の犯人がアイク・ザ・スパイクだと特定され、モーテルにいるスパイクが逮捕される。

シルビア・ホーンの家では、ジョニーが家の中を走り回り、壁に衝突して失神する。

part 9

ボビーは、ブリッグス少佐がクーパーに会った最後の夜のことを聞くため、フランク、ホークを連れて実家に帰る。ボビーの母ベティは、少佐はボビーたちがクーパーのことを聞きに来ることを知っていたといい、預かっていたシリンダーを渡す。

バックホーン。ゴードンらがノックス大尉と合流。マックレー刑事が、容疑者のヘイスティングスは、切断死体の首であるルースと愛人関係にあり、異次元に関するブログを運営していたと説明。ブログの最後の更新には「ゾーンに入り少佐に会った」と書かれている。

検視官のコンスタンスによれば、少佐の死体年齢は40代、胃から出た指輪には「ダギーへ　愛を込めて　ジェイニーE」と書かれていた。

ツイン・ピークス保安官事務所。フランクとホークがシリンダーの開け方がわからず途方にくれていると、ボビーがにやけながら見ている。幼いころブリッグス少佐に開け方を教わったというのだ。外に出てシリンダーをたたきつけると中から2枚の紙が出てくる。2日後にジャック・ラビット・パレスから253ヤード離れた場所で何かが起こるということと、もう1枚の紙には、「COOPER / COOPER / COO...」。

バックホーン。ヘイスティングスへの取り調べで、ブログについて質問をするタミー。ヘイスティングスは、別次元に入る方法を見つけ少佐に会ったという。少佐は自分が冬眠していると話し、ヘイスティングスたちに座標を手に入れるよう頼んだ。ヘイスティングスが少佐に座標を伝えると、少佐の体が浮かび上がり、「クーパー、クーパー」と2度つぶやいて頭が消えたというのだ。

ロードハウス。脇の下がかゆいとかきむしる女。ステージでは、Au Revoir Simoneが「A Violent Yet Flammable World」を演奏している。

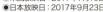
### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

ラスベガス警察の廊下でアメリカ国旗を〈ダギー〉が見つめる場面の背景にかすかに流れているのはご存知、愛国歌『アメリカ・ザ・ビューティフル』。今回の『ツイン・ピークス』で最も仕事の早い殺し屋二人組シャンタル&ハッチ（ジェニファー・ジェイソン・リー&ティム・ロス）がついにコンビで登場。彼らがMr. Cを迎える農場が単に一般名詞の「ザ・ファーム」と呼ばれているのが不気味さを増大させる（加えて、農場の人間は全員既に惨殺されているというおまけ付き）。おっと、第7章で書き忘れた小ネタを追記しておくと、「この25年間に唯一入手できた、リオデジャネイロで撮影されたクーパーの写真」でクーパー（ではなくMr. Cだが）の背後に映っている建物はフロリダ州パームアイランドに実在する豪邸で、かつてアル・カポネが所有していたといういわくつきの物件（カポネはこの建物で死亡している）。

# 第10話 ローラが それよ

Laura is the one.

The Return: Part 10

◉監督：デイヴィッド・リンチ
◉脚本：デイヴィッド・リンチ、マーク・フロスト
◉米国放映日：2017年7月16日
◉日本放映日：2017年9月23日

## Mr.Cはミッチャム兄弟を利用しクーパー殺害を謀る。アルバートが掴むMr.Cとダイアンのつながり

第3シーズンの全米放映時に使われていた『Twin Peaks：The Return』というタイトルは、サウンドトラックとブルーレイの発売にあたり、リンチ本人によって『Twin Peaks: A Limited Event Series』というタイトルに改題された。改題の意図は明らかにされていないが、続編交渉が始まったことが影響したのでは、とも言われている。

第3話に出てくるアルバートのセリフ「存在の不可思議な力は理解不能な謎(The absurd mystery of the strange forces of existence)」というフレーズは、リンチ／フロストの未完成の映画「ロニー・ロケット」のサブタイトルだ。

ツイン・ピークス郊外にあるミリアムのトレーラーハウスにやってきたリチャード。ひき逃げ事件を目撃したミリアムは保安官に事件を知らせるための手紙を書いたという。激昂したリチャードはミリアムを襲い意識不明にさせたあと、チャド保安官補に連絡をし、手紙を握りつぶすよう命じる。

ニュー・ファット・トラウト・トレーラーパーク。管理人のカールがギターを弾いて「赤い川の谷間」を歌っている。あるトレーラーハウスから赤いマグカップが飛んでくる。激しく喧嘩する声。ベッキーが夫のスティーヴンに殴られている。

ラスベガス。シルバー・マスタング・カジノのオーナーであるロドニー・ミッチャムが帳簿をチェックしている。部屋を飛び回るハエをおいかけてきたキャンディが、ミッチャムの頬をテレビのリモコンで殴る。自分が怪我をさせてしまったことにうろたえるキャンディ。弟のブラッドリーがあわてて飛び込んでくる。ロドニーが慰めてもなお動揺して泣いているキャンディ。TVをつけると、ニュース番組にアイク・ザ・スパイクの逮捕に協力した勇敢な市民としてクーパーの姿が出ている。ミッチャム兄弟は、カジノで大儲けした「ミスター・ジャックポット」の名前がダギー・ジョーンズであることを知る。

ダギーの主治医に診察してもらうクーパー。ジェイニーEは、以前のダギーと比べてはるかに引き締まって筋肉質なクーパーの体に驚き、目がはなせない。夜、クーパーを誘惑しベッドに誘うジェイニーE。クーパーも満足している様子。

ツイン・ピークス。元精神科医のジャコビーはドクター・アンプとして、民を搾取している政府やグローバル企業を批判するインターネット番組を放送中。心酔したような表情でパソコンのモニタを見つめるネイディーン。彼女の無音カーテンレールの店のショーウインドウには、ドクター・アンプの金のシャベルが飾られている。

part 10

シルビア・ホーンの家。ヘルメットをかぶり、動けないよう椅子に縛られているジョニー。金の無心にきた孫のリチャードはシルビアの首を絞め、金庫やバッグからありったけの金目のものを持って立ち去る。

ラスベガス。部下のロジャーからスパイクが逮捕されたと聞くトッド。ダギーの同僚のアンソニーを呼び出し、ミッチャム兄弟を利用してダギーを殺させるよう命令。もし失敗したらアンソニー自らが手を下せという。早速、ミッチャム兄弟に数カ月前に火事になったホテルの保険金がおりないのはダギーが妨害しているせいだと吹き込むアンソニー。兄ロドニーはその嘘を信じ込み、ダギーを殺そうと計画をたてる。

FBI。ゴードンがノックの音に気づいてドアを開けると、ローラ・パーマーのビジョンが現れて消える。そこにはアルバートが立っている。アルバートは、Mr.Cとダイアンがつながっている証拠としてショートメールの通信記録を見せる。続けて、タミーが持ってきた写真にはニューヨークのガラス箱の部屋にいるMr.Cが写っている。

ツイン・ピークス保安官事務所。丸太おばさんからホークに電話がかかってくる。

**トルーマン兄弟は**
**どちらも真の男たち**
**あなたの兄弟よ**
**その他にも良き者たちが**
**あなたのそばにいる**
**もうすぐ円が完成する**
**時と空間の夢に目を凝らし耳を傾けて**
**まるで川にように今こそ溢れだす**
**それであり、それでない**
**ホーク、ローラのことよ**

ロードハウス。歌うのはレベッカ・デル・リオ。曲は「No Stars」。

## 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

またまた1話前の話で恐縮だが、第9話のエンディング、ロードハウスで湿疹にかぶれた脇の下を掻き壊す若い女を演じたのは歌手で俳優のスカイ・フェレイラ（『ベイビー・ドライバー』17年など）。悪が『ツイン・ピークス』に迫りつつある、ということが示唆されているわけだが、それを強調するかのように、第10話のエンディングでは満を持して登場したレベッカ・デル・リオが『No Stars』を歌い上げる。「私の夢は／あの場所へ行くこと／知ってるでしょう／すべてが始まった場所／星の輝く晩に／（中略）／しかし全ては夢／もう星はない／ノー・スターズ」（歌詞デイヴィッド・リンチ）。リチャードによるシルビア襲撃事件の背後に流れているのはマントヴァーニ&ヒズ・オーケストラ『シャルメーヌ』。『カッコーの巣の上で』（75年）で精神病院のBGMに用いられた曲である。精神を病んだジョニー・ホーンとの関係性は明白だ。

# 第11話 あなたが向かう場所に火がある

There's fire where you are going.

The Return: Part 11

●監督：デイヴィッド・リンチ
●脚本：デイヴィッド・リンチ、マーク・フロスト
●米国放映日：2017年7月23日
●日本放映日：2017年9月30日

## ゾーンに到着。謎の渦がゴードンを飲み込む!?
## 夢を見たミッチャム弟。チェリーパイがダギーを救う

タミー・プレストン捜査官役のクリスタ・ベルは、リンチがプロデュースを手がけるミュージシャンでもある。プライベートではリンチの恋人だというが、現在も続いているかどうかは怪しい。『The Return』では、ローラ・ダーンを筆頭に、お気に入りの女性をずらり並べているリンチだが、クリスタ・ベルの起用だけは生々しいと思ったのか、本編中でデイヴィッド・ドゥカブニー演じるデニースFBI首席補佐官に「美人をはべらせちゃって」とからかわせている。現在の正式なリンチ夫人は、第14話のロードハウスのシーンで、ボックスシートで雑談するソフィーを演じたエミリー・ストールフ。『インランド・エンパイア』(06年)の出演女優として出会い、09年に結婚。『デヴィッド・リンチ：アートライフ』(16年)で、リンチの傍らで遊んでいるのが彼女との子供だ。

ツイン・ピークス郊外。キャッチボールをしている少年たちが、道路脇で、森から這い出てきたミリアムを発見。ミリアムは血だらけではあるがなんとか生きている。

ニュー・ファット・トラウト・トレーラーパーク。ベッキーが電話の相手にキレて絶叫。ダブルRダイナーで仕事中のシェリーに電話をかけ、今すぐ車を貸せと無理をいう。仕事を放り出してベッキーの元に駆けつけるシェリー。ベッキーは銃を手に、止めようとするシェリーを振り切って猛発進で飛び出していく。騒ぎを聞きつけたカールがシェリーをバンに乗せ、ダブルRダイナーに送る。道中、保安官事務所につながる無線機でボビーを呼び出してもらうカール。シェリーはボビーに状況を説明する。

スティーヴンがいると思われるアパートの208号室のドアを銃で乱暴に叩くベッキー。中からは返答がなく、留守と分かるとドアに向かって発砲する。階段の下でベッキーの様子をうかがうスティーヴン。一緒にいるのはドナの末妹ガーステンだ。

バックホーン。ヘイスティングスの案内でゾーンへの入口と思われる空き地に到着したゴードン一行。ゴードンが上空を見上げると、雲や鳥を巻き込む巨大な渦が発生しているが、アルバートたちには見えていない様子。上空に手を差し出すゴードン。渦の中にはコンビニエンスストアの2階に続く階段があり、ウッズマンたちが並んでいる。今にも吸い込まれそうなゴードンをアルバートが引き戻す。渦は消える。

廃墟のそばの草むらに首なし死体を発見。左腕の内側には座標と思われる数字が書かれている。マックレー刑事の車の背後に忍び寄るウッズマン。車に近づくと同時にヘイスティングスの頭部がつぶれる。

part 11

ダブルRダイナーで話し合うボビー、シェリー、ベッキー。レッドが窓の外からシェリーを呼び出す。シェリーは今まで泣きながら話し合っていたはずが、笑顔で飛び出していき熱いキスを交わす。シェリーが席に戻ってきた瞬間、銃声が響く。ボビーが銃をかまえて外に出る。どうやら、幼い少年が銃をさわり発砲してしまったようだ。後ろの車の女性が激しくクラクションを鳴らし続けている。

ツイン・ピークス保安官事務所。ホークが先祖の地図を広げて、フランクに説明している。電気を意味する火、死を意味する黒いとうもろこし。角のはえたマークについては知らないほうが良いという。そこに丸太おばさんからの電話が入る。

**私の丸太が火を怖がってる**
**あなたの進む先には火があるわ**

ラッキー7保険。ミッチャム兄弟のホテルの火事は放火ではないことが判明し、保険金3千万ドルが支払われることになった。ミッチャム兄弟に小切手を渡しに行く直前、クーパーは片腕のマイクに導かれ、大きな段ボールを手にして待ち合わせ場所に向かう。弟ブラッドリーはクーパーの抱える段ボールに気づき、昨夜観た夢の通りならクーパーは殺さないという。中身を確かめると、夢と同じくチェリーパイが入っていた。クーパーの胸ポケットに小切手を見つけて喜ぶミッチャム兄弟。ホテルのレストランでクーパーとともに祝杯をあげる。すると突然、上品な老婦人に話しかけられるクーパー。「ミスター・ジャックポット!」という言葉から、クーパーがカジノで当たる台を教えていた老婆だと分かる。クーパーに御礼を言えて嬉しそうな婦人。ミッチャム兄弟とクーパーは、ピアノの演奏を聴きながらチェリーパイに舌鼓をうつ。

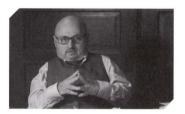
## 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

悲願の保険金を手に入れて上機嫌のミッチャム兄弟がダギーを連れて訪れた、シルバー・マスタング・ホテルのレストラン。ベタなようでいて感動的なメロディを演奏していたピアニストを演じたロバート・〈スモーキー〉・マイルズは別名を「スモキュラ伯爵」といい、白塗りのヴァンパイアの格好でアコーディオンを演奏するパフォーマンスで知られる。公称496歳。スモキュラ伯爵の主な活躍の場はバーレスクやストリップのイベントなどだが(MCを務めることもある)、『悪魔の毒々モンスター』で知られるトロマ映画とも長年に渡ってタッグを組んでいる。また、その場面に以前のみじめな格好とは打って変わった姿で登場、視聴者の涙を誘った「スロットマシン中毒のおばあさん」を演じたリンダ・ポーターは50代半ばを過ぎてから女優活動を始めた遅咲きで(1933年生まれ)、主におばあさん役で数多くの作品に出演している。

# 第12話　さあ やろう

Let's rock.

The Return: Part 12

●監督：デイヴィッド・リンチ
●脚本：デイヴィッド・リンチ、マーク・フロスト
●米国放映日：2017年7月30日
●日本放映日：2017年10月7日

## ブルーブック計画と「青いバラ」の真相。ダイアンが盗み見した座標の行き先は――

男女問わず世界中が恋したあのオードリーが、第12話でようやく登場した。前シーズン撮影当時、リンチにはイザベラ・ロッセリーニという大女優の恋人がいたが、オードリー役のシェリリン・フェンの誘惑に負け破局。オードリーは劇中でもプライベートでも小悪魔だったというわけだ。

ちなみにカイル・マクラクランは、ドナ役のララ・フリン・ボイルにひとめ惚れし、『ブルーベルベット』で共演して以来付き合っていたローラ・ダーンと別れた。ローラ・ダーンはリンチのガールフレンドだった時期もあり、ナオミ・ワッツも『マルホランド・ドライブ』のときにリンチと……との噂。カメラの後ろの人間関係にTP25年の歴史を見る思いだが、ただ単にリンチが絶倫なだけか。

part 12

バックホーン。ゴードンとアルバートは、ホテルの部屋に盗聴器がしかけられていないか調べた上で、タミーにブルーブック計画について説明を始める。

70年、アメリカ空軍のブルーブック計画は封印された。空軍は20年間UFOの調査をしたが確固たる証拠はつかめず、国の脅威にはなりえないと判断したからだ。数年後、軍とFBIは極秘チームを立ち上げブルーブック計画が残した不可解な事件の捜査に乗り出した。「青いバラ」と呼ばれるそのチームは、フィリップ・ジェフリーズがリーダーとなり、アルバートとクーパー、チェット・デズモンドがメンバーとして選ばれた。だが、クーパーとデズモンドはその後姿を消した。そのため、ゴードンは、チームに新たなメンバーを加えることをためらってきた。今夜までは。

ゴードンとアルバートはこの「青いバラ特捜チーム」の新たなメンバーとして、MIT、FBIアカデミーともに首席で卒業したタミーを勧誘したいというのだ。思いもかけない誘いに興奮を隠しきれないタミー。3人は「青いバラ」に乾杯をする。そこに合流したダイアンにも、チームへの協力を依頼。ダイアンは答える。

「Let's Rock」

ツイン・ピークス。スーパーで、酒とタバコを大量に買い込むセーラ。レジの奥にあるスモークされたジャーキーを見て取り乱し始める。「あなたたちに警告しているのよ！　何かが起きるかも。私に起きたように。気分が悪い、気分が悪いのよ！」と叫ぶセーラを、「それはダメ、ダメよ。こんなことやめて！　ここを出ましょう！」とセーラ自身がなだめている。セーラは荷物も持たずにスーパーを飛び出す。

スーパーでの騒ぎを耳にしたホークがセーラの家を訪ねる。セーラ自身、自分に

何が起きたかわからないと言うが、今は落ち着いているように見える。家の奥から物音がすると、ホークに「誰もいないわ。キッチンにいる何かよ」と説明する。

病院。リチャードに襲われたミリアムが意識不明で入院している。

ベン・ホーンのオフィスを訪ねるフランク。リチャードが男の子をひき逃げで死なせたことと、目撃者であるミリアムを殺そうとしたことを報告。ベンは治療費を負担することを約束する。リチャードはいまだ逃走中だ。

ベンの机の上には25年前にクーパーが泊まっていた315号室の鍵。ベンは、ハリーに渡してほしいとフランクに預ける。

ヤンクトン連邦刑務所のマーフィー所長の家の前に止まっているバンの中にシャンタルとハッチがいる。ハッチは銃にサイレンサーをつけ、マーフィー所長を撃ち殺す。

ツイン・ピークス。オードリー・ホーンの自宅。上着を手にかけどこかへ出かけようとしているオードリー。書類が山積みになったデスクの向こうに夫のチャーリーが座っている。オードリーは、2日前から行方不明のビリーを探しにロードハウスに行くという。仕事があるから出かけられないというチャーリーは、今夜は眠って明日にしようとなだめるが、オードリーはおさまらず、どんどんヒステリックになっていく。チャーリーは、オードリーに頼まれてしぶしぶティナに電話をかける。電話を切ったあともオードリーに何も話そうとしないチャーリー。オードリーはさらに苛立つ。

バックホーン。ホテルのバーにいるダイアン。盗み見したルースの左腕の座標を思い出しながら地図アプリに打ち込む。地図はツイン・ピークスを指す。

ロードハウス。再びクロマティクスのステージ。「Saturday」を演奏している。

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

ゴードン・コールにしなだれかかるフランス美女は『007／スカイフォール』（12年）でボンドガール、セヴリンを演じたベレニス・マーロウ。『ツイン・ピークス』に登場するフランス人の女はいつも絶世の美女である（映画版、ハップス・ダイナーのカウンターでネルシャツのおじさんが同伴していた美女を思い出していただきたい）。とんでもなく美人でセクシーな「フランス美女」という（リンチの思い描く）イメージは、本エピソードでほとんどカートゥーン的な域にまで達した。衣装や髪型も含め、ベレニス・マーロウ扮する「フランス美女」の原型は元祖セクシー・カートゥーンの『ベティ・ブープ』に求めることができる。ここまでコケティッシュにコケティッシュを重ねた表現は、まさにマリリン・モンロー以来と言って良い。本エピソードではついにオードリーも登場。オードリーの役はシェリリン・フェンの要望で当初の予定よりはるかに大きなものとなった。

# 第13話 物語って何よ
What story is that, Charlie?

The Return: Part 13

●監督：デイヴィッド・リンチ
●脚本：デイヴィッド・リンチ、マーク・フロスト
●米国放映日：2017年8月6日
●日本放映日：2017年10月14日

## 座標を手に入れたMr.C。ロードハウスにはジェームズの歌声が響く

『The Return』でリンチは、サウンド・デザインとしてもクレジットされている。第1話、Mr.Cの初登場シーンで流れるのは、マディ・マグノリアズの「アメリカン・ウーマン」の回転数を3分の1ほどに落としたリミックスバージョン。セーラの登場シーンでは、13年のリンチのアルバム『The Big Dream』の「Last Call」が使用されており、ロードハウスで演奏するバンドもすべてリンチが選んでいる。10年以来リンチと共にアルバムを発表しているディーン・ハーリーは、スーパーバイザー兼レコーディング・ミキサーとして参加。『The Return』は、リンチのミュージシャンとしての一面が、これまでのどの映像作品よりも色濃く反映されている。

ラッキー7保険。ミッチャム兄弟とキャンディたちがクーパーを伴い、踊りながら社長室へやってくる。あわてて机の下に隠れるアンソニー。ミッチャム兄弟は、保険金支払いの御礼として、キューバ産の葉巻、名前入りのダイヤのカフスボタン、そしてBMWの新車のキーをブッシュネル社長にプレゼントする。

アンソニーが机に隠れながらトッドに電話すると、今日中になんとかしろと言われる。つまりアンソニーは自分でクーパーを殺さなければならない。

ダギーの家にもBMWの新車とサニージムのための遊具セットが届く。裏庭に設置された遊具セットで遊ぶサニージムを見て、満足気なジェイニーEとクーパー。

モンタナ州西部。Mr.Cが、ある倉庫にレイを探しにやってくる。Mr.Cはギャングたちにレイの引き渡しを要請。ボスのレンゾとの腕相撲の勝負が始まる。無敗だというレンゾが力を込めてもMr.Cはまったく動じず、いとも簡単にレンゾをねじ伏せ、その場で撲殺。レイと2人になったMr.Cは、逃げようとするレイの脚を撃つ。レイから、自分を殺そうとした男がフィリップ・ジェフリーズであることと座標を聞き出したMr.Cは、レイが持っていた指輪を左の薬指にはめさせた上でレイを射殺。モニター越しにその様子を見るギャングの中にはリチャードの姿もあった。

ラスベガス警察。マグカップから採取したクーパーの指紋が、2日前にサウスダコタの刑務所から脱走した元FBI捜査官のものと一致。そんなことがあるわけないと刑事たちは報告書を丸めてゴミ箱に捨てる。

ラッキー7保険。アンソニーがクーパーにコーヒーをおごる。おいしそうに味わうクーパー。アンソニーは、クーパーがショーケースの中のチェリーパイに引き寄せられて席を外した隙にコーヒーの中に毒薬を入

part 13

れる。戻ってきたクーパーはアンソニーの肩にあるフケが気になり、やさしくマッサージするように触れると、急にアンソニーが泣き始める。毒薬の入ったコーヒーをあわてて捨てるアンソニー。社長室で泣きながら懺悔し、会社に背いてトッドのために働いていたことを告白する。社長は、悪事はすでにダギーが暴いていたと話し、正直に告白したアンソニーを許す。悔い改めたアンソニーは、これまでのことを洗いざらい裁判で話すと約束する。

ダブルRダイナー。シェリーに会いに来たボビーがノーマとエドに挨拶。3人で一緒に食事をしようとすると、ノーマのボーイフレンドでビジネスパートナーのウォルターがやってくる。席を移るノーマ。ダブルRダイナーは5店舗のチェーン展開をしているが、そのうち3店舗が黒字だったとの報告。ウォルターは、パイにコストがかかりすぎていると指摘。材料にこだわるノーマはコストカットにイエスと言わず、「ノーマのダブルR」という店名に変更したほうが良いとの提案にも従わない。

ネイディーンの店。ショーウィンドウの金色のシャベルに気づいたジャコビーがネイディーンを訪ねる。

セーラの自宅。タバコを吸い、酒をあおりながら、TVでボクシングの試合を見ている。試合は同じ場面を延々とループしている。灰皿には吸い殻の山。

オードリーとチャーリーはまだ自宅にいて、出口のない会話を続けている。

ロードハウスのステージに立つジェームズ。かつてドナ、マディと一緒に録音した「Just You」を弾き語りで歌っている。泣きながら歌声に聴き入るレネ。

自分のデスクでダブルRダイナーから持ち帰ったコーンスープを飲むエド。小さく折りたたんだメモをマッチで燃やす。

## 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

Mr. Cが思わず「ここは幼稚園か?」と口走ったほど幼稚なマッチョイズムに取り憑かれ、腕相撲だけがヒエラルキーの基準、というレンゾ率いるギャング集団（十会計士）。このバカバカしいほどのマッチョ主義は、映画版『ローラ・パーマー最期の7日間』のケーブル保安官一味を彷彿とさせる。戦いが始まる前に背後からいきなり殴りつけるという卑怯さも「鋼鉄を曲げる」ケーブルと共通している。ロードハウスでジェームズが『Just You』を——昔の声で——歌う場面に至って、ロードハウス自体、あるいはツイン・ピークスの街自体が時空の交差点となっているのではないかという疑いが濃厚になってきた。セーラ・パーマーの家のテレビが同じ映像をループしているのも「閉じた系」としてのツイン・ピークスと、そこに囚われ「時間から見捨てられた」人々という印象を増幅させる。なおネイディーンが言うように、Dr. アンプが言っていることはすべて正しい。

# 第14話　私たちは夢見人のよう

We are like the dreamer.

The Return: Part 14

●監督：デイヴィッド・リンチ
●脚本：デイヴィッド・リンチ、マーク・フロスト
●米国放映日：2017年8月13日
●日本放映日：2017年10月21日

## アンディが異世界で見たビジョン。セーラは内なる闇をあらわにし、男の喉を食いちぎる

リンチは数秘術に凝っており、『The Return』に出てくる数字にはすべて意味があるといわれている。第1話の冒頭で巨人が言った「430」、第3話に出てきた装置の「15」と「3」、電柱の「6」、グレート・ノーザン・ホテルでのクーパーの部屋番号「315」など。これについては、『The Return』ブルーレイボックスの特典映像に収録されているリンチとローラ・ダーンの会話がいい。リンチが「時計は2時53分を指している。2と5と3を足すと?」と聞くと、「10」とそっけなく答えるダーン。「その意味は?」「完成する数字」「そうなんだよ」。ダーンは「デイヴィッド・リンチのために働いてるんだもの」と、わかって当然だと言わんばかり。それを聞いて「さすがだ!」と嬉しそうなリンチ。「僕もメモるよ」というのんきなカイル・マクラクランの合いの手もあいまって、3人の関係性がよく見えるシーンだ。45年間欠かしたことがないという瞑想とともに、数秘術はリンチ作品の根底に流れている。

ゴードンはタミーに、青いバラ事件の始まりを語る。75年、ワシントン州で2人の捜査官が犯人であるロイス・ダフィーの逮捕に向かった。部屋から銃声が聞こえ中に踏み込むと2人の女性がいた。ひとりは腹部を撃たれて瀕死、もうひとりは銃を持っていた。撃たれたのはダフィーで、彼女は「私は青いバラと同じ」と言い残して息を引き取り、目の前で消えた。だが、部屋の隅で叫んでいるもうひとりの女性もダフィー本人だった。ダフィーには双子の姉妹はいなかった。ダフィーは裁判の前に首を吊って自殺した。この時ダフィーを逮捕した捜査官がゴードンとジェフリーズだった。

「青いバラ」は、自然界には存在しない。つまり死んだ女性は人間ではなく、チベット仏教でいう化身のようなものだという。

ダイアンが部屋に入ってくる。アルバートはダイアンに、25年前に軍の施設で死んだはずのブリッグス少佐が、数日前にバックホーンで見つかり、胃袋から「ダギーへ愛を込めて。ジェイニーE」と刻まれた指輪が出てきたことを話す。ダイアンは驚きながら、ジェイニーEは自分と片親が違う姉妹で、彼女の夫の名前がダグラス・ジョーンズ、愛称はダギーで、ラスベガスに住んでいると話す。

ダイアンが部屋を出たあと、ゴードンは昨夜見た夢の話を始める。モニカ・ベルッチが夢の中でこう話したという。

**私たちは夢を見て、夢の中に生きる**
**夢見人のようね**
**でも、夢見人は誰?**

夢の中でゴードンが振り返ると、フィラデルフィア支部にいる過去の自分を見る。部屋にクーパーがいて、ジェフリーズが突如現れた、いや現れなかった日のことだ。あの日に何か手がかりがあると確信するゴードン。

ツイン・ピークス保安官事務所。ブリッグス少佐のメモにあったジャック・ラビッツ・パレスに行く準備が進んでいる。フランクたちは、そこに入ってきたチャドを逮捕。チャドはミリアムの手紙の隠蔽だけでなく、数々の犯罪に関与していたようだ。

フランク、ホーク、アンディ、ボビーの4人がジャック・ラビッツ・パレスに到着。メモの通りその場所の土をポケットに入れ、253ヤード東に向かう。シカモアの木のまわりに白い煙が立ち込め、全裸のナイドが倒れている。2時53分になると、上空に渦が出現。アンディは異世界へ吸い込まれ、消防士と名乗る巨人に、核実験、ローラ、2人のクーパー、6番の電柱などいくつかのビジョンを見せられる。

いつのまにかジャック・ラビッツ・パレスに戻っているフランクたち。アンディがナイドを抱きかかえて帰ってくる。

保安官事務所。留置場には、顔が傷だらけの酔っぱらいやチャドが入っている。

グレート・ノーザン・ホテルの裏口。警備員のジェームズとフレディが座っている。フレディは右手にはめた手袋を外すことができない理由を語る。ロンドンにいたころ、空の渦に吸い込まれ、消防士だと名乗る男に指示されたとおりに手袋を買ってはめると、右手だけが怪力になり外せなくなったのだという。そして消防士の言う通り、ツイン・ピークスにやってきた。

バーに飲みに来たセーラ。隣の男に絡まれたセーラは、顔を開いて中の暗闇をあらわにし、男の喉を食いちぎる。

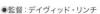
ロードハウス。リッシーが「ワイルド・ワイルド・ウエスト」を歌っている。

## 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

アメリカで放映されて1日も経たないうちに、「ジャック・ラビッツ・パレス」の場所がファンによって特定されたのには驚いた。ロケ地はノースベンドにあるオラリー州立公園の中。オリジナル版でブリッグス少佐が玉座のようなものに座らされていた場所が「ジャック・ラビッツ・パレス」ではないかという説もある。エンディング近く、「ここは自由のクンニだ（ア・フリー・〈カント〉・リー）」とのたまうキャットコーラー（女とみると下品なヤジを飛ばしたり口笛を吹いたりする連中をそう呼ぶ）の首の肉をセーラ・パーマーがちぎり取った「エルクズ・ポイント#9バー」の位置も判明している（こちらはスノコルミーにある「スモーキー・ジョーズ」というバー）。「我々は夢の中に生きている。だとしたら、夢を見ているのは一体誰なのか？」というモニカ・ベルッチ（役得人事）のセリフは、『The Return』を既に総括してしまった感もある。

# 第15話 手放すのが怖い

There's some fear in letting go.

The Return: Part 15

●監督：デイヴィッド・リンチ
●脚本：デイヴィッド・リンチ、マーク・フロスト
●米国放映日：2017年8月20日
●日本放映日：2017年10月28日

## コンビニエンスストアの2階。Mr.Cが知りたがるジュディとは――丸太おばさん、逝く

リンチの『サンセット大通り』（50年）愛、ここに極まれり。『マルホランド・ドライブ』が『サンセット大通り』に触発された作品だというのは有名だが、TPの世界にもその影響は随所に見られる。まずダブルRダイナーの〝ノーマ〟と『ローラ・パーマー最期の7日間』の〝デズモンド〟捜査官、この2人の名前をあわせると『サンセット〜』の主人公の名前〝ノーマ・デズモンド〟になる。第6話で、アルバートがダイアンを探しに行った〝マックス・フォンズ・バー〟は、『サンセット〜』の〝ノーマ〟の元夫で召使いでもある〝マックス〟と、それを演じた〝エリッヒ・フォン・シュトロハイム〟からの引用。きわめつけがリンチの役名〝ゴードン・コール〟で、これはそもそも『サンセット〜』にクレジットなしで出演したバート・ムアハウスの役名だ。ここまで大っぴらに『サンセット大通り』の影響を散りばめた上で、第15話では本編そのものをテレビで流し、クーパー覚醒のきっかけとするマッチポンプぶり。リンチの心臓の強さには恐れ入る。

エドのガソリンスタンド。ネイディーンがドクター・アンプから購入した金色のシャベルをかついで歩いてくる。表情は晴れやか。ネイディーンは、エドとノーマが愛し合っていることを知りながら嫉妬心から2人を引き裂いていたことを謝罪。自由になって残りの人生を愛する人と楽しんでほしいと、エドを解放する。

ダブルRダイナー。エドはノーマのもとに駆けつけるが、そこにウォルターが訪ねてくる。ノーマはウォルターに、ダブルRダイナーの本店以外のフランチャイズ権を買ってほしいと頼む。ダブルRダイナーは自分にとって家族であり、この店だけを守りたいというノーマに「きっと後悔する」と捨て台詞を残し店を出るウォルター。ノーマはエドのもとに行き、エドがノーマにプロポーズ。見つめ合いキスをする2人。

夜の道を行くMr.C。コンビニエンスストアにたどり着くと、ウッズマンが外階段から2階に案内する。ジェフリーズを探しているというMr.C。部屋を抜けてモーテルの8号室に入ると、機械の姿をしたジェフリーズがいる。ジュディのことを質問すると、彼女に直接聞けと言い、座標を教えるジェフリーズ。部屋の電話が鳴り受話器を取ると、コンビニエンスストアの外に転送される。目の前にMr.Cに銃を向けるリチャードがいる。あっというまにリチャードをねじふせ、トラックに乗せるMr.C。

ツイン・ピークスの森の中。スティーヴンとガーステンが木の根元で身を寄せ合っている。興奮状態で銃をさわるスティーヴン

part 15

は、ガーステンがなだめても落ち着かない。そこへ犬と散歩する男が通りがかり慌てる2人。銃を見て逃げ出す男につられるようにガーステンも駆け出す。森に一発の銃声が鳴り響く。

ロードハウスに仕事を終えたジェームズとフレディがやってくる。ジェームズがレネーに挨拶をすると、夫のチャックが激怒しジェームズを殴る。チャックの友人スキッパーも加勢。助けようとしたフレディが手袋をはめた手で2人を殴る。ジェームズとフレディは騒ぎを起こしたせいで、留置場に入れられる。

ラスベガス、シャンタルがダンカン・トッドと部下のロジャーを撃ち殺す。

ダギーの家。チョコレートケーキを頬張るクーパー。TVでは映画『サンセット大通り』が流れている。クーパーは、劇中の「ゴードン・コール」というセリフに反応。持っていたフォークをコンセントに差し込み感電する。

保安官事務所。ホークに丸太おばさんから電話がかかる。

**あなたは死を知っている**
**ただ、変化があるだけよ、終わりじゃない**
**ホーク、時間なの、少し怖さもある**
**手放すことが怖いのよ**
**あたしが言ったこと忘れないで**
**あたし、死ぬわ**
**おやすみ、ホーク**

ホークは、皆に丸太おばさんの死を報告する。丸太おばさんの家の灯りが消える。

まだ外出せず同じような口論を延々と続けているオードリーとチャーリー。

ロードハウスではThe Veilsが演奏している。ボックス席をどかされたルビーが、爆音の中、四つん這いでフロアを進む。絶叫を上げるが音楽にかき消される。

### 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

フィリップ・ジェフリーズがヤカンもといマシンの姿で登場してファンを驚かせたエピソードだが、デイヴィッド・ボウイは死の直前、『ローラ・パーマー最期の7日間』で自身が出演しているフッテージの使用を許可すると同時に、『The Return』に出演はかなわないものの、自分の役の声は「ルイジアナ出身で、その地方のアクセントがちゃんと操れる人物」が当てるよう指示したという。リンチによればボウイは『最期の7日間』での自分の「ルイジアナ・アクセント」があまりうまくいっていないと思っており（リンチは「あれはビューティフルだった」と言明しているが）、そのため正統なルイジアナ訛りができる声優を求めたのだそうである（『The Return』でジェフリーズの声を演じたネイサン・フリッツェルはニューオーリンズで育った生粋のルイジアナっ子である）。丸太おばさんとのお別れは観るのが本当辛かった。

# 第16話 ノックもなく ベルも鳴らさず

No knock, no doorbell.

The Return: Part 16

◉監督：デイヴィッド・リンチ
◉脚本：デイヴィッド・リンチ、マーク・フロスト
◉米国放映日：2017年8月27日
◉日本放映日：2017年11月4日

## 片腕のマイクの呼びかけにクーパーが覚醒。「私がFBIだ！」

なんでもはぐらかすリンチと違って、なんでも答えてしまうのがフロストだ。第8話で飛びガエルを飲み込む少女の正体は、フロストの著作「ツイン・ピークス ファイナル・ドキュメント(ドシエ)」に書かれているし、ニュー・ファット・トラウト・トレーラーパークの管理人であるカールがブックハウス・ボーイズの創設者だなんて、ツイッターでさらっと明かされても追いきれない。

　フロストもフロストだがファンもファンで、ファンサイトwelcometotwinpeaks.comでは「ファン・ドシエ」なるものの創作コンテストを開催。このコンテストでファンは、ダブルRダイナーのハイジや第1話に登場したビュエラ、第7話でロードハウスを掃除していた男など、脇役としてTPを彩る人物たちが一体どういう人生を送っているのかを書いて投稿、これがまたいちいちよくできていて読み応えがあるのだ。

　Mr.Cとリチャードは、手に入れた3つの座標のうち2つが指し示した場所に到着。リチャードに座標のポイントを調べるよう指示するMr.C。リチャードが岩の上のポイントに到達した瞬間、電気に打たれ体が爆発。Mr.Cは「じゃあな、息子よ」とつぶやく。携帯で誰かに「:-) ALL.」とメッセージを送るが、画面には送信失敗の表示。

　ラスベガス。感電して入院中のクーパー。ジェイニーE、サニージムが付き添っている。ブッシュネル社長に続き、ミッチャム兄弟らもお見舞いに到着。社長は会社から、ダギー宛にFBIから連絡があったとの伝言を受ける。

　ダギーの家を見張っているシャンタルとハッチ。FBIのウィルソン捜査官も別の場所から見張っている。

　シャンタルたちの車の前に、別の車が止まる。自分の車が入れられないから場所をどいてほしいと言うが、悪態をついて動かないシャンタル。すると男は自分の車のアクセルをふかし、シャンタルたちのバンにぶつける。怒ったシャンタルは、銃で男のフロントガラスを撃つ。男はトランクから銃を取り出し、ためらいなく発砲。腕を撃たれたシャンタルを見て、ハッチがショットガンで応戦する。シャンタルが車を急発進させ逃げようとすると、男がマシンガンを連射しシャンタルとハッチが死亡。一部始終を見ていたFBIが男を緊急逮捕する。

　病院。ノイズに誘われ病室を出るブッシュネル社長。ベッド脇に片腕のマイクが現れ、クーパーが覚醒。クーパーはマイクに自分の髪の毛を渡し、もうひとつドッペルゲンガーを作ってほしいと頼む。

　戻ってきたジェイニーEとサニージムも

クーパーの回復を見て喜ぶ。昨日までとうってかわって、ハキハキと話すクーパー。ミッチャム兄弟に電話をかけ、20分後にカジノのロビーで待ち合わせをする。ワシントン州スポケーンへ飛ぶというのだ。クーパーは社長に、ゴードンへの伝言を託す。社長からFBIの件について聞かれると「私がFBIだ」と返答。BMWを颯爽と運転し、シルバー・マスタング・カジノに向かう。

Mr.Cに座標を送るダイアン。バッグからは銃がのぞいている。ゴードンたちの部屋に来たダイアンは、クーパーにレイプされた夜のこと、Mr.Cに座標を送ったこと、そして、自分は自分ではないことを告白。バッグに手をのばして銃を取り出そうとしたダイアンをアルバートとタミーが射殺。ダイアンの体は赤い部屋に消える。

シルバー・マスタング・カジノのロビーで合流するクーパーとミッチャム兄弟。ジェイニーEとサニージムに、自分はダギーではないが必ず戻ってくると約束し別れる。

ミッチャム兄弟は、クーパーがFBI捜査官だったことに説明を求め、保安官事務所のような場所では自分たちは歓迎されないはずだというが、クーパーは「君たち兄弟は黄金のハートを持っている」と話し安心させる。深くうなずくキャンディ。

ようやくロードハウスに来たオードリーとチャーリー。ステージではEdward Louis Severson IIIが「Out of Sand」を歌っている。演奏が終わると、MCは「次にお届けするのはオードリーのダンスです」とアナウンス。フロアの中央でオードリーがゆっくりと踊り始める。すると突然、客同士の喧嘩が勃発。オードリーがチャーリーにここから連れ出してほしいと頼み込んだその瞬間、オードリーは明るい部屋の中で鏡を覗き込んでいた。

「何？　何なの？」

## 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

ついにクーパーが病院のベッドで覚醒する。覚醒する寸前、ゴードンやジェイニーE、ミッチャム兄弟や三人娘がベッドを取り囲んでいる構図は『オズの魔法使』でドロシーが現実に目覚めるシーンにそっくりだという指摘がある。ピンクのドレスの三人娘がマンチキンランドでドロシーを最初に迎える「ララバイ・リーグ」三人娘ではないかという説もあり、はたまた黄金に輝く「ローラ玉」は見ようによっては「北の良い魔女」が空中移動するときの球体とも受け取れる。ローラ＝シェリル・リーは『ワイルド・アット・ハート』で『オズの魔法使』まんまの「良い魔女」を演じてもいた。夢と現実の境界線上を揺らぐリンチ作品と『オズの魔法使』との強い結びつきは今に始まったことではないが、ツイン・ピークスの町を中心としたパステルカラーの宇宙はやはり、カラフルな「オズの国」と通じているのだろう。とすると今回の「悪い魔女」というのは……？

# 第17話 過去が未来を決める

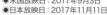
The past dictates the future.

The Return: Part 17

●監督：デイヴィッド・リンチ
●脚本：デイヴィッド・リンチ、マーク・フロスト
●米国放映日：2017年9月3日
●日本放映日：2017年11月11日

## Mr.Cとキラー・ボブの最期。クーパーは、89年2月23日、夜のツイン・ピークスへ向かう

ボブを木っ端微塵にしたフレディくんが右手にはめている「不思議な力を持つ緑色の手袋」は、リンチが昔から温めていたアイデアだったそう。もともとはピートを演じたジャック・ナンスにはめさせようと思っていたが、時を経て、ナンスが亡くなり、最初に思いついた時とはまったく違う形で『The Return』に登場した。

バックホーン。ゴードンは、とてつもない負の力"ジュディ"の存在を、ブリッグス少佐とクーパーとともに調査していたことを説明。情報屋のレイから、少佐が持っていた座標をMr.Cが探しているというメッセージが届いたという。

ラスベガスの病院にいるヘッドリー捜査官経由で、ブッシュネル社長がゴードンにクーパーからのメッセージを伝える。「トルーマン保安官の元へ向かう。ラスベガスの時間は2時53分で、合計すると10になる。これは完成を意味する数字だ」

タミーのもとにこれまでラスベガスで起きたクーパーの事件概要が届く。これは間違いなく青いバラ事件だ、とツイン・ピークスに向かうゴードン。

Mr.Cは、ジャック・ラビッツ・パレスのそばのナイドが倒れていた場所にいる。上空に渦が出現し、異次元へ転送される。消防士である巨人により、ツイン・ピークス保安官事務所に再転送されるMr.C。アンディはMr.Cをクーパーだと思い再会を喜ぶ。ルーシーや初対面のフランクが挨拶をしていると、アンディの表情が変わり、消防士のところで見たビジョンを思い出す。受付にいるルーシーに、今からかかってくる電話はとても重要だと声をかけるアンディ。

留置場ではナイドが何かに反応して怯えている。チャドは、靴のかかとに隠していた鍵で檻から抜け出す。アンディがチャドを見つけて銃を構えたその時、フレディが右の拳で檻の扉を叩く。倒れるチャド。アンディはすかさず手錠をかける。

クーパーからの電話を取り次ぐルーシー。Mr.Cとの会話を中断して電話に出たフランクは、Mr.Cがクーパー本人ではないと悟る。見抜かれたと気づき銃を抜いたMr.Cを、ルーシーが背後から撃つ。クーパーは電話越しに死体に触らないよう指示し、もうすぐ到着すると伝える。

留置所にいた面々がオフィスに集まる。ウッズマンがMr.Cを取り囲む。そこにクーパーとミッチャム兄弟らが到着。Mr.Cの体の中からキラー・ボブの顔をした黒い球体が浮かび上がる。ボブはクーパーを襲おうとするが、フレディが自分のほうを振り向かせ、手袋をはめた右手で応戦。見事ボブ

part 17

を玉砕する。クーパーがMr.Cの左手薬指に指輪をはめると、Mr.Cが消える。目の前の出来事に呆然とする一同。

クーパーがナイドの存在に気づく。お互いに近寄り手をあわせると、ナイドが赤い髪のダイアンに変わる。キスをする2人。

周囲が暗くなり、クーパーはダイアン、ゴードンと暗闇を歩いている。グレート・ノーザン・ホテルのボイラー室の扉を315号室の鍵で開ける。クーパーはひとりで扉の向こうへ進み、片腕のマイクと再会する。

コンビニエンスストアの2階を通り、フィリップ・ジェフリーズの元に到着。クーパーはジェフリーズに89年2月23日へ自分を転送するよう依頼。ジェフリーズはいう。

**ここで君はジュディを見つけるはずだ**
**おそらく、誰かがいる**
**君はこれを頼んだか？**

「電気だ！　それは電気！」と片腕のマイクが叫ぶ。

ツイン・ピークス。89年2月23日の夜。家を飛び出して、ジェームズのバイクに飛び乗るローラ。途中でバイクから降り、森へ駆け出すローラがクーパーと出会う。ローラの手を引いて歩き出すクーパー。

「家へ帰ろう」

翌朝、釣りに出かけるピート。湖の岸辺にローラの死体はない。

パーマー家。セーラはローラの写真を床に叩きつけ、叫びながら酒瓶を何度も何度も突き立てる。写真立てのガラスは割れるが、写真にはまったく傷がつかない。

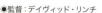
ローラの手を引きながら森の中を歩くクーパー。シカモアの木の近くでふと振り返ると、ローラの姿は消えていて、遠くからローラの悲鳴が聞こえる。

ロードハウス。ジュリー・クルーズが「The World Spins」を歌っている。

## 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

第8章で書いた「不可逆性」の問題がここにきて鮮明になってくる。ローラ・パーマー殺人事件は、すべてを巻き戻して「なかったこと」に本当になったのか？　もしそうであれば、『ワイルド・アット・ハート』で母親＝魔女の呪縛が解けたときに、その写真から母親の姿が消え失せたように、セーラが独り住むパーマー家のフォトフレームから、にっこり笑いかけるローラの顔が消えてしまうべきなのだが、そうはならなかった。セーラ（なのか、セーラのうちに潜む存在なのか、それが同一のものなのかについては置いておくとして）が何度も何度も写真に包丁を突き立てても、ローラの微笑みが消え去ることはない――効果も見事で、視覚的に「不可逆性」のぞっとするような冷たさが伝わってくる。「ボブ球」を破壊したことで世界は元通りになっただろうか？　虚構性だけが強調された「大団円」は「夢の終わり」を示唆しているのか、新たな悪夢の始まりを告げているのか？

# 第18話　君の名前は？
What is your name?

The Return: Part 18

●監督：デイヴィッド・リンチ
●脚本：デイヴィッド・リンチ、マーク・フロスト
●米国放映日：2017年9月3日
●日本放映日：2017年11月18日

**ダイアンとクーパー。リンダとリチャード。「ローラ！」と叫ぶセーラの声――。世界は暗闇に包まれる**

ついに世界に暗闇が訪れた。これから先、我々はどこへ向かえばいいのだろうか。

Showtimeのプログラム・ディレクターであるレヴィンは、18年1月に行われた米テレビ批評家協会のプレスツアーで「もし、リンチとフロストに、続編もしくは別の企画に関するアイデアがあるのならいつでもドアは開かれている」と発言。リンチ自身も折にふれて続編についての質問に答えている。『The Return』放送終了直後の17年9月、EW.comのインタビューでは「まだ終わったばかりじゃないか(笑)。まったく話し合ってもいないよ。もし続編が実現したとしても視聴者が目にするのは4年後だろう」。18年5月にNYで行われたフェスティバル・オブ・ディスラプションに登壇した際には、シリーズを続けたいかという質問に対して「今は話せない」と返答。18年6月にLAで行われた回顧録『Room to Dream』の出版記念イベントでは、「キャリー・ペイジはあなたが戻ってくるのを待っていますか？」という比喩的質問に対し「それには多くの障害がある」と続編交渉を示唆する発言をしている。さて……。

赤い部屋。椅子に腰掛けたMr.Cの体が燃えている。タネから新たなドッペルゲンガーが作られ、ジェイニーEとサニージムが住むラスベガスのダギーの家へ届けられる。再会を喜ぶ3人。

89年のツイン・ピークス。ローラの手を引きながら森の中を歩くクーパー。シカモアの木の近くで、ふと振り返るとローラの姿は消えていて、遠くからローラの悲鳴が聞こえる。

赤い部屋。クーパーと片腕のマイクがソファに座っている。

**これは未来か**
**それとも これは 過去か？**

別の部屋で進化した腕がクーパーに聞く。

**それは通り沿いの家に住んでいた**
**あの少女の物語なのか？**

ローラがクーパーの耳元でなにかをささやく。とまどいの表情を見せるクーパー。絶叫と共にローラは消える。

次の部屋にはリーランドが待っている。

**ローラを探せ**

外に赤い髪のダイアンが立っている。「本当に君か？　ダイアン」「ええ、そうよ」

古い車に乗り、ハイウェイを走るダイアンとクーパー。前方にはたくさんの送電線。

part 18

430マイルに近づき車を路肩に寄せる。熱いキスをするクーパーとダイアン。お互いの意志を確認し、再び車を走らせると、電気の音が大きくなり、夜のハイウェイへと景色が変わる。

さびれたモーテルに到着。クーパーが受付に向かい、ダイアンはひとりで待っている。柱の陰にもうひとりのダイアンが現れ、2人はお互いに見つめ合う。

部屋に入り、セックスをする2人。ダイアンはクーパーの上に乗り、クーパーの顔を両手で覆っている。

翌朝目覚めるとダイアンの姿は消えている。サイドテーブルにはリチャードからリンダへの置き手紙。昨夜とは違い、モーテルも車も現代的なものに変わっている。

テキサス州オデッサ。「ジュディのコーヒーショップ」へ立ち寄るクーパー。クリスティにもうひとりのウエイトレスの住所を聞き、車で向かう。

荒れ果てた家。目の前の電柱のプレートは「6」。家の中からはローラそっくりの女性が出てくるが、彼女はローラではなくキャリー・ペイジだと名乗る。ここから逃げ出したいというキャリーは、クーパーとともにツイン・ピークスに行くことにする。ひたすら車を走らせる2人。長い長いドライブの末、ダブルRダイナーの前を通ってパーマー家に到着する。

中から出てきたのは中年女性。「セーラ・パーマーは？」と聞くが、そんな名前の人はいないという。彼女はアリス・トレモンドで、チャルフォント夫人から家を買ったというが、その前の持ち主は分からない。

混乱するクーパー。

「今は何年だ？」

キャリーは、道路から再びゆっくりと家を見上げる。家の中から「ローラ！」と叫ぶセーラの声が聞こえる。絶叫するキャリー。

明かりが消え、暗闇に包まれる。

## 高橋ヨシキの赤い髪の部屋

キャリー・ペイジの家の椅子に腰掛け、半分腐り始めた男の死体には要注目だ。ハエがたかる死体の腹の部分が奇妙に膨らんでいて、体液か、あるいは「エンジンオイル」か、もしくは腐った「ガルモンボジーア」で汚されているかのように見えるからだ。ダイアンとクーパーの、文字通り人生最後のセックス場面は『マイ・プレイヤー』と相まってエモーションを掻き立てる。明日、違う存在になってしまっても感触を覚えていられるように——見分けがつかなくても触れば分かる、とでも言うように——クーパーの顔を掌で撫で回すダイアンの気持ちはいかばかりのものだっただろうか。それが不可能なことはお互い分かっていたはずなのに。しかし一方で、それがたとえTulpaであろうとも、ダギーがジェイニーEとサニージムの待つ、赤い扉の家に帰ってきたところに救いはある……あるいは、あったはずなのだ。すべてが取り上げられてしまったわけではない。

# PLAYBACK!
# ON THE AIR
# The Lester Guy Show

## [オン・ジ・エアー] 全話解説

生放送バラエティ番組『レスター・ガイ・ショー』を放送しようとする1950年代の架空のテレビネットワークZBC (Zoblotnick Broadcasting Company) の製作スタッフの滑稽さとその惨憺たる結果を描く、たった7話で打ち切りとなった、フロスト/リンチ・コンビによるスラップスティック・コメディ・ドラマを今こそ観返す!

文◎大内稔

# エピソード 1.1

Episode1.1：The Lester Guy Show

◉監督・脚本：デイヴィッド・リンチ ◉脚本：マーク・フロスト ◉米国放映日1992年6月20日／日本ビデオ発売1992年10月23日

**生バラエティ『レスター・ガイ・ショー』放送開始！**
**だが大道具は倒れ、レスター・ガイに激突！ 現場大混乱!!**

1957年のニューヨーク。ZBC（Zoblotnick Broadcasting Company）ネットワークTVでは、新番組の生放送バラエティ『レスター・ガイ・ショー』の放送を控えていた。

レスター・ガイ（イアン・ブキャナン）は、第二次世界大戦に出征せずにハリウッドに残っていたため主役にありつけた落ち目の映画スター。売れない時代にオレンジジュースの缶にウォッカを入れてすすっているところをZBCの社長バディ・バドウォーラー（ミゲル・フェラー）に見出され、カムバックのチャンスとして、今回のTVショーの話を持ちかけられたのだ。

局では俳優陣とスタッフがリハーサルを行っており、番組の相手役となる新人のベティ・ハドソン（マーラ・ルビネフ）はズブの素人で〝頭カラッポ〟の金髪娘。その不安を番組のプロダクション・アシスタントのルーシー・トゥルワーシー（ナンシー・ファーガソン）に打ち明けていた。そこを、番組の監督でネットワークのオーナー、イワン・ゾブロトニク（シドニー・ラシック）の甥ヴラジャ・ゴクテフ（デヴィッド・ランダー）にルーシーが駆り出された。ゴクテフは某国からの移民で、彼が話す英語は訛りがキツくルーシー以外には理解できず、ルーシーは通訳の役目も担っていた。番組や番組内で生放送されるCMのリハーサルを見て回るゴクテフに、社長のバドウォーラーが局に見学に来るとの知らせが。バドウォーラーは、この番組に我が社の社運がかかっていると皆に伝えるのだった。

そして生放送が始まるが、リハーサルとは違って現場は大混乱。大道具が倒れてレスター・ガイに激突し気絶させてしまう。さらにカメラは倒れ、効果音を間違えたりと、次々と惨事が襲いかかり、オーナーのゾブロトニクから怒りの電話がかかってくる。そのときベティ・ハドソンが歌い始め、彼女の純真な優しさをアメリカの一般市民に示し、めちゃくちゃになった生放送を救うのだった。

episode 1.1

# エピソード 1.2

Episode #1.2

◉監督：レスリー・リンカ・グラッター　◉脚本：マーク・フロスト　◉米国放映日：未放送／日本ビデオ発売1992年10月23日

## ベティ・ハドソンに完全に食われたレスター・ガイ、怒り心頭！

「鳥たちはかわいい歌を歌い、空気にはいつも音楽がある」

と歌ってメチャクチャになった番組を救ったベティに、視聴者から次々とファンレターが届けられ、番組も高視聴率を獲得。主役のレスター・ガイを完全に食ってしまったベティのもとに、社長バドウォーラーを始め監督やスタッフなどが次々と訪れ、オーナーのゾブロトニクからはディナーに招待される。いっぽうレスター・ガイを主役に選んだバドウォーラーとレスターは、この事態に立場の危うさを感じ、バドウォーラーの秘書兼番組担当者ニコル・ソーン（キム・マクガイア）も巻き込んでベティを排除しようと陰謀を企てる。

台本の読み合わせ最中、その意味もわからないベティのためにメチャクチャになってしまったことに怒り心頭のレスターは、ゾブロトニクとのディナーへ向かうリムジンの運転手に変装してゾブロトニクの恐ろしさをあることないこと吹き込み、次いでレストランのウェイターに化けて盗聴器を仕掛けるのだった。ビビるベティだが、ゾブロトニクが話す英語もこれまた訛りがキツいがベティとは順調に会話が進み、ディナーは盛り上がり、ゾブロトニクは上機嫌。バドウォーラーとレスター、ソーンがレストランに居るのがバレても、ベティの仕掛けた余興とゾブロトニクは信じた。いっぽうベティはレスターが貧乏でウェイターのバイトをしていると勘違い「オーナーに昇給を頼んであげましょうか？」とレスターを気遣うのだった。

episode 1.2

# エピソード 1.3

Episode #1.3

◉監督：ジャック・フィスク　◉脚本：ロバート・エンゲルス　◉米国放映日1992年6月20日／日本ビデオ発売1992年10月23日

## ベティにさらに大差をつけられたレスター、起死回生のクイズ番組を企画するが……！

生放送CMのリハーサル中、番組のプロデューサー、ドワイト・マクゴニグル（マーヴィン・カプラン）が花粉症で、西側某国出身のドクター・ウィンキー（リチャード・リール）に特効薬を処方してもらうが、彼は実は獣医で、特効薬のせいで花粉症は治るものの犬のスナップスが憑依してしまう症状に罹る。

いっぽう、ベティと人気の差を大きくつけられたレスターは、彼女を笑いものにしたうえ破滅させるためにクイズ番組を企画する。史上最高のIQの持ち主と称されるライト・アンサー教授（チャールズ・タイナー）にヤラセをさせるから（レスターは教授を騙して委員が自分だけの孤児院運営協会に賞金を寄付することを条件にヤラセをさせる）、とバドウォーラーを説得し高額な64000ドルという賞金を納得させ、企画は通った。

クイズ番組のリハを終え、いよいよ本番。ベティのパートナーにベティの中学校時代の恩師エセル・シスル夫人（ダイアナ・ベラミー）を迎えてクイズが始まった。レスターの意に反して、次々と問題に正解するシスル夫人に、アンサー教授も追い詰められ、超遠視の音響効果技術者ビリー・〝ブリンキー〟・ワッツ（トレイシー・ウォルター）が使ったヘンな響効果のせいで答えを間違ってしまう。生CM中に、これが本番で何百万人もの視聴者が観ていると知ったシスル夫人が取り乱し、番組から退場。代わりに、スナップスが憑依したマクゴニグルが番組に割り込んできて……。

episode 1.3

season 1 / season 2 / fire walk with me / season 3 / on the air

# エピソード 1.4

Episode #1.4

◉監督：ジョナサン・サンガー　◉脚本：スコット・フロスト　◉米国放映日：未放送／日本ビデオ発売1992年10月23日

## 崖っぷちレスター！ 名作映画『無実に近い男』リメイクが失敗したら番組打ち切り宣告！

番組で名作映画『無実に近い男』をリメイクしてキャリア・アップを狙うレスターは、その映画の主演スター、スタン・テイリングス（フレディ・ジョーンズ）を高額のギャラでゲストとして招くことに。バドウォーラーは、これが失敗すれば『レスター・ガイ・ショー』は打ち切りだとレスターに宣告。番組では『限りなく無実に近い男』としてリハが進むが、テイリングスは元舞台俳優でTVのことをまったく知らず、常に喉がいがらっぽくなる奇病に悩まされていた……。

そして本番。番組のタイトルコールはいつもの老アナウンサー（エヴェレット・グリーンバウム）だ。最初の鴨撃ちのシーンでは、仕掛けの鴨が出てこない上に、タイミングが大幅にズレて大量のダミーの鴨がレスターに降りかかり、天使（ベティ）が降臨するシーンでは、大男の舞台係ショーティ（アーウィン・キーズ）が一緒に降りてきてしまうなど、またも番組は大混乱。「レスターを殺す！」と銃を出して息巻くバドウォーラーは何とか気を静め、メインの『限りなく無実に近い男』がスタートするが、冒頭の電気椅子での処刑シーンからドタバタで、バドウォーラーが自ら番組に飛び込み台本を読むなど事態の収拾を図るが、電気椅子でレスターが高圧電流を流され、ラストをテイリングスにさらわれるなど、またまた筋書き通りには行かなかった……。

episode 1.4

season 1 season 2 fire walk with me season 3 on the air

# エピソード 1.5

Episode #1.3

◉監督・脚本：レスリー・リンカ・グラッター　◉脚本：マーク・フロスト　◉米国放映日1992年7月4日／日本ビデオ発売1992年10月23日

## 他人には毒舌で自分には特別待遇を要求するわがままスター、シルヴィア登場！

ZBCネットワークでは、ベティの姉で映画界からTVに転身し大成功していた大女優のシルヴィア・ハドソン(アン・ブルーム)をスペシャルゲストとして『レスター・ガイ・ショー』に招くことに。レスターはかつてシルヴィア主演のミュージカル映画『ドーバーの白い断崖』で端役を演じたことがあった。シルヴィアは自身の看板番組を持って大成功し、彼女の出演が呼び水になって『レスター・ガイ・ショー』にも大物が呼べると期待を寄せるバドウォーラー。だが、シルヴィアは他人には毒舌で自分には特別待遇を要求するわがままスター。しかもベティとは犬猿の仲。

番組では、マクゴニグルがプロデュースする朝の子ども向け番組に出演している人形使いのウォーリー・ウォルターズ(チャック・マッキャン)が操るピーナッツ君と彼女の共演を予定していた。しかし、シルヴィアはプライドが高く、人形との共演を拒みピーナッツ君の出番がなくなってしまう。レスターはシルヴィアと旧交を温めるが、それを見てニコルは激しく嫉妬する。

……そして本番。シルヴィアの登場シーンから仕掛けがニコルのスカートを巻き込んでしまい、シルヴィアは扉で頭を打ち付けて朦朧状態。急遽レスターの登場でコントが続けられ、ピーナッツ君がシルヴィアの代役で登場。さらに姉の代わりにベティが代役で登場すると、シルヴィアが正気づき、ピーナッツ君を罵倒。それを慰めるベティが歌を歌い始め……。

Episode 1.5

# エピソード 1.6

Episode #1.6

◉監督：ベティ・トーマス　◉脚本：ロバート・エンゲルス　◉米国放映日：未放送／日本ビデオ発売1992年10月23日

## 大魔術師グレート・プレシディオ登場！ だがマジックができない！

バドウォーラー社長はオーナーのゾブロトニクが大好きなマジック番組をやることに決め、ジプシー・トラベラー・マジックの開発者でゾブロトニクが大ファンの大魔術師グレート・プレシディオ(I・M・ホブソン)を招く。だが彼は、帽子に葉巻を咥えた犬の悪夢のせいでマジックができなくなっており、現在はバドウォーラーが浮浪者と間違えるほどやつれたただの老人になり果てていた。こりゃ使い物にならんと困ったバドウォーラーは、レスターにマジックを練習させて生放送でプレシディオの代わりにやるよう指示をする。だがレスターは自分のショーが『ベティ・ハドソン・ショー』に代えられるかもと落ち込んでいた。

ニコルはそんな彼を慰め、マジック道具一式を買い揃えレスターに渡し、これでベティを見返してやるのよと、発破をかける。しかし不器用なレスターは何をやってもものにならない。ニコルは思い余ってマジック・ボックスに自分が入り、簡単だと示そうとするが、カギが吹っ飛んで閉じ込められたまま本番の時間が……。だがそのとき、帽子に葉巻を咥えたスナップスを見たプレシディオは正気を取り戻し、閉じ込められたニコルをトカゲに変えてしまったり、レスターを手乗りサイズに縮めたりして大魔術師グレート・プレシディオとして大復活、番組も大成功するのだった。

episode 1.6

# エピソード 1.7

Episode #1.7

◉監督：ジャック・フィスク　◉脚本：デイヴィッド・リンチ、ロバート・エンゲルス
◉米国放映日：未放送／日本ビデオ発売1992年10月23日

## “名前のない女”登場！ レスターは最終兵器「音声破壊機」でベティ失墜を企むが……！

レスターは自身も大ファンで、若者たちに人気の最先端パフォーマー〝名前のない女〟(ベリナ・ローガン)を番組に出演させる話でバドウォーラーと口論になっていたが、結局レスターの説得で〝名前のない女〟を招くことになる。

いっぽうベティは、実家に電話をかけようとして母親の名前が思い出せず、ルーシーに実家に電話をかけて母親の名前を聞いてもらおうとするほどボケまくる。ゲストの〝名前のない女〟は監督のゴクテフの言葉を聞き違って親密な関係になり、靴好きのゴクテフは彼女を〝ブーツメーカー〟と崇める。

レスターはビル・マルカヒー(ジョン・クエイド)から紹介された声を耳障りな音に変える「音声破壊機」を使って、またまたベティを失墜させようと企むのだった。そしてリハが始まると、ゴクテフ監督はベティに事前に歌を録音しておけば本番で失敗しない、と説得。そこへオーナーのゾブロトニクがやって来て、リハは中断。レスターはマルカヒーとともに何とかベティに「音声破壊機」を使わせようと画策するのだが……。

そして本番。オープニングのレスターのダンスから「音声破壊機」が作動し、海辺のコントでも音声が破壊されるが、〝名前のない女〟のアバンギャルドなパフォーマンスには「音声破壊機」が逆に効果的。そしてラストでベティが歌う歌で、ベティが母親の名前を思い出し……。

打ち切り！

episode 1.7

高橋ヨシキの赤い髪の部屋 EXTRA 番外編

# ようこそ、呪われたシットコム『オン・ジ・エアー』の世界へ

そのとっ散らかった、腹がよじれるほど
可笑しい他者との断絶

文◎高橋ヨシキ

『オン・ジ・エアー』は、リンチが正面切って「1950年代」と格闘した最初の作品であると同時に、『ツイン・ピークス』とはまた別の形で「TV番組」そのものを脱構築しようとした試みだ。

## 幻のTV番組『オン・ジ・エアー』

スポットライトの中に、書き割り然とした——いや、実際に書き割りなのだが——人工の楽園が浮かび上がる。鉄製の尖塔からスパークとなって電気が空中に撒き散らされる。メーターやレバーの並ぶ操作盤を操る奇妙な男たち。どこからともなく耳に心地よい音楽が流れ、ダンサーの女たちが彼方でゆっくりと踊る。人々の会話はすれ違う。相手の言っている言葉は理解できても、その意味するところが互いに通じ合わないのだ。奇怪なイントネーションで話す小男に至っては、何を言っているのかすら判然としない——男のセリフには英語の字幕がつけられている。混沌のさなか、赤いドレスに身を包んだ美女が、天使のような声で歌い出す。

木にとまった鳥が
楽しげに歌っている
あなたのためにトウィティー
私のためにトウィティーと
夜はあまりにも静かで……

窓枠をのりこえて、男がキッチンに侵入してくる。そして恐怖の絶叫。

ようこそ、『オン・ジ・エアー』の世界へ。リンチ／フロストが『ツイン・ピークス』の直後に送り出した、呪われたシットコム『オン・ジ・エアー』は、現在のところ、アメリカはもちろんのこと、世界のどこでもBlu-ray はおろか、DVDすら発売されていない幻のTV番組である……といってもVHSソフトは存在するので「幻の」は言いすぎか。日本語を解する者にはラッキーなことに、本作は日本でだけレーザーディスク版が発売されており、つまり最も画質の良い『オン・ジ・エアー』は、日本語字幕がついたバージョンしか今のところ存在しない。

『オン・ジ・エアー』の日本版LDジャケット

現在、本作はYouTubeで全エピソードを観ることができるが、これもすべて日本版レーザーディスクの映像をアップロードしたものであるため日本語字幕がばっちり入っている。これはレーザーディスクの仕様がオン／オフが切り替えられるキャプションではなく、画面に直接字幕が埋め込まれていることによる。海外の『ツイン・ピークス』／『オン・ジ・エアー』ファンのウェブサイトには（彼は日本版レーザーディスクを所持しているのだが）、「日本語になじみのない人間にとって、何を意味するかわからない文字が並ぶ字幕はたしかに集中力を妨げるものだが……しかし、このスクリーン下方に、奇怪な記号が並んでいるという状況自体が『オン・ジ・エアー』の、とっ散らかった、超現実的な世界観と完全にマッチしているということは言える」と、負け惜しみにしては愛情あふれる文言が並んでいたりもする。家の廊下の蛍光灯の寿命が近づいて、ビービーガチガチと点滅するようになったとき「うん、これはなかなか〈リンチっぽい〉からこのままにしておこう」というリンチ・ファンは世界中に多く存在する――はずだ――が、リンチ熱にうかされた病人は、得てして偶発的な不具合やノイズを無理やりにでも楽しんでしまいがちなものなのである（でも古くなった蛍光灯は早めに交換することをお薦めしておくが）。

『オン・ジ・エアー』のアイディアをリンチが思いついたのは、『ツイン・ピークス』シーズン2の音響編集作業を行っていたときだという。

「突然、ひらめいたんだ。人々がなにか、ことをうまく運ぼうと努力するにもかかわらず、すべてが失敗に終わるというアイディアが」。残念なことに、その正確な時期、つまりシーズン2のどの段階でリンチがこのアイディアを思いついたかは定かではないが、リンチがこのとき既に『ツイン・ピークス』が袋小路に迷い込んだ感覚を持っていたことは想像に難くない。

おそらく製作プロセスと実際の放映にタイムラグがあったせいもあってか、ABCはリンチとマーク・フロストが持ち込んだ『オン・ジ・エアー』に好感触を示し、パイロット版の製作がスタート。リンチ自身が監督したパイロット版は試写の反応も良かったため、続けて6つのエピソードが製作される運びとなった。

ところが、パイロット版を作るときには有利に働いたタイムラグが、いざ放映という段になって『オン・ジ・エアー』の足を引っ張った。あれよあれよという間に『ツイン・ピークス』人気が急降下するのを見たABCは――『ツイン・ピークス』不人気の理由

映画『ヘビー・ペッティング』より

がABCによる放映時間の度重なる変更、ならびにABC自身が「ローラ・パーマー事件を早く解決しろ」とプレッシャーをかけたことに起因するにもかかわらず——放映開始前に『オン・ジ・エアー』を見切り、この番組を厄介者のように扱った。ABCは『オン・ジ・エアー』の放映を渋りに渋り(何度も放送開始が見送られた)、最終的に、どんな番組であろうが視聴率が見込めない時間帯に無理やり押し込んだ。『オン・ジ・エアー』は夏の土曜日(1992年6月20日に放映開始)という、アメリカ人が最もTVを観ない時期・時間帯に放映され、おまけに全部で7話あるうちの3話しか放映されなかったのである。このことについてリンチは「試写でも好評だったし、私も気に入っていた番組なのに、なぜこんな仕打ちを受けなければならないのか」と愚痴り、『ツイン・ピークス』に続き、イライラしっぱなしのTV局社長役で出演しているミゲル・フェラーは「(番組を生殺しにされるくらいなら)いっそひと思いに撃ち殺せばいいじゃないか」と怒りをぶちまけた。

『ブルーベルベット』をはじめ、『ツイン・ピークス』も、あるいは『ワイルド・アット・ハート』や『ストレイト・ストーリー』、いや、この際『ロスト・ハイウェイ』も『マルホランド・ドライブ』も含めてかまわないと思うが、リンチの諸作品にはいつもカギカッコ付きの「1950年代」の雰囲気が濃厚に漂っている。カギカッコをつけなくてはいけないのは、それがノスタルジーへの耽溺とは一線を画すものだからである。

## リンチ作品の「1950年代感」

1989年のドキュメンタリー映画『ヘビー・ペッティング』は、ウィリアム・S・バロウズ、アレン・ギンズバーグ、フランシス・フィッシャー、ローリー・アンダーソン、アン・マグナソン、それにデイヴィッド・バーンといった錚々たるメンバーに、1950年代の若者の性的活動の実態についてインタビューした作品だ。彼らの話から浮かび上がってくる1950年代は、建前としての「健全さ」がメディアとコミュニティを席巻していた——そのイメージが現在に至るまで無邪気に継承されている——「清く正しい」「懐かしの」時代とはまったく違う。偽りの「健全さ」の光が当たらない暗闇で、若者たちは逸脱的な性行為に没頭し、ドラッグに溺れ、暴力を振るっていた(これはいつだってそうだし、そうでない時代があると考えるほうがおかしいのだが)。

リンチ作品の「1950年代感」は、『ヘビー・ペッティング』で描かれたそれと同様、いつもアンビバレントで不安定なものだったし、また、それがどこまで「1950年代風」に見えようとも、作品内の時代設

定は常に現在だった。自身が多感な時期を過ごした時代をノスタルジックに回想したい、という欲望は否定しないままで、ノスタルジーという「イメージ」がすべてを偽りのパステルカラーで塗りつぶすことをリンチは良しとしなかった。この感覚は『The Return』で、絵に描いたような「1950年代」をウッズマンが侵食したことでさらにくっきりと浮かび上がることになる。

話を急ぎすぎた。『オン・ジ・エアー』は、リンチが正面切って「1950年代」と格闘した最初の作品であると同時に、『ツイン・ピークス』とはまた別の形で「TV番組」そのものを脱構築しようとした試みだ。『ツイン・ピークス』はソープオペラを分解し、その部品で別の何かを作り上げようとしたわけだが——予期せぬことに、ソープオペラの部品はどう組み合わせてもソープオペラにしかならない、という罠が待ち受けていたにせよ——『オン・ジ・エアー』はシチュエーション・コメディ、いわゆるシットコムを「シットコムとして」きちんと組み立てている。にもかかわらず『オン・ジ・エアー』がシットコムを脱構築したことになり得るのは、この番組のメインテーマがディスコミュニケーションだからである——他の優れたコメディの多くがそうであるようにだ。

## 「ラーフ・トラック(ここが笑うところです)」

コミュニケーションの不可能性は『オン・ジ・エアー』の中で徹底的に追求されている。人々の会話は絶対に通常の形では成立しない。人々は聞き間違え、意味を捉え損ね、相手の思いを間違って忖度し、どたばたの連鎖が収束することはない。ことコミュニケーションの観点からすると、『オン・ジ・エアー』には絶望しかない。それは人間が他者と最終的に分かり合えないという絶望であり、また、他人に意思を伝達しようとする作業が結局のところ「シーシュポスの岩」でしかないのではないか、という恐るべき予感でもある。シットコムに特有の「ラーフ・トラック（録音された笑い声）」が挿入されていないことが、さらにこの感覚を増幅させる——「ラーフ・トラック」は「ここが笑うところです」と示すことによって視聴者と番組とを「通じ合わせる」ためのツールだからだ。

真に恐ろしいのは、他者の絶望や他者との断絶といったものが、傍目には腹がよじれるほど可笑しいということだ。『オン・ジ・エアー』はコメディが本質的に持つ残酷性をとことん追求したハードコアなコメディだった。そうは見えないかもしれないが。

だから、トンチンカンなノイズ音が鳴り響く、『オン・ジ・エアー』の徹頭徹尾ふざけた効果音の数々はとても重要だ。

互いに断絶した人々が、あらかじめ不可能なコミュニケーションを求めて右往左往するさまを観て爆笑しようではないか。人生は絶望に満ちたコメディに過ぎないのだから。

『オン・ジ・エアー』より

## "TWIN PEAKS" SOUNDTRACK REVIEW #3
## 『ツイン・ピークス』音楽解説

The BANG BANG BAR

バダラメンティ、久々にリンチと合体!
音楽の約束事から逸脱した「サウンド・デザイナー」リンチの
パラノイアックなリミックス

# 『The Return』［ソート・ギャングの復活］編

『ツイン・ピークス The Return』は、オリジナルTVシリーズや
劇場版『ローラ・パーマー最期の７日間』以上に“音楽的”な作品だ。
アンジェロ・バダラメンティが復帰、新しいスコアを手がけているのに加えて、
デイヴィッド・リンチ自らが“サウンド・デザイナー”として参加。
サウンドへのこだわりが増している。

文◎山崎智之

全18回のエピソードのうち、大半はロードハウス（酒場）〝バン・バン・バー〟で幕を閉じる。シーズン1&2ではジュリー・クルーズが歌姫として出演していたが、今回はエピソードごとに異なったアーティストが出演。リンチの趣味が反映されたツボを突いた人選で、毎回楽しませてくれる。

さらに劇中では数々のポップスやロック、オールディーズの楽曲が使われ、〝耳で楽しむ『ツイン・ピークス』〟でもあった。そんな音楽へのこだわりゆえに、『The Return』は2枚のサウンドトラック・アルバムCDが発売された。ひとつはポップ／ロック・アーティストたちによる『Music from the Limited Event Series』（邦題は『オリジナル・サウンドトラック〈ポップ／ロック〉』）、もうひとつは『Limited Event Series Soundtrack』（邦題は『オリジナル・サウンドトラック〈スコア〉』）である。どちらとも純然たる音楽作品として楽しむことができ、映像を伴うことでさらに魅力を増すアルバムだ。この記事では〝バン・バン・バー〟で演奏したミュージシャンたちの解説、バダラメンティによる音楽スコア、リンチの関与などについて記していこう。

## 〈〝バン・バン・バー〟出演者たち〉

旧シリーズから『The Return』まで、酒場〝バン・バン・バー〟はツイン・ピークスの住民たちや流れ者、長距離トラック運転手たちが飲み食い、笑い泣く舞台となってきた。間違ってはいけないのは、食事やアルコール類を提供、ライヴ演奏などもある酒場兼食堂のことを一般名称としてロードハウスと呼ぶのであって、店の名前が〝ロードハウス〟なのではない。店の名前は、看板にある通り〝バン・バン・バー〟だ。

かつて『ロードハウス／孤独の街』（89年／ビデオ&LD題は『ロードハウス／誓いのカクテル』）という映画があったが、やはりロードハウスというのはこの種の酒場をあらわす一般名詞で、店の名前は別にあった（余談ながらこの映画には盲目のカナダ人ブルース・ギタリスト、ジェフ・ヒーリーが出演。やはり〝音楽的〟な作品である）。

### ●ナイン・インチ・ネイルズ

インダストリアル／エレクトロニックかつヘヴィな音楽性で現代ロック界の最重要バンドのひとつといわれるナイン・インチ・ネイルズは実質トレント・レズナーのひとりバンド。日本でもフジ・ロック・フェスティバルやサマーソニックといった夏フェスでヘッドライナーを務めるなど、絶大な人気を誇っている（ライヴ時にはサポート・メンバーを起用）。コンスタントに数千人規模のアリーナを埋められるアーティストゆえ、地方都市の酒場に突然出演するのは相当なサプライズだ。

レズナーは『ロスト・ハイウェイ』（97年）のサントラをプロデュース、「ザ・パーフェクト・ドラッグ」を提供するなど、リンチ作品にかかわった経験もあり。兄貴分のデイヴィッド・ボウイや、（元）弟分のマリリン・マンソンが役者としてリンチ作品に出演したこともあって、『The Return』の出演者のひとりとしてレズナーが発表されたとき、どんな役柄か期待させた。しかしフタを開けてみると、なんと〝バン・バン・バー〟でナイン・インチ・ネイルズとしてライヴ演奏をするという、ミュージシャンとしての出演だった。彼らは第8話で「シーズ・ゴーン・アウェイ」（アルバム『ノット・ジ・アクチュアル・イヴェンツ』〈16年〉収録曲）をプレイしている。レズナーは『ナチュラル・ボーン・キラーズ』（94年）の音楽プロデュースや『ソーシャル・ネットワーク』（10年）、『ゴーン・ガール』（14年）など映画に携わることも多く、いずれまたリンチとかかわることもあるに違いない。

### ●エディ・ヴェダー

パール・ジャムのシンガーであるエディ・ヴェダーが第16話でライヴ演奏している「アウト・オブ・サンド」は、『The Return』のために書

き下ろされた新曲だが、16年からライヴでプレイされていた。

●オ・ルヴォワール・シモーヌ
ブルックリン出身の女性シンセサイザー奏者3人組で、10年来のリンチのお気に入りバンド。来日公演も行っている。07年1月、N.Y.の書店『バーンズ&ノーブル』ユニオン・スクエア店でリンチが自著『Catching The Big Fish』のサイン会を行ったとき、リンチが朗読しながらオ・ルヴォアール・シモーヌがライヴ演奏するというイベントが実現している。それ以来、リンチはインタビューなどで彼女たちを絶賛、今回の出演に至った。彼女たちは第4話で「ラーク」、第9話で「ア・ヴァイオレント・イエット・フラマブル・ワールド」と2回出演。両曲ともアルバム『The Bird Of Music』（07年）で聴くことができる。

●レベッカ・デル・リオ
カリフォルニア在住のメキシコ系シンガー・ソングライター。『マルホランド・ドライブ』（01年）で、ロイ・オービソンの「クライング」をスペイン語アカペラで「Llorando」として歌うシーンで、リンチのファンに知られるようになった。彼女は第10話で「ノー・スターズ」を歌っている（アルバム『ラヴ・ハーツ、ラヴ・ヒールズ』〈11年〉収録）。

ちなみに、この第10話での演奏でギターを弾いているのは、アメリカのエレクトロニック・アーティストのモービーだ。彼は90年のシングル「Go」では「ローラ・パーマーのテーマ」をサンプリング。彼の「ショット・イン・ザ・バック・オブ・ザ・ヘッド」（09年）のMVをリンチが監督したり、リンチの「ザ・ビッグ・ドリーム」（13年）をモービーがリミックスしている。

また、キーボードを弾いているのはギャング・オブ・フォーやルー・リード、アーケイド・ファイアやニック・ケイヴ&ザ・バッド・シーズなどを手がけてきたプロデューサー、ニック・ローネイだ。

第5話のトラブル演奏シーン。真ん中のギターがライリー・リンチ

●クロマティックス
オレゴン州ポートランド出身のエレクトロニック・ポップ・バンド。映画『ドライヴ』（11年）の冒頭で「ティック・オブ・ザ・クロック」が使われたり、TVドラマ『ベイツ・モーテル』（13〜17年）、『ゴシップガール』（07〜12年）でも楽曲が流れるなど、映画ファンにもおなじみだ。第2話で「シャドウ」、第12話で「サタデイ」をプレイしているのに加えて、バンドのプログラミングとプロデュースを担当するジョニー・ジュエルは第5話のエンディングにソロ曲「ウィンドスウェプト」を提供している。なお彼らは第17話でジュリー・クルーズのバックを務めている（後述）。

●トラブル
リンチの息子ライリー・リンチがギターを担当するロック・バンド。第5話で「スネイク・アイズ」を演奏している彼らは、父も音楽作品

をリリースしたことがある米「セイクリッド・ボーンズ」レーベルと契約している。

**●ザ・カクタス・ブロッサムズ**

ジャック・トレイとペイジ・バーカムの兄弟からなるミネアポリス出身のカントリー・デュオ。第3話で演奏した「ミシシッピ」はアルバム『You're Dreaming』（16年）から。

**●シャロン・ヴァン・エッテン**

ニュージャージー出身のシンガー・ソングライターで、2015年に来日経験もある。第6話で演奏する「タリファ」はアルバム『アー・ウィー・ゼア』（14年）から。

**●リッシー**

リッシーことエリザベス・コリン・マウラスはアメリカのシンガー・ソングライター。第14話で演奏された「ワイルド・ウェスト」はアルバム『マイ・ワイルド・ウェスト』（16年）収録曲。

**●ザ・ヴェイルズ**

本作では珍しいイギリス勢で、ロンドン出身のロック・バンド。第15話で演奏した「Axolotl」はアルバム『トータル・デプラヴィティ』（16年）の1曲目を飾ったナンバー。

**●ハドソン・モホーク**

こちらもイギリス出身（スコットランド）のDJ／プロデューサー。第9話でプレイしている「ヒューマン」は未発表曲。

**●ZZトップ**

残念ながらZZトップのライヴ・シーンはないが、酒場で「シャープ・ドレスド・マン」が流れ、乱闘のBGMになるという趣向がある。

**●ジェームズ・ハーレイ**

ローラ・パーマーの元カレだったジェームズ・ハーレイは『The Return』ではグレイト・ノーザン・ホテルの警備員をやっているが、第13話ではなんとステージに上がって「ジャスト・ユー」を弾き語りする。すっかりおでこが広くなったジェームズが切なげに歌うシーンは懐かしさに涙が出る。

**●オードリー・ホーン**

第16話ではオードリーが〝バン・バン・バー〟のフロアで〝オードリーのダンス〟を踊るシーンがあり、旧シリーズと同様「オードリーのダンス」に乗って、相変わらずやる気のないダンスを披露した。MCが「オードリーのダンスです」と紹介して、他の客が彼女の邪魔にならないようにフロアの端に寄るので、どうやら彼女は出演者らしい。

**●ジュリー・クルーズ**

旧シリーズで〝バン・バン・バー〟の歌姫として出演していたジュリー・クルーズだが、『The Return』では第17話で再びステージに立ち、「ザ・ワールド・スピンズ」を歌っている。新シリーズも終盤に入り、彼女の出演はもうないのか……と寂しがっていたファンは、クロマティックスを従えて歌う彼女の姿に一気にテンションを上げた。

だが、ジュリーは放映後にFacebookでリンチとエグゼクティヴ・プロデューサーのサブリナ・サザーランドを大バッシング。「せっかく歌ったのに出演シーンが短かった」というのが表向きの理由だが、「本当はやりたくなかった。電話番号やメアドを変えまでしたのに追いかけてきた」「平手打ちを食らった気分」「ゴミみたいに扱われた」など激しい言葉で批判しており、問題の根は深そうだ。ファンからの「シーズン4があって、もっと出演時間が多いといいですね」という励ましにも「絶対出ない」と断言しており、かつてジュリーのアルバム『ヴォイス・オブ・ラヴ』（93年）の制作中に生じた亀裂が再び開いたようだ。18年7月現在でリンチは72歳、ジュリーも61歳と、もう決して若くはない。仲直り出来るうちに、してほしいものだ。

## 〈劇中使用曲〉

**●ショーン・コルヴィン**

第11話のラスヴェガスのシーンで、ショーン・コルヴィンの「ラスベガス万才」が使われた。この曲はエルヴィス・プレスリーのヒット曲として知られるが、このヴァージョンは作曲者であるドク・ポーマスへのトリビュート・アルバム『Till The Night Is Gone:A Tribute To Doc Pomus』(95年)に初収録され、映画『ビッグ・リボウスキ』(98年)のエンディングでも使われている。なお「ラスベガス万才」は、ZZトップによるヴァージョンが『ビッグ・リボウスキ』、ブルース・スプリングスティーンのヴァージョンが『ハネムーン・イン・ベガス』(92年)で使用されるなど、すっかり映画挿入歌としてスタンダード化している。

**●ユニフォーム**

NY出身のノイズ・ロック・バンド。第5話、ダギーの自動車に敵が忍び寄るときに「ハビット」(アルバム『Wake In Fright』〈2017〉収録)が使われている。

**●クシシュトフ・ペンデレツキ**

ポーランド出身の20世紀を代表する現代音楽家であるペンデレツキの楽曲は、数多くの映画で使用されてきた。『エクソシスト』(73年)、『シャイニング』(80年)、『カティンの森』(07年)、『シャッターアイランド』(10年)などが例だ。

リンチもペンデレツキの楽曲を効果的に使っており、『ワイルド・アット・ハート』(90年)での「コスモゴニア」、『インランド・エンパイア』(06年)での「デ・ナトゥラ・ソノリス第2番」に続いて、〝神回〟の第8話では「広島の犠牲者に捧げる哀歌」(ヴィトルド・ロヴィツキ指揮/ワルシャワ国立フィルハーモニック・オーケストラ演奏)が流れる。もちろんこれは〝核〟がストーリーに絡んでくることも関係しているだろうが、それ以上に第8話の映像と音楽が呼応することによって生まれる、壮絶な昂ぶりを重視したのではなかろうか。

当初このシーンで、リンチはバダラメンティとオリジナル新曲を書こうとしていたが、ペンデレツキの曲があまりにも第8話のムードとピッタリだったので使うことにしたそうである。

なお余談であるが、レディオヘッドのギタリスト、ジョニー・グリーンウッドはペンデレツキの大ファンで、映画『ゼア・ウィル・ビー・ブラッド』(07年)の音楽を手がけたときには物凄いなりきりペンデレツキぶりを見せていた(特に「ヘンリー・プレインヴュー」)。また同じくグリーンウッドがスコアを書いた『ノルウェイの森』(10年)、特に「直子が死んだ」あたりもペンデレツキからの影響が丸わかりだったりする。

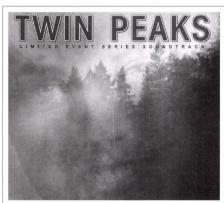
**●アメリカン・オールディーズ**

『The Return』では随所で古き良きアメリカのオールディーズが使われている。

オーティス・レディング「愛しすぎて」(65年)、サント&ジョニー「スリープ・ウォーク」(59年)、プラターズ「マイ・プレイヤー」(56年)、ブッカー・T&ザ・MG's「グリーン・オニオン」(62年)、パリス・シスターズ「忘れたいのに」(61年)、デイヴ・ブルーベック「テイク・ファイヴ」(59年)など、アメリカ音楽を代表する名曲が散りばめられている。リンチが『The Return』の構想を練っている最中、頭の中で鳴っていたのはそれらの曲だったという。

エドとノーマが遂に結ばれるシリーズ屈指の感動的なシーンで流れる「愛しすぎて」は67年、モンタレー・ポップ・フェスティバルでのライヴ・テイクだ。曲が始まる前のステージMCまで収録しており、ダイナーに向かうエドとステージに向かうミュージシャンの姿をダブらせている。

## 〈バダラメンティ×リンチのソート・ギャング〉

『The Return』の劇伴音楽を主に書いているのはやはりアンジェロ・バダラメンティだ。非リンチ作品だと今ひとつ力を発揮できないともい

**『ツイン・ピークス Limited Event Series』**
**オリジナル・サウンドトラック〈スコア〉**

作曲：アンジェロ・バダラメンティほか／解説：山崎智之／発売：ワーナーミュージック・ジャパン／価格：2,200円＋税

**収録曲：**

01. ツイン・ピークスのテーマ
02. アメリカン・ウーマン（デヴィッド・リンチ・リミックス）
03. ローラ・パーマーのテーマ（ツイン・ピークス 愛のテーマ）
04. アクシデント/フェアウェル・テーマ
05. グラディ・グルーヴ
06. ウィンドスウェプト（リプライズ）
07. ダーク・ムード・ウッズ/レッド・ルーム
08. チェアー
09. ディア・メドウ・シャッフル
10. 広島の犠牲者に捧げる哀歌
11. スロー・30's ルーム（MONO）
12. ファイアーマン
13. サタデー（インストゥルメンタル）
14. ヘッドレス・チキン
15. ナイト
16. ハートブレイキング
17. オードリーのダンス
18. ダーク・スペース・ロウ

われる彼ではあるが、『The Return』ではベストパートナーと久々に再合体して、新時代の『ツイン・ピークス』の音楽で魅了する。

『The Return』におけるバダラメンティの楽曲の白眉は、第11話のナイトクラブのシーンとエンディングで披露された「ハートブレイキング」だろう。物悲しくロマンチックなピアノ・インストゥルメンタル曲は、彼のイタリア系のルーツを感じさせる。リンチはバダラメンティに「イタリア料理店のシーンで使う曲」と指定して依頼したところ、バダラメンティは映像を観ることなくすぐに3曲を書いて送ってきたという。

そのひとつが「ハートブレイキング」だった。

ところで、劇中「ハートブレイキング」のピアノを弾いているのはバダラメンティではなく、『チキン・オブ・ザ・デッド 悪魔の毒々バリューセット』（08年）などに出演してきた俳優のスモーキー・マイルズだ。さらに、ブリッグス少佐の椅子に隠された秘密が明かされる「ザ・チェア」、少年が車で撥ねられるシーンの「アクシデント／フェアウェル・テーマ」、新キャラ（？）のテーマ曲「ザ・ファイアマン」、タイトル通り〝夜〟を描いた「ナイト」など、いずれもバダラメンティの真骨頂だ。映像なしでも音楽のみでじゅうにぶんに楽しめるが、リンチの映像美学を伴うことによって、さらに輝きを増している。

オールドファンには懐かしい、旧シリーズからの音楽も効果的に使われている。過去を思い出すシーンで「ツイン・ピークスのテーマ」「ローラ・パーマーのテーマ」を聴くことができた。

バダラメンティ作の「ディア・メドウ・シャッフル」は、『ローラ・パーマー最期の7日間』のために書かれた曲だ。映画のサントラ盤には収録されず、12年にリンチの公式サイトで〝ツイン・ピークス・アーカイヴズ〟のひとつとして公開された曲だが、『The Return』では第9話で使われた。

リンチとバダラメンティの双頭ユニットである〝ソート・ギャング〟は『最期の7日間』サウンドトラックに「ア・リアル・インディケイション」「ザ・ブラック・ドッグ・ランズ・アット・ナイト」を提供していたが、『The Return』では久々にこのユニットの名義が復活。「ヘッドレス・チキン」を提供している。この楽曲が他2曲と同様に90年代に書かれたのか、それとも新たに書いたのかは明らかになっていないものの、サウン

ドの感触が共通していることを考えると、この曲は当時のアウトテイクである可能性もある（アルバム1枚分のマテリアルがあるといわれるが、現時点では未発表）。

このソート・ギャングはふたりのユニットといっても、作曲を手がけているのは基本的にバダラメンティ単独だ（リンチは作詞とパーカッション担当）。にもかかわらず、バダラメンティのひとり名義での楽曲とは明らかに〝何か〟が異なっているのが興味深い。

### 〈デイヴィッド・リンチ〉

『イレイザーヘッド』のころからサウンドへの強いこだわりを持ってきたリンチだが、近年では『クレイジー・クラウン・タイム』（11年）、『ザ・ビッグ・ドリーム』（13年）など自分名義の音楽アルバムを発表。さらに自らがキュレーターを務めるイベント『フェスティバル・オブ・ディスラプション』も16年から開催されている。これまでロバート・プラントやセント・ヴィンセント、ボン・イヴェール、フライング・ロータス、アニマル・コレクティヴなど個性の際だったアーティストたちが出演、18年10月にL.A.で開催されるイベントにはマイク・パットンやディラン・カールソンが出演することが発表されている。

『The Return』でリンチは〝神回〟第8話に音楽スーパーヴァイザーのディーン・ハーリーとの共作で「スロー・30's・ルーム」を提供している。30年代のヴィンテージ・ジャズの短いパッセージを執拗に繰り返すパラノイアックな展開は鮮烈なインパクトを持っている。

リンチはまた、ナッシュヴィル出身のロック・バンド、マディ・マグノリアズが15年に発表した「アメリカン・ウーマン」の〝リミックス〟も行っている。あえて〝リミックス〟とカッコ付けするのは、通常のいわゆるリミックスと違って、オリジナルを思い切りスローダウンさせた内容だからだ。

音楽スーパーヴァイザーのディーン・ハーリー。トラブルのドラムも担当

そのようにリンチは、メロディやリズム、コーラスなどクラシック音楽やポピュラー音楽の約束事から逸脱した、いわば〝ノン・ミュージシャン〟であるが、その才能は『The Return』でも発揮されている。彼は〝サウンド・デザイン〟担当としてクレジットされ、随所で効果音ともアンビエント・ノイズともつかないサウンドを聴かせている。

## ボウイの思い出に捧げる——

残念ながらデイヴィッド・ボウイの『The Return』への参加は実現しなかった。

『ローラ・パーマー最期の7日間』でフィリップ・ジェフリーズ捜査官として出演したボウイはかなり早い段階から『The Return』に出てほしいというオファーをリンチから受けていた。だが、そのコンタクトはすべてボウイのマネージメントを通したもので、はっきりした返答はなかったという。リンチとボウイはお互いに尊敬し合う間柄ではあったものの、個人的な交友関係があったわけではなく、結局ジェフリーズはヤカンになって出演したが、オファーがあった時点でボウイは体調が思わしくなく、16年1月10日に亡くなっている。

# "TWIN PEAKS" SOUNDTRACK REVIEW #3

『ローラ・パーマー最期の7日間』でのボウイの映像が使い回された第14回のエンディングには〝デイヴィッド・ボウイの思い出に捧げる〟という献辞が記されている。

もしボウイが出演したら、『The Return』の物語は大幅に異なっていたに違いない。ジェフリーズはヤカンになることなく、物語を左右する動きのある役柄だったのだろう。ひょっとしたら、ジェフリーズが〝バン・バン・バー〟で歌うシーンなんていうのも実現したかも知れない（なお、リンチはボウイのなれの果てについて「あれはヤカンじゃない！ ああいう形をした機械なんだ」と、ヤカン説を否定している）。

ちなみに、ボウイの病状を知らなかったリンチは、返事がないのは、『ローラ・パーマー最期の7日間』でジェフリーズを演じるにあたってボウイがやったルイジアナ訛りめいた発音を恥じているからだと考えていた。事実ボウイはジェフリーズとしての自分のセリフを〝もっとちゃんとした人〟にオーヴァーダビングしてもらうよう依頼している。そのせいで、『The Return』では過去映像の使い回しを含め、ネイサン・フリゼルがジェフリーズの声を担当している。

リンチの音楽観の片鱗は、ロバート・プラントの映像作品『ライヴ・アット・デイヴィッド・リンチズ・フェスティヴァル・オブ・ディスラプション』（18年）に収められたリンチへのインタビューで窺い知ることができる。

プラントによる作品本編は16年の〝フェステイバル・オブ・ディスラプション〟で収録されたライヴだが、ブルーレイ&DVDの特典映像ではリンチが「ジャンルを分け隔てせずに聴く。ボビー・ヴィントンからショスタコーヴィチまで聴くよ」などとトークしていて興味深い。しかも、プラントの作品にもかかわらず、インタビューでまったく彼やレッド・ツェッペリンの話題に触れないというのも、なんだか面白い。

『The Return』はいわゆるMTVムービーとは一線を画している。ヒット曲満載のレコード会社のゴリ推しなどは皆無。いずれもリンチの耳のフィルターを経た上で選び抜かれている。いわば『ツイン・ピークス』という名のターンテーブルの上で、リンチがDJをしているのだ。

**『ツイン・ピークス Music from the Limited Event Series』オリジナル・サウンドトラック〈ロック／ポップ〉**

作曲：アンジェロ・バダラメンティほか／解説：山崎智之／発売：ワーナーミュージック・ジャパン／価格：2,200円＋税

**収録曲：**

01. ツイン・ピークスのテーマ（エディット）／アンジェロ・バダラメンティ
02. シャドウ／クロマティックス
03. ミシシッピ／ザ・カクタス・ブロッサムズ
04. ラーク／オ・ルヴォワール・シモーヌ
05. アイ・アム／ブランテッド・ビーツ
06. アイ・ラヴ・ハウ・ユー・ラヴ・ミー（MONO）／ザ・パリス・シスターズ
07. スネイク・アイズ／トラブル
08. タリファ（ロードハウス・ミックス）／シャロン・ヴァン・エッテン
09. シーズ・ゴーン・アウェイ／ナイン・インチ・ネイルズ
10. マイ・プレイヤー（MONO）／プラターズ
11. ノー・スターズ／レベッカ・デル・リオ
12. ラスベガス万才／ショーン・コルヴィン
13. ジャスト・ユー／ジェームズ・マーシャル
14. グリ-ン・オニオン（MONO）／ブッカー・T. &MG's
15. ワイルド・ウエスト（ロードハウス・ミックス）／リジー
16. シャープ・ドレスト・マン／ZZトップ
17. AXOLOTL（ロードハウス・ミックス）／ザ・ヴェイルズ
18. アウト・オブ・サンド／エディ・ヴェダー
19. 愛しすぎて（ライヴ）／オーティス・レディング
20. ザ・ワールド・スピンズ／ジュリー・クルーズ

「『ブルーベルベット』の25年後だと思え!」――by デイヴィッド・リンチ

# 『ツイン・ピークス:リミテッド・イベント・シリーズ』Blu-ray BOX 特典映像完全解説!

ついに日本でも『The Return』のBlu-ray &DVDが発売された! その特典映像に収録されている、なんと5時間51分にも及ぶ大長編メイキング・ドキュメンタリー『インプレッションズ:「ツイン・ピークス」舞台裏の旅』がもの凄い! まるで宇宙人がリンチを観察しているかのような、驚愕のロードムービーなのだ!

文◎多田遠志

『ツイン・ピークス:リミテッド・イベント・シリーズ』(17年米TV/発売・販売:NBCユニバーサル・エンターテイメントジャパン/7月4日発売/BD-BOX:19,800円+税、DVD-BOX:12,800円+税 

**「デイヴィッド・リンチ製作のプロモ映像」(約6分)**

リンチ自ら手がけた『The Return』のCM集。嫌が応にも期待が高まってくる作りだ。

**「ツイン・ピークス現象」(約14分)パート1:誕生/パート2:打ち切り/パート3:復活**

『LOST』(04〜10年)のデイモン・リンデロフ、作家のジョン・ソーンなどが『ツイン・ピークス』現象について語っていく『The Return』の宣伝ドキュメンタリー。J・J・エイブラムスが『LOST』は『ツイン・ピークス』を意識して作ったと発言するなど、後年のドラマに与えた影響も語られ、放送時間帯の変更やシーズン2以降の視聴率低下、湾岸戦争が打ち切りの要因になっていた、などの事情も明かされる。

熱狂的なマニアも続々登場する。ファンジン「Wrapped in Plastic」の編集人や、ドラマ内の曲をカバーし続けているバンド、世界観を再現したバーレスク・ショーの主催者など、『ツイン・ピークス』に人生を狂わされた人々が次々と登場する。ファンの二次創作も多数集められ、ネットがなかった時代のマニアの苦労や情熱を語っている。彼らが新シリーズ再始動を聞いたときの熱狂、新エピソード公開時の大行列などを

伝え、待望の伝説の作品が蘇るのだ、ということを存分にアピールしている。

### 「コミコン2017」プレゼンテーション（約61分）

2017年7月21日にファン7000人が集まった会場で開催されたトークショー。残念ながらフロストとリンチは欠席。しかし、リンチから来場者に向けて謎のメッセージ映像が届けられる。4階から飛び降りた男を止めようとしたり、死体の手が握ったO・J・シンプソンのゴルフボールを紹介したりとギャグ満載だが、馬が入ってきたりネコに引っかかれたりと大騒ぎしているうちに終わってしまう……。

壇上には、エヴェレット・マッギルやジェームズ・マーシャル、キミー・ロバートソンなどの旧メンバーから、ティム・ロス、ナオミ・ワッツ、ドン・マレー、マシュー・リラードなどの新メンバー、そしてもちろんカイル・マクラクランも登場。

各人がリンチにどのように召還されたのか？については、カイルは暗号のようなもので呼び出され「大事な話があるが電話では話せない」と伝えられたと証言。キミーは再始動の報を受けてベッドから転落。エヴェレットは消息がわからず、リンチたちにSNSで行方を探された……など、各人がシリーズに再会した驚きを語る。ワッツはローラ・ダーンとともにリンチ宅に押しかけ、何か新しい映画を撮ろうと常日ごろから話していたほど交流が深く、そんなワッツのリンチの物真似は必見だ。

役者陣に渡された各話の脚本は、自分とは関係のないシーンのセリフはまるで公文書のように塗りつぶされていたという。そのため自分の出番以外ではどんな物語が進行しているのかわからず、一般の視聴者と同じようにドキドキしながら放送を観ていたそうだ。まとめて録画してから観る、という役者たちがけっこう多かったのも驚きだ。リンチの性格を問われたゲストたちは、いっせいに彼のぶれなさ、ポジティブさを讃えている。

その後の観客からのQ&Aコーナーでは、コミコンならではの面白いコスプレ（クーパーのコスプレでダイアンに向かって質問するやつとか）も楽しめる。ネット社会ならではのネタバレ防止策といった制作の苦労話や、逆再生言葉の難しさなどが語られ、リラードにヘイスティングスのセリフを『スクービー・ドゥ』（02年）で彼が演じたシャギーの声で言わせたり、マニアックすぎる質問や雑な質問にも誠意を持って応えている。中でも見ものは『ツイン・ピークス』を観たことのない『デューン／砂の惑星』（84年）の熱狂的ファンへの対応だろうか。カイルの口から改めてリンチに見出された過程も語られ、ブラックロッジのシーンでは進化した腕がクーパーの目の前にあるとは知らずに演じていたことや、調子に乗ってアドリブをかましたジム・ベルーシへのリンチの強烈なひとことなど、数々の秘話が明かされている。

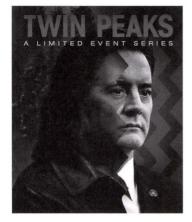
### 「とてもすてきな夢：『ツイン・ピークス』の1週間」（約27分）

キャストとクルーが25年ぶりにロケ現場であるシアトルのノースベンドを再訪したメイキング的な映像。25年が経ち、変貌したロケ地をリフォームしたり、セットを作ったりして再現し、当時とすべて同じ環境を作り出すことに成功している。撮影クルーには『ロスト・ハイウェイ』からのリンチ組が多いことも判明。リンチ自ら血糊をつけ「鮮度を保って！」と細かく指示。カイルの撮影初日、悪クーパー初登場シーンで48回リテイク。ドアの開閉音にもこだわる独特の演技指導も目にすることができる。

### リチャード・ベイマー（ベンジャミン・ホーン役）の作品集「赤いカーテンの裏側」「テラドゥンで腐った牛乳を」（約57分）

ベイマーはかつてリンチとともに、ヒンドゥーの導師マハリシ・ヨギの構築した超越瞑想と人生をリンチが観察する『リンチがたどるマスターの足跡…インド各地への旅』を撮っている（14年日本未公開）。ここに収録されているのは2作。まずは赤い部屋の撮影現場のドキュメンタリー。あの床を丹念にモップ掛けしているの

をモップアングルで撮影したり、ＰＣでＣＧＩを同時展開しながら演出を付けるリンチの演出も見ることができる。そして、赤い部屋といえばもちろん逆再生。今はアプリで録音すれば簡単に逆再生ができ、役者たちはスマホを片手にセリフを暗記している。ローラとクーパーのキスシーンの再現のためにYouTubeで元のシーンを観ながら「えーっと角度はこうで……」と演出している姿はおかしい。

「テラドゥンで腐った牛乳を」では、数秘術的に「7」という自分のラッキーナンバーにこだわるリンチや、ネクタイの締め方をカイルにアドバイスするオフショットも収録。撮影を控えた消防士や、リーランドのリラックスした表情も見える。フロストと語り合うカイルも映り、仲の良さそうなムードが出ている。ちなみに、「テラドゥン～」というタイトルはリンチのインドでの実体験。

### RANCHO ROSA LOGOS（約2分）

プロダクションの18パターンの全ロゴも収録されている。

### 製作の舞台裏：フォトギャラリー

撮影中の写真だが基本リンチ中心。

### インプレッションズ：『ツイン・ピークス』舞台裏の旅（約291分）

「逆立った白髪の男」「言って」「2つの青いボール」「ヒッチハイカーを拾うな」「沸騰する油の鍋」……各章のタイトルは、リンチの印象的な発言などからとっている。本作は『The Return』撮影の裏側に密着した、約6時間近くに及ぶドキュメンタリーだが、さながら「逆立った白髪の男」を追いかけるロードムービー的な作品だ。まるで宇宙人が奇妙な生物・リンチを観察しているような感覚にとらわれる。

リンチの演出は極めて独特で、リハーサル時に登場する役者ひとりひとりに「首を小動物のように伸ばして」などの細かいディテールをマンツーマンで演技指導する。細やかな心情やバックグラウンドまでを丹念に説明することによって、リンチ世界の住人として完成させている印象だ。リハで演技を付けるときも、リンチは怒っているシーンでは声を荒げ、悲しいときは目をうるませる。その人物と同化しているかのようだ。

幼児に向かっても「転がって赤ちゃんみたいに泣いてくれ！」（子どもは楽しそう）、「ロックコンサートみたいに泣き叫べ！」と優しいけれど有無を言わせない檄が飛ぶ。たとえ大物役者であっても、自分のビジョン実現への妥協はしない。助監督に任せても良さそうなＴＶニュースのシーンでも、納得いくまでテイクを重ねる。シェリリン・フェンの演出だけは指示を耳元で囁き、非常にボディタッチも多い。時を経て松坂慶子的な妖艶さが増したシェリリンとのイチャイチャ演出は、昔いろいろあっただけに観ていてドキドキする。クーパーとダイアンの再会シーンでは、「『ブルーベルベット』の25年後だと思え！」と自らリンチ作品を全集化させるような演出も記録されている。

### 激怒の直後、上機嫌に！

役者独自のキャラ作りやアイデアもある程度聞く態度は示すが、やはりリンチ、譲れない一線はガンとして変えない。いちど演技をさせてから、自分のビジョンやそのキャラが何を考えているのか、それをセリフにしてみるまでの間などを、こと細かく現場で修正していくリンチ。椅子に座ったままのディレクションではまったくない。アクション・シーンでも各キャラの位

置に自ら行き、どんな些細なキャラにも細かく指示を出す。詳細な部屋の見取り図を書いて説明し、時には道路においた箱やシャンプーのボトルを人に見立てるなど、とにかく熱のある演技指導をせわしなく続けている。このドキュメンタリーを観ていると、本編を観直してもメガホン越しのリンチの声が聞こえてきてしまいそうだ。

　現場での「こうしよう！」という即興アイデアも、すべては「よりよいリンチ世界の顕在化のため」である。基本的に現場では優しいリンチだが、用意したものが違ったり、ロケ地の砂漠の廃墟が自分の思った通りではなかったりすると、機嫌が悪くなる。

　グレート・ノーザン・ホテルの撮影日程が2日間しかないと知ったときは大激怒。しかし、部屋の出来映えを見たとたん上機嫌になったり、「これいいなぁ」とふと見た街並みの電線の張り巡らせ方に惹かれて一眼レフのシャッターを切りまくったり。PCを使いこなしているのに、携帯電話の通話終了ができなくてスタッフに切ってもらうなど、お茶目なリンチの姿も随所に見ることができる。

　全力投球のリハはもちろん、撮影の合間にはロケハンのセットチェック、特殊メイクの細かい色指定など、リンチのチェックを通過していない部分はないだろうと思わせるほど細かい。演出の手が空いたときは、なかなかスタッフにイメージが伝わらないオブジェの形を、自ら発泡スチロールを削って作り出していく！撮影していないときも「オブジェをもっとツルツルにしたいんだよな！」と言いながらなで回している。

　撮影がノレば徹夜もいとわないバイタリティあふれるリンチ。ボブの黒い沼の縁を染めるために「卵1ダースと粒コーンを買ってこい！」と言って食材を塗料として用い、見事にリンチ色に仕上げてみせる。そんなふうに、リンチにインスピレーションが降ってくる瞬間も見ることができる。死体発見シーンでも、ほとんど映らないであろう頭の下の枕についた毛やシミまで入念にチェックし、必要とあらばリンチ自ら手を入れる。血糊を塗る際のランダムなパターンも、彼にしかわからないこだわりに満ちている。

## 役者全員がリンチの分身！

　芸術家としてのいかにも「リンチらしい」表情もたびたび覗かせる。赤い部屋の撮影前、片腕の男がなぜ腕を失ったのかについてえんえん細かく聞き出し始めるリンチ。また真剣にスケジュールの擦り合わせをしている際にも、唐突にキング牧師の名演説「私には夢がある」誕生秘話を語り始める。直感とインスピレーションに魅せられてきたリンチらしい姿を随所に見ることができる。

「リンチは監督の前に芸術家だ。親しい友人であるいっぽう、ある一線があって、そこから先はリンチ以外誰にも行けない。そこはおそらくアーティストとしてのリンチだけの純粋な領域なのだろう」とカイルは語っている。カイルはリンチの分身的な存在だと長らく言われてきた。もちろんその通りなのだろうが、このドキュメンタリーを観ていると、役者全員がリンチの分身や別人格なのだと思えてくる。役者たちを慈しみながらも、自身の作品のためには道具として、駒として扱うことをいとわない。いっぽうの役者＝道具側も「彼のためなら何でもする」と口をそろえる。リンチの脳内では撮りたい画のビジョンが完全に細部まで完成されていて、現場ではそれをどう現出させようかと必死にもがいている。そのひたむきさが周囲の人たちのモチベーションにつながっていることが、強く伝わってくるのだ。現場にいる全員が、各自の努力でリンチを喜ばせるためなら何でもしようとしている。これは理想的なモノ創りの関係性であるといえるのではないか。

　さらには、撮影現場のスタッフ、キャスト全員を集めて、リンチ自身が「これで撮影終了だ！」と宣言する別れのシーンが感動的だ。彼のその呪文によって、役者たちは夢から醒め、呪縛から解放され、リンチの世界を彩る道具の任を降ろされる崇高な儀式のように思えてくるからである。

## 限界まで単純化され、あきれるほどに形態と機能が一致した

# リンチ・ガジェット

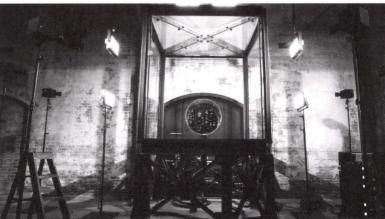
LYNCH GADGET

**インダストリアル感満点のコンセント、限界までシンプルなビデオカメラ、無音のカーテンレール、スーツケース内の怪しいマシン……大道具と小道具、衣装、美術とロケーションの混合体としてのリンチ・ガジェットを愛でる——。**

文◎高橋ヨシキ

### 『The Return』の「ガジェット」の最たるものは……

フィリップ・ジェフリーズ捜査官

『ツイン・ピークス The Return』第1話で最初に目を惹きつけるのは、ニューヨークの古びたビルの一室に設えられた、謎めいたガラスの大箱と、それを取り囲む機械やビデオカメラだろう。ビデオカメラのメモリカードを収納するためのボックスに至るまで、すべてが完全に統一されたあの部屋は、それ自体一種のインスタレーション・アートとして成立しており（ダミアン・ハースト、あるいはフランシス・ベーコンの影響については別項で述べたが、それを指摘することの無為さは常に意識しておきたい。たとえダミアン・ハーストの『A Thousand Years』が、ガラス箱内で繁殖するハエを、その閉じた世界のなかで電撃によって死に至らしめるものであったとしても）、同時に「確かに異次元から出現するなにものかを捉えようとしたら、このような構造物を作らなければならないのだろうな」と思わせる説得力にも満ちた不思議な空間となっていた。形態として限界まで単純化されたビデオカメラは、『ロスト・ハイウェイ』（97年）でミステリーマンが構えていたカメ

ビルの一室に設えられた、謎めいたガラスの大箱

「ヤカン」になってしまったフィリップ・ジェフリーズ捜査官

ラに引き続き、「形態そのものが限りなく機能と一致している」構造になっていて、にもかかわらずカメラを構成する黒いスチールの接合箇所などの微細なディテールによって一定のリアリティが担保されている。ちなみに、ビルの外観として用いられたのはニューヨークのアッパー・イーストサイドにあるハンター・カレッジ・ハイスクールで、ここはテリー・ギリアム監督『フィッシャーキング』(91年)のロケ地としても知られている。

デイヴィッド・リンチの映画に登場する「ガジェット」の範疇を、どこからどこまでに決めたら良いのか、というのはなかなかに悩ましい問題だ。大道具と小道具の違い、というものが時に曖昧なように、リンチ作品内で「ガジェット」と呼ぶべき対象はあまりにも多岐に渡る。というか、それはしばしば大道具と小道具、衣装、セット美術とロケーションの混合体であって(ここに俳優を加えることも可能だ)、ニューヨークのビルのあの部屋が、それ自体としてひとつの「ガジェット」を構成していたように、要素を抜き出した場合、それが全体に対する部分であり部品にすぎないために、独立したオブジェとして考察することは難しくなってしまう。

『The Return』の「ガジェット」の最たるものといえば、これはもう「フィリップ・ジェフリーズ捜査官」に尽きる……と言いたいところだが、その前にナイドと「アメリカン・ガール」にクーパーが出会った、パープルとピンクの混じり合ったあの部屋について——いや、その色彩はナイドが部屋の「外側」でナイフスイッチを切ったことで生気を失い、真っ黒になってしまうのだが——語る必要がある。それにしても、あの部屋の「外側」、ナイドとクーパーが梯子を登っていった先にあった、フィリップ・ジェフリーズにも似た、巨大な指ぬき型の構造物、あれはいったい誰だったのだろう?(第17話で、異界に突入したMr.Cが空中に「ロックされた」とき、「劇場」の向こうに同様の構造物が無限に並んでいたことを思い出していただきたい。あの中にチェット・デズモンド捜査官もいたのではないか、という考えが頭にこびりついて離れない……)

ナイドと「アメリカン・ガール」の部屋には、クーパーが「現代」に戻ってくるための「コンセント」が設置されていた——出たり消えたりしていたと言ったほうが正確だろうか?『The Return』について何かを語ろうとすると、すべて疑問形になってしまうので困ったものだが(同時に楽しくもあるが)、あの「コンセント=機械」の佇まいが持つ、『イレイザーヘッド』直

系のインダストリアル感は驚くべきものだった。「インダストリアル感」といっても、それは太い銅線が半田で接合されているような、ハンドメイド・エレクトロニクス＝メカニクス的な感覚で、それはそのまま『イレイザーヘッド』でジャック・フィスク演じる「惑星の男」がスパークさせながら押し倒したレバーだらけのマシンと結びつく。ナイドが「切った」ナイフスイッチは「惑星の男」が「入れた」スイッチと同じ回路に繋がっているに違いない。

「コンセント」のあった部屋は、無限に広がるパープルの海にそびえ立つ抽象的で巨大な構造物の一部だが（岩場に押し寄せる波からカメラが移動して、はるか崖の上にそびえ立つ「城」が映るさまは『デューン／砂の惑星』における惑星カラダンのそれを引き継いでいる）、ゆるやかな曲面で覆われ、上層部にドーム状の突起を持つあの塔が、建築家エーリッヒ・メンデルゾーンが手がけた「アインシュタイン塔」（ドイツ、ポツダム／１９２４年）を模しているのは間違いない。アインシュタインは無論、直接的に原子爆弾の開発にかかわっていたわけではないが、トリニティ実験で炸裂したキノコ雲の奥へ奥へとカメラが突き進み、次々と核分裂反応が起きている超微小の世界をくぐり抜けた先にあの塔が出現することを考えると、象徴的に「アインシュタイン塔」が出現するということには一貫性があるように思われる。

アインシュタイン塔

　なお第8話の「次々と核分裂反応が起きる」ビジュアルは、ＣＧとセル・アニメーションの違いこそあれ、１９５６年にＧＥ社がプロモーション用に製作した「核」啓蒙アニメーション『A is for Atom』の連鎖反応シーンの印象にきわめて良く似たものとなっている（『A is for Atom』はのちにモンテ・カザッツァ＆ザ・アトム・スマッシャーズのビデオ『Sex is No Emergency』に流用されたことでも知られているが、よりにもよって「アトム・スマッシャーズ」……核分裂はここでも止まらない）。「フィリップ・ジェフリーズ捜査官」については多くを語る必要はないだろう。『The Return』に「フィリップ・ジェフリーズ」が登場するやいなや、ネット上には「ジェフリーズ捜査官がヤカン（＝ティー・ケトル）になってしまった！」「なぜヤカンに！」という声が湧き上がった。これに対しては、あまりにもヤカンヤカン言われるのに業を煮やしたのかリンチ自身も「たしかにあのマシンにはティー・ケトルのような注ぎ口がついている。その注ぎ口部分は私が自分で彫刻したものだ（これは実際にBlu-rayのメイキング映像に収録されている）。しかし、ここまでヤカンヤカン言われるとわかっていたら、いっそあの注ぎ口をまっすぐにしておけばよかった。あれはマシンであってヤカンじゃないよ」とコメント。注ぎ口から湯気や数字やフクロウの洞窟の記号をポッポッと吐き出す「フィリップ・ジェフリーズ捜査官」は、都合の悪いことを聞かれると黙ってしまうところも含めて、『The Return』に登場する「ガジェット」の中でも特にキュートな1体（1人？）だったと言えるだろう。

## Mr.Cがらみの謎の「ガジェット」に注目

　リンチ作品の、といっておきながら、紙幅の都合で『The Return』の話ばかりになってしまい恐縮だが、Mr.Cがらみの謎の「ガジェット」はどれも注目に値する。中でもブエノスアイレスの「中継機」を通じてフィリップ・ジェフリーズと交信するときに使っていた、スーツケースに入った謎のマシンは、スーツケースの形状まで含め「シーズン2」でウィンダム・アールが「地

図」の解析に使っていたマシンと同一、あるいは同系列であることがわかっている。ウィンダム・アールとMr.Cはどちらもトランプのカードを小道具として使うところ、また赤い部屋に入ってから炎によって粛清＝浄化？されるところも含め共通点が多く、興味は尽きない。しかし、ブエノスアイレスに置いてあった「中継機」の抽象性の高さはどうだろう？黒い四角いボックスに赤いLEDがふたつ光っているだけなのに、見た瞬間に「これは何かしらのハブに違いない」と思えるのは、NYのビデオカメラと同様、形態が機能と一致しているからだろう。Mr.Cがスーツケース機械と携帯電話を接続するのに使っていた、謎めいた黒いボックスも同様である。

「形態と機能が一致している」といえば、今回ゴードンらFBIが、仮のオフィスとしたホテルの一室に設置されたマシン類の画面や携帯電話、バックホーン警察のPCの指紋照合インターフェイスなどといった、いわゆる「映画内モニタ」のデザインが、すべて呆れるほどシンプルだったのにも注目したい。それが「(観客や作り手の想定内の範囲で)リアル」であることよりも、「その画面の果たす機能は何なのか」という部分を重視した結果、ほとんど抽象的なまでに単純な表現になったものだ。

『The Return』だけに絞っても、レディメイドのガジェットにも目を向けると大変なことになるので――特にミッド・センチュリーの家具をこれでもかと投入した家具や照明器具など――ああ、それに「ラッキー・セブン・インシュアランス」のビルの前に立つカウボーイの彫刻の話も、窓が不可解に消えるFBIのプライベート・ジェットの話もしていなかった……「クソをかき出して脱出するための」Dr.アンプの黄金のシャベルのことも(Dr.アンプのトレイラー・ハウスがこれまたガジェットの宝庫なのだ)、ネイディーンがついに商品化に成功した無音のカーテンレールについても、はたまたエドワード・ホッパーの絵画『夜のオフィス』を完全に再現したラジオ局のあれこれについても、ダイアンとクーパーが「越境する」ハイウェイの横に立ち並ぶ記号的な鉄塔についてもまだまだ語り足りないし、ひとつひとつ見ていったら1冊の本が書けるのではないかと思うほどだが、最後に『ツイン・ピークス』全体を通じての、筆者のお気に入りのガジェットを挙げるとすれば、それは『ローラ・パーマー最期の7日間』でサム・スタンレー検視官(キーファー・サザーランド)が後生大事に抱えて持っていた、緑色の不思議な機械ということになる。大きなハンドルのついた、やや時代がかかったマシン――それこそ外観や塗装は1950年代の機械を思わせる――は、顕微鏡の機能がある、ということ以外すべてが謎に包まれていて(カット・シーンでサムはクーパーに対して「この機械で〈ホイットマン事件〉を解決したんですよ！」と胸を張っていたが、何がどうなったのかはいっさいわからない)、それでいてたしかに何やら底知れない機能をいくつも備えていそうなところ、いかにも実用性がありそうに見えるところも含め、リンチ印のミステリアス・マシンの真骨頂ではないかと思うのである。

サム・スタンレー検視官が持つ緑色の不思議な機械

リンチ DEEP ガジェット&美術論 PART Ⅱ

点滅する照明、ジージーと鳴る通電音、
コンセントのクローズ・アップ……
現実を浸食する異次元からの媒介は、
いつもジリジリと明滅する不気味な閃光とともに現れる——

# リンチはなぜ電気にこだわるのか?

文◎本田敬

映画監督は自作に共通して登場させる独自のモチーフを持っている。成瀬巳喜男はチンドン屋と子ども。ジョン・ウーなら白いハト。サム・ライミはクルマのデルタ88。想田和弘はネコという具合に。そして、リンチは煙、炎、工場、タバコ、電気などがそれに当たる。中でもリンチが電気を登場させる場合、それがストーリーに大きくかかわってくることが多い。点滅する照明、ジージーと鳴る通電音、コンセントのクローズ・アップ。電気によって導かれ、もうひとつの世界へとつながるきっかけとなるのだ。

**『マルホランド・ドライブ』(01年)**
撮影はハリウッドサインが間近に見えるビーチウッド・キャニオンにあるサンセット・ランチで行われた。カウボーイがアダムに言う「うまくやれば1回、しくじれば2回、私と会うことになる」の名セリフはこのシーン。

**『イレイザーヘッド』(76年)**
婚約者メアリー・エックスのママから唐突にキスされた後、例の赤ん坊の存在を知らされるシーン。白熱灯と蛍光灯が融合したようなデザインは、映画用ではなく実際に商品化されており、映画に登場するのは1941年製とのことだ。

**『インランド・エンパイア』(06年)**
9人の女性が突然「ロコモーション」の曲に乗ってダンスを始める。映画内映画『暗い明日の空の上で』に登場する娼婦たちという設定。唯一のハッピーで派手なシーンと言える。他にもポーランド映画『47』など、五重の構造の難解さを誇る。

**『ブルーベルベット』(86年)**
ジェフリーが害虫駆除業者に扮装し、初めてドロシーのディープリバー・アパートを訪れるシーン。隙を見たジェフリーはアパートの鍵を盗み出すことに成功し、デニス・ホッパー扮するフランクとの異常な性交シーン目撃へとつながっていく。

**『ツイン・ピークス The Return』転送**
3話目に登場する転送装置。基盤などの中心に大きなコンセントの穴が空いているような構造。最初クーパーは【11】と書かれた装置を使おうとするが、ナイドに止められ【3】を使うことに。この数字は単位か、はたまた多元宇宙の順番なのか?

**『ワイルド・アット・ハート』(90年)**
ランプが印象深く軒先に灯るモーテルの中庭のシーンでは、ロケット学者を名乗るジャック・ナンスが、映画自体のモチーフとなっている「オズの魔法使い」について語ったり、謎の男ペルー(ウィレム・デフォー)と出会ったりと見どころたっぷり。

今回、リンチ作品のなかでも、数あるこだわりのなかから「電気」について書こうと思ったのには理由があった。これまでの作品に比べて「電気」に関する考え方が、大きく変わり、強く意味を持っているように感じたからだった。長編のデビュー作『イレイザーヘッド』では、ジャック・ナンス扮するヘンリーがメアリー・エックスの産み落としたモノの存在を知るとき、リビングの不思議な電気スタンドが激しく明滅して破裂する。終盤、胎児が次の段階へと変態するときにも、コンセントは火を噴く。『ブルーベルベット』ではイザベラ・ロッセリーニ扮するドロシーのアパートに、ジェフリー役のカイル・マクラクランが忍び込もうとしたとき、ロビーにある「ELEVATOR」の案内板は電子音とともに不安定に点滅し、エレベーター自体も故障している。『ワイルド・アット・ハート』では、セイラーとルーラが立ち寄った町ビッグ・ツナで、モーテルの軒先に下がった色とりどりの電球が、ベッド上のふたりとオーバーラップする。『マルホランド・ドライブ』では映画監督のアダムがカウボーイと遭遇する牧場の入り口で、動物の頭がい骨の下で電子音とともに激しく電灯が点滅する。『インランド・エンパイア』は、光に包まれた忘れがたい「The Locomotion」のダンス。このほかにも電気をめぐる印象的なシーンは数多く存在する。そして、電気にまつわるシーンの後には、必ずストーリーが大きく動き始める。

## 変圧器と核実験

もちろん、ほかの著名な映画監督たちの作品にも、電気が登場する印象的なシーンは多く存在する。最近でいえば、新鋭デヴィッド・F・サンドバーグ監督の『ライト／オフ』

**巨人の役割**
巨人＝ファイヤーマンが住む絶海の孤島にそびえる奇妙な家。地球上のあらゆる場所をリサーチするためアンテナを張り巡らせ、悪の種子が生まれる瞬間を察知する防衛施設のようだ。警報が鳴っている。後ろはセニョリータ・ディド。

**コンセントからの転送**
【3】の装置を経由して無事にダギーの愛人との逢瀬の現場に転送されるクーパー。コンセントから閃光とともに黒い煙が沸きだし、筒状の物体にまとわりながら空間へと吐き出されるという表現。

**変電器とモニター**
階段を上がった先にはモニタ付きの捜索システム。核実験から爆心地にある想像上のコンビニ。そして、ボブ誕生の瞬間までの映像を巨人がチェック。この後巨人のアタマからローラ玉が出現、ボブを追うために地球上に投下される。

**クーパーからダギーへ**
丸まった筒が開かれるようにしてダギーの姿になっていく。リンチにしてはかなりわかりやすい特撮シーン。頭上にあるのは、代わりにブラックロッジに放り込まれたダギーの吐瀉物。今回のシーズンはおう吐シーンが多い。

**巨人の屋敷**
見方によっては原子力発電所のような、スチームパンク的な佇まいの建物。ボブ、あるいは悪が発生するたびにローラ玉をサプライしている、ということか。

**トリニティ実験**
8話に登場する1945年に行われた人類初の核実験「トリニティ実験」のリンチによる再現映像。この激しい衝撃と高温の渦の中から、ボブが誕生したというイメージの定着が今後は為されるのか？ そんな直接的でシンプルなものではなさそうだが。

（16年）。電気を消すと不気味な影が浮かび上がるギミックに唸った。フランク・ダラボンは『グリーンマイル』（99年）で凄まじい電気椅子のシーンを撮り上げた。デイヴィッド・フィンチャーは『ベンジャミン・バトン 数奇な人生』（08年）で7回雷に撃たれた男、という奇妙なキャラを登場させている。ウォシャウスキー兄弟（当時）は「マトリックス」3部作（99年）で、電話回線の中を動き回り、最終的には電気エネルギーの流れを肌で感じ取って操る救世主へとネオを成長させている。ジェームズ・キャメロンの『ターミネーター』（84年）はT－800登場のシーンで激しい放電と丸くくりぬかれた空間を鮮やかに演出してみせた。ロバート・ゼメキスは『バック・トゥ・ザ・フューチャー』（85年）で冒頭の巨大なスピーカー、そしてデロリアンと1・21ジゴワットの給電を巡るやりとりで観客を興奮の渦に巻き込んだ。他にもサム・ライミは『XYZマーダース』（85年）、ウェス・クレイヴンは『ショッカー』（89年）、レニー・ハーリンは『プリズン』（87年）で、それぞれ電気を媒介にした特異なヒーローたちを生んでいる。そのどれもが素晴らしいのだが、残念ながらリンチほどのバラエティに富んだ表現で電気を描いた監督は見当たらない。

『ツイン・ピークス The Return』にも、多くの電気にまつわるシーンがある。前半のヤマ場ともいえる3話、裕木奈江演じるナイドに導かれ、クーパーが宇宙空間にある巨人の家の【3】と書かれた電子装置によって、現世空間のコンセントを通して転送されるシーン。また、神回と言われている第8話。巨人と謎の女セニョリータ・ディドが住む漆黒の海の孤島にそびえる流線型の建物。テスラ・コイルを思わせる変圧器のような機械と、核

**電子の動き**
核実験のキノコ雲の中で激しく核分裂を起こし、運動する中性子や電子のイメージ。日本を代表する芸術家・杉本博司氏が手がけるシリーズ「放電場」、あるいはテレンス・マリックによる『ボヤージュ・オブ・タイム』（16年）を思わせるような映像

**「知らないほうがいい」**
悪魔のマークの正体をホークに聞いたトルーマンだが「知らないほうがいい」と暗に断られこの表情。その場にログレディから電話がかかってくるが、ホークは彼女にも「言えないんだ」と断る。ブルー・パインの山には、何がいるのか？

**悪魔のマーク**
11話でホークとトルーマンが地図を広げて聖地ブルー・パイン・マウンテンの場所を確認中。山の上のほうには角の生えた黒い悪魔のようなマークが。これは8話でボブ玉を口から吐き出したものか？

**ウッズマンの案内**
15話。「火はあるか」の決めゼリフでシリーズ屈指の人気キャラを予感させるウッズマン。激しい閃光とともに、彼の案内によって奥の空間にあるフィリップ・ジェフリーズが封じ込められた釣り鐘型変電器と対面する。

**たき火とは何か**
火のマークはホーク曰く「炎の象徴。今でいう電気のようなものだ」。周囲を明るくし温かくする、昔は電気と同じ役割だった。肥沃さを表すトウモロコシは黒く腐敗している。それと電気の象徴であるたき火が合わさることによって黒い火となる、とホークは語る。

**電話器で転送**
フィリップの投げかけた謎「ジュディ」を問いただすも、鳴り響く電話を通して屋外に閉め出されてしまったMr.C。これまでも電話を使った移動のイメージは多く使ってきたが、このケースはかなりわかりやすくなっている。

実験による黒い種子状の「ボブ誕生」のイメージ。放射能の恐怖を想起させ、前述の建物はそれを制御するための原子力発電所のようにも見える。他にも15話ではコンセントで感電し、意識不明となったダギーが、次の16話でクーパー捜査官として覚醒・復活したり、オードリーのドラ息子リチャードがMr.Cの罠によって岩上で電撃によって消滅する。最終話でのクーパーとダイアンは430マイル地点の土地で張り巡らされた送電線に立ちすくみ、リチャードとリンダという存在へと変貌する。

## 催眠術にかかったみたいだ

リンチはなぜ、これほどまでに電気にこだわるのか？ クリス・ロドリー著『デイヴィッド・リンチ』のインタビューでは「プラグやコンセントはどうしてああいう形になったんだろう？ 電球だってそうだ。（中略）送電線の下のハイウェイを走る車に乗り、真剣に意識を集中すれば電子がぶつかってくるのがわかる」と語っている。

　また、自身の創作に関するエッセイ『大きな魚をつかまえよう』では「炎を前にして座っていると、催眠術にかかったみたい。神秘的だ。電流が流れるのを見ても同じように感じる。煙や電灯の瞬きにも」と語っている。06年にアメリカで行われた『インランド・エンパイア』のプレミアで、観客から電気に夢中な理由を問われると「美しい音、眩しい光、どこにでも通っている。美しく時には危険。マジックがあり力強い。綺麗なイメージと音ですべての物は電気で動くから」と答えている。

　リンチが普段から電気機器のフォルムに思いをはせ、電子の流れを感じ取り、神秘性を追求している日常を送っていることがよくわかる。そんな電気への異常な愛情と強烈なこだわりに貫かれたリンチ作品、電気のシーンに注目してもう一度見直してみるのも面白いかもしれない。

**電気とタイムスリップ**
電気ショックによって再生したクーパーは、片腕の男とともに再びジェフリーズのもとに赴く。2人の男、そして電気の力によって25年前にタイムスリップしたクーパーは、大きな決意とともに行動する。

**感電するダギー**
自宅でケーキを食べるダギーは、たまたま点けたTVでやっていた『サンセット大通り』に登場したゴードン・コールの名前を聞いて激しく動揺する。そのとき、電気の音がしていることに気付き、その発生源である壁のコンセントにフォークを突っ込み、激しく感電して意識不明となる。

**送電線の向こう側**
最終話。クーパーとダイアンは送電線を通過し次のステージに向かう。激しく身体を重ねたとき、プラターズの「My Prayer」がかかる。8話でウッズマンがラジオ局を襲撃したときの曲。このふたつのシーンを重ねると、奇妙な符合が浮かぶそうだ。興味のある方はサイトで検索してほしい。

**電撃に焼かれるリチャード**
16話。Mr.Cの車に乗せられ向かった先は平原に横たわる大きな岩。何か都合のいいようなことを言われ、その岩に上がった瞬間、凄まじい閃光と煙に包まれたリチャードの肉体は電気によって跡形もなく蒸発する。

のキャラクターだろう。美人女優ケリー・チャンがオロナミンCの大村崑のような黒縁メガネをかけ、パワーストーンの店を営むオカルト好きの女性を素っ頓狂に怪演。「美人に変なことをさせる」演出もまた、リンチっぽいと言えなくもない。

その後いろいろあって、ホーは若夫婦の家に立て籠った女子高生の恨みを晴らし、成仏させる。そのクライマックスで、いきなり部屋の天井が波打つ海面と化し（少女がその身を没した場所である）、光の明滅とともに冥界の入り口へと繋がるくだりは、保安官事務所の留置場に土砂降りの雨が降り注ぐ『ツイン・ピークス』シーズン2の第16章、リーランドの最期が思わずフラッシュバックする。いずれにせよ、リー・チーガイに「その血」が流れていることは疑いようがない。マコ捜査官の目に狂いはなかった。

ちなみに、『迷離夜』は残りの2話も面白い。頼れる上司から変態殺人鬼まで幅広く演じる「香港のキラー・ボブ」こと名優サイモン・ヤムが監督・主演した第1話「贓物」は、職を失って社会保障も受けられない中年男（ヤム）が〝遺骨誘拐〟を思いつき、当然のごとく怪奇現象に見舞われるという物語。脚本は原作者リリアン・リー自ら書き下ろし、香港の住宅事情や不景気といった社会問題を黒い笑いで煮詰めている。フルーツ・チャン監督による第3話「驚蟄」は、香港名物の路上占いを生業にする老女を主人公にした怪異譚。すでに『美しい夜、残酷な朝』（04年）でホラー短編競作は経験済みのチャン監督らしい、毒の効いた演出と見せ場作りの巧さが際立つエピソードだ。

エピソードタイトル「放手」のニュアンスは英語で言うなら「Let it go」。迷える幽霊女子に訪れる救済は『ローラ・パーマー最期の7日間』ラストの泣き笑いにも似て、なんとも切ない

フルーツ・チャンが『ツイン・ピークス』的ストーリーテリングを導入した異色の傑作といえば『ミッドナイト・アフター』（14年）である。深夜に繁華街を出発したミニバスが山向こうの新興住宅地を目指してトンネルを抜けると、香港中から人間の姿がキレイさっぱり消えていた……という大風呂敷にもほどがある導入部から始まり、バスに乗り合わせた老若男女の五里霧中的サバイバル劇を展開させつつ、どんどん謎が増えていく。現在の香港市民の不安を具現化したかのような「謎の監視者」の存在や、突如降り出す「赤い雨」といった隠喩的描写をちりばめ、いよいよクライマックスに突入したと思ったら「第2部に続く！」とばかりにブッツリ終わってしまう驚愕のラストまで、謎そのものを面白さに転化させる大胆な作品だった。よほど胆の据わった監督でなければ作れないシロモノだが、その作劇スタイルが『ツイン・ピークス』の影響下にないとは言わせない。本当は第2部も続けて作りたかったそうだが「諸般の事情で」断念。いまのところ未完のカルトムービーと化しているが、それこそ25年かかってもいいから続編を作ってほしいものである。

『ミッドナイト・アフター』（14年）松竹より
Blu-ray、DVD発売中

香港にローラ・パーマー再臨!? 『ツイン・ピークス』の遺伝子発見！

# 非業の死を遂げた幽霊少女ホラー『迷離夜』の異界

文◎岡本敦史

「その部屋も赤く、死んだ少女は濡れていた」

――失踪した捜査官マコ・タキモトが残したメッセージと、1枚のDVD。そこには『迷離夜』というタイトルが記されていた。『ツイン・ピークス』の中国語タイトルは『雙峰』または『迷離劫』。何かあるとしか思えない奇妙な符号である。どこまでも続く五里霧中の果てにぼうっと姿を現す恐怖の真実……共通するのは、そんなニュアンスだろうか。

2013年公開の香港映画『迷離夜』は、『ルージュ』（88年）、『さらば、わが愛／覇王別姫』（93年）の原作者として知られる女性作家リリアン・リー（李碧華）の短編小説を映像化した、3話構成のオムニバス・ホラーである。その第2話「放手」に、どうやら謎の答えがあるらしい。監督・脚本は『不夜城』（98年）のリー・チーガイ。なんでもありの香港映画人とはいえ、ホラーを撮るというイメージはない。

『迷離夜』香港版ポスター。姉妹編に『奇幻夜』がある

レオン・カーファイ演じる主人公のホーは、雑居ビルに小さな店を構える占い師。彼には幽霊の姿が見えるという特殊能力があった。しかし、その力のせいで妻とは別居、復縁の条件として霊能力を使う仕事からは今後いっさい足を洗うべし、と言い渡されている。

そんなわけで開巻早々、最後の仕事に臨んだホーのもとに、怪現象に悩まされる若夫婦がやってくる。そのとき、ホーの〝魔眼〟は彼らに取り憑く亡霊の姿を捉えてしまった。それは水中で非業の死を遂げた女子高生のさまよえる魂……すわ、ローラ・パーマーの再臨か!?

なんだそれだけか、と言うなかれ。幽霊女子が出現するホーの占い部屋の内装が、すでにしておかしいのである。ギザギザ模様の床、赤いカーテン、古風な占い道具と不釣り合いな銀のライトスタンド……。香港の土地の狭さを反映して、本家に比べると5分の1ほどしかない小規模ぶりだが、これは紛れもなく「赤い部屋」だ。

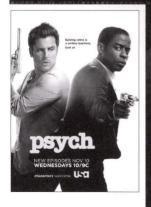
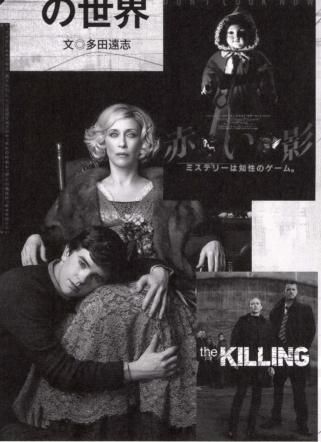
こちらのローラは、もとい幽霊女子のシウティンは、死してなお制服姿で溌剌と生命感を振りまき、自分が死んだことにも気づかない風である（たまに血の涙をドバドバ流したりもするけど）。演じるのはダンス映画の傑作『狂舞派』（13年）で颯爽とデビューした健康優良少女チェリー・ガン。この配役からもわかるとおり、本作には高温多湿の香港型陰鬱ホラーの定石を踏まない「外し」と「軽み」が随所に効いている。90年代に『月夜の願い／新難兄難弟』（93年）や『世界の涯てに』（96年）といった作品で、ピーター・チャンらとともに香港映画界に洗練と洒脱を持ち込んだリー・チーガイ監督らしい演出である。

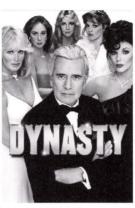
そのオフビート演出を最も体現しているのが、ホーの商売仲間で〝相棒〟となるヒロイン、ラン

この床、このカーテン（真っ赤です）を見よ! 主人公の占い師は顧客にヒーリングCDをプレゼントする「CD大師」という設定。背後にあるCDプレイヤーは『The Return』の蓄音機の先取り?

これがなけりゃ、「究極読本」は終われない！
映画、小説、漫画、ゲーム……実はもっとも『TP』の
影響を受けたのは、日本のドラマだ！

# 増殖するエクストリーム・ソープオペラの遺伝子たち！
# パチもん『ツイン・ピークス』の世界

文◎多田遠志

## 『TP』影響下のTVドラマ

90年代、謎だらけのサスペンスといったものはみんな『ツイン・ピークス』（以下、『TP』）の影響下にあると断言していいだろう。謎が謎を呼ぶ、とか奇妙な人間の複雑な関係性とか。

オリジナル版『ダイナスティー』（81年／右）とリメイク版『ダイナスティ』（17年〜）

当時のTVドラマのエクストリーム化のもうひとつの要因、『TP』と並ぶドラマが、今また少しずつ脚光を浴びようとしている。それは『ダイナスティー』（81年〜89年）だ。今Netflixで同名のリメイク版（17年〜）が配信されている。複雑なドロドロの人間関係、挿入されるメロドラマなどは王道のソープオペラだが、大富豪ゆえのスケールの大きい奇想天外なドラマが展開された。石油王に嫁いだ女性を主人公に、元彼の石油掘削技師と大富豪の間の三角関係をメインにしたが視聴率的に苦戦。彼女と石油王の前妻とのいがみ合いを主軸にシフトチェンジしたら人気爆発。これは、日本の昼ドラが姑の嫁いびりを描くのと同じ傾向だろうか？

NHKでの日本放送版は憎しみがとうとうヒートアップした2人が燃えさかる屋敷の中でくんずほぐれつ争っているところでブッと「今回で『ダイナスティー』の放送を終了させていただきます……」とあっさりと終わってしまった。「来週『ダイナスティー』のファミリーが宇宙にいても何ら不思議はない」とまで言われるほど何やらすごい幕切れのオチだった、と言われているのだが……。観るまでは死ねない1本である。

『ダイナスティー』などのエクストリーム化したソープオペラの流れの源泉には『TP』がある。ならば同様に復活してほしいものだ。リメイク版でなく、オリジナル版をやってほしい。最後まで。

「『TP』みたいなドラマがもっと観たい！」というのは、90年代の日本のユーザーの強い欲求であった。『TP』と同時期の海外ドラマで外せないのは、当時日本に入った数少ない海外ドラマの1本『キングダム』（94年）である。ラース・フォン・トリアーの手によるミニシリーズで、「キングダム」と呼ばれるデンマークの国立病院内の脳神経外科病棟を舞台に奇妙な人間ドラマが展開される。日本でも2匹目のドジョウを期待され、ヨーロッパ版『ツイン・ピーク

日本では第1,2話が劇場公開された『キングダム』

ス』の触れ込みで売り出された。癌を自らの体に移植する医者、健康体なのにたびたび病院に侵入して降霊術を試みる老婆、病院内で拳銃をブッ放しネズミを殺そうとする看護婦、女医に死体の首をプレゼントしようとする医学生と、奇人だらけ。まず、病院の創設者役でウド・キアーが登場する時点ですでに普通のドラマになるわけはない。全編セピア色で描かれているのが印象的だ。デンマーク本国での視聴率は50%以上というお化け番組だった。それなのに、病院に謎の組織が査察に入るという風雲急を告げる展開で、めちゃくちゃ気になるところでブッッと終了してしまう。主演のヘルマー医師役エルンスト・フーゴ・イエアゴーが死去したため未完に終わってしまったのだ。ウド・キアーに似た巨大な赤ん坊が生まれて急速に成長するあたりで終わりとは、ある意味『ダイナスティー』よりも気になる。日本ではこのときすでに、バダラメンティの音楽とシュールな台詞満載の『TP』の元ネタともいうべき映画『タフガイは踊らない』(87年)などがリリースされていたものの、あまりプッシュされなかったというのは非常に残念なことである。

『タフガイは踊らない』の米版ポスター

## 『TP』の影響が強い日本のドラマ

しかし、実はもっとも『TP』の影響を受けているのは日本のドラマだったりするのである。日本のドラマ枠は今でも臆面もなくハリウッド映画をトレース、ゴールデンタイムのドラマは『ER』や『キューティ・ブロンド』など、ハリウッド企画をパクり放題である。その流れに大きな影響を与えた端緒は、間違いなく『TP』のブレイクが原因なのだ。

当時は『東京ラブストーリー』(91年)など、いわゆるトレンディドラマが隆盛し、旬の男優女優を起用し流行や恋愛を語る内容がメインだった。そろそろそれとは異なる違う風味がほしい、その流れに『TP』ブームは好機だった。

吉田栄作演じる野心家の青年を主人公に、ドロドロの愛憎関係を描いた『ダイナスティ』風ドラマ『もう誰も愛さない』(91年)でジャンル化した一連のジェットコースタードラマの第2弾が『あなただけ見えない』(92年)。女子大生と謎の青年の出会いから始まる物語は、財閥の相続権を巡り、企業の陰謀やロシアの催眠術や異常な人間たちによる複雑な関係が絡み合う。小泉今日子や三上博史、本木雅弘などの大人気スターを起用、各話のタイトルは「好き」「会いたい」など既存の恋愛ドラマのようだが、その中身は精神崩壊した弁護士がヒヒヒと笑いながら瓶に入ったウジ虫を愛でたり、『赤い影』(73年)のように昼夜問わず歯列矯正した幼女が三輪車に乗って現れたり、『レイジング・ケイン』的な多重人格ネタから、財閥の奥に隠された『悪魔のいけにえ』的な秘密まで、オマージュというよりも視聴者に衝撃を与えるためだけのショック描写がゴールデンタイムにぶちまけられた。

しかし、リンチ世界のような芳醇で深みのあるムードを日本の放送コードや予算や進行内で実現するのはなかなかに難しいこと(というか無理)だった。日本のドラマは1クール12~13回とほぼ相場は決まっており、予算も限られているしキャラも少ない。また恋愛ドラマ枠という基本フォーマットは崩せない。いきおい登場人物がすごい勢いで不幸になったり復讐したり、唐突に奇行に走ったり死んだりする。主要キャラまでもが霊に憑依されて殺

人鬼になったり、ゴミ捨て場でバラバラ死体で発見されたり、証拠隠滅のためにロボトミー化されたり……となかなか雑で面白い作品になった。謎をそのまま匂わせておくことができずに無理矢理な解決を迎えてしまうのも、日本ならではの生真面目さかもしれない。

　その後も日本では『ケイゾク』(99年)、『トリック』(00年)などの超能力系、幻覚系のドラマが好評を博していた時期があった。そのなかでも『TP』を意識した作りになっていたのが『熱海の捜査官』(10年)である。南熱海市で3年前に発生した女性高校生失踪事件の謎が主軸となっており、オダギリジョーと栗山千明が捜査官コンビで登場する。オダギリ演じる星崎剣三の造形は、第6感に基づく捜査、非科学的なアイテムを活用する捜査方法など相当にクーパー。登場人物のオムライスなど特定のメニューへの異常なこだわりとか(星崎はクーパーとは逆にコーヒーが飲めない)、奇人だらけの複雑な人間関係が展開される。まるで赤い部屋のような「向こう側」という異世界の存在もたびたび示唆され、そこが謎の重要なファクター、鍵になる……。いつも飴をナメている老女「チュッパチャップスさん」が、脚本・演出の三木聡が監督した映画『図鑑に載ってない虫』(07年)にも出ていることや、多くの謎が未解決なのも含め、置きに行くインスパイア作品の多いなか、直球に『TP』ごっこをしている作品だ。

『熱海の捜査官』Blu-ray BOX

　浅野温子主演の『沙粧妙子最後の事件』(95年)も人間が根源から持つ「悪意」をベースにしている。オカルト的な道具立てや主人公が精神不安定で薬が手放せず、たびたびヴィジョンや幻覚を見るキャラクターで、最初の犠牲者が口にバラを詰め込まれて白いシーツでぐるぐる巻きと、まんま『TP』の影響が随所に見られる。和製ドラマには『TP』はすっかりひとつの要素として取り込まれているようだ

## 『TP』風味の海外ドラマ、ア・ラ・カルト

　近年では海外でも『TP』的なドラマは作られている。デンマーク製作のドラマ『The Killing／キリング』(07年)は、コペンハーゲンでの少女殺害事件を女性刑事が捜査するが、コンセプトとして1日＝1話で、20日間の物語という構成になっている。舞台となる街や事件が変わっても話は続き、シーズン4まで作られた。アメリカでも同じコンセプトのリメイク作『The Killing～闇に眠る美少女』(11年)が製作されたが、こちらはより『TP』寄り。

オリジナル・デンマーク製の『The Killing／キリング』

　『ベイツ・モーテル』(13年)は舞台は現代だが『サイコ』の前日譚的なノーマンベイツ誕生物語。彼の変容ぶりも見ものだが、母ノーマと営むモーテルを取りまく環境も、皆秘密を抱えた住民、街も主力産業が麻薬だったり人身売買が横行していたりと映画では描かれなかった周囲の環境が異常そのもの。絶えず母子に降りかかってくるトラブルは相当に『TP』風味。

　また、超能力者のふりをした青年が活躍する『サイク／名探偵はサイキック?』(06年)

も、超能力者と思われ続けるためにわざと奇矯な行動を取るさまが、ことごとくクーパー的であったりする。ドラマ界には完全に『TP』フォーマットが定着している感がある。アニメ世界にも『シンプソンズ』から『怪奇ゾーン グラビティフォールズ』(12年)などまで、『TP』のパロやインスパイアは蔓延している。『TP』のような変なドラマが観たい、謎や奇妙な世界観に酔い痴れたいというユーザーの欲は常に存在しているのだ。

『誰がペギー・スーを殺したか』

## 国内外のミステリー小説

『TP』から影響を受けたミステリー小説も多数存在している。海外だとアイリーン・グージの『誰がペギー・スーを殺したか』(91年)が印象的だ。カリフォルニアの桃花祭コンテストのクイーン、通称プリティ・ペギー・スーは誰になるのか？ 美のレイシー、知のレイヴン、好感度のキキ、才能のエイプリル。そのなかのひとりが殺害されるが、果たして候補者4人の誰が殺されてしまったのか。少年たちや秘密を握る大人たちなど、狭い世界で展開される濃密な物語はかなり『TP』的である。青春小説の要素も強く、誰が殺したのか？ だけでなく「誰が殺されたのか？」も物語の根幹を担っている。

日本にはもっと明確に作者が『TP』の影響で書いたと公言している作品がある。『時の森殺人事件』(98年)は、夭折した吉村達也の作品で、高地にある森と湖に囲まれ、外部の人を寄せつけない町で美少女の殺人事件が発生する。殺害現場の森で時を刻み続ける古い杜時計。捜査に乗り出した里美捜査官だが、住人は皆、巡査官までもが彼に敵意むきだしにし、何かを隠しているのであった。迷宮世界を舞台にしたような物語、全6巻、2000枚越えのボリューム、50人にも及ぶ登場人物と、さながら本格派ミステリーにコンバートした『TP』の印象が強い。人物相関図や、最終巻には冒頭に親切にも「残された謎」を箇条書きにしている。しかもすべて謎は解けるし、驚愕の過去と前代未聞の動機は一読の価値がある。

日本のミステリ界には幾重にも謎の絡まった「新本格」のブームが起こるが、読み手側に「ちょっとやそっとではもう驚かない」という素地を作ってくれたのは『TP』だろう。そうでなければ、ナチのガス室の秘密と三重密室とヘーゲル哲学批判を兼ねている、立ち読みしたら疲労骨折確定な笠井潔の大著『哲学者の密室』(99年)などを許容できるキャパが読み手側に生まれるはずがない。超常現象も何もかもミステリーにぶち込み、ミステリーの枠を思いっきり広げてくれたのは『TP』のもたらした効果なのかもしれない。恩田陸の『ユージニア』(08年)、村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』(97年)、阿部和重『シンセミア』(03年)など、普通小説にまで『TP』的影響は拡散した。

マンガでは『ジョジョの奇妙な冒険』第4部の舞台の杜王町は、明らかに『TP』風味である。奇妙な町に岸田露伴やシリアルキラーや

『時の森殺人事件』と『哲学者の密室』

殺された少女が幽霊で出てきたり……言い始めたらキリがない。

## スティーヴン・キング世界に『TP』をぶち込んだゲーム『ALAN WAKE』

そして何よりも『TP』の影響を受けたのがゲーム業界だ。ゲームのハードの描画能力が向上し、デモシーンで映画的な演出が可能となり、ストーリーが大人向けになったことによって、犯罪や幻覚、薬物や殺人、グロテスクな登場人物の表現も可能になってきた。そこでクリエイターが思春期に浴びた『TP』の影響が盛大に花開いた印象だ。

『ミザーナフォールズ』(98年)は、観光名所が滝の町で、行方不明の町長の娘を殺される前に発見し、1週間以内に事件を解決するという時限式アドベンチャーゲームだ。しかも格闘ゲームやカーチェイスなどの要素も加わってくる。もちろん、住民と町長の娘エマとの秘密の関係性が謎のベースになっている。

『ミザーナフォールズ』

『レッドシーズプロファイル』

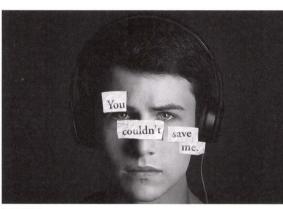
『レッドシーズプロファイル』(10年)も同種のホラー・ミステリ・アドベンチャーゲームだが、より『TP』の影響が濃厚だ。田舎町グリーンベイルで起きた若い女性の殺人事件。都市伝説的なレインコート・キラーの仕業ではないかと囁かれていたが、都会でも発生しているシリアルキラーに関係しているのでは？とFBIのモーガンが捜査に当たる。読心術に長けたいつも鍋を持っている丸太ならぬ「お鍋おばさん」が登場したり、モーガンの造形はまんまクーパーである。捜査が進むうちにもうひとつの世界、「常世」が現れ、夜になると街に跋扈する悪霊と戦ったりするなどゲーム的な要素も高い。コーヒーで占いをしたり、空腹や眠気などのパラメーターがあったりとなかなかの意欲作で、『TP』のゲーム化にいちばん近いかもしれない。

デザイナーのSWERYこと末弘秀孝氏は、僧侶の資格を持つユニークな経歴で、今は小説を執筆してゲーム会社も立ち上げている。次作はイギリスの田舎町を舞台に、借金まみれの都会人を主人公にした『The Good Life』が予定されているが、絵画の「オフィーリア」的な死体を発見したり、奇妙な住人たちが夜になると猫になったり……とかなり独特な世界感で、ゲームについての講演タイトルは「田舎+殺人+モンスター+コーヒー=ゲーム」というこれまた『TP』的だ。

『ALAN WAKE』(10年)は、作家である主人公がバカンスで来た田舎町で妻が失踪、探索していくうちに超自然の世界に足を踏み入れていくゲーム。全体が得体のしれない何かに支配されている。舞台となるブライトフォールズの住民は、自分はソーだオーディンだと言い張る元ヘビメタバンドの老人たちや、ランプを抱えたランプおばさん(皆ナントカおばさんは出したがるようだ)など、これまた変人ばかり。『TP』の影響以外にも、かつてこの町にいた作家が姿を消し、その彼女がアランの妻のように失踪したという過去や、道中に自分の次回作の原稿が随所に落ちており、これから起きることを予期するような内容が書かれ

ているなど、作家の産みの苦しみも描かれている。『シャイニング』『ダーク・ハーフ』(襲い来る鳥の群はまんまである)などのスティーヴン・キング世界に『TP』をぶち込んだような

『ALAN WAKE』の画面

内容だ。ゲーム内のTVがドラマ内ドラマを映し、独自の物語が展開されているのも印象的だ(これは開発元REMEDYの出世作『マックス ペイン』にも描かれている)。

意外な有名ゲームも、実は濃厚に『TP』の影響を受けている。それが元祖RPG『ゼルダの伝説』シリーズだ。『ゼルダの伝説～夢をみる島』(93年)は、難破して見知らぬ島に漂着した

『13の理由』

主人公リンクが遭遇する奇妙な世界を描いているが、作者の宮本学自身が「どんな物語かよりもどんな人物が出てくるかに興味があった」と物語を組み立てる際に『TP』のように怪しい人物をどんどん出してくれ」と指示したと語っている。続く『～時のオカリナ』(98年)、『～ムジュラの仮面』(00年)なども同じ方向性で展開されたため、意外にRPGへの『TP』の影響は色濃い。

少女の日常に起こる奇妙な出来事を描く、スマホにも移植されているADV『Life is Strange』は、異なる世界の自分の姿では?と思える謎の女性が登場するなどかなり『TP』を意識している感が半端ない。さらに、ヒーローになりたい同じ世界に住む少年を主人公にした作品『キャプテンスピリット』の製作が発表されるなど、連続ドラマ的に拡大している。

ごく最近でも、自殺した少女の残したテープから秘めた人間関係と彼女の素性が次第に明らかにされていく……というNetflixの『13の理由』(17年)など、新世代配信ドラマにも『TP』の影響は継承されている。今回の『The Return』がさらに今後のドラマやゲームなどに影響を与えるのは間違いない。VRなど新しいツールを用いたさらなる『ツイン・ピークス』の遺伝子たちの展開に期待したい。

# INTO THE PROFILE

**滝本誠／たきもと・まこと**
トルーマン保安官（兄）が、ゴードン・コールからの電話を受けた場面、コールの大声に対する普通の反応は、耳から受話器を遠ざける。しかし、そこは耄碌、もうろく時、帰らねばレベルで悠然と自分の口側を離す。さすがである。

**高橋ヨシキ／たかはし・よしき**
69年生。デザイナー、ライター、サタニスト。『The Return』でいちばん好きなのはやっぱりジョニー・ホーンとあのクマのぬいぐるみ。「ハロー、ジョニー、ハウ・アー・ユー・トゥデイ？」。（偽）ダイアンにもさようなら。自分がTulpaだと知ってなお「ファック・ユー！」と言える人でありたい。

**北原香／きたはら・かおり**
エンタメ系WEBディレクター。サニージムがかわいくてかわいくて。他者をひたすら許し受け入れる存在が、異世界ではなくラスベガスにいることに救われました。

**大内稔／おおうち・みのる**
フリー・エディター&ライター。定位置おおむね『映画秘宝』。『～最期の7日間』に出てたモイラ・ケリーが好きだったんだけどなー、あんまり覚えてないや。

**岡本敦史／おかもと・あつし**
ライター。劇場版のテレサ・バンクス事件捜査パートが大好きで（デズモンド捜査官がカッコいい！）、『The Return』はあれがえんえん続くような至福のシリーズでした。

**オギー ジョーンズ／おぎー じょーんず**
映画毒見役、プロ映画観客。25年前の約束を律儀に守って本当に帰ってきてくれたTP、ありがとね！ 鑑賞中は一気に若き日のピーカーに戻ることができました。（毛髪はのぞく）。次のシーズンまでは長生きしないとね。当時、『TP』の美女3人の中で誰が好き？ と盛り上がったもんです。オギーは、オードリーLOVEでしたが、今回いちばんカッコ良く老けたのは、シェリーでしたね。ひとりどっか行っちゃったしね。

**高橋佑弥／たかはし・ゆうや**
97年生。学生。映画文筆見習い。最近の悩みは金欠と"複視"（ものが二重に見える）。ゆえに字幕が読み難くてかなわない。近々でいちばん観たい映画はデヴィッド・ロウリー『A Ghost Story』。『ツイン・ピークス The Return』で好きなシーンはたくさんあるが、ロードハウスのエンディング、特に第2話の"Shadow"は脳にこびりついて離れない。

**多田遠志／ただ・とおし**
ロフト秘宝番、ライター、司会業。解こうとせずに謎を浴びているだけだとこんなに心地いいのかと『The Return』で再発見。敢えてお気に入りのキャラを挙げるなら眼帯好きの嗜好に巨大な一石を投じたネイディーンです。

**樋口泰人／ひぐち・やすひと**
今年の後半はジョン・カーペンター祭りになる予定。どこまでやれるか。詳細はboidのHP（boid-s.com）にて順次。本文でも書いたのだが、ローラのお父さんがレコード聴きながら泣き続けるシーンが、いまだに脳裏から離れない。

**本田敬／ほんだ・けい**
映画宣伝会社主宰。『パイロット版』で冒頭にブレイクダンスを踊る男子生徒と、校長によるローラ死亡の校内放送を聴いた瞬間に、悲鳴をあげて渡り廊下を走り去る女子生徒が好きです。ふたりともこれ以降はいっさい登場しないところも。

**馬飼野元宏／まかいの・もとひろ**
『映画秘宝』編集部所属。ベスト・シーンは『The Return』14話で、全裸姿で登場するナイドって屋外にいると物凄い違和感があって、このシーンだけ人間っぽいんですよ！

**町山智浩／まちやま・ともひろ**
いちばん好きなのはナオミ・ワッツのコメディ演技です。

**真魚八重子／まな・やえこ**
朝日新聞、ハニカム、文春オンラインほかで執筆中。好きなキャラはキャンディと、ラリッてるジェリー・ホーンです。

**山崎圭司／やまざき・けいじ**
『最期の7日間』至上主義。好きなキャラはキラー・ボブ玉。ピンクルームで呆けたいです。

**山崎智之／やまざき・ともゆき**
音楽ライター。オリジナルTVシリーズサントラと『The Return』サントラ2枚のCD解説を書いています。好きなシーンはアンディがエロ本をルーシーに見つかるところ。ルーシーのダンスもびっくり。よくぞ隠し通してきた！ ブログは、http://yamazaki666.com/blog/。

いたのか?」という疑問に対する解答を自らのうちに探す必要がある。
ロードハウスが掃除されるこの長い長いワンカットについての意見で、筆者が聞いたうちで最も愉快だった答えは「あの長い掃除は絶対に必要なものだった。あの衝撃的な第8話に備えて、ロードハウスの従業員は、それまで『The Return』でばらまかれた断片を象徴的に『かき集めて』、第8話が登場するステージを準備しておく必要があったのだから」というものだ。
これは愉快で、なおかつ説得力もある見方だと思うが、もちろん、そういうふうにこの場面をとらえ「なければいけない」というわけではない。表現はいろんな方向に開かれているのが当たり前なので、誰もが納得し得る単一の解釈などというものは存在しようがない——もしそうだとしたら、表現としての幅が狭すぎる。比喩的な表現が常に1対1で何かと対応しているとしたら、あまりにも豊かさに欠ける。
「意味や何かについて語ることには居心地の悪さを覚える」
と、リンチは言う。
「何が何を意味するか、ということについては知らずにいたほうが良い。なぜなら、『意味』というのは個人的なものだからだ」。
この言葉をリンチが字義通りに信じているとは考えづらいが——なぜなら商業作品をものにするためには、一定の共通認識を前提とする必要があるからだが——言いたいことはわかる。表現について「ああ、意味がわかった」と人が言うとき、それは往々にして「Aというものは、実はBというものを示している」という対応に安心感を覚えているだけであって、それはAというものの本質とはあまり関係がない。本質は——現象学の用語を使えば——直観によって掴み取ることができる(こともあるし、できないこともあろう)。
『The Return』は、『ツイン・ピークス』を再定義し直すことで新たなパースペクティヴを手に入れた。夢と現実がこれまでになく魔術的な手付きで混ぜ合わされたことで、我々は画面を凝視しつつ——『The Return』のもたらしたもうひとつの大きな果実が「凝視することの楽しみ」であることは間違いない——自分にとっての「意味」とは何なのか、改めて見つめ直す作業を余儀なくさせられる。TVの娯楽番組がここまでコンテンポラリーな高みに達しえたことは驚くべき、そして喜ばしいことだ。そして何より、「ダギー・ジョーンズ」という信じがたいキャラクターが産み落とされた幸福について、今はゆっくりコーヒーを味わいながら、その余韻を反芻したいと思う。
赤い扉の向こうに、ジェイニーEとサニージムが待っている。

By YOSHIKI TAKAHASHI

# Finale

## 本質は、直観によって掴み取ることができる

「人生はとても、とても複雑なものだ。であれば映画も同じように複雑であるべきだろう」
——by デイヴィッド・リンチ

文◎高橋ヨシキ

たとえば『ツイン・ピークス The Return』の第7話。閉店後のロードハウス。カウンターの奥ではジャン・ミシェル・ルノーが……おそらく帳簿をつけているのだろう。手前では別の従業員が木張りのフロアを箒で掃いている。床に散らばったチリが少しずつ集められていく……2分半に及ぶ、固定カメラのショット内で。

この場面に、いったいどんな「意味」があるのだろう？ と、疑問に思った人は数多い。逆に、単に箒で床掃除しているという描写を2分半も観せられることを苦痛に感じた人たちもいる。まるで「無意味」なものを、不必要なまでに長時間観せられる必要があるのか、と。

こうした反応はどちらも興味深いものだ。努めて表層的なことに限っていえば、当然のことながらこの場面に「意味」はある。『The Return』では、ほとんどすべてのエピソードがロードハウスでのライブシーンで幕を閉じる。我々は豪華なゲスト・スターの演奏にうっとりと身を委ねるロードハウスの客を目にし、また後半では、そのロードハウスに何らかの邪悪な気配が迫ってくることを知る。だが、閉店後のロードハウスが描写されるのは第7話の、この場面だけである。

ふだん、我々はいろんな店に足を運ぶが、そういう店の閉店後の様子を目にすることはあまりない。ドラマや映画には、我々が普段見ることのない事物や現象を擬似体験させてくれるという機能があるが、そういう意味でロードハウスが掃除される場面には、一定の意味がある。しかし、いくらなんでも長すぎるじゃないか、という気持ちはわからないでもない。では、どのくらいの長さなら良かったのか？

同じことが「意味」についても言える。「どんな意味があるのか？」と問うことは、逆に「どんな『意味』があれば、あなたはそれを満足すべき場面だとみなすつもりだったのか？」という疑問となって跳ね返ってくる。「無意味すぎる」というのであれば、「それを有意義なものにするために、あなたは何を必要として

MOVIE TREASURE MAGAZINE'S THE ULTIMATE GUIDEBOOK SERIES

# NEXT ISSUE!!

『別冊映画秘宝』の究極読本シリーズ

別冊映画秘宝　決定版

# ツイン・ピークス究極読本

滝本誠＋高橋ヨシキ：監修

洋泉社MOOK

STAFF

編集人――岩田和明

編集――北原香、本田敬、大内稔、岡本敦史、田口俊輔

表紙デザイン――高橋ヨシキ

本文デザイン――勅使川原克典
田中秀幸（Double Trigger）
土佐林渉&大橋郁子
塚本雄一郎（スラッシュ）

DTP――神村達也（base on shape）
大久保浩一（Homesize）
市川力夫

SPECIAL THANKS／奈良夏子、辻村篤、山下崇（キャノンボール）、一柳義之（TEX AGENCY）、小倉美紀（ムーブマン）、岡田太郎（文学座）、野田美佐子（moonriders division / jism）、駒井尚文、椚田透（ニクス・グラフィクス）、ドナルド・トランプ

写真協力／amanaimages、アフロ、Getty Images、NBCユニバーサル・エンターテイメント、ワーナー・ブラザース・ホームエンターテイメント、ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント、裕木奈江

In Memory of ... MASAYUKI KAWAKATSU

2018年8月4日発行

発行者――江澤隆志

発行所――株式会社　洋泉社
東京都千代田区神田駿河台2-2　御茶ノ水杏雲ビル5F
郵便番号　101-0062
電話番号　03-5259-0251（代）
郵便振替　00190-2-142410 ㈱洋泉社

印刷・製本――図書印刷株式会社



洋泉社ホームページアドレス　http://www.yosensha.co.jp/

INTO THE INTERVIEW

裕木奈江／原康義 as デイル・クーパー／安達忍 as ルーシー・モラン
野木亜紀子、鈴木慶一、町山智浩、『ツイン・ピークス』にハマる。

We Live Inside A Dream

Fuck You!

滝本誠の電撃ボウイ作戦／『ツイン・ピークス』激レア・グッズGALLERY／シリーズ全サントラ解説／『オン・ジ・エアー』の世界／マーク・フロストHISTORY／高橋ヨシキ、真魚八重子の長編作品論／PLAYBACK! 川勝正幸&滝本誠のリンチング旅 1992-2018 ……and more!!

THE ULTIMATE GUIDEBOOK TO
# TWIN PEAKS

洋泉社MOOK

発行=洋泉社

9784800315069

1929474015008

雑誌 69053-58

ISBN978-4-8003-1506-9
C9474 ¥1500E

定価：本体1500円+税